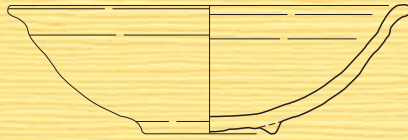


城ヶ谷山遺跡  
鎌田遺跡  
貢山城跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ



2013.3

高 知 県 教 育 委 員 会  
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター









城ヶ谷山遺跡  
鎌田遺跡  
貢山城跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ

2013.3

高 知 県 教 育 委 員 会  
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 序

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成18年度から高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所の業務委託を受けた一般国道33号線バイパス(高知西バイパス)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。この事業は、高知県東部に計画されている高知南国道路と南国安芸道路の二つの自動車専用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査とともに県内を横断する大規模な調査であります。

高知西バイパスは、高知市から西に隣接するいの町にかけて全長9.8 kmの区間で計画されており、工事路線上にはバーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡を始めとして多くの遺跡が所在しています。

今回報告する城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡は、いの町鎌田地区に所在し、道路の仁淀川架橋に伴い実施した試掘調査によって確認された遺跡であり、平成19・20年度に発掘調査を行いました。遺跡は、仁淀川右岸に面した丘陵の裾に立地する古代～近世にかけての複合遺跡であり、発掘調査により、掘立柱建物跡や、当時の流通が窺われる土器や陶磁器がみつき、当遺跡が地域に果たしてきた役割や、仁淀川流域における遺跡の実態がより鮮明なものになる貴重な資料を提供しています。

本書が豊かな地域史の復元に寄与し、地域の再発見に繋がるとともに、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、そして埋蔵文化財への深い御理解と御協力を賜りました地元の皆様方に心から謝意を表すと共に、発掘調査に従事して頂いた現場作業員の皆様方、報告書作成にあたり御指導ならびに御教示頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
所長 森田 尚宏



# 例言

1. 本書は、(公財)高知県文化財団が高知県教育委員会の委託を受けて平成19・20年度に実施した城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高知西バイパス建設工事に伴うもので、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡は、高知県吾川郡いの町字鎌田に所在する。
4. 今回報告する各遺跡の調査面積は、次のとおりである。  
城ヶ谷山遺跡1,206㎡、鎌田遺跡163㎡、貢山城跡1,079㎡
5. 調査期間は、平成19年4月25日～平成21年1月13日にかけて発掘調査及び基礎整理を行い、本報告書刊行に向けての整理業務を平成24年8月10日～平成25年3月12日まで実施した。
6. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

## 平成19年度(城ヶ谷山遺跡)

総括:財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 汲田幸一

総務:同次長 森田尚宏 総務課長 戸梶友昭 同主任 谷真理子

調査総括:同調査課長 廣田佳久

調査担当:同調査第三班専門調査員 前田光雄 同調査第二班専門調査員 森信輔

同調査員 中石忍 技術補助員 矢野雅子 測量補助員 菊池直樹

## 平成20年度(鎌田遺跡・貢山城跡)

総括:財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫

総務:同次長 森田尚宏 総務課長 恒石雅彦 同主任 谷真理子

調査総括:同調査課長 廣田佳久

調査担当:同調査第二班長 吉成承三 同主任調査員 坂本幸繁 技術補助員 矢野雅子

測量補助員 横山藍

## 平成24年度(報告書刊行・整理業務)

総括:公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務:同次長 嶋崎るり子 総務課長 里見敦規 同主任 黒岩千恵

調査総括:同調査課長 廣田佳久

調査担当:同調査第四班長 吉成承三 技術補助員 大原直美 測量補助員 横山藍・前田早苗

7. 本書の執筆、編集は吉成が行い、測量補助員の前田が補佐した。現場測量図面、遺構図等の作成、及び報告書掲載の遺構図版・写真図版等の図版作成は、技術補助員 矢野・大原、測量補助員 横山・前田の補助を得た。
8. 遺構については、SB(掘立柱建物跡)、SA(柵列)、SK(土坑)、SD(溝)、SX(性格不明遺構)、P(ピット)とし、遺構番号は、SB、SAについては調査区全体の通し番号とし、SK、SD、Pについては調査区ごとに通し番号を付した。掲載している遺構図の縮尺はSB、SAはS=1/100、SK、SD、PはS=1/40、S=1/60で作成しそれぞれに記載した。

9. 遺物については、原則S=1/3とし、法量の大きさによってS=1/2, S=1/4で掲載し、各遺物にはスケールを付けている。
10. 発掘調査にあたって、事前の樹木伐採(貢山城跡)については(社)いの町シルバー人材センターに委託し作業を実施した。また、基準点設置については(株)アンプル、航空写真測量については(株)四航コンサルタント(城ヶ谷山遺跡)、(株)アジア航測(貢山城跡)に委託し業務を実施した。
11. 現場作業及び整理作業については下記の方々に行って頂いた。(敬称略,五十音順)  
発掘調査作業員  
大原栄美・尾崎定富・小松利明・勝賀瀬登・白井三郎・新川太郎・杉本直助・田中勇造・中島美恵子・中野泰佑・中村敬喜・西村和男・西村仁水・林美津恵・町田憲嗣・森山三四子・山口壽子・山口優幸・山中益代・渡辺清記  
整理作業員  
岡内真理子・川谷文香・高橋友子・高橋由香・永森亜紀・西村香織・橋田美紀・畑平裕美・松山真澄・山中美代子
12. 調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、いの町教育委員会、工事関係者の協力を得た。また、地元の方々の絶大な協力と援助を得た。
13. 出土遺物の注記は、出土略号を城ヶ谷山遺跡07-3IS, 鎌田遺跡08-11IK, 貢山城跡08-7IMとし、図面、写真資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。



# 目次

第I章 序章	
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	2
第II章 調査の概要	
1. 発掘調査の経緯	5
2. 試掘調査の概要	5
(1) 城ヶ谷山遺跡	5
(2) 鎌田遺跡	8
(3) 貢山城跡	9
3. 調査日誌抄	10
第III章 周辺の歴史的環境	
1. 地理的環境	17
2. 歴史的環境	19
(1) 縄文時代	19
(2) 弥生時代	19
(3) 古墳時代	20
(4) 古代	20
(5) 中世	20
(6) 近世	21
第IV章 城ヶ谷山遺跡	
1. 調査概要	23
2. 調査の方法	23
(1) 調査方法	23
(2) 基本層序	24
3. 検出遺構と出土遺物	28
(1) I区の検出遺構	28
(2) I区の包含層出土遺物	35
(3) II区の検出遺構	39
(4) II区の包含層出土遺物	54
第V章 鎌田遺跡	
1. 調査概要	61
2. 調査の方法	61
(1) 調査方法	61
(2) 基本層序	62
3. 検出遺構と出土遺物	65

(1) 検出遺構	65
(2) 包含層出土遺物	68
第Ⅵ章 貢山城跡	
1. 調査概要	69
2. 調査の方法	69
(1) 調査方法	69
(2) 基本層序	70
3. 検出遺構と出土遺物	70
(1) 検出遺構	70
(2) 包含層出土遺物	76
第Ⅶ章 総括	
1. 城ヶ谷山遺跡	77
(1) 弥生時代	77
(2) 古代	77
(3) 中世	79
(4) 近世	79
2. 鎌田遺跡	80
(1) 検出遺構	80
(2) 出土遺物	80
3. 貢山城跡	80
(1) 検出遺構	80
(2) 出土遺物	81
4. 考察	81
(1) 遺跡の立地からみた貢山城跡の性格	81
(2) 周辺の城跡立地からみた仁淀川流域の「渡し」と「街道」	82

## 挿図目次

図 1 いの町位置図	1
図 2 西バイパス工事範囲図(S=1/8,000)	3
図 3 グリッド設定図・試掘位置図・調査区位置図	4
図 4 城ヶ谷山試掘 TR3柱状図	7
図 5 城ヶ谷山試掘 P1・2柱状図	7
図 6 城ヶ谷山遺物図(S=1/2) (S=1/3)	8
図 7 鎌田試掘 TR15・16柱状図	9
図 8 鎌田遺物図(S=1/3)	9

図9	貢山堀切セクション図(S=1/60)	9
図10	いの町地質・地形図	16
図11	周辺の遺跡地図(S=1/30,000)	18
図12	城ヶ谷山調査区位置図(S=1/1,000)	23
図13	I W区調査区セクション図(S=1/60)	24
図14	I E区調査区セクション図(S=1/60)	25
図15	II区調査区セクション図(S=1/60)	26
図16	城ヶ谷山遺構配置図(S=1/250)	27
図17	I E区SB1遺構図(S=1/100)	28
図18	I E区SB2遺構図(S=1/100)	28
図19	I E区SB3遺構図(S=1/100)	29
図20	I E区SA1遺構図(S=1/100)	30
図21	I W区SK1遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3)	31
図22	I W区SK2遺構図(S=1/40)	31
図23	I E区SK3～6遺構図(S=1/40)	32
図24	I W区P10遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3)	33
図25	I E区P20遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/2)	33
図26	I W区SD1遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3)	34
図27	I W区II～IV層出土遺物(S=1/2) (S=1/3)	35
図28	I W区V層出土遺物(S=1/2) (S=1/3)	36
図29	I E区I・II層出土遺物(S=1/3)	37
図30	I E区III・IV層出土遺物(S=1/3) (S=1/4)	38
図31	I E区V層出土遺物(S=1/2) (S=1/3)	38
図32	II区SB4遺構図(S=1/100)・出土遺物(S=1/3)	40
図33	II区SB5遺構図(S=1/100)・出土遺物(S=1/3)	40
図34	II区SB6遺構図(S=1/100)	41
図35	II区SB7遺構図(S=1/100)	41
図36	II区SB7出土遺物(S=1/3)	42
図37	II区SB8遺構図(S=1/100)	42
図38	II区SB9・10遺構図(S=1/100)	43
図39	II区SA2遺構図(S=1/100)	43
図40	II区SA3遺構図(S=1/100)	44
図41	II区SK1・2遺構図(S=1/40)	44
図42	II区SK3遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3)	45
図43	II区SK4遺構図(S=1/40)	45
図44	II区SK5遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/4)	46
図45	II区SK6・7遺構図(S=1/40)	46
図46	II区SK8遺構図(S=1/40)	47

図47	Ⅱ区SK9・10遺構図(S=1/40).....	48
図48	Ⅱ区Pit遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3).....	49
図49	Ⅱ区SD2遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3).....	49
図50	Ⅱ区SD3遺構図(S=1/40).....	50
図51	Ⅱ区SD3出土遺物(S=1/2) (S=1/3).....	51
図52	Ⅱ区SD4遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/2).....	52
図53	Ⅱ区SD5遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/2).....	52
図54	Ⅱ区SD6遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/2).....	53
図55	Ⅱ区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物(S=1/3).....	54
図56	Ⅱ区Ⅲ-1層出土遺物(S=1/2) (S=1/3).....	55
図57	Ⅱ区Ⅲ-2層出土遺物(S=1/2) (S=1/3).....	56
図58	Ⅱ区Ⅳ層出土遺物1(S=1/2) (S=1/3).....	57
図59	Ⅱ区Ⅳ層出土遺物2(S=1/2) (S=1/3) (S=1/4).....	58
図60	Ⅱ区Ⅴ層出土遺物(S=1/3).....	60
図61	鎌田調査区位置図(S=1/1,000).....	61
図62	調査区東壁セクション図(S=1/60).....	62
図63	調査区南壁セクション図(S=1/60).....	63
図64	鎌田遺構配置図(S=1/100).....	64
図65	SK遺構図(S=1/40).....	65
図66	P10遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3).....	66
図67	SD1遺構図(S=1/60)・出土遺物(S=1/3).....	67
図68	包含層出土遺物(S=1/3).....	68
図69	貢山調査区位置図(S=1/1,000).....	69
図70	貢山遺構配置図(S=1/250).....	71
図71	貢山遺構配置図(S=1/200).....	72
図72	調査区セクション図(S=1/100).....	73
図73	SA1・2遺構図(S=1/100).....	74
図74	P10遺構図(S=1/40)・出土遺物(S=1/3).....	74
図75	調査区エレベーション図(S=1/250).....	75
図76	堀切セクション図(S=1/60).....	76
図77	Ⅱ層出土遺物(S=1/2) (S=1/3).....	76
図78	村と街道と城(S=1/30,000).....	82
図79	城郭位置図.....	83

## 表目次

表1 試掘TR一覧表.....	6
表2 出土遺物内訳表.....	78

## 遺物観察表目次

遺物観察表1.....	87
遺物観察表2.....	88
遺物観察表3.....	89
遺物観察表4.....	90
遺物観察表5.....	91
遺物観察表6.....	92
遺物観察表7.....	93
遺物観察表8.....	94

## 遺構計測表目次

城ヶ谷山遺跡	
I・II区遺構(SB)計測表.....	95
I E区遺構(SB1)計測表.....	95
I E区遺構(SB2)計測表.....	95
I E区遺構(SB3)計測表.....	95
II区遺構(SB4)計測表.....	96
II区遺構(SB5)計測表.....	96
II区遺構(SB6)計測表.....	96
II区遺構(SB7)計測表.....	97
II区遺構(SB8)計測表.....	97
II区遺構(SB9)計測表.....	97
II区遺構(SB10)計測表.....	97
I・II区遺構(SA)計測表.....	98
I E区遺構(SA1)計測表.....	98
II区遺構(SA2)計測表.....	98

II区遺構(SA3)計測表	98
I区遺構(SK・SD・SX)計測表	98
II区遺構(SK・SD・SX)計測表	99
I W区遺構(P)計測表	99
I E区遺構(P)計測表	100
II区遺構(P)計測表	100
鎌田遺跡	
遺構(SK・SD・P)計測表	102
貢山城跡	
遺構(SA)計測表	103
遺構(SA1)計測表	103
遺構(SA2)計測表	104
遺構(P)計測表	104

## 写真図版目次

図版 1	城ヶ谷山遺跡全景(西上空より)	I E区SB3(P1)セクション(東より)
図版 2	城ヶ谷山遺跡全景(北上空より)	I E区SB3(P1)セクション(東より)
	城ヶ谷山遺跡 I区全景(西上空より)	I E区SB3(P6)礎板検出状態(東より)
図版 3	I W区上面遺構検出状態(南より)	I E区SB3(P1)完掘状態(東より)
	SD1バンクセクション(北より)	図版 7
	SD1緑釉陶器出土状態(No.17)	I W区完掘状態(北西より)
	SD1土師器皿出土状態(No.16)	I E区完掘状態(北西より)
	SD1土師器出土状態	図版 8
図版 4	I W区下面遺構検出状態(北より)	II区北西部上面遺構検出状態(東より)
	I W区SB1完掘状態(東より)	II区北東部上面遺構検出状態(東より)
	I W区SK1土師器出土状態(南より)	図版 9
	I W区P8根石検出状態(北より)	II区下面遺構検出状態(北東より)
	I W区土師器甕出土状態(北より)	II区北西部下面遺構検出状態(北より)
図版 5	I W区西壁セクション(東より)	図版10
	I E区SK5半裁状態(北より)	II区SD3集石検出状態(東より)
	I E区SK5セクション(北より)	II区SD3完掘状態(北東より)
	I E区SK5周辺出土鉄滓(北より)	図版11
	I E区SK5周辺出土鉄釘(北より)	II区包含層(I・II層)陶器碗出土状態
図版 6	I E区SB3Pit調査区西壁セクション(北東より)	II区包含層(III層)土師器甕出土状態
		II区包含層(III層)土師器甕出土状態
		II区瓦質土器(No.100)出土状態
		II区唐津灰釉皿(No.76)出土状態
		II区須恵器壺(No.129)出土状態
		II区青磁碗(No.101)出土状態
		II区瓦器碗(No.93)出土状態



- 図版12 II区下層弥生土器出土状態(南より)  
II区下層弥生土器出土状態(北より)
- 図版13 試掘調査出土遺物
- 図版14 I区P10・20出土 土錘, 土師質土器(鍋)  
I W区V層出土 須恵器(壺・甕)  
I W区SD1出土 土師器(皿), 緑釉陶器(碗)  
I W・E区I・II層出土 肥前産陶器(皿)  
I W区III層出土 土師器(椀)
- 図版15 I W区SK1出土 土師質土器(杯)  
I W区SK1出土 土師質土器(杯)  
I E区SB4Pit出土 唐津(皿)  
I W区III層出土 土師質土器(杯)  
I W区IV層出土 土師器(椀)  
I W区IV層出土 土師器(椀)  
I W区V層出土 黒色土器(椀)  
I E区I・II層出土 尾戸窯(碗)
- 図版16 I W区IV層出土 土師器(甕)  
I W区V層出土 土師器(皿・杯)  
I W区V層出土 須恵器(椀)  
I W区V層出土 土師器(甕)
- 図版17 I E区I・II層出土 唐津(碗)  
II区SD2出土 須恵器(杯)  
II区SB5Pit出土 瓦器(皿), 土師質土器(皿)  
II区SK3出土 土師器(杯・皿)  
II区SK5出土 砥石
- 図版18 I E区IV層出土 瓦器(皿・椀)  
I E区IV層出土 瓦質土器(鍋・羽釜)  
I E区V層出土 白磁(碗)  
I E区V層出土 土師器(甕)
- 図版19 I E区III層出土 青磁(碗), 白磁(皿), 瀬戸・美濃産陶器(碗)
- 図版20 I E区V層出土 土師器(皿・椀)
- 図版21 II区SB7Pit出土 瓦器(杯・椀), 黒色土器(椀), 須恵器(杯)
- 図版22 II区P27・28・36出土 黒色土器(椀), 瓦器(皿), 青花(碗)
- 図版23 II区SD3出土 須恵器(蓋・甕), 陶器(播鉢)
- 図版24 II区SD4～6出土 土師器(甕)
- 図版25 II区I・II層出土 唐津(碗・皿)
- 図版26 II区I・II層出土 肥前産陶器(皿), 瀬戸・美濃産陶器(碗)
- 図版27 II区I・II層出土 肥前産磁器(皿・碗)
- 図版28 II区III-1層出土 備前焼(播鉢)  
II区III-1層出土 瀬戸・美濃産陶器(碗)  
II区III-1層出土 青花(皿・碗)  
II区III-2層出土 須恵器(椀)
- 図版29 II区III-2層出土 瓦器(椀)
- 図版30 II区III-2層出土 瓦質土器(羽釜・不明)  
II区III-2層出土 瓦質土器(不明・刻印部分)  
II区III-2層出土 青磁(碗)
- 図版31 II区IV層出土 黒色土器(椀)
- 図版32 II区IV層出土 緑釉陶器(皿), 灰釉陶器(碗)
- 図版33 II区IV層出土 土師器(甕)
- 図版34 II区IV層出土 土師器(甕)
- 図版35 II区IV層出土 須恵器(杯)
- 図版36 II区IV層出土 須恵器(皿)  
II区IV層出土 須恵器(杯)  
II区IV層出土 須恵器(壺)  
II区IV層出土 須恵器(蓋・壺)  
II区IV層出土 須恵器(甕)
- 図版37 II区IV層出土 須恵器(甕)
- 図版38 II区V層出土 弥生土器  
II区V層出土 弥生土器(鉢)  
II区V層出土 弥生土器(甕)  
II区V層出土 弥生土器(甕)
- 図版39 貢山城跡・鎌田遺跡調査前近景(北より)

- 鎌田遺跡調査前全景(北東より)
- 図版40 光宜神社風景(東より)
- 鎌田遺跡遺構検出状態(北東より)
- 図版41 鎌田遺跡遺構検出状態(北より)
- SD1集石検出状態(北より)
- 図版42 SD1集石検出状態(北より)
- SD1南壁セクション(北より)
- 図版43 SD1バンクセクション(南より)
- SD1完掘状態(北西より)
- 図版44 調査区東壁セクション(北西より)
- 調査区東壁セクション(西より)
- 図版45 調査区南東壁セクション(北西より)
- SK1東壁セクション(西より)
- SK1完掘状態(西より)
- SK2セクション(西より)
- SK2完掘状態(北より)
- 図版46 SK3セクション(西より)
- SK3完掘状態(西より)
- P12根石出土状態(北より)
- P12完掘状態(北より)
- P21根石検出状態(西より)
- P21完掘状態(西より)
- P11礎板検出状態(西より)
- 須恵器口縁部出土状態(西より)
- 図版47 完掘状態(北西より)
- 完掘状態(東より)
- 図版48 試掘調査出土遺物
- 試掘調査出土遺物
- SD1出土 瓦器(椀)
- 図版49 P10・SD1出土 須恵器(皿・杯)
- 図版50 IV層出土 須恵器(杯・蓋・甕), 土師器(甕), 東播系須恵器(捏鉢)
- 図版51 貢山城跡遠景(西上空より)
- 貢山城跡全景(西上空より)
- 図版52 貢山城跡遠景(東・仁淀川より)
- 貢山城跡完掘状態(西上空より)
- 図版53 平場1遺構検出状態(南より)
- 平場1-4区遺構検出状態(南より)
- 図版54 平場1-3区バンクセクション(南より)
- 平場1完掘状態(南より)
- 図版55 平場2バンク(南東・平場1より)
- 平場2完掘状態(南東・平場1より)
- 図版56 西斜面通路状遺構から堀切へのアプローチ(北西より)
- 西斜面完掘状態(南より)
- 図版57 土橋・東斜面完掘状態(南より)
- 東斜面完掘状態(北より)
- 図版58 北斜面完掘状態(東より)
- 北斜面トレンチセクション(東より)
- 図版59 堀切調査前風景(西より)
- 堀切調査前風景(南より)
- 図版60 堀切バンクセクション(北西より)
- 堀切バンクセクション(西より)
- 図版61 堀切完掘状態(西より)
- 土橋・堀切完掘状態(東より)
- 図版62 平場からの北西風景
- 平場からの東風景
- 図版63 P10・II層出土 磁器(皿), 陶器(鍋)
- 図版64 発掘調査に携わった現場作業員さんたち(平成21年1月 貢山城跡にて)

# 第 I 章 序章

## 1. はじめに

本書は、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（平成 24 年度公益法人化）が、平成 19 年度と平成 20 年度に高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から業務委託を受けた高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査の内、発掘調査を実施した城ヶ谷山遺跡、鎌田遺跡、貢山城跡の調査成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所が計画し、実施している高知西バイパス（一般国道33号線・地域高規格道路）建設工事に伴って影響を受ける埋蔵文化財について事前に発掘調査を行った上で、出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図る事を目的としている。

仁淀川右岸に位置する鎌田地区には、既に古代～中世の遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地となっているハギ原遺跡・門田遺跡が工事計画区域周辺に立地していることから、平成18年度と平成19年度に工事計画範囲内についての試掘確認調査が行われた。その結果、古代～中・近世にかけての遺構と遺物が確認されたことから、調査地点の字名を付し、各遺跡を「城ヶ谷山遺跡」・「鎌田遺跡」・「貢山城跡」として名称し、新たに発見された遺跡として届出を行い周知の埋蔵文化財包蔵地に登録された。

今回報告する城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡の発掘調査は、いの町における遺跡の実態をより鮮明に把握できる成果が挙げられた。過去には、高知自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査等が行われ同町内南部に所在する一部の遺跡の様相はわかっていたが、今回の発掘調査によって、仁淀川流域における各時代の地域的な様相、及び変遷についてより詳細な内容が明らかとなった。

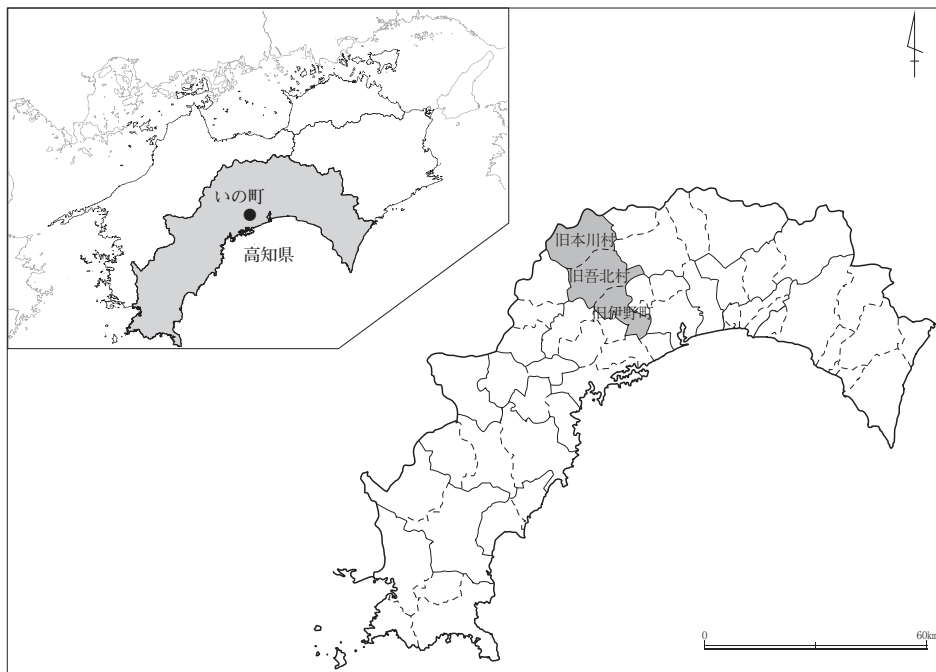


図1 いの町位置図

## 2. 調査の契機と経過

当遺跡の所在するいの町は高知県中央部に位置し、東側は高知市に接する。いの町の南部に位置する中心部には、鉄道に並行して東西に国道33号線が通っており、仁淀川橋たもとで、吾北、本川、愛媛県西条市方面に向かう国道194号線と分岐する。他方、国道33号線は、仁淀川橋を渡ると、日高村、佐川町、越知町、仁淀川町と続き、愛媛県松山市に至る。これらの国道は、高知県西部の主要国道であり、いの町は県都である高知市に隣接していることから交通の要衝となっており、中心部の国道は慢性的な渋滞道路になっている。交通渋滞緩和、及び路面冠水の解消、交通安全の確保等を目的として国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所による高知西バイパスの計画が図られた。高知西バイパスは、高知市鴨部からいの町波川までの総延長9.8kmの区間で計画されており、Ⅰ期工事として平成9年度までに高知市鴨部からいの町枝川までの区間は供用開始され、残るいの町枝川から波川区間についてはⅡ期工事として地域高規格道路・高知松山自動車道の一部としての事業が進められている。いの町内では、平成18年度から高知西バイパス建設工事が進められており、路線計画では、いの町中心部の南部丘陵地を現国道に並行して東西に通る、仁淀川を架橋して対岸の鎌田に渡り、波川、日高村方面に向けてバイパスが建設される計画である。

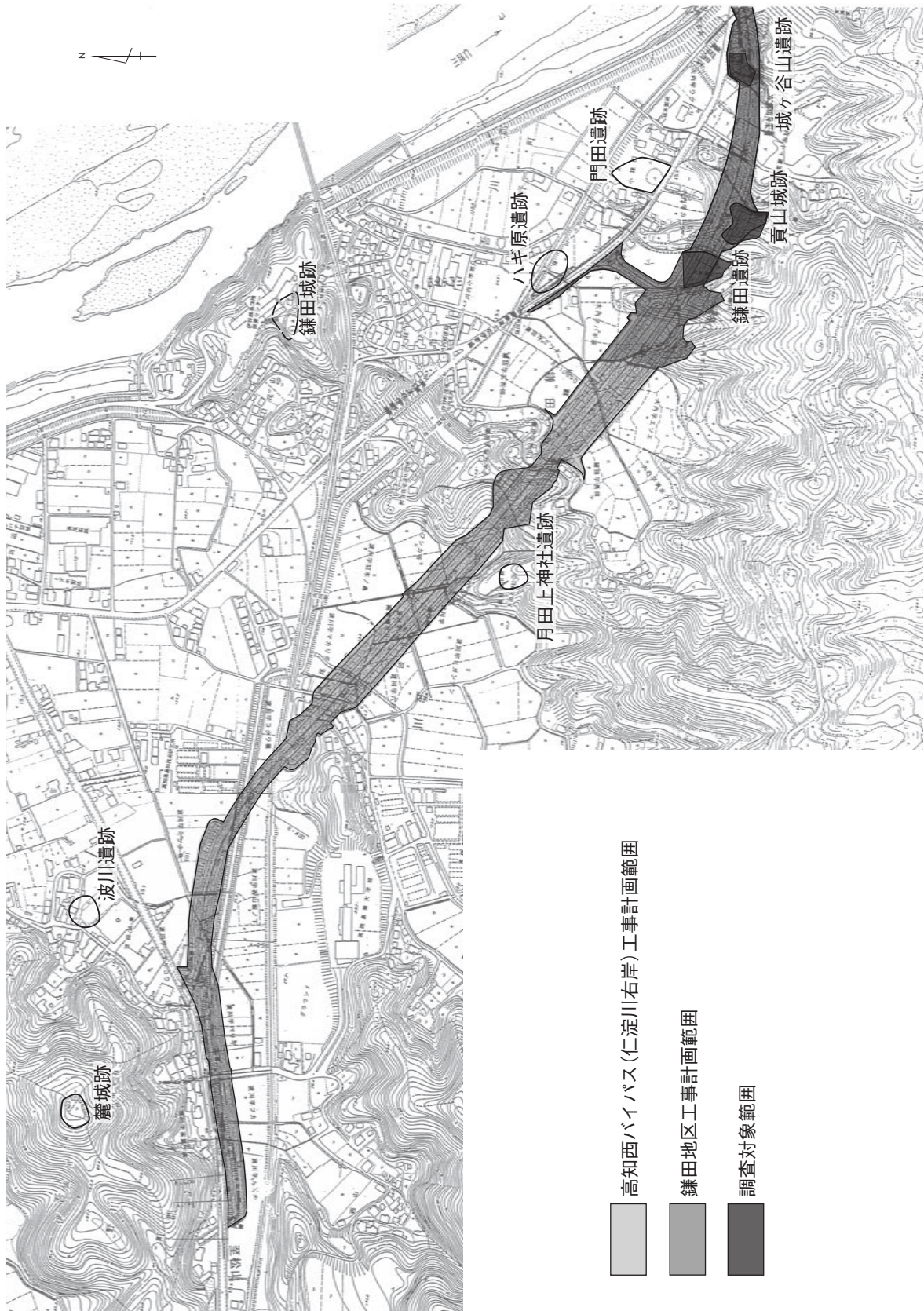
いの町内には、仁淀川及び、その支流沿いに遺跡の分布密度が高く、バーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡などに代表される弥生時代～中・近世にかけての周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く立地する。今回のバイパス路線計画は、南部丘陵地及び宇治川沿いに工事が行われる計画である事から国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会による協議が行われ、計画路線内及び周辺部に埋蔵文化財包蔵地が立地する箇所については、事前に工事計画区域内の試掘調査を行い、遺構、遺物の有無、内容を確認したうえで本調査として発掘調査が必要な場所、範囲について協議を行う事となった。

試掘確認調査は、平成19年度に計画されている道路建設工事の内、仁淀川架橋工事により影響を受ける箇所について、仁淀川右岸の鎌田地区、左岸の天神地区の試掘確認調査を実施した。鎌田地区には周辺に中世の遺跡としてハギ原遺跡、門田遺跡があり、天神地区には弥生時代の天神遺跡、天神溝田遺跡が立地する。試掘調査では古代～中世を中心とする遺構と遺物の広がり確認された。その結果に基づき、平成19年度より記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を、高知県教育委員会から委託を受けて公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施してきた。

発掘調査は、平成19年度に城ヶ谷山遺跡の本調査を平成19年4月25日～8月31日まで実施し、併せて鎌田遺跡、貢山城跡の試掘補足調査を実施した。平成20年度には、試掘調査の結果を受けて、鎌田遺跡、貢山城跡の発掘調査を平成20年11月5日～平成21年1月13日にかけて実施した。調査面積は、城ヶ谷山遺跡1,206㎡、鎌田遺跡163㎡、貢山城跡1,079㎡であった。

試掘調査の概要及び、各遺跡の調査の経過についての詳細は次章で述べる。





城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡位置図 (S=1/8000)

図2 西バイパス工事範囲図

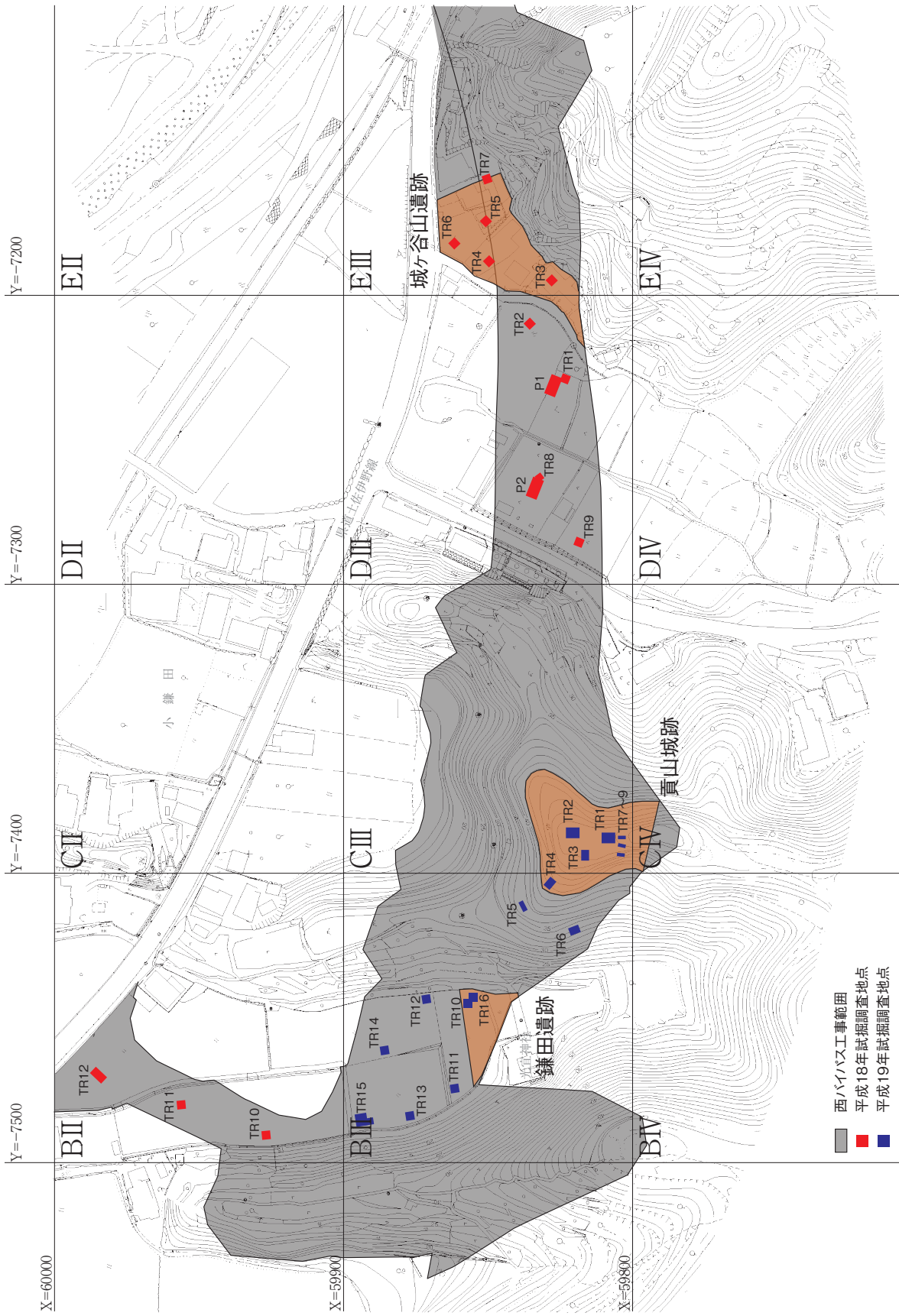


図3 グリッド設定図・試掘位置図・調査区位置図



## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 発掘調査の経緯

城ヶ谷山遺跡、鎌田遺跡、貢山城跡は、平成18・19年度に行った高知西バイパス建設に伴う事前の試掘調査によって確認された遺跡であり、大字の「城ヶ谷山」、「鎌田」、「貢山」を取って名称登録された遺跡である。平成18年度に行われた試掘調査の結果を受けて、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所との間で本発掘調査についての協議を重ね、城ヶ谷山遺跡については平成19年度に橋脚工事が計画されているため、平成19年度の前半期に本発掘調査を実施する事となった。発掘調査は、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会の業務委託を受け、平成19年4月1日付で高知県教育委員会と(財)高知県文化財団との間で業務委託契約を締結した上で調査準備に入り、同年4月25日より開始した。調査面積は1,206㎡であり、埋め戻しが終了したのは同年8月31日であった。

また、城ヶ谷山遺跡発掘調査終了後、平成20年度以降に鎌田IC.(インターチェンジ)工事が計画されているため鎌田地区の本発掘調査が必要な範囲についての確認調査を行った。その結果、城ヶ谷山遺跡の西側丘陵部で、城郭遺構と思われる堀切と平場が確認され、さらに、その丘陵下の西側谷部で、古代～中世にかけてのピットや溝跡が検出されたため、確認地点の大字である「鎌田」、「貢山」を取って鎌田遺跡、貢山城跡として名称登録を行い、平成20年度に両遺跡の本発掘調査に着手した。鎌田遺跡は、平成20年11月5日から発掘調査に入り同年12月9日に埋め戻しが完了し、貢山城跡の調査は、伐採作業、調査前の地形測量を鎌田遺跡の発掘と並行して行い、平成20年11月12日から発掘調査に入った。両遺跡の発掘調査は、平成21年1月13日に終了し、同年度に計画されていた仁淀川対岸の天神溝田遺跡の発掘調査に移行した。発掘調査の経過は、後節の調査日誌抄に記す。

### 2. 試掘調査の概要

鎌田地区の試掘調査は、橋脚工事、及びインターチェンジが計画されている部分を中心に、平成18年12月5日～28日、平成19年8月23日～9月5日にかけて実施され、国土交通省が工事用地として取得している範囲について合計28箇所試掘調査を行った。(表1 試掘TR一覧表)ここでは、試掘調査の内容について遺跡ごとに概要をまとめる。

#### (1)城ヶ谷山遺跡

平成18年度に行われた試掘調査で9箇所(TR1～9)設定したトレンチの内、現況が宅地跡の山裾に設定したTR3～7で遺構と遺物が確認された。時期は古代(平安時代)と中・近世が中心である。検出された遺構は、掘立柱建物跡の柱穴、溝、土坑であり、出土遺物は土師器など古代を中心とする遺物が250点ほど出土した。特にTR6では、ピット19個、溝1条、土坑1基と遺構が集中して検出された。遺構検出面高は、地表下0.9～1.0m下、標高15.50m前後であり、明黄褐色シルトが検出面堆積土である。包含層は地表下0.55～0.60m前後に堆積が認められ、古代～中世にかけての遺物を確認した。以下に基本層序について述べる。

2. 試掘調査の概要

表1 試掘 TR 一覧表

年度	遺跡名	TR番号	面積	出土遺物(器種×破片数)
平成18年	城ヶ谷山遺跡	TR1	25㎡	—
		TR2	25㎡	—
		TR3	12㎡	土師器24・石斧1・石斧未製品1
		TR4	12㎡	土師器6・瓦質土器1・黒色土器A1・唐津灰釉2・尾戸窯1・磁器1・備前焼1・鉄製品4
		TR5	12㎡	—
		TR6	12㎡	弥生土器2・土師器171・須恵器3・土師質土器19・瓦器6・緑釉陶器1・灰釉陶器1・内野山窯2・備前焼7・棒状石器5
		TR7	16㎡	磁器2
		TR8	25㎡	—
		TR9	25㎡	—
	鎌田遺跡	TR10	16㎡	土師器9
		TR11	16㎡	土師器3・瓦質土器3・鉄製品2
		TR12	40㎡	弥生土器2・土師器1・土師質土器1
平成19年	貢山城跡	TR1	12㎡	—
		TR2	12㎡	白磁1
		TR3	6㎡	—
		TR4	6㎡	—
		TR5	3㎡	—
		TR6	12㎡	瓦1
		TR7	1.5㎡	瓦1
		TR8	1.5㎡	染付白磁1
		TR9	1.5㎡	—
	鎌田遺跡	TR10	25㎡	土師質土器3
		TR11	25㎡	—
		TR12	25㎡	—
		TR13	25㎡	土師質土器2・石斧1
		TR14	25㎡	—
		TR15	55㎡	土師器1・端部炭化材1
		TR16	16㎡	須恵器1・土師質土器5

基本層序

I 区 (TR3)

- I : 表土 (宅地造成土)
- II : 褐色 (10YR4/6) シルト質粘土
- III : 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト (にぶい黄褐色 (10YR5/6) シルトをブロックで含む) (中世遺物包含層)
- IV : 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト (古代～中世遺物包含層)
- V : 暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土 (φ 1.0 ～ 1.5 cm 礫含む) (古代遺物包含層)
- VI : 黄褐色 (10YR6/8) シルト (φ 1.0 ～ 2.0 cm 礫含む) (地山)

対象地南部の山裾に設定したTR3を基本層序とした。表土は宅地造成土が40～50cm前後堆積しており、その下に旧耕作土と思われる褐色シルト質粘土が認められる。17世紀代の唐津や肥前産磁器が出土しており、近世以降の耕作土として捉えることができる。以下、III～V層は遺物包含層であり、古代～中世を中心とする遺物の出土が認められた。地山は西に向かって傾斜しており、包含層も層厚を増す。

また、対象地の谷部に設定したTR1・2及びTR8・9、そして橋台設置予定箇所のP1・2については、地表下3～4mにわたり盛土造成土であり、その直下に旧耕作土(水田)が確認された。下層は、グライ化した粘土層が厚く堆積しており、間層に植物堆積層が認められた。遺構及び遺物は確認されなかった。

出土遺物(図6)については、III・IV層から出土したものであり、土師質土器杯(No.1・2)、土師器甕(No.3)、瓦器椀(No.4)、緑釉陶器皿(No.5)、灰釉陶器碗(No.6)、石斧(No.7)の断片など9世紀末～12世紀にかけての遺物が出土した。

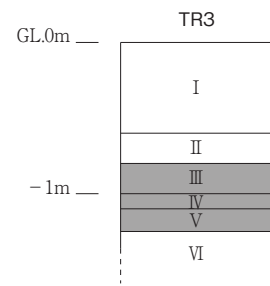
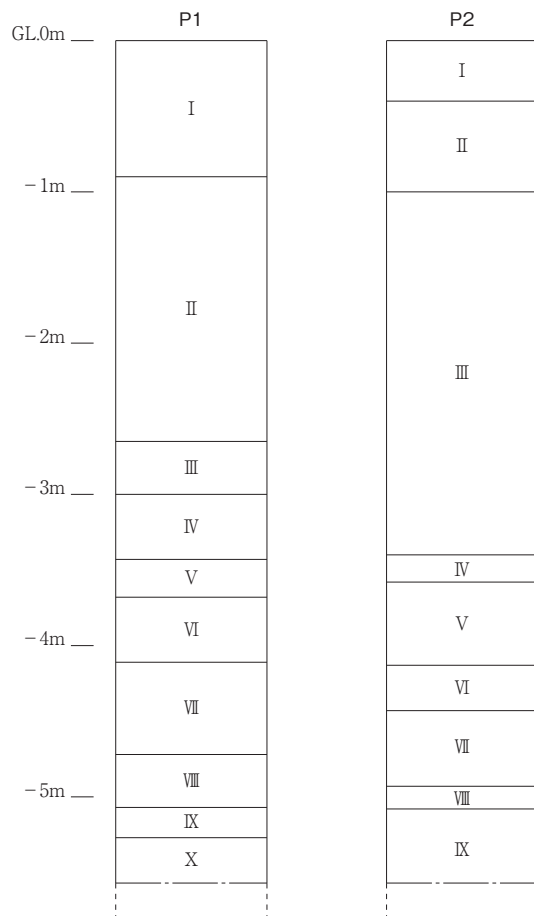


図4 城ヶ谷山試掘TR3柱状図



- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>I. 赤褐色礫(山土切土)</li> <li>II. 青灰色砂礫</li> <li>III. 暗灰色シルト(旧耕作土)</li> <li>IV. 青灰色粘土</li> <li>V. 灰褐色粘土(植物堆積層)</li> <li>VI. 青灰褐色粘土(植物少量含む)</li> <li>VII. 暗灰色粘土質シルト(植物、砂礫含む)</li> <li>VIII. 青灰色粘土(植物、相互堆積)</li> <li>IX. 黒褐色粘土質シルト(植物堆積層)</li> <li>X. 明青灰色粘土(植物、礫混)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>I. 赤褐色礫(山土切土)</li> <li>II. 暗青灰色シルト(φ20.0～30.0cm礫)</li> <li>III. 青灰色シルト(φ2.0～5.0cm, 20.0cm礫)</li> <li>IV. 暗灰色シルト(旧耕作土)</li> <li>V. 緑灰色粘土(植物根痕に鉄分多く含む)</li> <li>VI. 灰褐色粘土質シルト(くされ礫、植物含む、土石流堆積)</li> <li>VII. 暗褐色粘土質シルト(植物堆積層)</li> <li>VIII. 青灰色粘土</li> <li>IX. 暗褐色粘土質シルト(植物堆積層)</li> </ul> |
|--|--|

図5 城ヶ谷山試掘P1・2柱状図

## 2. 試掘調査の概要

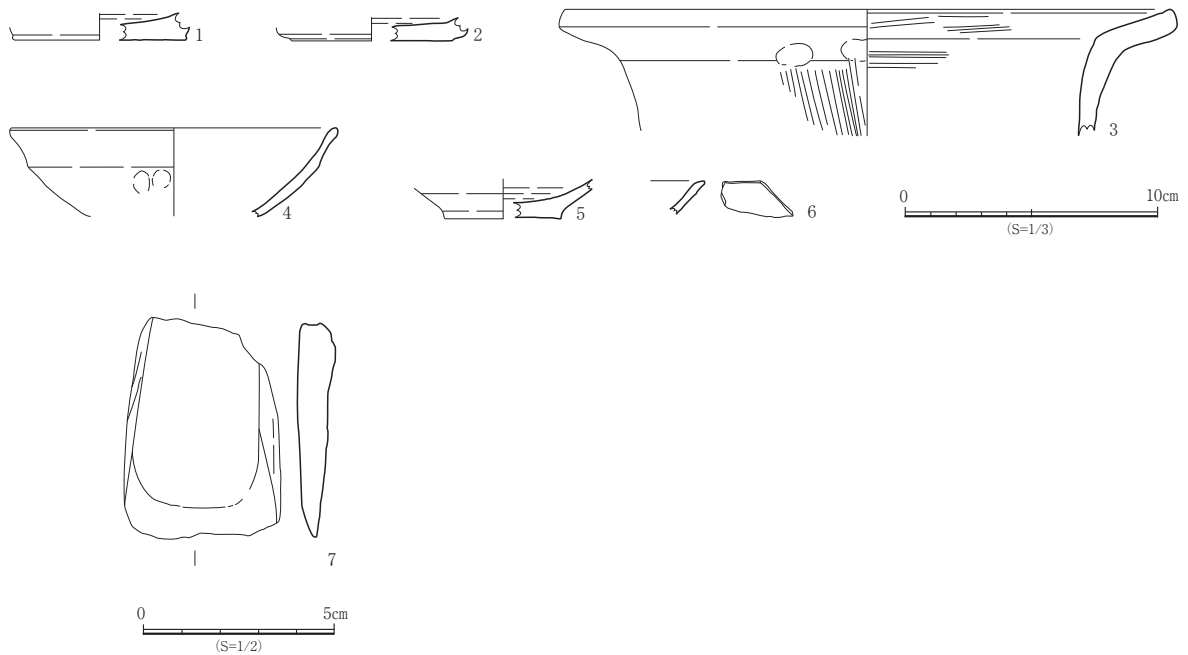


図6 城ヶ谷山遺物図

### (2) 鎌田遺跡

平成18年度に実施した試掘調査では対象地北部の谷部にTR10～12の3箇所の試掘を行った。その結果、TR10で古代の土師器椀が1点出土しており、古代～中世にかけての遺物が僅少出土した。その状況から、南部の一段高い山裾部からの流れ込みが想定される事から、平成19年度に再度試掘調査を行った。設定箇所は光宜神社に隣接する一段高くなった場所を中心にTR10～16の7箇所について試掘坑を設定し試掘調査を実施した。TR11～15の調査では、約20年前の造成に際して、TR10の北半分ほどから深く削り込まれており、TR10・16に見られたような旧耕作土以下の堆積層は見られず、深くまで盛土がなされていた。全てのトレンチで盛土とその下の粘土質シルト層の境目より、湧水が認められ、さらに谷中央部のTR14では、三方からの湧水があり調査を断念せざるを得なかった。西部山際のTR13・15では氾濫原堆積物と土石流堆積物の互層となっており、河川の氾濫と、山斜面崩壊に伴う土砂の流れ込みの影響が認められた。一方、TR10・16では、旧耕作土が残っており、古代～中世の遺構が検出された。TR16では、南北に延びる溝跡、ピットが検出された。出土遺物は、土師質土器、須恵器が少量であるが出土した。遺構検出面は地表下0.6～0.7mである。以下に、基本層序を述べる。

#### 基本層序(TR15)

- I: 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト(表土)
- II: 褐色(10YR4/6)シルト質粘土
- III: 褐色(10YR4/4)粘土質シルト
- IV: 明オリーブ灰色(5.6Y4/1)粘土質シルト
- V: 灰色(10YR3/4)粘土質シルト(明緑灰色(10GY7/1)φ1.0～2.0cm礫含む)(古代遺物包含層)
- VI: 灰黄褐色(10YR6/8)粘土質シルト(植物含む)

- VII: 灰白色 (N7) 粘土
- VIII: 黒褐色 (10YR3/1) シルト (植物含む)
- IX: 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土質シルト (明緑灰色 (10G7/1)  $\phi$  1.0cm 礫, 及び植物含む)

基本層序 (TR16)

- I: 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト (表土)
- II: 黄褐色 (2.5Y5/6) 礫 (盛土)
- III: 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト (旧耕作土)
- IV: 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト (Mn 含む)
- V: 黄色 (2.5Y7/8) 粘土質シルト (地山)

出土遺物は, TR10~12のIV層から土師器椀, 土師質土器杯, 瓦質土器羽釜 (図8 No.8~10) など古代~中世の遺物が出土した。

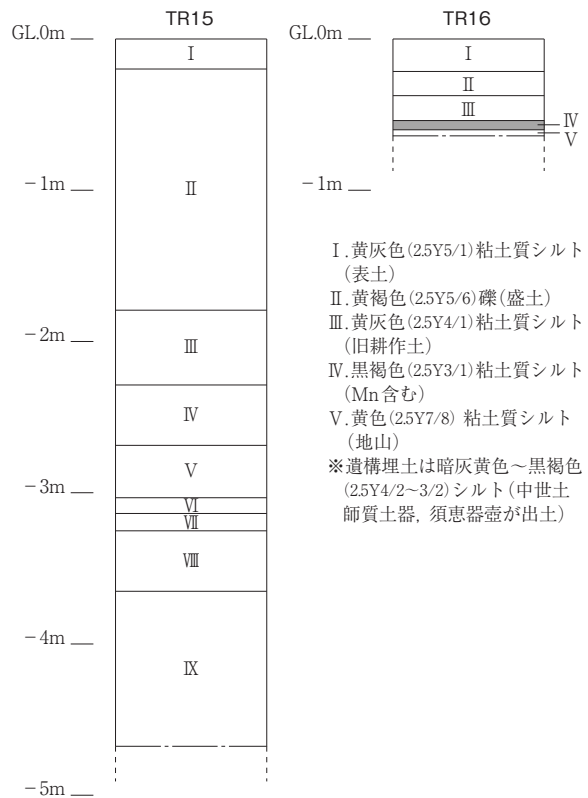


図7 鎌田試掘 TR15・16 柱状図

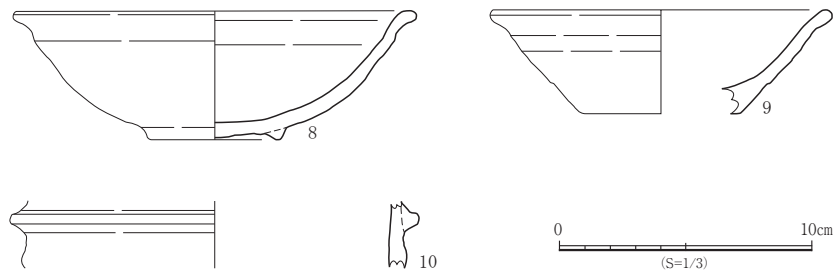


図8 鎌田遺物図

(3) 貢山城跡

平成18年度の踏査で城郭遺構と考えられる平場と堀切を確認した丘陵部にTR1~9を設定し, 試掘調査を行った。平場部分では明確な遺構, 遺物は検出されなかったが, 堀切と考えられる場所に設定したTR7~9では, V字状に掘込んだ跡が認められ, TR8からは青花皿の細片が出土した。出土遺物は, 近世の遺物が出土した。

- I: 橙色 (7.5YR6/6) 砂質シルト ( $\phi$  1.0~1.5cm 礫含む)

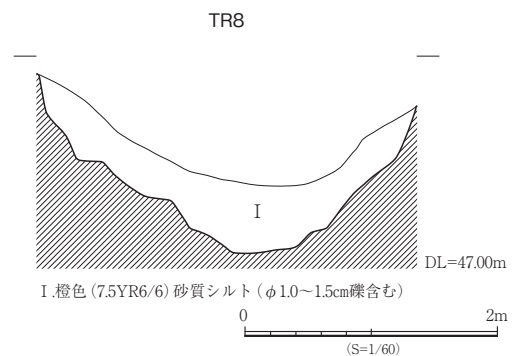


図9 貢山堀切セクション図



### 3. 調査日誌抄

#### 城ヶ谷山遺跡

平成19年4月25日(水)～8月31日(金)

- 4.27(金) 調査区周辺の草刈りを行い、調査区(I区)を設定する。



- 5.2(水) IW区表土掘削。試掘坑のTR3を南北に延長し、層位の確認を行う。  
5.7(月) IW区の上面遺構検出作業。溝(SD1)、ピット等を検出する。廃土は重機により、調査区西側の工事用地内に搬出する。



- 5.8(火) IW区上面遺構掘削。Ⅲ層(包含層)を掘削し、Ⅳ層上面で部分的に遺構検出作業を行う。  
5.9(水) IW区下面遺構検出状態写真撮影。遺構配置図作成後、遺構掘削にかかる。調査区西壁に沿ってトレンチ(TR4)を設定する。  
5.10(木) IW区遺構掘削。焼土と炭化物を伴った土坑(SK1)を検出する。I区の北壁側にトレンチを設定する。  
5.11(金) IW区遺構掘削。SK1のバンクセクション図を作成する。IE区の表土掘削を重機により行う。  
5.14(月) IW区遺構掘削、及びIE区の包含層掘削を行う。  
5.15(火) IE区の包含層掘削及び遺構検出作業を行う。掘立柱建物跡の柱穴を検出する。  
5.16(水) IE区の遺構検出作業。SB1検出状態写真撮影。撮影後、柱穴を半裁し、断面図を作成

する。

- 5.17(木) IW区中央の谷部に堆積している包含層掘削を行う。IE区はSB1の完掘平面図を作成する。  
5.18(金) IW区中央部の下層遺構を検出する。炭化物と焼土を含む土坑を検出する。  
5.21(月) IW区下層遺構検出作業。集石遺構、ピット、土坑を検出する。  
5.22(火) IW区下層遺構検出作業並びに、IE区の遺構検出作業を行う。  
5.23(水) IW区下層遺構検出作業並びに、IE区の遺構検出作業を行う。IE区山際ではⅢ層下で地山を確認する。  
5.29(火) IW区西壁セクション写真撮影。IE区はⅢ層(包含層)を掘削する。  
5.30(水) IW区西壁セクション図作成。IE区はⅢ層(包含層)を掘削、遺構検出作業を行う。  
5.31(木) IE区はⅢ層(包含層)を掘削、遺構検出作業を行う。IE区TR4の北壁セクション図作成。  
6.1(金) IE区はⅢ層(包含層)を掘削、遺構検出作業を行う。検出された遺構について遺構配置図を作成する。



- 6.4(月) IE区はⅢ層(包含層)を掘削、遺構検出作業を行う。全体的な精査を行い、遺構検出状態の写真撮影を行う。IE区北壁セクション図作成、写真撮影も併せて行う。  
6.5(火) IE区遺構掘削。ピットを中心に遺構を半裁掘削する。  
6.6(水) IE区遺構掘削。ピットは完掘する。柱穴と思われるピットは、底に根石が検出されており、平面図の作成を随時行う。航空写真測量に向けての精査も行う。  
6.7(木) I区全体の航空写真測量。  
6.8(金) I区全体下層遺構についての精査を行う。



I W区中央部は谷流路の堆積が認められ一番深いところで焼土、炭化物を含んだ土坑状のプランを検出した。

- 6.11(月) I W区はV層(包含層)を掘削、遺構検出作業を行う。古代の土師器、須恵器などの土器片が出土する。I E区は下層遺構検出作業を行う。
- 6.12(火) I W区はV層(包含層)を掘削、遺構検出作業を行う。I E区は下層遺構検出状態写真撮影後、遺構掘削を行い、完掘する。I E区下層遺構完掘状態写真撮影を行う。
- 6.13(水) I W区はV層(包含層)下、遺構検出状態を写真撮影、遺構配置図を作成する。その後、遺構掘削を行い、完掘する。
- 6.14(木) I 区の測量を行う。
- 6.15(金) 雨のため現場作業は中止。
- 6.18(月) 雨のため現場作業は中止。
- 6.19(火) I W区下層遺構完掘写真撮影。
- 6.20(水) I 区は埋め戻しを行う。II 区の表土掘削開始。
- 6.21(木) II 区の表土掘削、及び山際の部分から包含層掘削。II 層から近世陶磁器片が出土する。
- 6.22(金) II 区表土掘削、試掘坑TR5で確認された遺構検出面まで層位を確認しながら掘り下げる。
- 6.25(月) II 区表土掘削、及びIII層(包含層)を掘削する。中世の遺物が出土する。
- 6.26(火) II 区III層(包含層)掘削、及び西側から精査しながら遺構検出作業に入る。
- 6.27(水) II 区III層(包含層)掘削、及び遺構検出作業を行う。溝、ピットが検出される。III-2層で検出された遺構の配置図作成。
- 6.28(木) II 区上面遺構検出状態写真撮影。
- 6.29(金) II 区上面遺構掘削。さらに検出面のIII-1層(包含層)を掘削する。III-1層からは室町時代後期の遺物が出土した。
- 7.3(火) II 区のIII-1層(包含層)掘削。
- 7.4(水) 雨のため現場作業は中止。
- 7.5(木) II 区のIII-1層(包含層)掘削。
- 7.6(金) 雨のため現場作業は中止。
- 7.9(月) II 区のIII-1層(包含層)掘削。
- 7.10(火) II 区のIII-1層(包含層)掘削。中世の瓦質土器や青磁が出土する。
- 7.11(水) 雨のため現場作業は中止。
- 7.12(木) 調査区西部のIII-1層の掘削。台風接近のため、調査区の養生を行う。



- 7.13(金) 台風接近のため現場作業は中止。
- 7.17(火) 台風の影響により調査区内に溜まった水の排水作業を行う。台風養生の後片付けを行い、発掘作業を再開する。III-1層の掘削。
- 7.18(水) II 区のIII-1層で検出されていた円形土坑SK2・4について完掘する。
- 7.19(木) II 区西部の上面遺構完掘状態並びにIII-2層検出遺構についての写真撮影を行う。
- 7.23(月) II 区のIII-2層検出遺構について遺構配置図を作成した後、遺構掘削を行う。調査区西部は柱穴ピットが検出された。
- 7.24(火) II 区のIII-2層検出遺構について掘削を行い、遺構を完掘する。完掘状態写真撮影を行う。
- 7.25(水) II 区のIII-2層(包含層)掘削。平安時代末～鎌倉時代を中心とする遺物が出土する。
- 7.26(木) II 区のIII-2層(包含層)掘削。下層でピットが検出され始める。
- 7.27(金) II 区のIII-2層(包含層)掘削。溝(SD3)を検出する。SD3は上層に集石が認められた。溝にトレンチを設定し区画に分けて掘削した。
- 7.30(月) II 区のIII-2層(包含層)はほぼ掘削が終了しIV層上面の検出作業に移る。調査区の北壁にトレンチを設定し、IV層の確認を行う。9世紀頃の土師器、須恵器の杯や皿の破片が出土する。
- 7.31(火) II 区のIV層上面での遺構検出作業を行う。調査区北部の遺構検出は、ほぼ終了し、溝、ピットが検出された。
- 8.1(水) II 区のIV層上面での遺構検出状態写真撮影。台風接近のため調査区の養生作業を行う。
- 8.2(木) 台風接近のため現場作業は中止。
- 8.3(金) 台風の影響により、調査区内の復旧作業を行う。
- 8.6(月) II 区のIV層上面検出遺構の掘削を行う。
- 8.7(火) II 区のIV層上面検出遺構のピット、溝の中

### 3.調査日誌抄

心に掘削を行う。SD3・6の完掘状態写真撮影。

- 8.8(水) II区のIV層上面検出遺構のピット、溝を中心に掘削を行う。ピットは礎板を伴うものや、柱痕が確認された。
- 8.9(木) II区のIV層上面検出遺構のピット、溝を中心に掘削を行う。調査区西部に掘立柱建物跡の柱穴が集中する。
- 8.10(金) II区のIV層上面遺構の掘削はほぼ終了する。明日の航空測量に向けて掃除と精査を行う。
- 8.11(土) II区の全体的な航空写真測量を実施する。II区遺構完掘状態、及び東壁セクションの写真撮影も併せて行う。



- 8.16(木) 下層確認のため、II区のIV層(包含層)の掘削に入る。調査区の西部では古代の須恵器片などが出土する。調査区の北壁側に沿って設定したTR2をさらに下層に0.7m下げたところ、古墳時代の土師器甕片が確認された。
- 8.17(金) II区のIV層(包含層)は遺物が僅少なため、重機併用で掘り下げを進める。古代の遺物は調査区西部に集中しており、東部はほとんど確認されなかった。昨日確認された調査区北壁沿いのTR2を拡張し、古墳時代の

遺物が確認された深さまで掘削を進める。

- 8.20(月) II区のIV層(包含層)を重機併用で掘り下げを進める。
- 8.21(火) II区のIV層は掘削がほぼ終了。V層は黄褐色粘土質シルトであり、一部で小規模なピットを検出した。
- 8.22(水) II区のV層上面で弥生時代終末期～古墳時代初頭の甕が完形に近い状態で出土した。出土状況写真撮影を行う。
- 8.23(木) V層の掘り下げを行う。V層も遺物は僅少であり、調査区北壁に近い部分にのみ集中がみられた。
- 8.24(金) II区の下層の最終確認トレンチを調査区中央部に設定して、重機により掘削する。下層は厚く粘土の堆積が認められ3mほど掘り下げたが遺物は確認されなかった。トレンチのセクション写真を撮影し、その後埋め戻しを行う。
- 8.27(月) 今日からII区の埋め戻し作業に入る。
- 8.29(水) II区埋め戻し。調査機材類の片付け、事務所、倉庫の掃除等を行う。
- 8.30(木) 調査機材類、及び出土遺物等をセンターに運搬する。
- 8.31(金) 現場事務所、休憩所等、借上げ機材の撤収。調査区の埋め戻しも終了し、発掘調査は完了する。

### 鎌田遺跡

平成20年11月5日(水)～12月9日(火)



- 11.5(水) 現場事務所周りの草刈りを行う。現場事務所・倉庫・トイレの設置を行う。
- 11.6(木) 調査区の設定及び調査準備を行う。
- 11.7(金) 事務所で使う電気工事を行う。重機搬入。
- 11.10(月) 事務所周辺への進入路確保のため、重機により周辺の整地を行う。
- 11.11(火) 重機により表土掘削を行う。基準点の設置を行う。
- 11.12(水) 鎌田調査区、重機掘削及び人力掘削を行う。IV層、黒褐色粘土層までを検出する。
- 11.13(木) 遺構検出を行う。SD1条、ピット数基確認。明日の午後、検出状態写真撮影の予定。

- 11.14(金) 鎌田遺跡清掃後、午後より遺構検出状態写真撮影を行う。鎌田作業員は撮影後、調査予定の貢山城跡への山道の清掃を行う。
- 11.19(水) 遺構掘削作業を行う。
- 11.20(木) SD1の掘削を中心に掘削作業を進める。埋土が粘土層～砂利層に変わるところまでの検出作業。集石がみられる。
- 11.21(金) 午前中SD1の清掃作業を行う。後に集石検出状態写真撮影を行う。
- 11.24(月) 雨のため現場作業は中止。
- 11.26(水) 調査区中央部と西部の包含層掘削及び遺構検出作業を行う。SD1はセクション図作成・写真撮影後にバンクを平面上で、SD1-1、SD1-2の判別できる位置まで掘り下げる。集石出土状態写真撮影と平面図を写真測量により行う。



- 11.27(木) 鎌田遺跡・SD1出土の石の測量を行う。後、SD1-1・SD1-2の掘削を始める。SD1の西側部分の包含層掘削と遺構検出を行い、検出状態写真撮影を行う。また、SD1の北側、

### 貢山城跡

平成20年11月12日(水)～平成21年1月13日(火)

- 11.12(水) 貢山調査区、伐採作業を行う。伐採作業についてはシルバー人材センターより2名派遣。



- 11.13(木) 引き続き、伐採作業を行う。
- 11.14(金) 引き続き、伐採作業を行う。午後、鎌田作業員は、貢山山道の清掃を行う。

調査区北東部付近の掘削を行い、遺構を検出中である。

- 11.28(金) SD1-1完掘、SK2の半裁及び図面・写真撮影を行う。遺構(ピット)掘削を行う。
- 12.1(月) SD1-1の測量を行う。後にSD1の残り埋土を掘削する。(ピット検出、掘削途中) SD1西側のピット掘削完了。調査区北東部の遺構検出。(ピット、土坑検出、掘削途中)
- 12.2(火) 遺構は完掘する。光波による測量を行う。SK3セクション図作成。SK1根石出土状態平面図作成。明日、清掃後完掘状態写真撮影予定。
- 12.3(水) 午前中清掃を行い、完掘状態写真を撮影する。その後、光波による測量を行い、南壁付近の下層確認に入る。(下層確認途中まで) SDの西側から掘削を行う。
- 12.4(木) 下層確認続き。東壁、南壁セクション写真・図面の作成。ピット検出(25Y4/3オリープ褐色シルト質粘土)。VI層から流れ込みと思われる弥生土器片を取り上げる。
- 12.5(金) 重機により下層確認のため掘り下げる。湧水が認められる深さで掘り下げを止める。
- 12.8(月) 埋め戻し作業を行う。
- 12.9(火) 埋め戻しを終了する。鎌田遺跡の調査を完了する。

- 11.19(水) 伐採作業を行う。
- 11.20(木) 伐採作業を行う。山道の整備、平場の清掃、斜面の清掃等を行う。
- 11.21(金) 午前中から午後にかけて、伐採・清掃作業を行う。午後、調査前風景写真撮影を行う。
- 11.25(火) 調査前の現況地形測量を行う。平場2箇所、掘切。



- 11.26(水) 平場にバンク設定。設定状況写真撮影後、



### 3.調査日誌抄

- バンク際のトレンチ調査を開始する。
- 11.27(木) 平場のバンク際のトレンチ調査を続ける。表土直下で地山(岩盤)を検出する。
- 11.28(金) トレンチ調査, 登山道整備, 廃土移動用のシューター設置等を行う。



- 12.1(月) 平場を中心に地山までの掘削を行う。
- 12.2(火) 平場の表土掘削を行う。



- 12.3(水) 平場1-4区表土掘削終了。平場1-1区の表土掘削に移る。
- 12.4(木) 平場1-1区表土掘削を終了する。
- 12.5(金) 雨のため現場作業は中止。
- 12.8(月) 平場1-1区表土掘削, 及び1-2区の伐根作業。北斜面にシューターを設置する。平場1-1・4区の精査遺構検出を始める予定。
- 12.9(火) 平場1-1区の西半分の精査と表土剥ぎを行う。精査は, 雨のため途中まで行った。平場1-2区は引き続き, 伐根作業を行う。北斜面にトレンチを設定し掘削する。



- 12.10(水) 平場1-4区の精査を行い, ピットを検出する。平場1-4区の精査はほぼ終了する。

- 12.11(木) 平場1-1区の精査を行い, 遺構検出をする。ピット4個検出。午後より, 平場1-2区の表土掘削。一部, 平場1-3区のトレンチ掘削。東斜面は廃土を盛り, 通路及び作業道を確保する。
- 12.12(金) 平場1-2区表土掘削。平場1-2区の半分まで掘削終了。平場1-3区はほぼ地山部分まで掘削終了。東斜面の表土掘削, 斜面下の作業道の整備。
- 12.15(月) 平場1-2区表土掘削。平場1-3区及び東斜面表土掘削。北斜面に平場2へつなぐトレンチを設定し, 掘削を行う。
- 12.16(火) 平場1-2・3区の精査と東斜面の精査を行う。



- 12.17(水) 平場1-2・3区の精査及び遺構検出を行う。後に検出状況の写真撮影を行う。
- 12.18(木) 平場全区画にあるピットの掘削を行う。北斜面の掘削を行う。平場バンクセクション図の作成。
- 12.19(金) 平場遺構の測量とバンク掘削を行う。バンクは東西バンクの掘削が終わる。(ピットを2個検出)平場北東部の攪乱をうけている箇所については, 重機で掘削する。北斜面の掘削とトレンチ掘削を行う。
- 12.22(月) 北斜面トレンチセクション図の作成と写真撮影。平場の南北バンク掘削終了。北斜面及び西斜面の掘削を行う。
- 12.24(水) 北斜面の掘削・伐根作業を行う。西斜面は, 上半分の掘削が半分ほど終了した。
- 12.25(木) 北斜面の掘削を行う。ほぼ完掘状態になる。平場2の掘削に入る。東半分がほぼ終わる。西斜面の掘削を行う。
- 12.26(金) 西斜面と平場2の掘削を行う。午後から道具類の片付け及び清掃を行う。
- 1.5(月) 西斜面と平場2の掘削を行う。北斜面と平場2へ続くバンクセクションの写真撮影と図面作成。また, 堀切部分の掘削を行う。



1.6 (火) 北斜面の掘削，堀切の掘削及び平場2の南側斜面の掘削を行う。堀切の断面図の作成。(写真撮影含む)

1.7 (水) 西斜面部の掘削，堀切の掘削を行う。



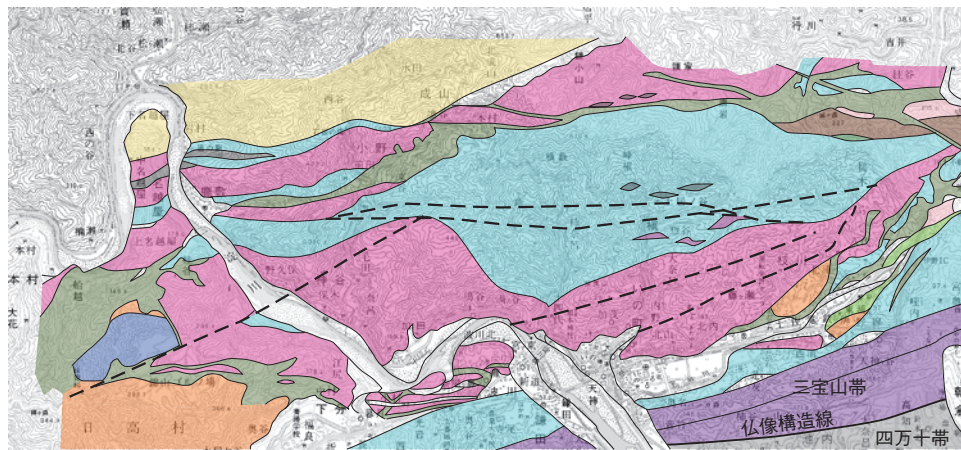
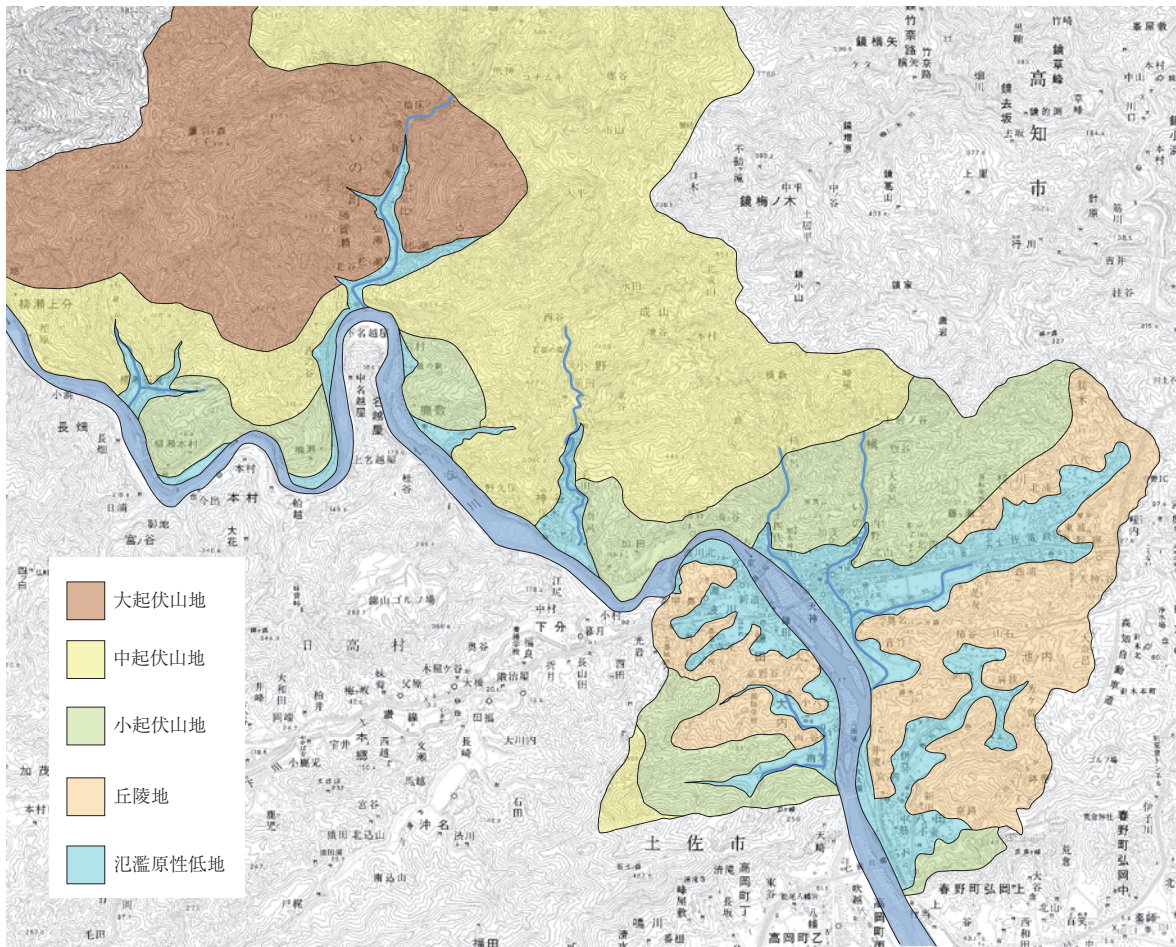
1.8 (木) 航空写真測量前の清掃及び西斜面掘削と堀切の掘削を行う。明日清掃終了後，航空写真測量予定。

1.9 (金) 貢山城跡全体の航空写真測量を実施する。午後から，山頂部で使用していた機材類の撤去を行う。



1.13(火) 発掘調査終了。次に予定されている天神溝田遺跡調査のため現場機材等の撤収作業。





0 3000m

図10 いの町地質・地形図

## 第三章 周辺の歴史的環境

### 1. 地理的環境

当遺跡の所在する吾川郡いの町は、高知県の中央部に位置し、西は吾川郡仁淀川町・高岡郡越知町・高岡郡日高村、北は土佐郡大川村・伊吹山(1502.8m)～寒風山(1763.0m)～笹ヶ峰(1859.5m)～平家平(1692.6m)を境に愛媛県、南は土佐市、東は土佐郡土佐町・高知市に隣接している。昭和29年に4町村の合併で伊野町を成し、平成16年10月1日に北東部に位置する旧吾川村・北部に位置する旧本川村が合併して現在のいの町が成立した。面積470.71km<sup>2</sup>(平成17年10月1日現在)、人口25,062人(平成22年国勢調査)を有している。北部の本川地区は標高1,000m前後の山岳地で、西日本最高峰の石鎚山から連なる高山を多く有し、吉野川の源流域に位置する。南部には古生層からなる丘陵と、東西方向の標高15～20mの沖積層の低地がある。

当地域の地質に目を向けると大きくは秩父累帯に属し、北から秩父亜帯、黒瀬川亜帯、三宝山亜帯に三分される。北部は一部が仁淀ユニットと呼ばれる岩層に含まれ、先白亜系の砂岩、泥岩の互層からなり、泥岩部にはチャート、石灰岩、緑色岩の岩塊が含まれている。南部は黒瀬川構造帯と呼ばれるシルル～デボン期の古期岩類からなるレンズ状の岩帯である。この地域の黒瀬川構造帯は東西方向に細長く帯状にみられることから大きく四帯に分けられている。いの町南部の中心部は、黒瀬川構造帯の一部を構成する伊野層があり、岩層は緑色岩、泥質岩からなり、チャート、石灰岩が含まれる。仁淀川断層を南限に仏像構造線までの間は三宝山亜帯と呼ばれチャート、泥岩、砂岩で構成される斗賀野層と、石灰岩、チャート、凝灰岩、砂岩、泥岩が含まれる三宝山層の付加帯にあたる。いの町八田が秩父累帯の南端に位置し、仏像構造線に接する。今回報告する遺跡は、大きく秩父累帯南帯の三宝山帯に属され、岩層は砂岩、泥質岩からなり、斗賀野層にはチャート、三宝山層には部分的に石灰岩が含まれる。

いの町を流れる仁淀川は、流域面積1,560km<sup>2</sup>・流路は124kmを誇り、吉野川・四万十川に次ぐ四国第三の河川である。上流域は石鎚山に源を發する面河川と、分水嶺である久万川が合流して形成され、四国山地に深いV字谷を刻む。西から南西縁に沿って蛇行しながら南東に流れたのち、町の中心部をなす南東部の中央を南流し、やがて土佐市を経て土佐湾に注ぐ。仁淀川の水は透明度も高く「仁淀ブルー」と称され、水質は全国1位(2010年)に位置付けられている。

集落は全体として、仁淀川およびその支流である上八川川・小川川・宇治川・勝賀瀬川・早稲川・奥名川などの河谷や低地に立地する。暖温帯の照葉樹林に町域のほとんどが覆われているが、北部山地の高所は冷温帯でブナ・ミズナラ等の落葉樹林をみる。

産業は南部の平坦地では施設園芸と果樹栽培が中心となっており、中部では生姜を特産としている。いの町は、江戸期以来土佐紙の生産で知られており、「土佐紙生業」の中心地である。豊富な水源と、町木にも指定されている原料のひとつ三桮の産地でもあり、製紙業や印刷業などが盛んである。



2. 歴史的環境

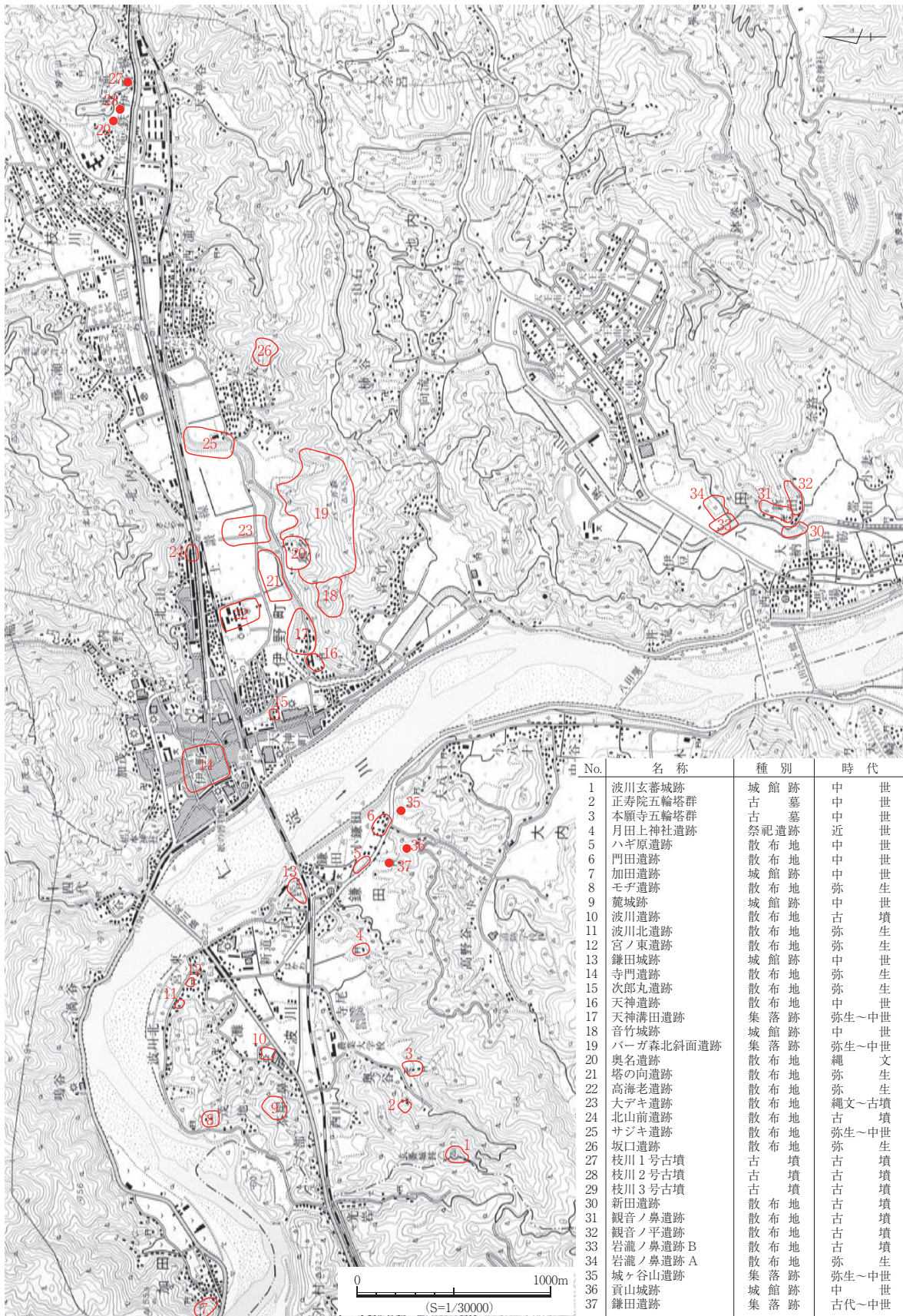


図 11 周辺の遺跡地図



## 2. 歴史的環境

### (1) 縄文時代

吾川郡いの町の歴史は、縄文時代まで遡ることとなる。宇治川左岸の奥名遺跡から縄文時代中期中葉の船元Ⅲ A式土器が発見された。同じく大デキ遺跡の水田中から、排水工事の際に縄文晩期の磨製石斧が発見された。また八田神母谷遺跡からは縄文時代後期中葉の伊吹町式土器が発見され、晩期の自然流路やピットを検出したことにはじまり、以降採集経済を基盤とした縄文時代からの生活の営みの一端が伺える。

### (2) 弥生時代

弥生時代前期の遺跡としては、いの町八田に所在する八田神母谷遺跡から弥生時代前期の遺物も多く確認される。県内初の無釉の木葉文を施した壺の破片や、条痕調整など縄文時代的要素を多分に残す深鉢や浅鉢などの遺物が出土し、周辺部に位置する仁淀川流域の動向を伺うことができる。

弥生時代中期の遺跡は、大デキ遺跡から弥生土器の甕形口縁部が発見され、大デキ遺跡から東へ500mの地点に位置するサジキ遺跡からは石包丁が出土している。同時期の遺物として岩瀧ノ鼻遺跡 A から中細形銅剣が出土している。

弥生時代中期後半の代表的な遺跡としては、バーガ森北斜面遺跡が挙げられる。バーガ森北斜面遺跡は、いの町奥名・是友に所在し、仁淀川の支流、宇治川に沿った標高50～80mを測る丘陵上に立地する。当遺跡は、昭和32(1957)年に地元の方によって土器が発見され、丘陵部の調査の結果、東西約450m、南北300mの範囲の中で7地点から遺物が出土し、その状況から弥生時代の集落の存在が想定されていた。昭和49(1974)年と昭和51(1976)年に三世庵地点と奥名地点の発掘調査が行われ、竪穴建物跡3軒と、弥生時代中期後半の土器や、石包丁、叩石、打製石鏃、鉄刀子、投弾などが出土し、その結果、是友から奥名にかけて、それぞれ谷を挟んで標高50～80mを測る丘陵斜面に弥生時代の集落があることが明らかとなった。特に三世庵地点で発見された竪穴建物跡は残りが良く、昭和50(1975)年に「伊野町指定文化財」として登録された。その後、平成9(1997)年と平成11(1999)年に、いの町農道改良工事に伴い新崎地点と岩神地点の発掘調査が実施され、弥生時代中期末～後期前半の竪穴建物跡や土坑などが遺物とともに発見されたことにより、集落の広がりをより明確に把握することができた。高知県を代表する弥生時代の遺跡であり、調査事例の少ない弥生時代の「高地性集落」の構造を解明するうえで学史的にも欠かす事のできない遺跡である。

弥生時代後期になるとそのほとんどが低地性遺跡の様相を呈するが、後期初頭の鷹ノ巣山遺跡はいの町北部標高1,150mの越裏門地区に所在する遺跡であり、低地で見られるような遺跡とは性格が異なる。発見された土器はすべて甕形土器の焼成直後のものであって、周辺部には洞窟もなく狩屋としての性格を示している。いの町南部では、後期前半の寺門遺跡、後期後半の天神溝田遺跡が仁淀川支流の早稲川及び宇治川の形成する沖積地に立地する。寺門遺跡からは壺・甕・高杯などが出土し、天神溝田遺跡からは土器のほかに、昭和36(1961)年の宇治川改修工事の際に発見された弥生時代中期末頃の中細形銅剣・中広形銅戈(いの町指定文化財)などが出土しており、バーガ森北斜面遺跡との関連性も考えられている。

## 2. 歴史的環境

### (3) 古墳時代

弥生時代終末期～古墳時代前期にかけての集落の動向は、仁淀川流域では、いの町八田に隣接する高知市春野町の西分増井遺跡で弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけての拠点とも呼べる集落が成立をする。また、いの町八田の岩瀧ノ鼻遺跡Bからは、古墳時代中期の土器とともに鉄斧が出土している。同じく八田神母谷遺跡では、畿内系搬入土器や、ナスビ形木製品等の農耕具類・建築部材等の木製品も出土している。さらに、古墳時代中期の須恵器壺(TK73 型式或はそれ以前)も出土し、祭祀性の強い遺物群が検出されている。古墳は、古墳時代後期の枝川古墳群と八田古墳がある。枝川古墳群からは3基の横穴式石室を持つ古墳が確認されている。3基とも円墳であり、須恵器・玉類・硝子環・銀環・鉄刀子・大刀鞘が出土した。枝川1～3号墳は、いの町指定文化財である。

### (4) 古代

律令期に入り、郡郷制が施行される頃のいの町の大半は吾川郡大野郷に属していたと思われる。当初吾川郡は8郷からなり、仁淀川の兩岸に拡大したが、承和8(841)年に折半された。西岸の波川付近は高岡郡吾川郷に、南部の八田地区を吾川郡桑原郷に入れる説もある。なお東部の枝川・池内は土佐郡朝倉郷に属したとみられる。大野郷は天平勝宝4(752)年東大寺の封戸となっており、大野郷の貢納は国司を経て納められ、以後古代を通じて封郷であった。平成20(2008)年度に実施された、いの町道塔の向線改良工事に伴う天神溝田遺跡発掘調査では、その頃の宇治川下流域での活動を示す遺構や遺物が確認されている。

### (5) 中世

文治元(1185)年、源頼朝の守護・地頭設置により、吾川郡は京都六条若宮八幡の別当秀巖の所領とされた。吾川郡のうち、大野郷・仲村郷は室町期以後、六条若宮八幡を管轄する京都醍醐寺三宝院門跡の所領となった。仁淀川流域右岸の天崎遺跡(土佐市高岡乙)から鎌倉時代中頃(13C中葉)以降に埋納されたと思われる中広形銅矛4本が出土した。また、いの町サジキ遺跡からは籐花双雀鏡と瓦器碗が出土している。青銅器にまつわる祭祀儀礼の風習がこの頃に垣間見られる。また、室町期には天神溝田遺跡の南背後の丘陵に音竹城跡が設けられており、備前焼の壺破片や明染付皿破片などの遺物が表採されている。さらに、平成20年度に実施された、いの町道改良工事に伴う天神溝田遺跡の発掘調査では、音竹城跡に関連する屋敷の一部と、城跡の機能していた時期が窺える遺物が出土した。

室町時代の波川城跡はいの町波川西南、高岡郡日高村との境である城床に位置する。昭和48(1973)年に本丸の一部の調査が行われ、5間×2間の建物の礎石群が検出された。波川城跡は波川小研城とも称され、現在は波川玄蕃城ともいわれる。波川玄蕃清宗は蘇我氏を名乗ることから、蘇我神社を氏神として中世に勢力を伸ばした土豪と考えられる。戦国末期の頃には波川・鎌田・大内の地を領している。波川玄蕃清宗は長宗我部元親の高岡郡侵略に際して降伏し、後に元親の妹を妻として姻戚関係を結んだ。しかし、玄蕃謀反の企てにより阿波国海部で自刃させられた。一族は天正8(1580)年に鎌田城で滅ぼされ、玄蕃の妻はその後に養甫尼と称し、成山村に所領を与えられ成山御用紙の開祖となった。

## (6)近世

江戸時代になると、寛保3(1743)年の郷村帳に見えるいの町域の村々は、吾川郡伊野・八田・神谷・賀田・小野・鹿敷・柳ノ瀬・柏原・楠ノ瀬・勝賀瀬・土佐郡真木(槓)・枝川・池ノ内・中追・成山・高岡郡鎌田・大内・波川の18ヵ村を数える。江戸時代初期には、野中兼山により仁淀川本流に八田堰及び鎌田堰が設けられた。慶安元(1648)年に仁淀川東岸を開拓するために八田堰を、万治2(1659)年に西岸を開拓するために鎌田堰の築造を開始し、川沿いの諸村の物資移送と吾川郡南部や高岡平野の灌漑のために築かれた。仁淀川左岸にある弘岡井筋は八田堰から導水され、弘岡上ノ村から森山村新川に至る。井筋は諸木井筋・川窪井筋・南川井筋・北川井筋など多くの分流を形成し、吾川南部の畑地854ha余を灌漑し、内505ha余を新田とした。仁淀川上流域の物資はそれまで仁淀川河口から土佐湾を経て、浦戸湾を通じて高知城下へ運ばれていたが、内陸水路の確立により、より多くの木材物資が城下へ運ばれ、城下の物資も仁淀川上流域へ運ばれるようになった。一方、鎌田堰は、八田堰の上流2kmに位置し、長さ540m・幅18m・高さ12.6mを築いた。中央部には長さ7m・幅5mの凹字形をした筏越を松・楠の巨材を用い設けた。塞き止めた用水は鎌田閘(長さ16m・幅2.7m・高さ3.6m)から鎌田井筋へ流れる。井筋は深さ2.7~3m・幅2.7mを測り、大内・高岡・中島を経て新居に入り、再び仁淀川へ入る。延長は約12kmである。

いの町の和紙については、「七色紙」が有名である。七色紙とは、黄紙、浅黄紙、桃色紙、紫色紙、柿色紙、萌黄紙、朱善寺紙をいう。「成山七色紙」の製作に成功した安芸家友は、安芸城主の安芸国虎の次男であり、国虎の滅後は、いの町成山において七色紙の製作に従事し、慶長5年に山内一豊が国主になると家友は御用紙方役を任命されて成山に居住する。以来、成山、伊野には合計24戸の御用紙漉家が指定されて、将軍家への献上紙や土佐藩札の原紙など上質紙を製紙し大きく発展した。文政9(1826)年御用紙漉家に生まれた吉井源太は製紙器具の改良を工夫し、製法も分業化したため生産量が增大する。明治維新後には、自由販売になり企業化が進展し現在に至る。

## 参考文献

- 『伊野町史』 伊野町 1973
- 『高知県史 考古編』 高知県 1968
- 『伏原大塚古墳』 土佐山田町教育委員会 1993
- 『高知県遺跡地図』 高知県教育委員会 1998
- 『高知の研究1 地質・考古編』 清文堂 1983
- 『高知の研究2 古代・中世編』 清文堂 1982
- 『日本の古代遺跡39高知』 保育社 1989
- 『高知県の地質』 高知市民図書館 1969
- 『八田神母谷遺跡』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集 1998
- 『八田奈呂遺跡Ⅰ』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集 1999
- 『八田奈呂遺跡Ⅱ』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第51集 2000
- 『天崎遺跡』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第39集 1999
- 『バーガ森北斜面遺跡』 伊野町教育委員会 伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 1999
- 『バーガ森北斜面遺跡Ⅱ』 伊野町教育委員会 伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 2001

## 2. 歴史的環境

『高知県の地名日本歴史地名大系40』 平凡社 1983

『角川日本地名大辞典39高知』 角川書店 1986

『高知県土木史』 社団法人高知県建設業協会 1998

『日本城郭大系15香川・徳島・高知』 新人物往来社 1979

# 第Ⅳ章 城ヶ谷山遺跡

## 1. 調査概要

当調査区は、丘陵の縁辺域から低湿地帯の境界部にあたり、現地標高15.50～17.00mを測る。傾斜した丘陵縁辺部と低湿地の平坦部で古代～中世にかけての遺構と遺物が検出された。主な遺構はピットであり、中には掘立柱建物跡を構成する柱穴も確認された。他には焼成土坑、溝などが検出され集落構造の一端を知る事ができる成果が得られた。

出土遺物は古代～中世にかけての土器・陶磁器類が包含層からまとめて出土した。古代では土師器・須恵器の供膳具や甕、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土し、中世では土師質土器の杯や皿、備前焼、貿易陶磁器の出土がみられた。また、下層では弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての土器が出土した。この時代の遺構は確認できなかったが、何らかの祭祀を行った可能性も考えられる。

## 2. 調査の方法

### (1)調査方法

平成18年度に実施された試掘調査の結果に基づき、工事予定区域11,620㎡の内、工事の影響を受ける範囲1,206㎡について発掘調査を行った。

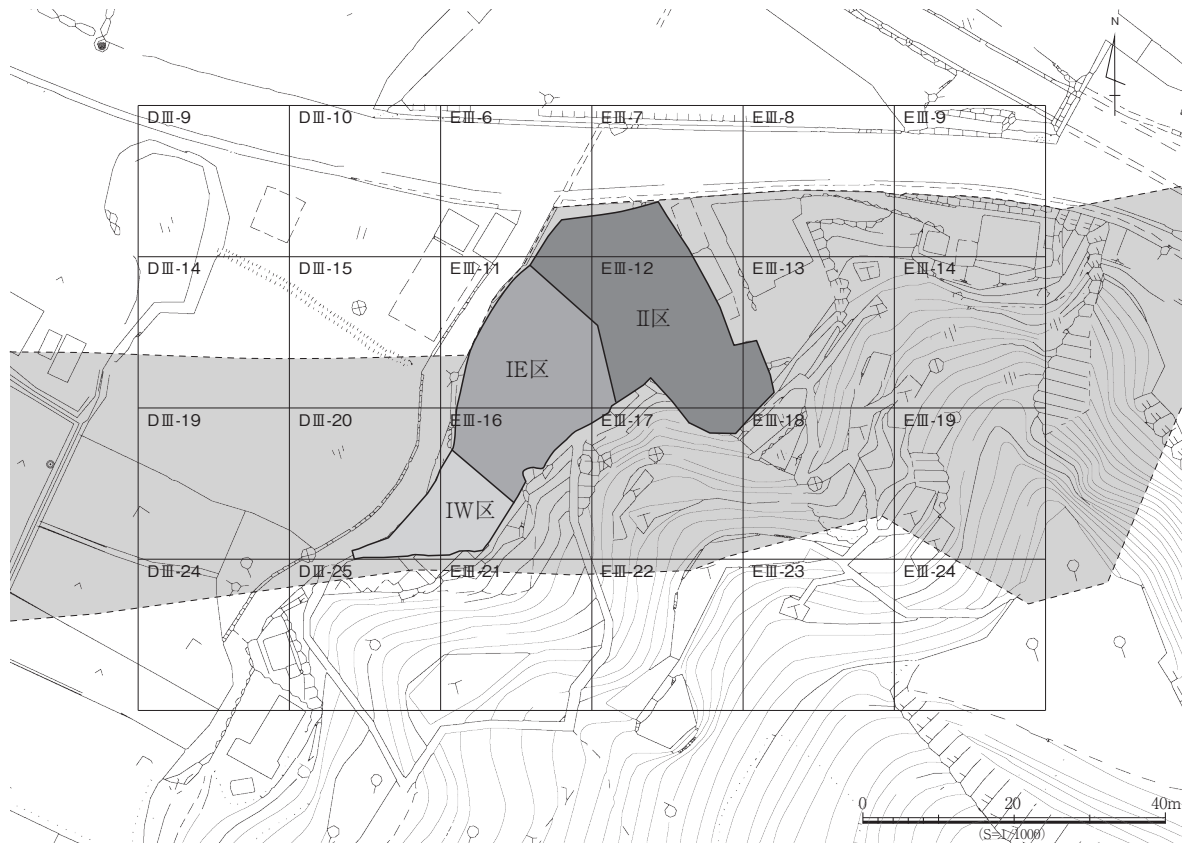


図12 城ヶ谷山調査区位置図



## 2.調査の方法

本調査区の現況は山林裾に開けた宅地であり、まずは対象範囲内の雑木の伐採、草刈りを行い、重機により宅地の基礎撤去や産廃物の処理を行った。その後、新たに調査区の設定を行い、調査前状況の写真撮影をした後、発掘調査に着手した。表土及び無遺物層は重機により掘削を行い、包含層掘削、及び遺構検出作業は人力により実施した。検出した遺構については人力により掘削し、掘削終了後に遺構全体の完掘写真撮影、平面図を作成し、必要に応じて個別遺構の完掘写真撮影も行った。出土遺物については必要に応じて出土状況についての写真撮影、出土状況図の作成、レベル測量を実施した。調査終了時には航空写真撮影、及び航空測量を実施した。

測量については、3級基準点・3等水準点を設置して、今後の調査が予定されている鎌田I.C.工事予定地の西側から調査対象地全体にグリッドを設定し、大グリッド(100×100m)には東西方向にアルファベット、南北方向にローマ数字を付し、中グリッド(20×20m)と小グリッド(4×4m)にはアラビア数字を用い、包含層遺物の取り上げ等には、各グリッド番号を使用した。本報告書の図面には公共座標(世界測地系)を記している。城ヶ谷山遺跡はEⅢグリッドに位置する。

### (2)基本層序

各調査区で認められた基本的な層序は以下のとおりである。

#### I W区(調査区西壁)

第Ⅰ層：整地層

第Ⅱ層：褐色(10YR4/6)シルト

第Ⅲ層：褐色(10YR4/4)シルト(にぶい黄褐色(10YR5/6)シルト混)

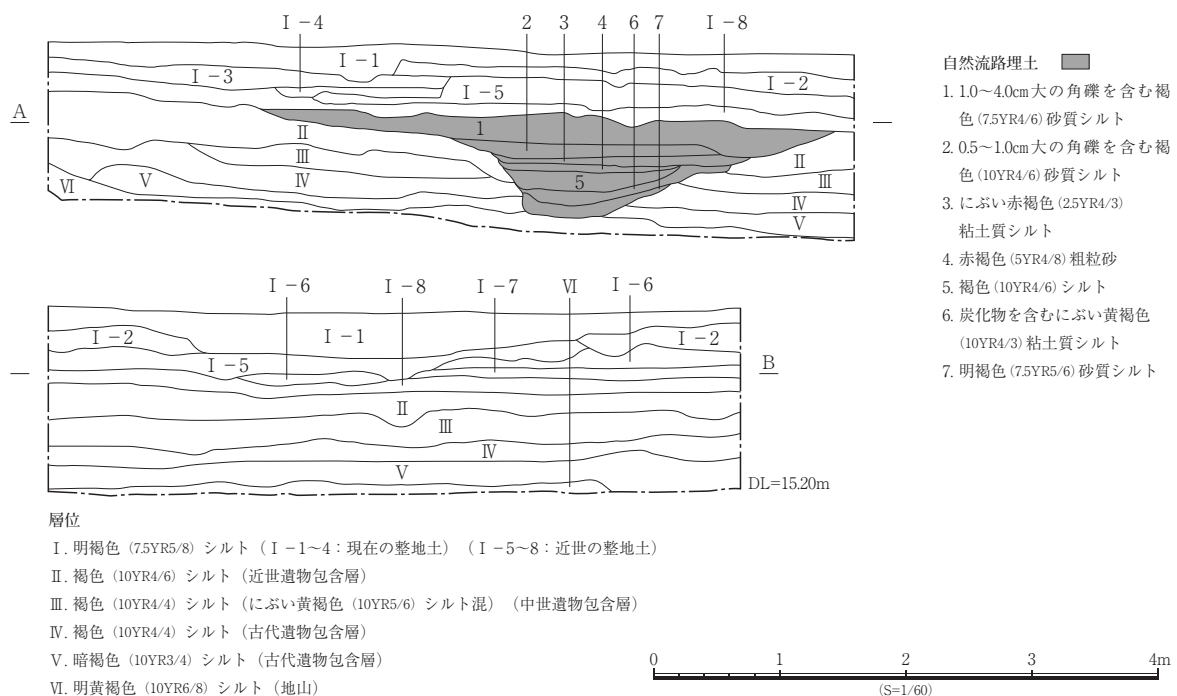


図 13 I W区 調査区セクション図

- 第IV層：褐色(10YR4/4)シルト
- 第V層：暗褐色(10YR3/4)シルト
- 第VI層：明黄褐色(10YR6/8)シルト(地山)

I W区は、丘陵谷部にあたり、調査区南壁から4～6mのところまで自然流路の堆積が確認された。遺構検出面はVI層上面であり、自然流路の堆積が認められる調査区中央部分はやや凹んだ状況であった。遺物包含層は、II～V層であり、古代～中世にかけての遺物が出土した。

### I E区(調査区西壁)

- 第I層：整地層
- 第II層：褐色(10YR4/6)粘土質シルト
- 第III層：褐色(10YR4/4)粘土質シルト(にぶい黄褐色(10YR5/6)シルト混)
- 第IV層：褐色(10YR4/4)粘土質シルト
- 第V層：暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト

I E区は、II区と同様に調査区の北西側に開けた谷部にあたり、低湿地的な堆積層により構成されている。I E区の基本的な堆積は、I W区と同じであるが、調査区の北西寄りではシルトの粘性が強くなる。SB3を構成する柱穴の並びが西壁セクションで確認された。

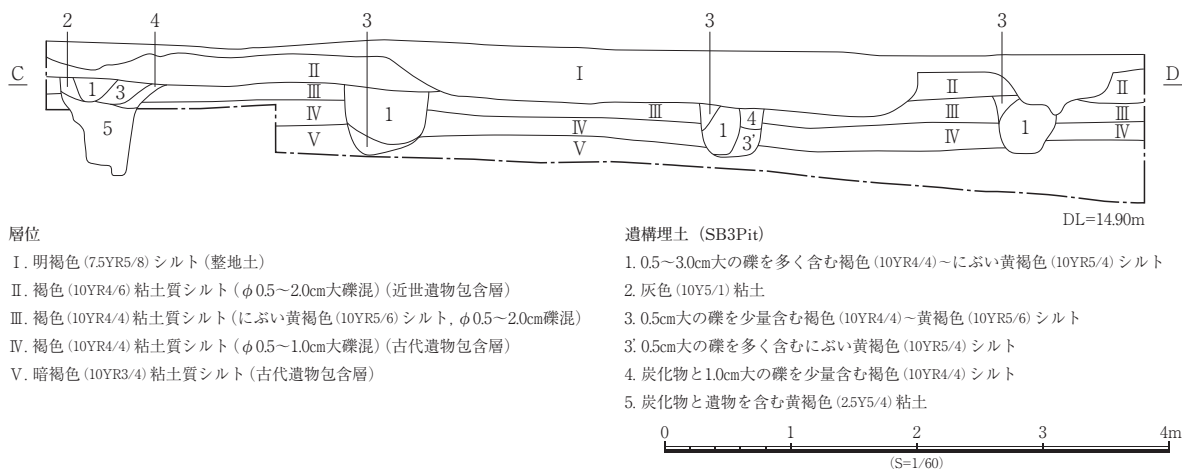


図14 I E区 調査区セクション図

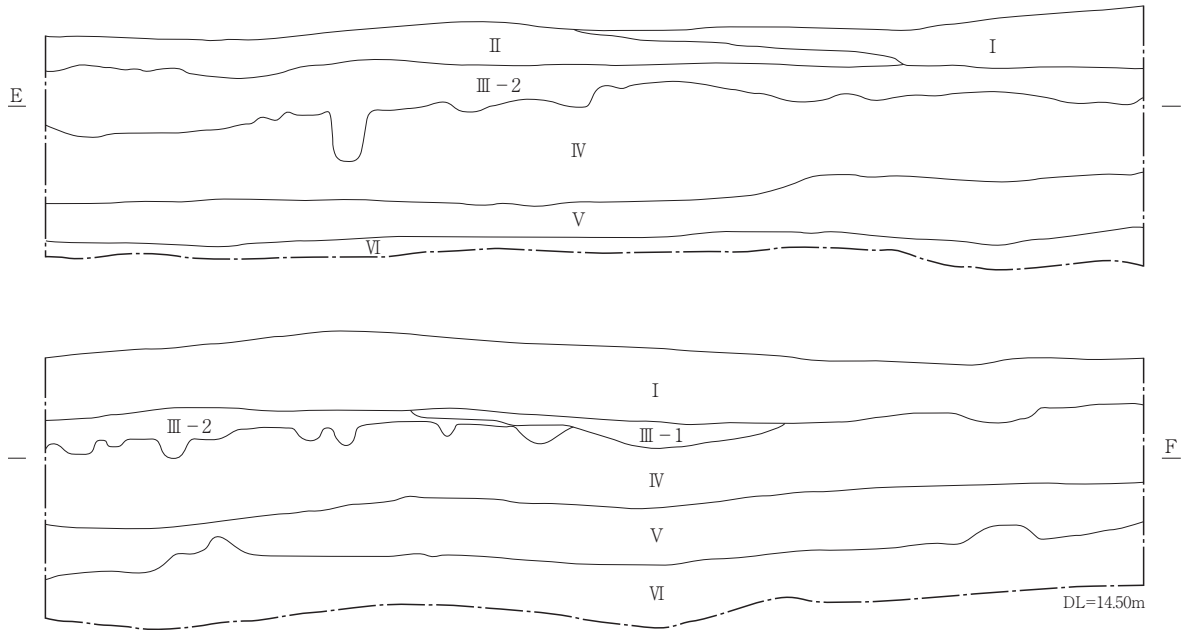
### II区(調査区北壁)

- 第I層：褐色(10YR4/6)粘土質シルト
- 第II層：黄褐色(10YR5/8)粘土質シルト
- 第III層：暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト
- 第IV層：褐灰色(10YR4/1)シルト(上部に炭化物・礫含む, 植物根痕多い)
- 第V層：褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト(植物根痕多い)
- 第VI層：明灰色(10Y5/1)粘土(植物根痕多い)

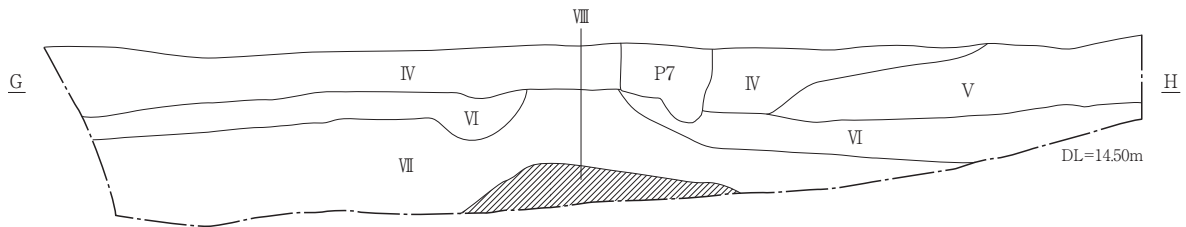
2.調査の方法

第Ⅶ層：灰色(7.5Y6/1)粘土(ノジュール化した植物根痕多い)

第Ⅷ層：青灰色(5BG6/1)粘土(植物根痕多い, 旧堤防)



Ⅱ区 北壁セクション図



Ⅱ区 東壁セクション図 (下層)

層位

- |   |   |
|---|---|
| <p>I. 褐色(10YR4/6)粘土質シルト(表土)(近世遺物包含層)</p> <p>II. 黄褐色(10YR5/8)粘土質シルト(近世遺物包含層)</p> <p>III-1. 暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト(中世遺物包含層)</p> <p>III-2. 褐色(10YR4/4)粘土質シルト(φ0.5~2.0cm礫混)(古代~中世遺物包含層)</p> <p>IV. 褐灰色(10YR4/1)シルト(上部に炭化物・礫含む, 植物根痕多い)(古代遺物包含層)</p> | <p>V. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト(植物根痕多い)(古墳時代前期遺物包含層)</p> <p>VI. 明灰色(10Y5/1)粘土(植物根痕多い)</p> <p>Ⅶ. 灰色(7.5Y6/1)粘土(ノジュール化した植物根痕多い)</p> <p>Ⅷ. 青灰色(5BG6/1)粘土(植物根痕多い, 旧堤防)</p> |
|---|---|

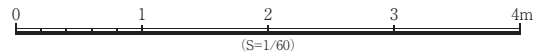


図 15 Ⅱ区 調査区セクション図





図16 城ヶ谷山遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

(1) I 区の検出遺構

検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、柵列1条、土坑6基(火葬遺構含む)、溝2条、ピットであり、標高14.50～17.50m、V・VI層上面で検出された。ここでは、各遺構について記述する。

①掘立柱建物跡

SB1 (図17)

I E区南部で検出された梁行1間×桁行3間の東西棟建物である。棟方向はN-76°-Wを示し、規模は、梁行3.10～3.25m、桁行4.80mを測り、床面積は15.60㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が3.10～3.25m、桁行は1.20～1.95mを測る。梁行の柱間寸法が大きいことから梁と棟木を持たせる小屋束等により上部構造を支えていたものと思われる。柱穴プランは全て円形であり、規模は直径0.19～0.30m、深さは13.3～36.0cmを測る。P5では、直径17.0cmの柱痕を確認した。遺構埋土は黄褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトであり、各柱穴からは遺物の出土はなかった。

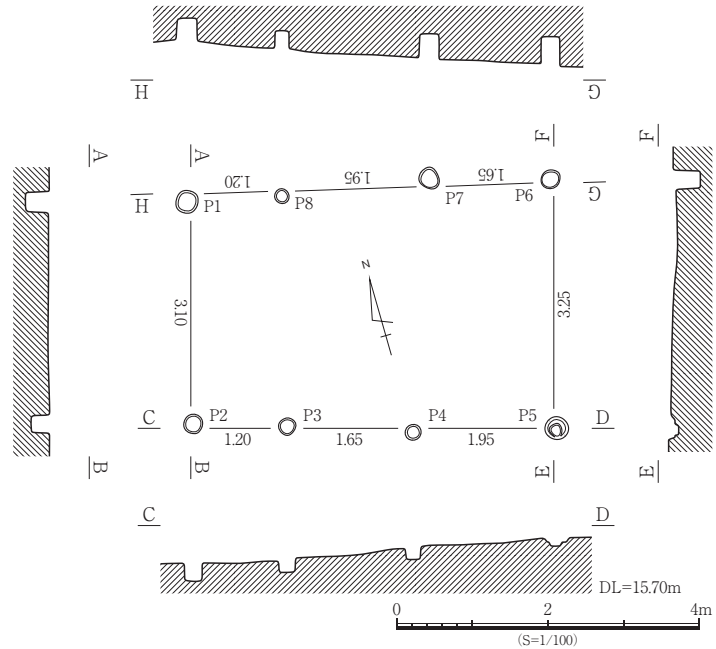


図17 I E区 SB1 遺構図

SB2 (図18)

I E区南部で検出された梁行1間×桁行2間の南北棟建物である。棟方向はN-24°-Eを示し、規模は、梁行1.50～1.60m、桁行3.70mを測り、床面積は5.92㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が1.50～1.60m、桁行は1.60～2.10mを測る。丘陵斜面に対し平行に棟方向を示しており、梁行側の柱間が狭いことから片流れ屋根的な上部構造を持つ納屋が想定される。柱穴プランはほぼ円形で、規模は直径0.22～0.35m、深さは17.3～47.9cmを測る。遺構埋土は褐色～黄褐色を呈したシルトであり、各柱穴からは遺物の出土はなかった。P3はSK3によって切られており、検出面で焼土が確認された。

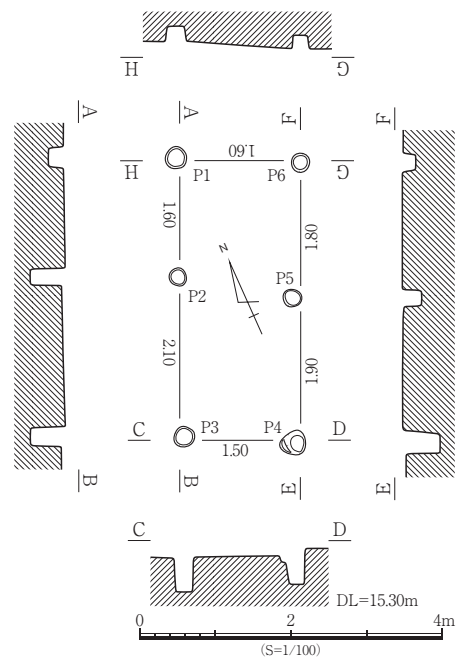


図18 I E区 SB2 遺構図

SB3 (図19)

I E区北西部, 調査区西壁際で検出された梁行2間×桁行3間の南北棟建物である。西側柱列は, 調査区西の壁断面で検出した。調査区西側は, 現況道路を維持するため拡張が行えず, 西壁の矩面を調整しながら可能な限り柱穴の平面プランの検出及び完掘に努めた。棟方向はN-35°-Eを示し, 規模は, 梁行4.35m, 桁行7.10mを測り, 床面積は31.32㎡である。西側に1間以上延びる可能性も考えられるが, 柱通りと桁行の規格から見て, 検出した規格の側柱建物跡になるものと思われる。各柱穴の柱間寸法は南側梁行が1.85~2.50m, 北側梁行は1.30~3.05mを測る。桁行は2.15~2.55mを測る。梁行は柱間距離が区々で柱通りも悪い。南側のP2・P3間が1.85m, 北側のP6・P7間が1.30mを測り, 建物の北側の柱間が狭く間口が想定される。桁行は建物の北西側と南東側の柱間距離が各柱間で揃っており, P3・P4間とP1・P10間の柱間距離が2.15mと他に比べ狭い特徴がある。柱穴プランは円形及び楕円形で, 規模は直径0.28~0.68m, 深さは6.9~83.0cmを測る。遺構埋土は褐色~にぶい黄褐色を呈した砂質シルトであり, P1では直径16.0cm, P4では直径13.0cmの柱痕が確認された。またP6では柱穴底面に直径20.0cmの扁平な礫が敷かれており, 礎板として使用されていたものと思われる。北東部分で検出したP6・7は, 他の柱穴より検出面が低くⅢ層の堆積が厚いことから旧地形が北側に傾斜していたか, もしくは中世以降に削平があったものと考えられ, 柱穴の規模が小さいのはそれらの事が起因しているものと思われる。P1・3・5からは土師器細片が出土した。

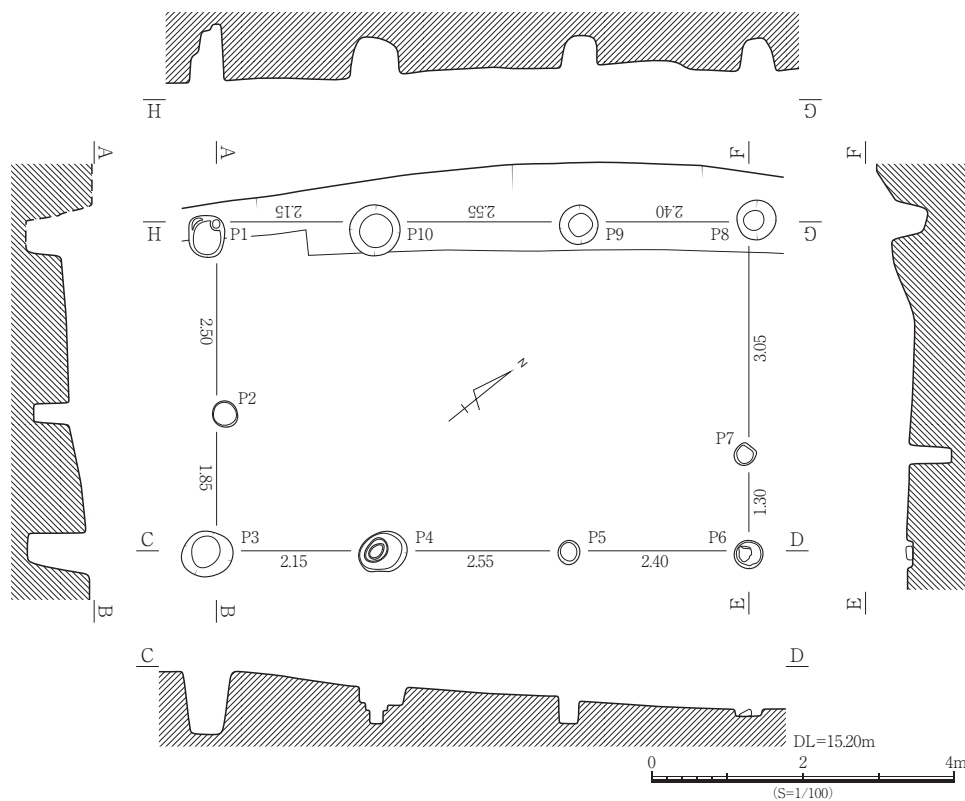


図19 I E区 SB3 遺構図

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### ② 柵列

##### SA1 (図20)

I E区北端部, II区との境界に設定したトレンチに沿って検出された。全長は15.80m, 柱間は1.80～2.20mを測る。柱穴プランは円形で規模は直径0.18～0.52m, 深さは8.0～65.0cmを測る。各柱穴の埋土は, 褐色～にぶい黄橙色を呈した砂質シルトであり, 柱穴からは遺物は出土しなかった。

#### ③ 土坑

##### SK1 (図21)

I W区中央部, 試掘調査TR3で一部が検出されていた土坑である。検出の際, 直径1.60～1.80mの円形に焼土が検出され, 焼土中央部分で土坑状のプランを検出した。中央部の平面プランは楕円形を呈し, 長径1.71m, 短径0.48～0.52mを測り, 長軸方向は南北方向を示す。遺構の深さは3.4～17.3cmを測り, 断面形は逆台形状を呈する。遺構埋土は黄褐色粘土質シルト層と炭化物が混じる焼土層が土坑内部全体に認められた。また土坑底面には炭化物層が認められ炭化材を検出した。埋土中から土師質土器杯7点, 細片16点, 鉄滓6点, 骨片が出土した。No.11・12は, ロクロ成形による土師質土器杯であり, 底部には内外面にタールが付着しており, 灯明として使用された可能性も考えられる。また, 土坑周縁には直径15cm前後を測るピットが検出され, 埋土は土坑埋土と同じく黄褐色粘土質シルト層と炭化物が混じる焼土層が認められる事からSK1に付属する遺構と思われる。全体的な形状から火葬遺構と考えられ, 中央部の落ち込みは焼成部, 周縁のピットの凹みからロストル式構造になるものと思われる。出土した土師質土器杯の形態から13世紀後半～14世紀代の遺構として位置づけることができる。

##### SK2 (図22)

I W区西部, 調査区西壁際で検出された土坑である。平面プランは方形と考えられ, 長径0.71m, 短径0.57mを測り, 深さは5.9～7.0cmを測る。断面形は浅

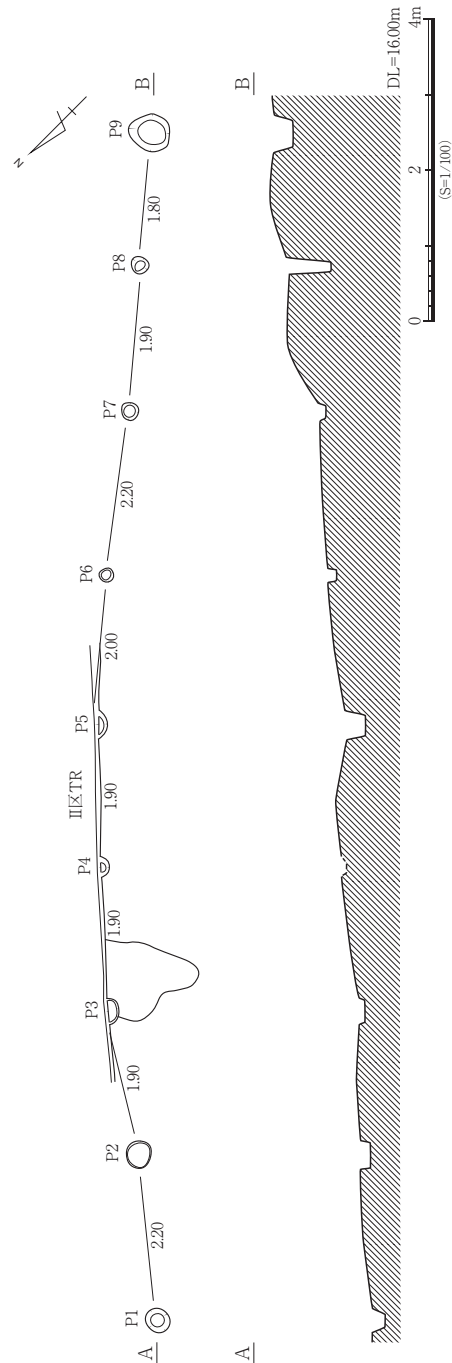


図20 I E区 SA1 遺構図

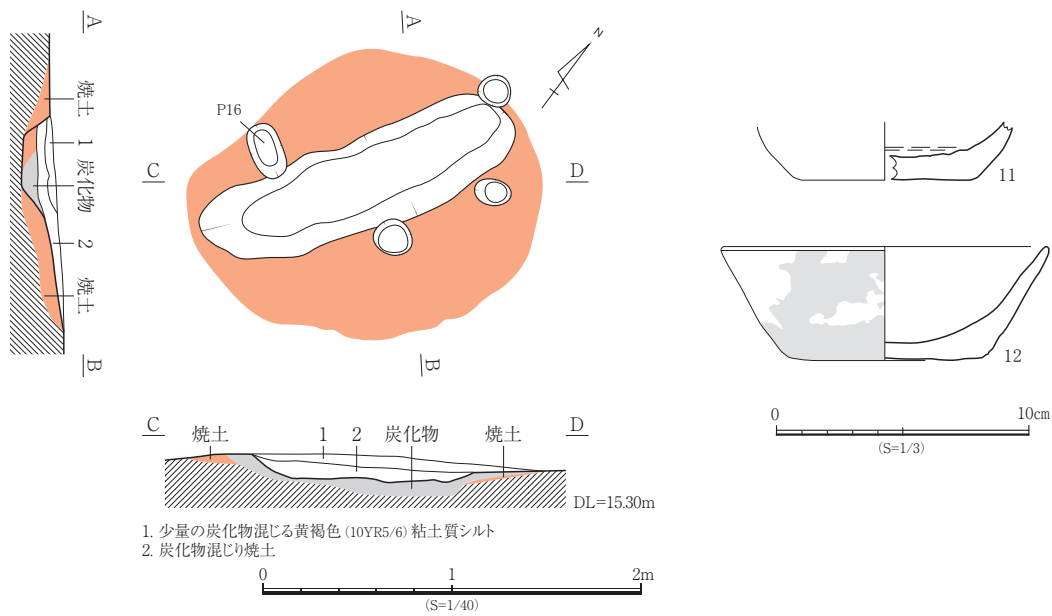


図21 I W区 SK1 遺構図・出土遺物

い逆台形状を呈し、底面で直径0.13～0.17mの円形ピットが検出された。遺構埋土は暗褐色粘土質シルトであり、ピット埋土も同じである事から柱穴と柱痕の可能性も考えられる。埋土中から土師器供膳具の細片13点、土師器甕細片16点、須恵器細片1点が出土した。検出面がVI層上面であることから、古代(8世紀後半～9世紀前半代)の遺構であると考えられる。

### SK3(図23)

I E区西部, 調査区西壁際で検出された土坑である。平面プランは不整楕円形を呈し、長径0.97m, 短径0.46mを測り、深さは20.0cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。遺構埋土は上部に焼土が認められ、下部は褐色シルトである。埋土中から土師器供膳具の細片7点, 土師器甕細片2点, 瓦器細片1点が出土した。出土遺物から12～13世紀代の遺構であると考えられる。

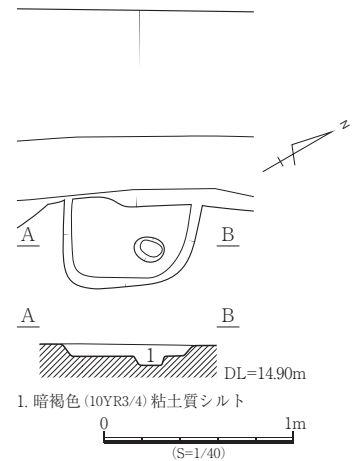


図22 I W区 SK2 遺構図

### SK4(図23)

I E区西部, 調査区西壁際で検出された土坑である。平面プランは隅丸方形と考えられる。長径0.96m, 短径0.42mを測り、深さは19.8cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。遺構埋土は褐色粘土質シルトであり1cm以下の礫を含む。埋土中から土師器供膳具の細片2点, 土師器甕細片1点が出土した。

3. 検出遺構と出土遺物

SK5 (図23)

I E区北東部で検出された土坑である。平面プランは円形と考えられ、長径0.88m、短径0.70mを測り、深さは14.9～31.3cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。検出面で土坑の周縁部に焼土が認められた。遺構埋土の上部は褐色粘土質シルト、下部は炭化物を多く含んでいる。埋土中からは遺物は出土しなかった。

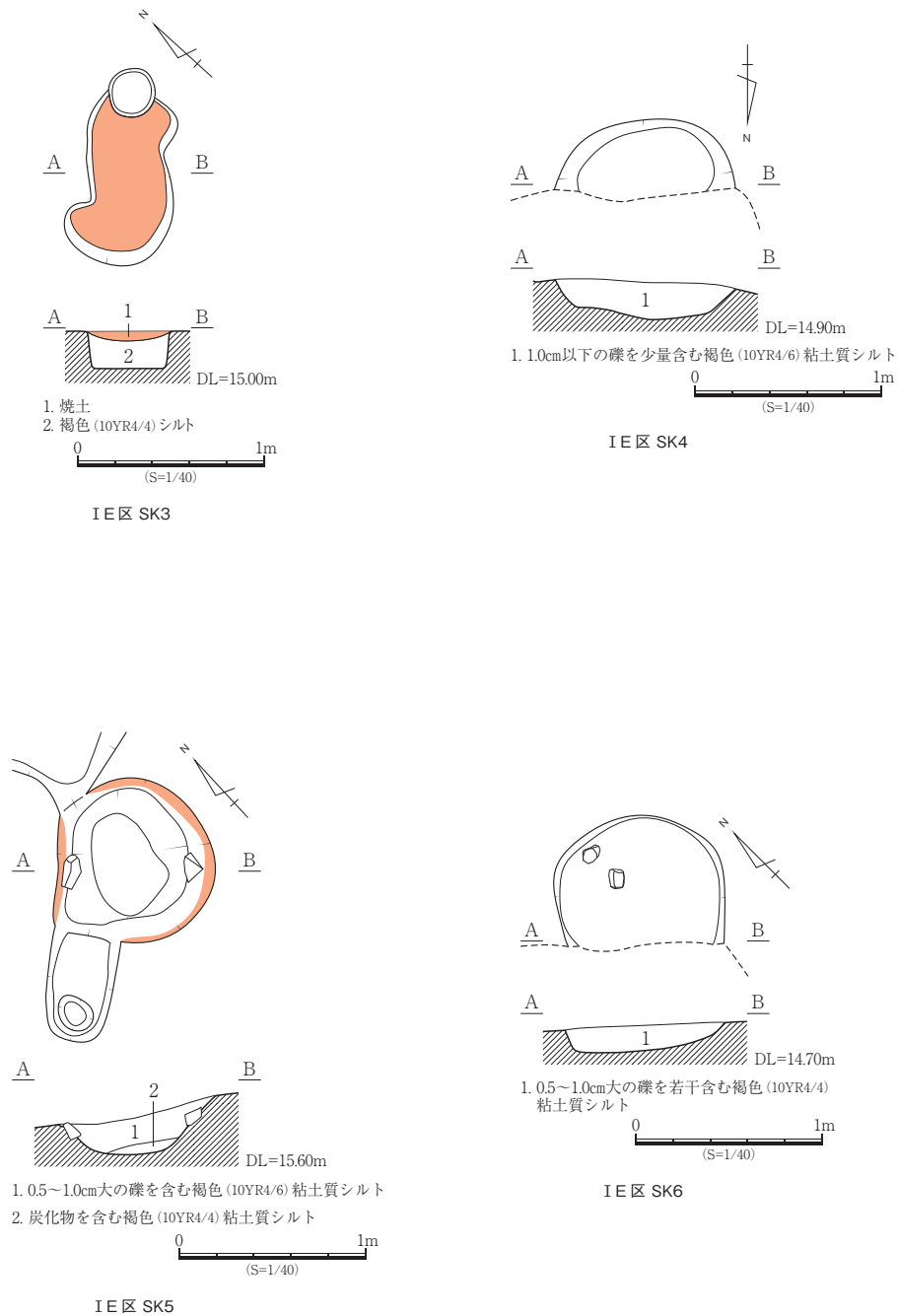


図23 I E区 SK3～6遺構図

SK6 (図23)

I E区北西部, 調査区西壁際SK4の北側で検出された土坑である。平面プランは隅丸方形と考えられ, 長径0.92m, 短径0.68mを測り, 深さは14.6cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。遺構埋土は褐色粘土質シルトであり, 埋土中から土師器供膳具の細片が3点出土した。

④ピット

P10 (図24)

I W区中央やや西寄りで検出されたピットである。平面プランは円形で長径0.24m, 短径0.22mを測り, 深さは27.2cmを測る。遺構埋土は, 暗褐色砂質シルトであり, 埋土中から土師器甕1点, 細片2点, 土錘(No.13)が出土した。

P20 (図25)

I E区北東端で検出されたピットである。平面プランは円形で長径0.45m, 短径0.37mを測り, 深さは38.8~46.9cmを測る。地山の岩盤を掘り抜いており, 遺構埋土は, にぶい黄褐色粘土質シルトであり, 埋土中から近世の土師質土器の焙烙鍋(No.15)が出土している。

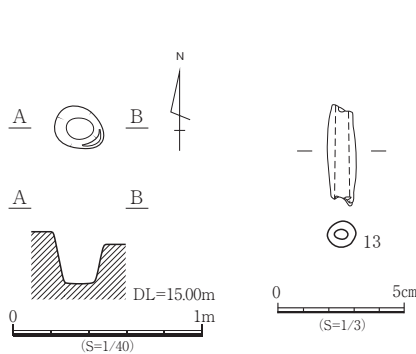


図24 I W区 P10 遺構図・出土遺物

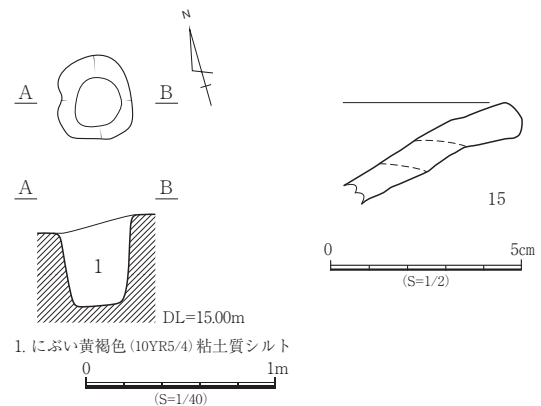


図25 I E区 P20 遺構図・出土遺物

⑤溝

SD1 (図26)

I W区中央部, 標高16.00mで丘陵縁辺に沿って検出された溝である。検出長8.62m, 幅0.59~0.87m, 深さは9.5~26.2cmを測り, 溝底の南端は一段低くなっている。遺構埋土は暗褐色粘土質シルトであり, 検出面で直径18.0~28.0cm大の集石が認められ, 埋土中からは, 土師器供膳具細片41点, 土師器甕片8点, 緑釉陶器碗1点が出土した。No.16は, 土師器皿であり, 底部はヘラ切りが認められる。17は緑釉陶器碗底部であり, 内面見込みに沈線状の界線が認められる。10世紀代の遺構として位置付けが可能である。SD1の西側は谷状の地形を呈し, プラン検出時には直径15.0~20.0cm前後の角礫が周辺にも検出され, さらに周辺部の下層には砂質シルトや礫混じりシルトの堆積も認められる事から流路(谷川)堆積物として捉える事ができ, これらの層の中からSD1と同時期の遺物も出土している事から10世紀代に流路の氾濫があったものと思われる。

3. 検出遺構と出土遺物

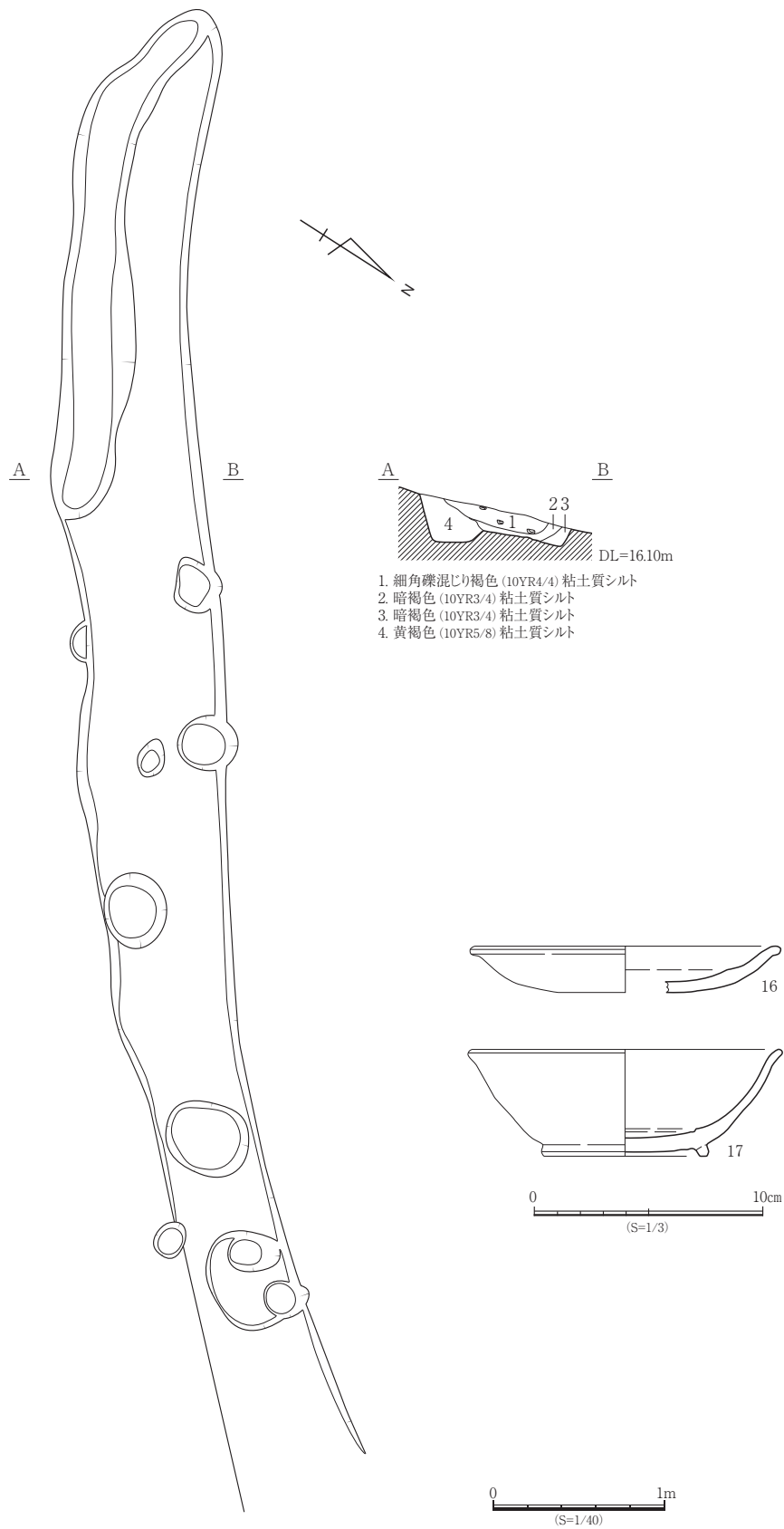


図 26 IW区 SD1 遺構図・出土遺物



(2) I 区の包含層出土遺物

ここでは、包含層から出土した遺物について層位・器種ごとに取り上げる。I W区と I E区では包含層の堆積が異なるため I W区から層位ごとに記載する。

I W区

① II 層出土遺物 (図27No.18)

II 層は、近世の遺物が出土した。No.18は、肥前内野山窯の銅緑釉が施された皿である。見込みに蛇ノ目釉剥ぎが認められる。

② III 層出土遺物 (図27No.19～21)

III 層からは古代～中世の遺物が出土した。19は土師質土器杯である。回転ナデ調整が施され、外底部にヘラ切り痕が認められる。20・21は土師器碗である。20の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は強い横ナデが施され瓦器碗の調整技法に類似する。21は底部片であり、20・21ともに低い高台が付く。

③ IV 層出土遺物 (図27No.22～24)

IV 層からは古代～中世の遺物が出土した。22・23は土師器碗である。22は底部と思われる、外底部にヘラ切り痕が認められる。23はベタ高台から内湾して口縁部は大きく外反する。24は土師器甕であり、口縁部は外反、端部は横ナデにより上方に尖り気味に仕上げる。胎土にはチャートが含まれており在地産と考えられる。

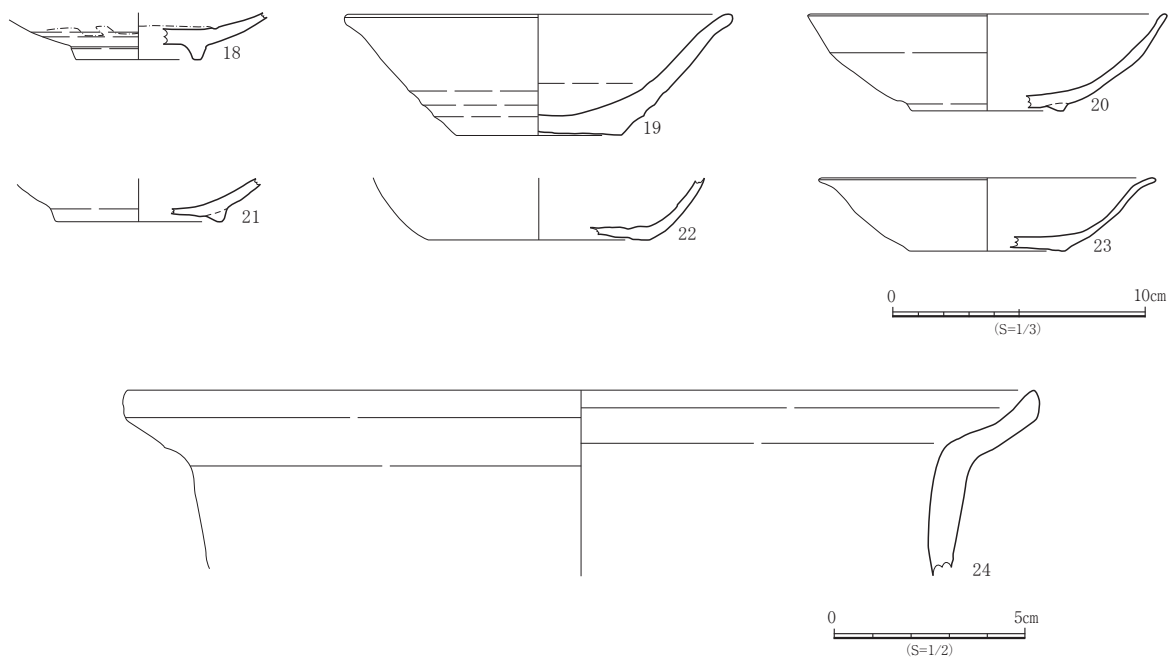


図27 I W区 II～IV層出土遺物 (II層 18・III層 19～21・IV層 22～24)

3. 検出遺構と出土遺物

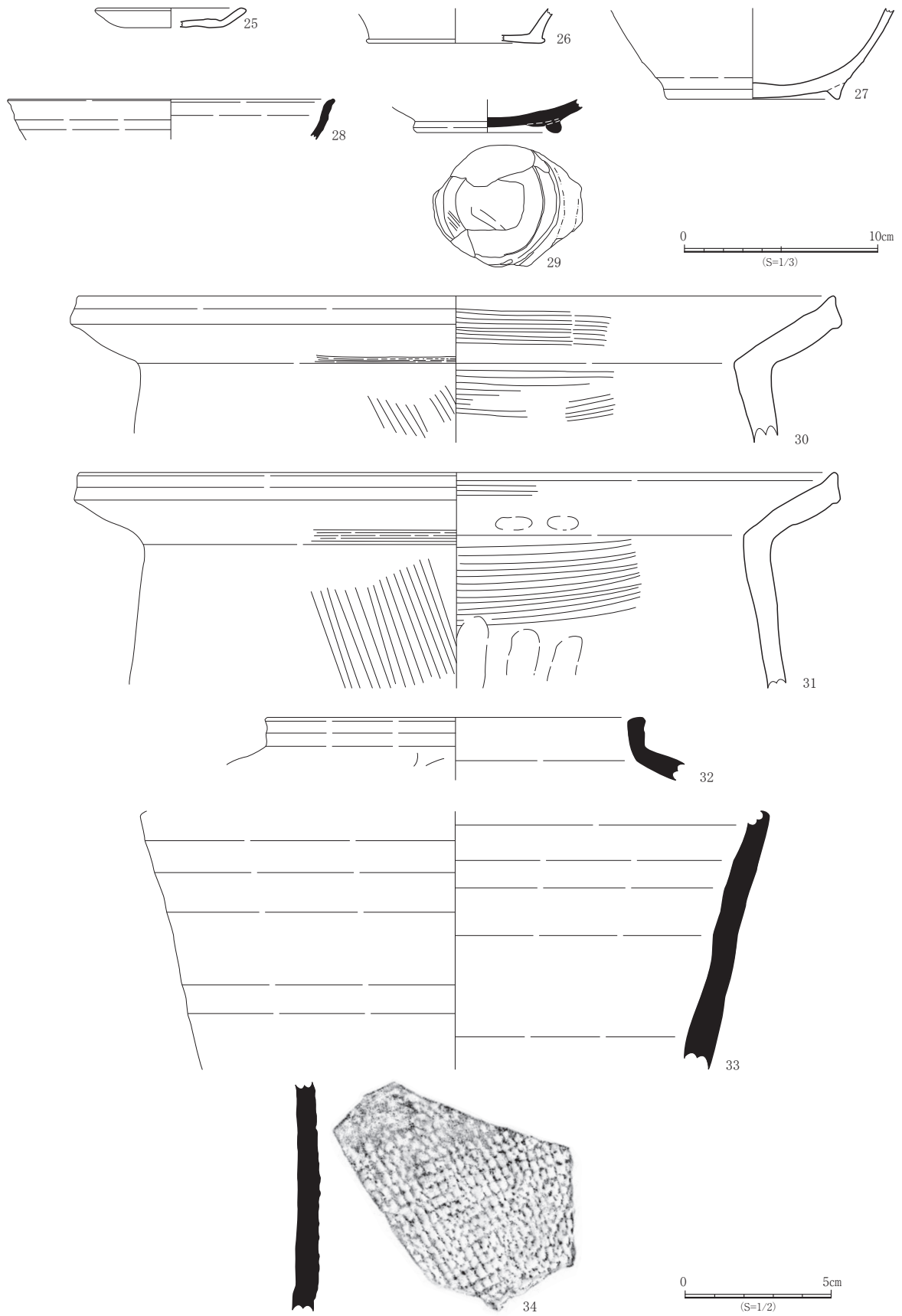


図28 I W区 V層出土遺物

## ④ V層出土遺物(図28No.25~34)

V層からは古代の遺物がまとまって出土した。供膳具は土師器の杯・皿, 須恵器の椀がみられる。25は土師器皿であり, 短く立ち上がり, 口縁部は丸くおさめる。底部はヘラ切りである。26は土師器杯であり, 底部は分割成形による段を持つ。27は内黒の黒色土器椀である。断面三角形の高台が付き, 底部はやや丸みを持つ。在地産と思われる。28・29は須恵器椀である。28は口縁部片であり, 口縁端部は外方に尖り気味に仕上げている。端部内面は沈線状に凹む。29は底部片であり, 丸みを持つ高台が貼付される。外底部にはヘラ起こしの痕が認められる。焼成は不良で瓦質的な仕上がりである。在地産と思われ, 仁淀川流域では天崎遺跡で管見がみられる。30・31は土師器甕である。口縁部は, 「く」の字に外反し, 端部は面を成し上方に尖る。胴部外面は縦方向, 内面は横方向のハケ調整が施され, 口縁部は横方向のハケ調整が施される。32・33は須恵器壺である。32は短頸壺の口縁部であり, 上方に短く立ち上がり, 端部は水平な面を成す。外面はナデ調整が施される。33は壺の胴部片であり, 上下が欠損する。上方の欠損部は壺の肩部にあたり, 器形からみて長頸壺になるものと思われる。34は須恵器甕の胴部片であり, 外面に格子状のタタキ目が認められる。焼成は不良で瓦質的な仕上がりである。

## I E区

## ① I・II層出土遺物(図29No.35~37)

I E区は, 上層が攪乱の影響を受けており, 上層部の遺物の取り上げは層位別におさえる事が困難であったためI・II層の一括で取り上げを行った。主に近世~昭和初期の遺物が見られる。35は灰釉が施された唐津皿である。見込みに胎土目がみられる。底部は削り出しによる高台が付き, 外底中央部は凸状になる。36は在地産の尾戸窯の碗である。全体的ににぶい黄色の釉が施される。畳付と高台の一部に砂目が残る。37は全体的に赤黒釉が施された天目茶碗である。外面下部は露胎である。

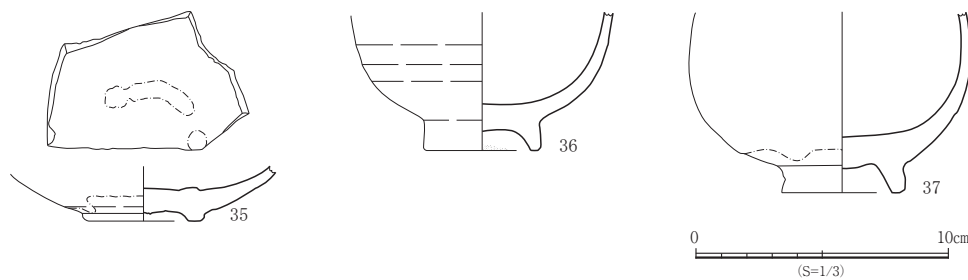


図29 I E区 I・II層出土遺物

## ② III層出土遺物(図30No.38~41)

III層では中世の遺物が集中して出土した。38・39は青磁碗であり, 38は外面に片切彫りによる蓮弁文が施される。39は底部片であり, 断面四角形の高台が付く。釉は高台外面まで施される。40は白磁皿で, 内面見込みには陽刻による文様が施される。底部は碁笥底を呈する。41は天目茶碗であり, 全体的に黒褐色を呈した釉が施され, 口縁部は禾目状を呈する。

3. 検出遺構と出土遺物

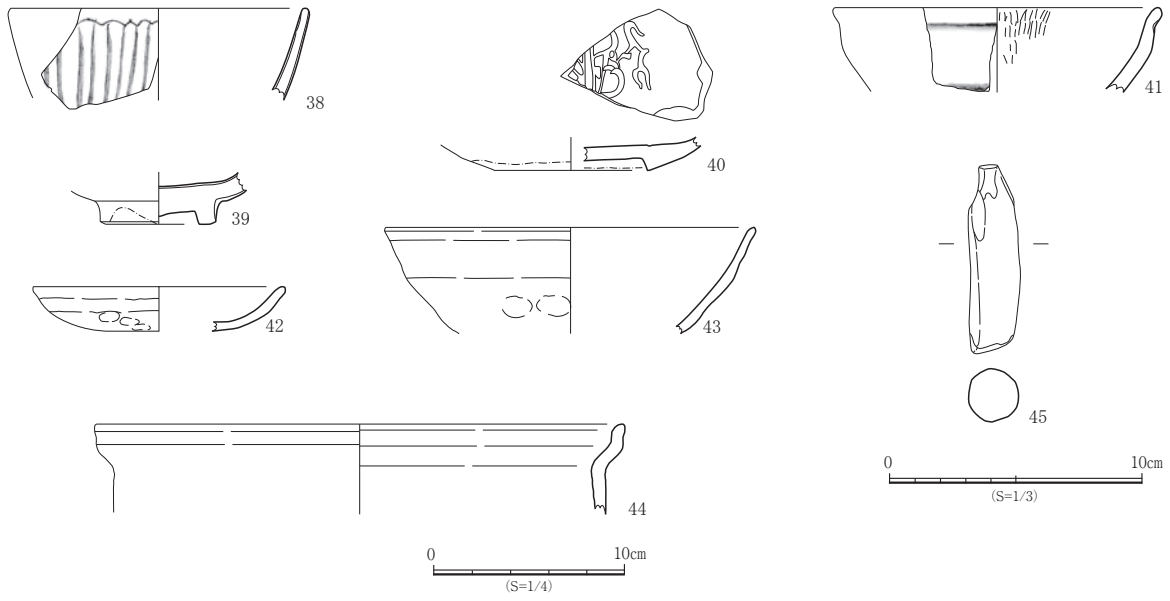


図 30 I E 区 III・IV層出土遺物 (III層 38～41・IV層 42～45)

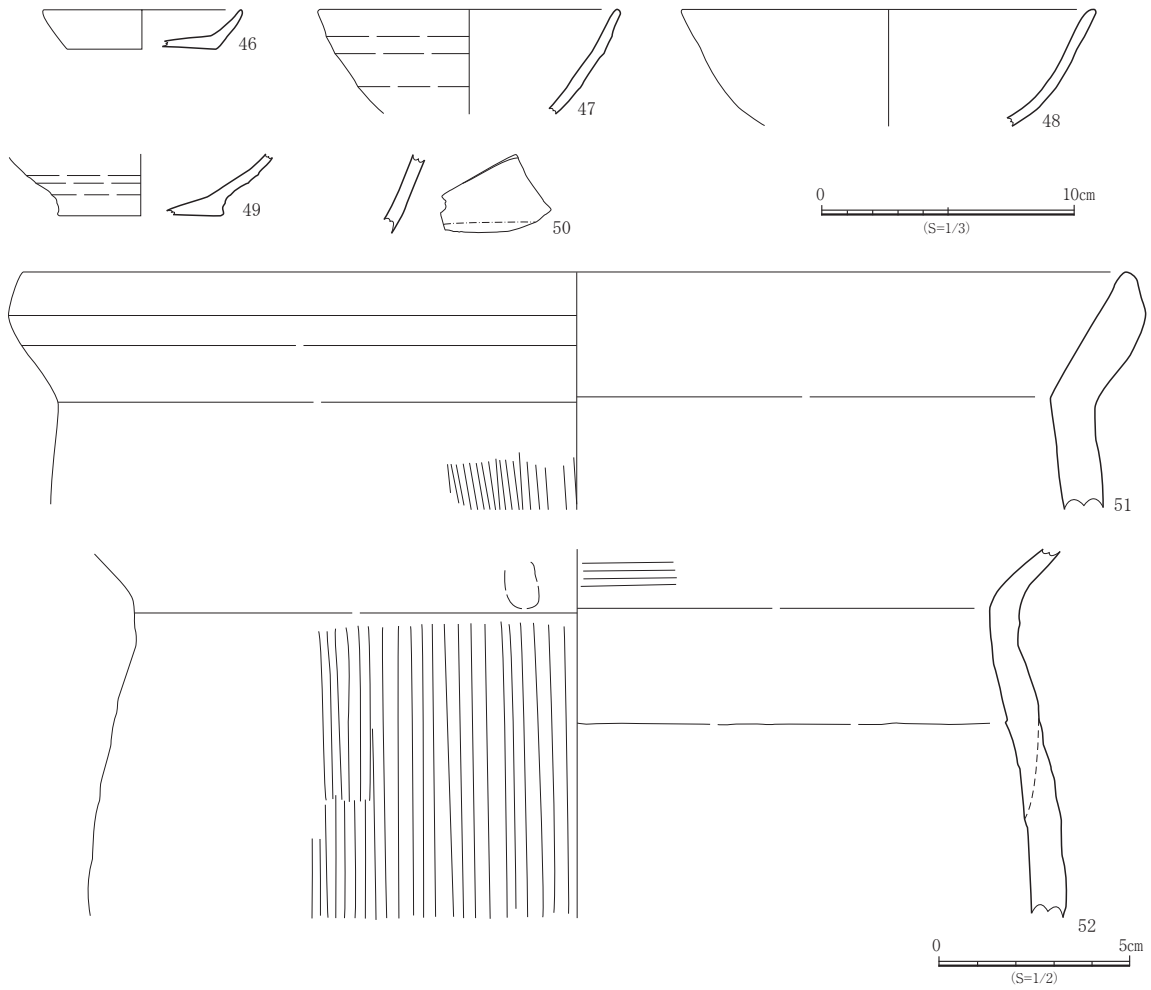


図 31 I E 区 V層出土遺物

## ③IV層出土遺物(図30No.42~45)

IV層では中世の遺物が出土した。42は瓦器皿である。外底部は指頭圧痕、口縁部はナデが施される。43は瓦器椀であり、口縁部は二段の横方向のナデ痕がみられる。44は瓦質土器鍋である。口縁部の形態は、受け口状を呈し、端部内面は、強い横ナデにより沈線状に凹むほどの調整が施される。畿内からの搬入品と思われる。45は瓦質土器羽釜の脚部片である。

## ④V層出土遺物(図31No.46~52)

V層では古代の遺物が出土した。46~49は土師器である。46は皿であり、47~49は椀である。47は横ナデが顕著であり、48に比べやや直線的に立ち上がる。48の口縁部は外反する。49は底部であり、円盤状高台である。内面は凹み、外面には糸切り痕が認められる。50は白磁碗の体部片である。外面の下半は露胎である。51・52は土師器甕である。51の口縁端部は面を成し、上方に尖る。51・52ともに外面には縦方向のハケ調整が施される。

## (3)II区の検出遺構

II区は本調査区の北部にあたり、現県道側に接した地点である。遺構検出面は、標高14.50~16.50mであり、古代~中・近世にかけての掘立柱建物跡7棟、柵列2条、溝6条、土坑10基、ピットを検出した。ここでは、遺構ごとに述べる。

## ①掘立柱建物跡

## SB4(図32)

II区南端部、IE区と重複して検出された梁行1間×桁行3間の南北棟建物であり、ここではII区の検出遺構として取り上げる。棟方向はN-38°-Eを示し、規模は、梁行1.90m、桁行5.00~5.20mを測り、床面積は9.88㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が1.90m、桁行は1.20~1.40mを測る。P3・P4間、P7・P8間はトレンチによって切られており、柱穴の有無は不明であるが柱間距離が2.60mを測り、他の柱間距離で割り切れることから梁行1間×桁行4間規模も想定される。柱穴プランは全て円形で、規模は直径0.24~0.52m、深さは20.0~65.2cmを測る。P5では直径10.0cmを測る柱痕を確認した。遺構埋土は褐色~にぶい黄褐色を呈した砂質シルトであり、P2から土師器供膳具細片が出土したが混入と考えられる。No.14の唐津灰釉皿はP2(IE区P11)からの出土であり、近世の建物と考えられる。

## SB5(図33)

II区中央部で検出された梁行2間×桁行3間の南北棟建物である。棟方向はN-32°-Eを示し、規模は、梁行3.80~3.90m、桁行5.40mを測り、床面積は21.06㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が1.80~2.10m、桁行は1.75~1.85mを測る。柱穴プランは全て円形で、規模は直径0.29~0.45m、深さは7.2~65.8cmを測る。遺構埋土は褐色~にぶい黄褐色を呈した砂質シルトである。遺物はP2・4~7・9から出土しており、瓦器皿(No.53)、土師質土器皿(No.54)、他に土師器供膳具、土師器甕の細片が合計8点出土した。P7では直径13.0cmの柱痕を検出した。SB6の身舎としての可能性も考えられる。

3. 検出遺構と出土遺物

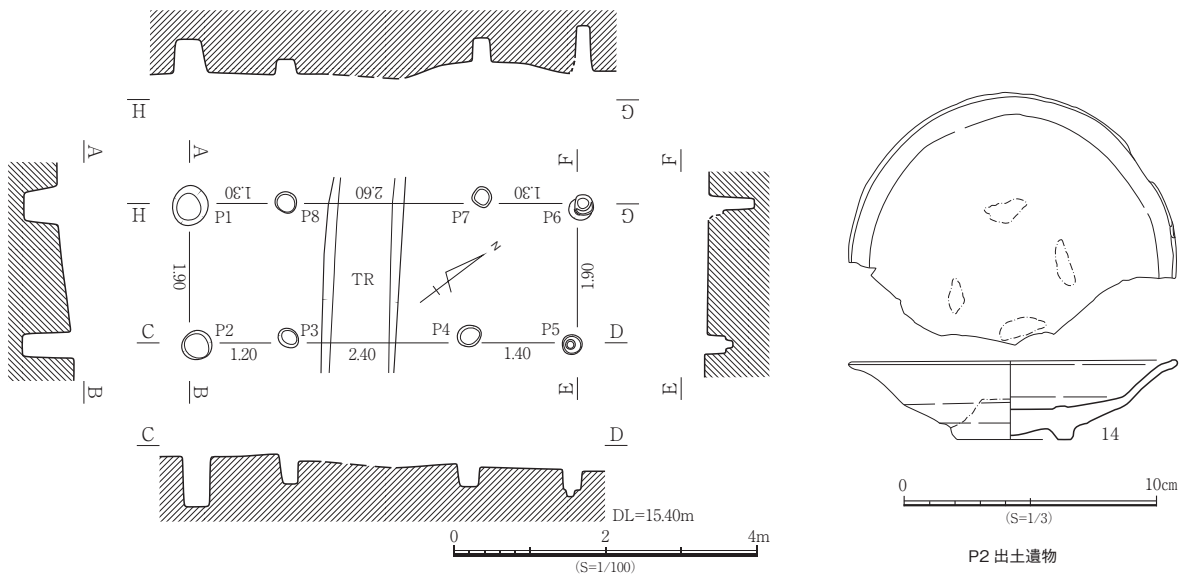


図 32 II区 SB4 遺構図・出土遺物

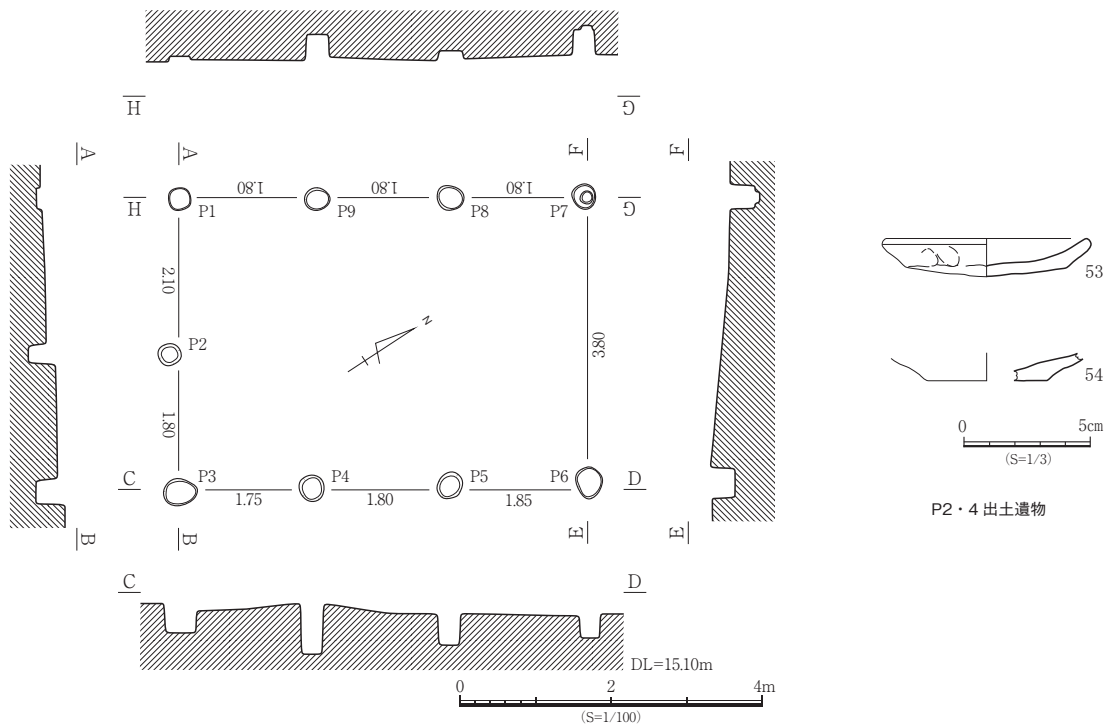


図 33 II区 SB5 遺構図・出土遺物



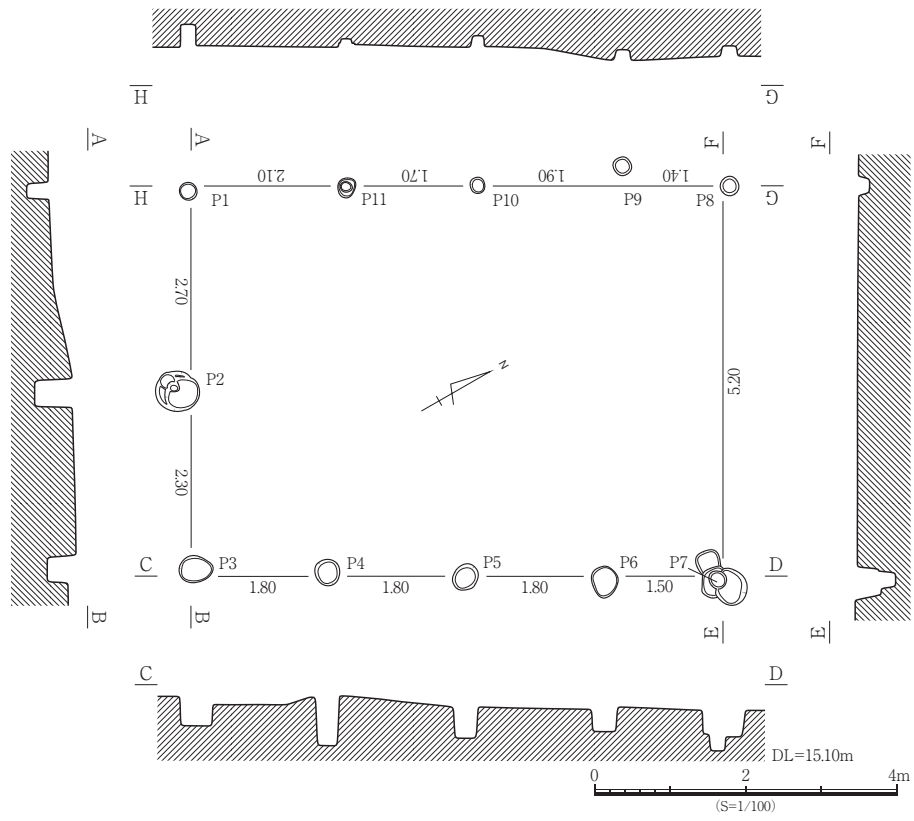


図 34 II区 SB6 遺構図

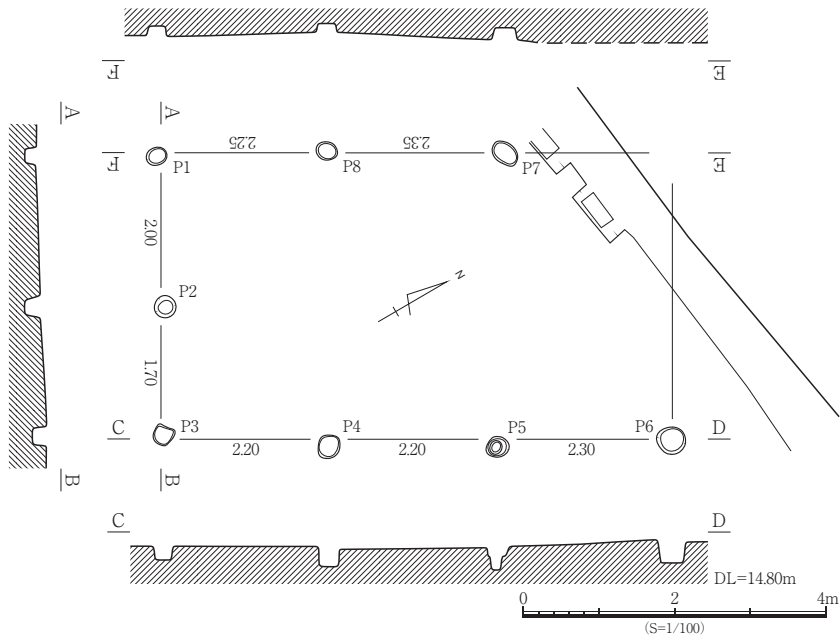


図 35 II区 SB7 遺構図

### 3. 検出遺構と出土遺物

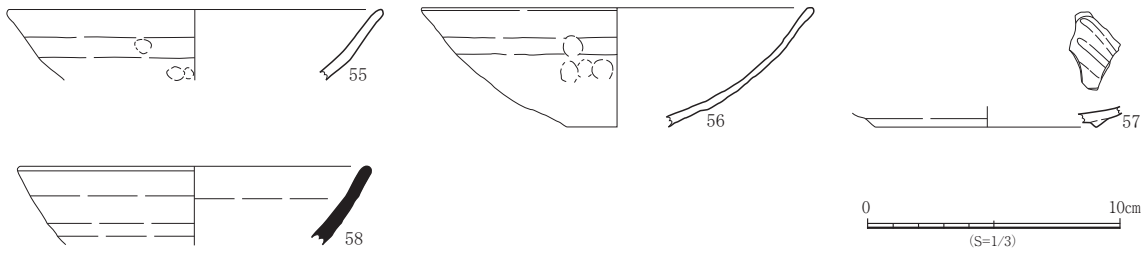


図 36 II区 SB7 出土遺物

#### SB6 (図 34)

II区中央部, SB5に接して検出された梁行2間×桁行4間の南北棟建物である。東側柱列はSB5のP3～6と重複する事からSB5を身舎として建物の西側へ廂的な拡張, 増築も考えられる。棟方向はN-31°-Eを示し, 規模は梁行5.00～5.20m, 桁行6.90～7.10mを測り, 床面積は36.92㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が2.30～2.70m, 桁行は1.40～2.10mを測る。柱穴プランは全て円形で, 規模は直径0.19～0.55m, 深さは11.1～65.8cmを測る。P7とP11では直径11.0～17.0cmを測る柱痕が確認された。遺構埋土は褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトであり, P1・2・4～6・8・10の各柱穴から瓦器碗, 土師器供膳具, 土師器甕の細片が合計25点出土した。

#### SB7 (図 35・36)

II区北西部で検出された梁行2間×桁行3間の南北棟建物である。棟方向はN-30°-Eを示し, 規模は梁行3.70m, 桁行6.70mを測り, 床面積は24.79㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が1.70～2.00m, 桁行は2.20～2.35mを測る。柱穴プランは全て円形で, 規模は直径0.22～0.40m, 深さは11.8～30.4cmを測る。P5では直径19.0cmを測る柱痕が確認された。遺構埋土は褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトであり, P1～3・5・6の柱穴から土師器, 須恵器, 黒色土器, 瓦器碗等の細片が合計16点出土した。P2の柱穴からは, 図示した瓦器杯(No.55)・碗(No.56), 黒色土器碗(No.57), 須恵器杯(No.58)が出土した。

#### SB8 (図 37)

II区中央部で検出された梁行1間×桁行2間の南北棟建物である。棟方向はN-22°-Eを示し, 規模は梁行2.30m, 桁行3.90mを測り, 床面積は8.97㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が2.30m, 桁行は1.60～2.30mを測る。柱穴プランは全て円形で, 規模は直径0.25～0.43m, 深さは6.1～43.5cmを測る。P1では直径22.0cmを測る柱痕が確認された。遺構埋土は褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトであり, P2・6の柱穴から土師器の細片が合計3点出土した。

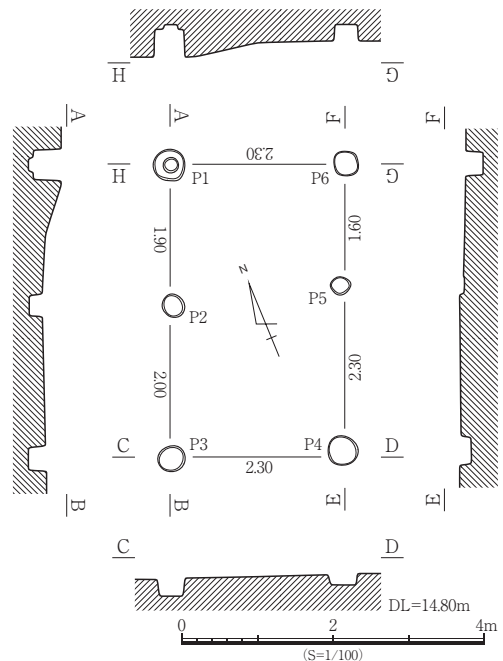


図 37 II区 SB8 遺構図

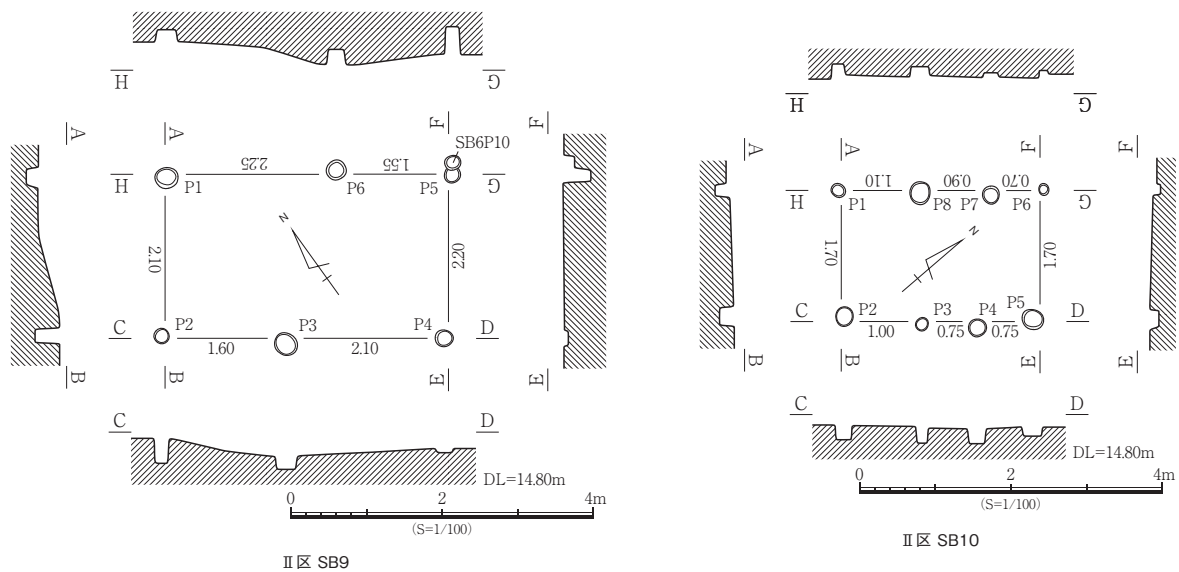


図38 II区 SB9・10 遺構図

SB9 (図38)

II区中央部で検出された梁行1間×桁行2間の東西棟建物である。棟方向は、N - 55° - Wを示し、規模は梁行2.10～2.20m，桁行3.70～3.80mを測り、床面積は8.36㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が2.10～2.20m，桁行は1.55～2.25mを測る。柱穴プランは全て円形で、規模は直径0.20～0.32m，深さは6.1～36.7cmを測る。遺構埋土は褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトであり、P2・6の柱穴から唐津ハケ塗皿，土師器の細片が合計4点出土した。

SB10 (図38)

II区中央部で検出された梁行1間×桁行3間の南北棟建物である。棟方向はN - 40° - Eを示し、規模は梁行1.70m，桁行2.50～2.70mを測り、床面積は4.59㎡である。各柱穴の柱間寸法は梁行が1.70m，桁行は0.70～1.10mを測る。規模が他の建物に比べ小さく、倉庫的な建物と思われる。柱穴プランは全て円形で、規模は直径0.14～0.32m，深さは6.1～21.9cmを測る。遺構埋土は褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトである。

② 柵列

SA2 (図39)

II区北西端部，SB7周辺で検出した。方向はN - 30° - Eを示し、全長は4.30m，柱間は1.20～1.80mを測る。柱穴プランは円形で規模は直径0.20～0.34m，深さは10.0～30.6cmを測る。P2はSB7P5に切られる。各柱穴の埋土は、褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトである。

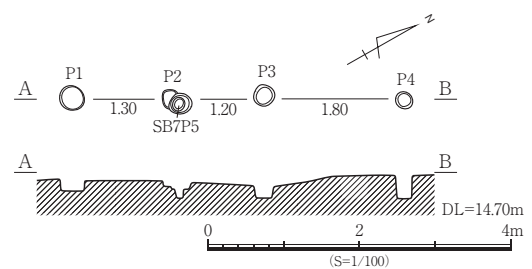


図39 II区 SA2 遺構図

3. 検出遺構と出土遺物

SA3 (図40)

Ⅱ区の北西端部隅で検出した。調査区外の県道側に柱穴が延びる可能性も考えられ、掘立柱建物跡の柱穴列の可能性も残している。方向はN - 50° - Wを示し、全長は3.20m、柱間は1.60mを測る。柱穴プランは円形で直径0.38～0.43m、深さは24.0～38.0cmを測る。各柱穴の埋土は、褐色～にぶい黄褐色を呈した砂質シルトである。

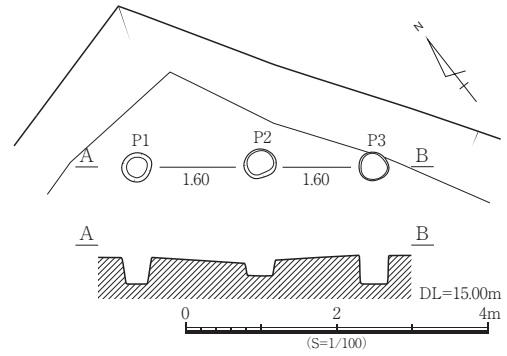


図40 Ⅱ区 SA3 遺構図

③土坑

SK1 (図41)

Ⅱ区北西部，SA3に隣接して検出された土坑である。平面プランは不整形であり，規模は長径が1.63m，短径が0.67～0.89mを測る。深さは7.0～8.0cmを測り，炭化物が混じった焼土層を掘り下げると浅い皿状の凹みを呈する。埋土中からは古代の土師器皿1点が出土した。

SK2 (図41)

Ⅱ区北西部，SK1に接して検出された土坑である。平面プランは円形であり，規模は，直径1.32～1.36mを測る。遺構埋土は単一層で，オリーブ褐色粘土質シルトであり，埋土中から唐津灰釉皿，内野山窯銅緑釉皿など17世紀後半頃を中心とする近世陶磁器片4点，鉄釘1点が出土した。断面形は両端に段を持つ台形を呈し，深さは30.7cmを測り，西側の段部までは7.0cm，東側の段部までは11.0cmを測る。SK4と規模がほぼ同じであり，同時期が考えられる。出土遺物から17世紀後半頃の遺構と考えられる。

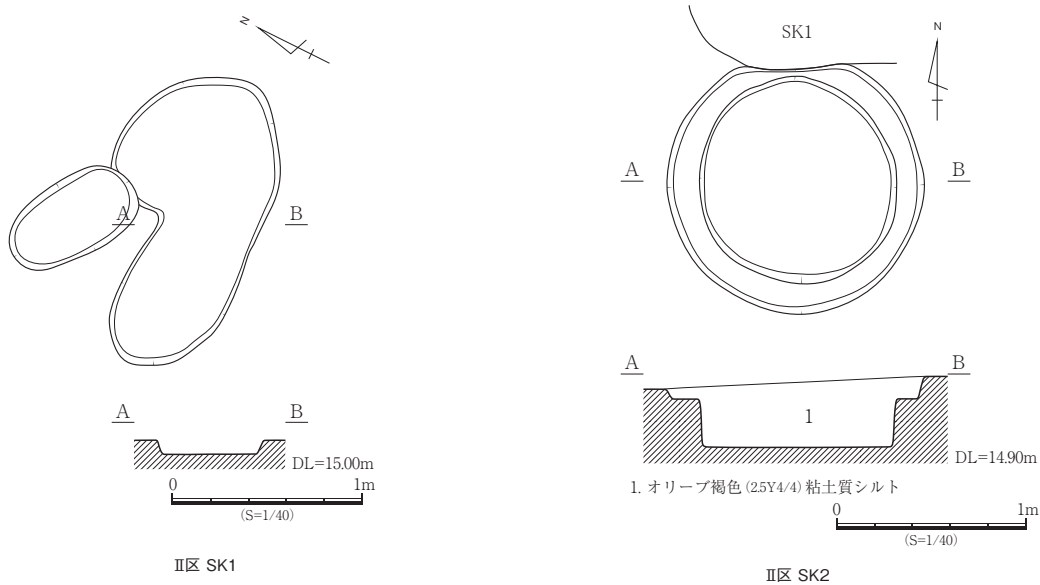


図41 Ⅱ区 SK1・2 遺構図

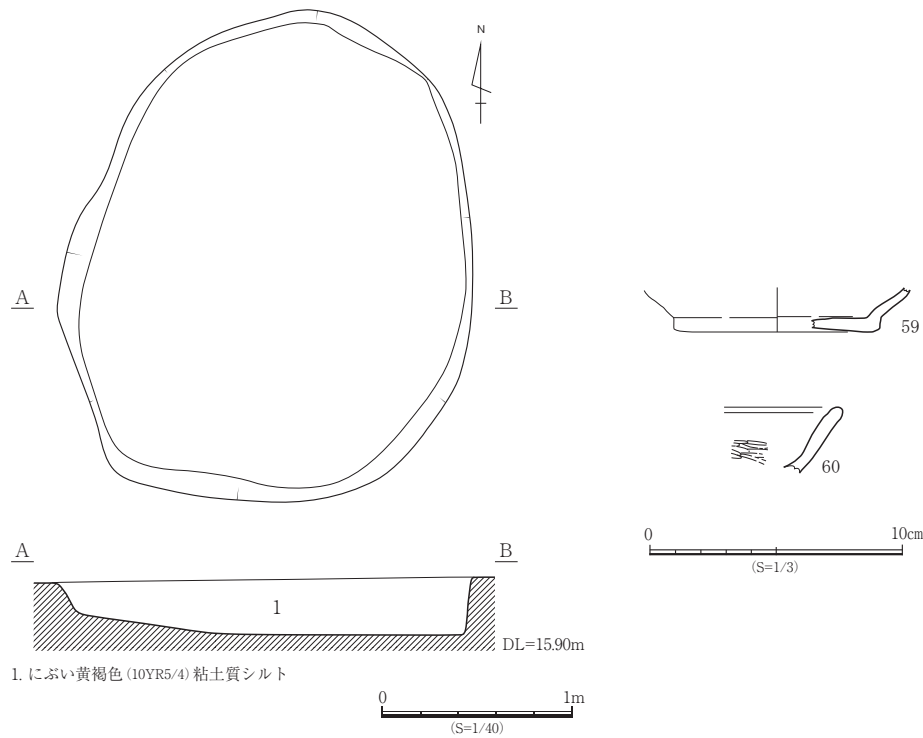


図42 II区 SK3 遺構図・出土遺物

SK3 (図42)

II区北西部，SK2・4に隣接して検出された土坑である。平面プランは不整楕円形であり，規模は長径が2.62m，短径が1.91～2.17mを測る。断面形は，西側がやや浅く，逆台形状を呈する。遺構埋土は単一層で，にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトであり，埋土中から図示した土師器杯(No.59)・皿(No.60)の他，土師器供膳具細片6点，須恵器細片1点，鉄釘1点が出土した。59の杯は底部分割成形に起因し内底が凹み，底部切離しはヘラ切りである。9世紀末～10世紀前半代の在地産の土師器杯にみられるタイプである。60は口縁内面に僅かに沈線が残る。内面はヘラミガキが施される。

SK4 (図43)

II区北西部，SK3に接して検出された土坑である。平面プランは円形であり，規模は，直径1.30mを測る。遺構埋土は単一層で，褐色粘土質シルトであり，埋土中から近世陶磁器細片2点，混入と考えられる土師器細片3点が出土した。断面形はSK2と同様で，両端に段を持つ台形を呈し，東側の段部までの掘込みがやや深い。深さは最深部で27.0cmを測り，西側の段部までは18.0cm，東側の段部までは13.0cmを測る。平面プラン及び掘方がSK2と同様であり，出土遺物の内容からみて同時期の遺構として捉える事ができる。

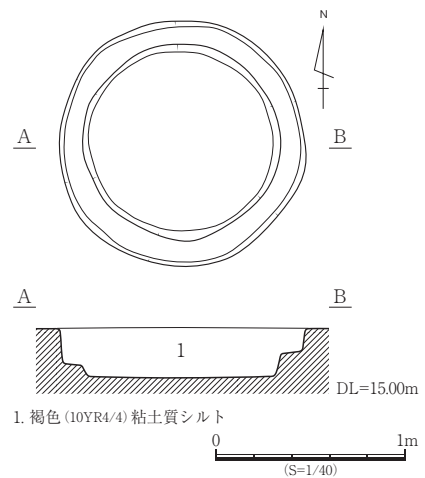


図43 II区 SK4 遺構図

3. 検出遺構と出土遺物

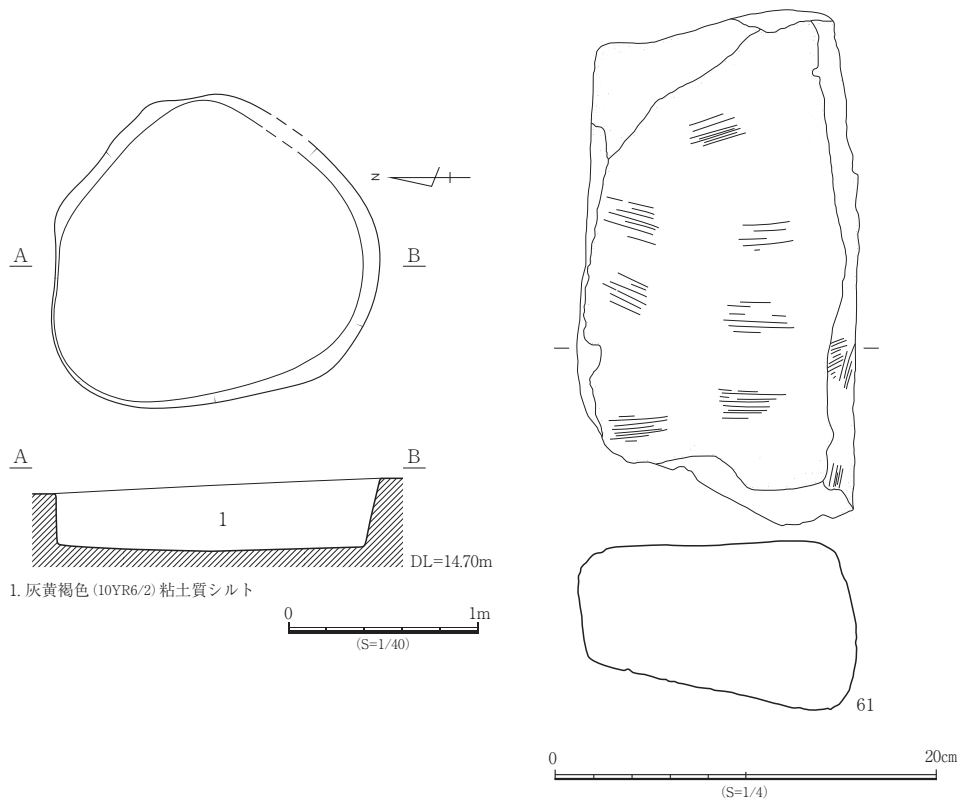


図 44 II 区 SK5 遺構図・出土遺物

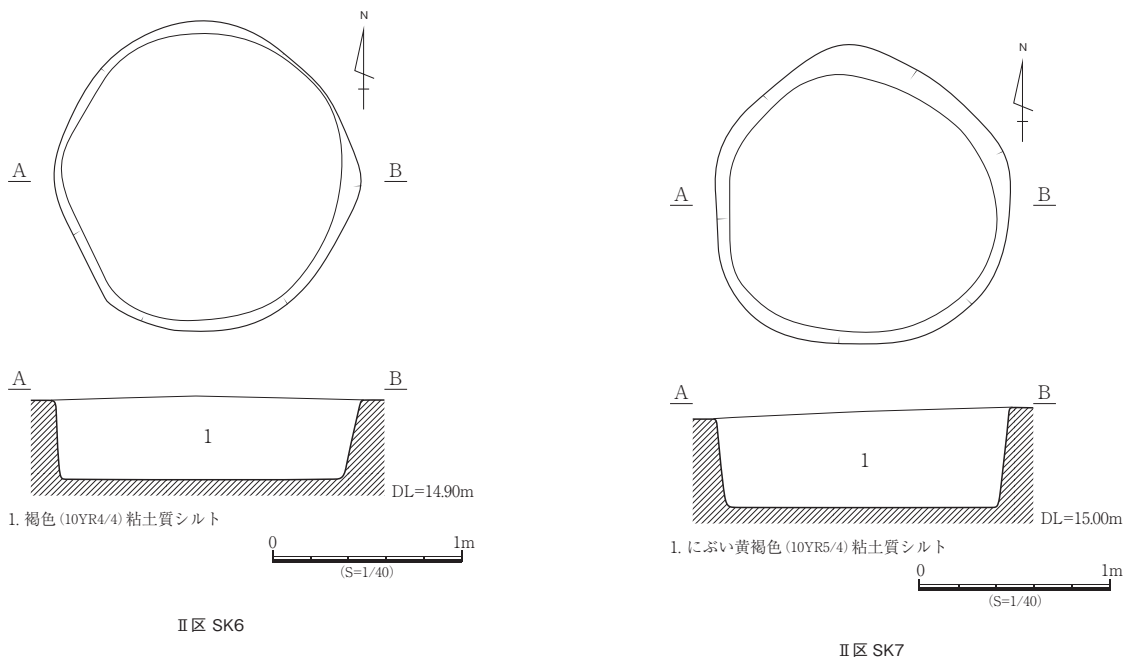


図 45 II 区 SK6・7 遺構図



SK5 (図44)

Ⅱ区中央部西より，SD4 に接して検出された土坑である。平面プランは不整形円形であり，規模は，直径1.66～1.78mを測る。断面形は逆台形を呈し，深さは最深部で35.4cmを測る。遺構埋土は単一層で，灰黄褐色粘土質シルトであり，埋土中から唐津灰釉皿，内野山窯銅緑釉皿，堺産播鉢等の近世陶磁器片14点，砥石(No.61)が出土した。61の砥石は砂岩が使用されており，二面に使用痕が認められる。出土遺物から17世紀後半頃の遺構と考えられる。近世遺構にみられるこのタイプの円形土坑は，埋土中から砥石及び金属包丁が伴う事例が多く，水溜や貯蔵施設の地鎮の際に用いられたものと思われる。

SK6 (図45)

Ⅱ区中央部，SK7に隣接して検出された土坑である。平面プランは円形であり，規模は，直径1.62～1.66mを測る。断面形は箱形を呈し，深さ43.4cmを測る。遺構埋土は単一層で，褐色粘土質シルトであり，埋土中から緑釉陶器細片1点，混入と考えられる土師器細片2点，瓦質土器細片1点が出土した。SK7と二対になるものと思われる。

SK7 (図45)

Ⅱ区中央部，SK6に隣接して検出された土坑である。平面プランは円形であり，規模は，直径1.56～1.58mを測る。断面形はSK6と同様で箱形を呈し，深さ51.6cmを測る。遺構埋土は単一層で，にぶい黄褐色粘土質シルトであり，埋土中から近世陶磁器細片2点，混入と考えられる土師器甕細片3点，瓦質土器細片2点が出土した。

SK8 (図46)

Ⅱ区北部，SK7に近接して検出された土坑である。平面プランは円形であり，規模は，直径1.45～1.46mを測る。断面形は浅い箱形を呈し，深さ10.3～18.2cmを測る。上部は削平されているものと考えられる。遺構埋土は単一層で，黄褐色粘土質シルトであり，埋土中から近世の陶器碗細片2点，混入と考えられる土師器細片19点，瓦質土器細片2点が出土した。SK6・7と同じ性格の土坑と考えられる。

SK9 (図47)

Ⅱ区中央部，SK7に近接して検出された土坑である。平面プランは隅丸方形であり，規模は，直径1.75～1.85mを測る。断面形は逆台形を呈し，底面北寄り直径0.64～1.02mのピット状の凹みを検出した。土坑の平均的な深さは21.0cm前後を測り，ピット状に凹む最深部は39.3cmを測る。上部は削平されているものと考えられる。遺構埋土は単一層で褐色粘土質シルトである。埋土中から混入と考えられる土師器甕細片1点，土師器供膳具細片3点が出土した。

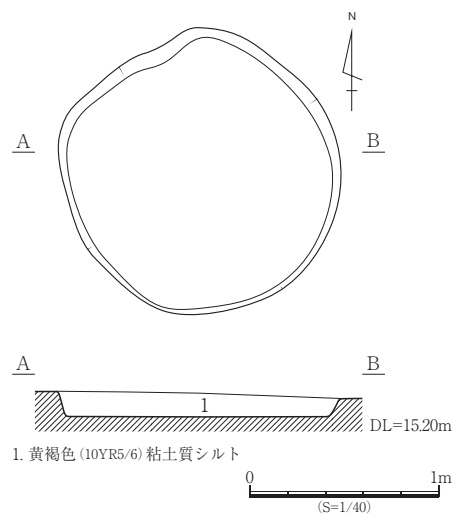


図46 Ⅱ区 SK8 遺構図

### 3. 検出遺構と出土遺物

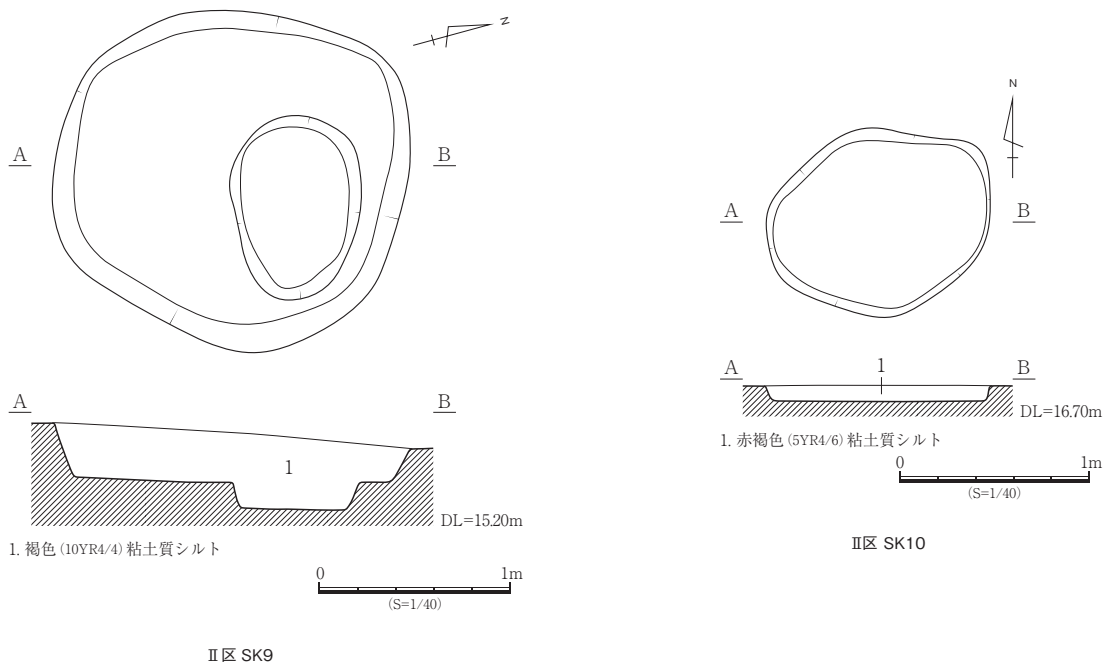


図47 II区 SK9・10 遺構図

#### SK10 (図47)

II区中央部，SB6に近接して検出された土坑である。平面プランは不整形円形であり，規模は，長径1.18m，短径1.01mを測る。断面形は浅い皿状を呈し，土坑の平均的な深さは9.3cm前後を測る。遺構埋土は単一層で赤褐色粘土質シルトである。上部は削平されたものと考えられ，遺物は出土しなかった。

#### ④ピット

##### P27 (図48)

II区西部，SB6の内部で検出されたピットである。平面プランは楕円形で長径0.27m，短径0.22mを測り，深さは21.2cmを測る。遺構埋土は褐色粘土質シルトであり，埋土中から土師器細片2点，図示した搬入品である内黒の畿内系黒色土器碗(No.62)の底部片が出土した。

##### P28 (図48)

II区西部，P27に近接して検出されたピットである。平面プランは円形で長径0.28m，短径0.24mを測り，深さは24.1cmを測る。遺構埋土は褐色粘土質シルトであり，埋土中から灯明皿として使用した土師器皿細片4点，瓦質土器細片2点，瓦器皿(No.63)が出土した。63は口縁部に横ナデが施され，和泉型瓦器碗の搬入品である。これらの出土遺物から地鎮ピットであると考えられる。

##### P36 (図48)

II区西部で検出されたピットである。平面プランは円形で長径0.22m，短径0.18mを測り，深さは15.8cmを測る。遺構埋土は褐色粘土質シルトであり，埋土中から，図示した青花碗(No.64)，瓦器碗細片が出土した。64は外面に草花風の文様が描かれており，16世紀代のC群の碗であると思われる。

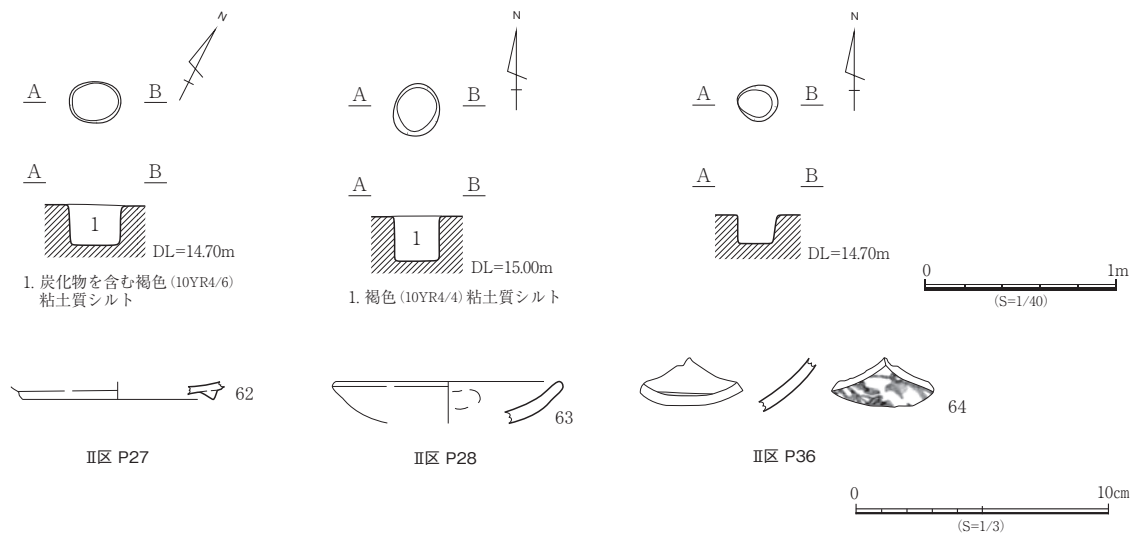


図 48 II 区 Pit 遺構図・出土遺物

⑤溝

SD1

II 区南東部, 標高15.80m前後で丘陵縁辺に沿って上面で検出された溝である。検出長1.97m, 幅0.23~0.45mを測る。SD3に繋がる可能性がある。遺構埋土はオリブ褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SD2 (図49)

II 区西部, 標高14.70m前後で検出された溝である。検出長2.47m, 幅0.44~0.53m, 深さは9.0cm前後を測り, N-57°-Wの東西方向を示し, 西方に向かって傾斜している。断面形は浅い皿状を呈し, 遺構埋土は褐色粘土質シルトであり, 遺物は須恵器杯(No.65)が出土した。65は体部が直線的に立ち上がり, 口縁端部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整が施され, 底部の切離しはヘラ切りである。

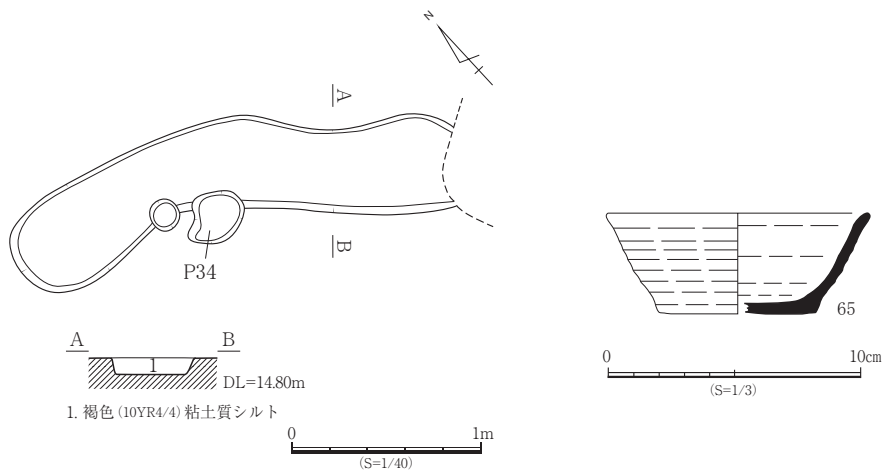


図 49 II 区 SD2 遺構図・出土遺物

3. 検出遺構と出土遺物

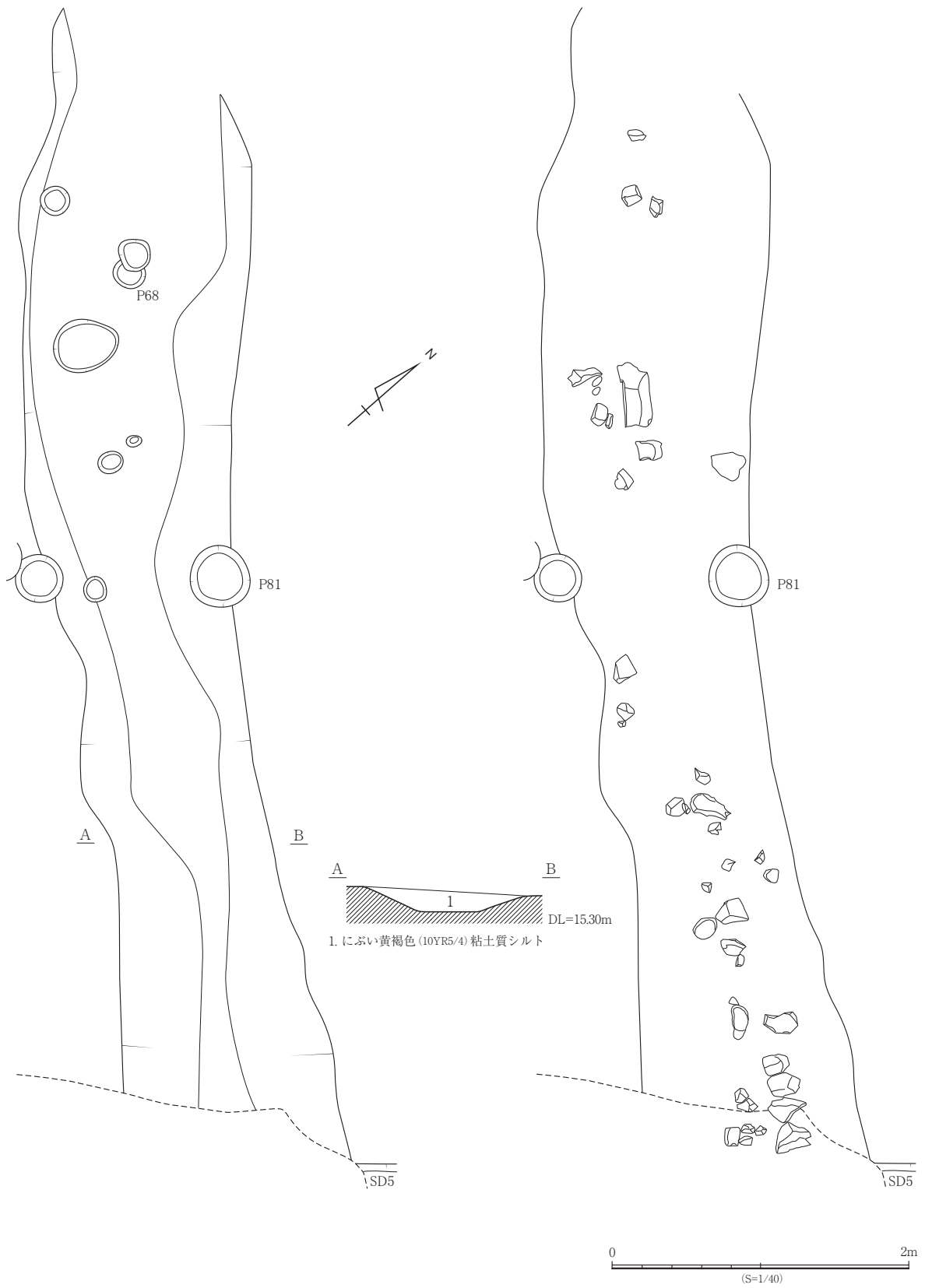


図 50 II区 SD3 遺構図

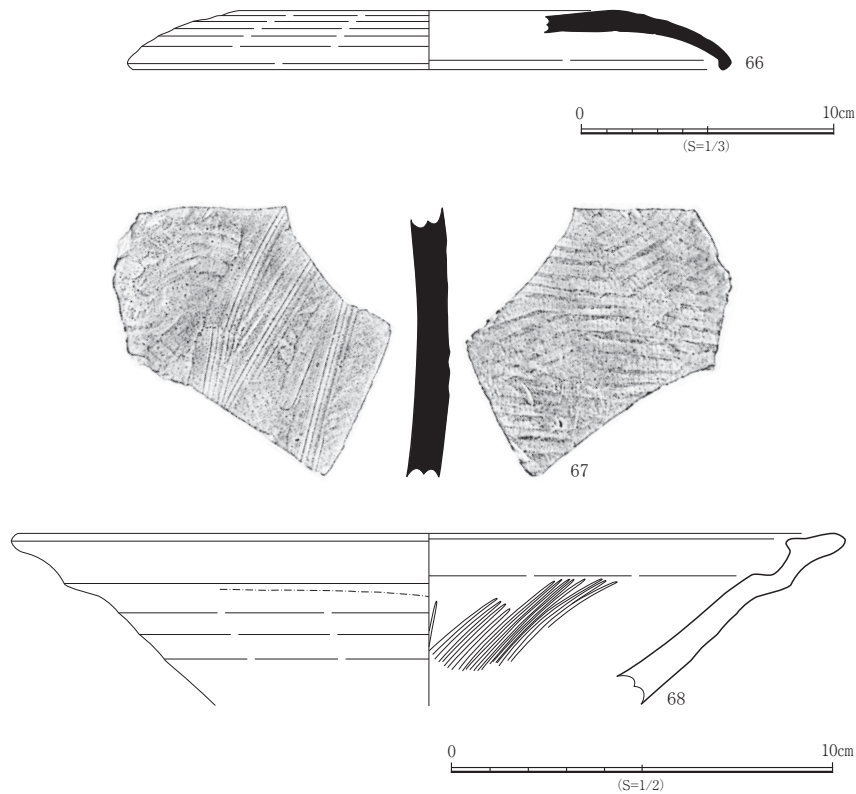


図 51 II区 SD3 出土遺物

#### SD3 (図50・51)

II区中央部, 標高15.10m前後で検出された溝である。検出長9.10m, 幅1.05～1.57m, 深さは18.0cm前後を測り, N-54°-Wの東西方向を示し, 西方に向かって傾斜している。断面形は浅い皿状を呈し, 遺構埋土は単一層でにぶい黄褐色粘土質シルトである。上層で直径15.0～20.0cmの角礫の集石が認められた。SD3東側にあたる丘陵裾の成形時に流れ込んだものと思われる。遺物は須恵器蓋(No.66)・甕(No.67), 近世の陶器挿鉢(No.68)が出土した。66の天井部はヘラ削り, 体部は回転ナデ調整が施される。67の外表面は平行タタキ, 内表面には当て具痕を残す。68は丹波産の挿鉢である。口縁部は屈曲し端部は水平な面を成す。体部内面には単位の細かい条線が施される。

#### SD4 (図52)

II区西部, 標高14.60m前後で検出された溝である。SB5P7に切られる。検出長5.44m, 幅0.48～0.71m, 深さは2.0～13.4cm前後を測り, N-10°-Wの南北方向を示し, 北西に向かって傾斜している。試掘TR4で検出された溝であり, 北西部の延長は確認されなかった。断面形は浅い箱形を呈し, 遺構埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。出土遺物は, 土師器甕(No.69・70)が出土した。他に土師器細片38点, 須恵器杯1点, 土錘1点が出土した。69・70ともに胴部内面は横方向のハケ調整, 胴部外面は縦方向のハケ調整が施され, 胎土に雲母片を含む。70の口縁端部は横ナデ調整により上方に拡張され, 端部外面が沈線状に凹む。SD4の南東部に位置するSD6は, 溝方向と直交する方向で延びており区画を示す溝と思われる。埋土及び出土遺物の内容からみて同時期が考えられる。

3. 検出遺構と出土遺物

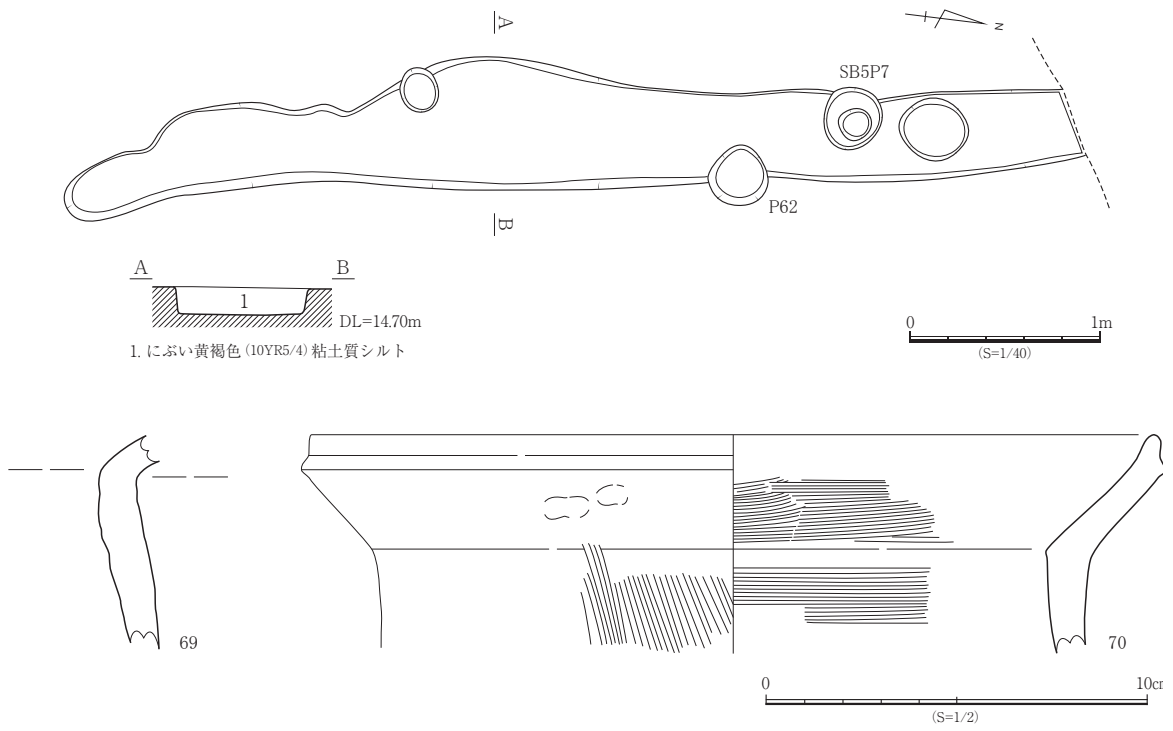


図 52 II区 SD4 遺構図・出土遺物

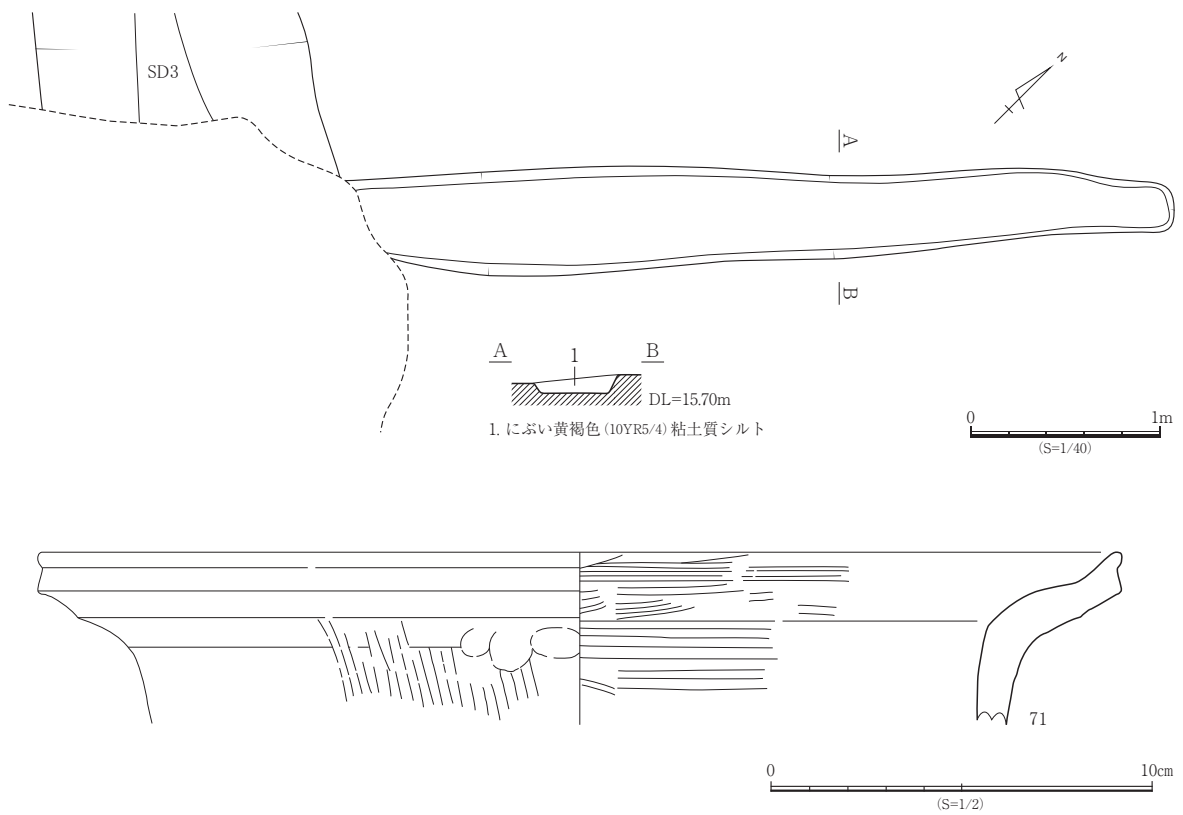


図 53 II区 SD5 遺構図・出土遺物



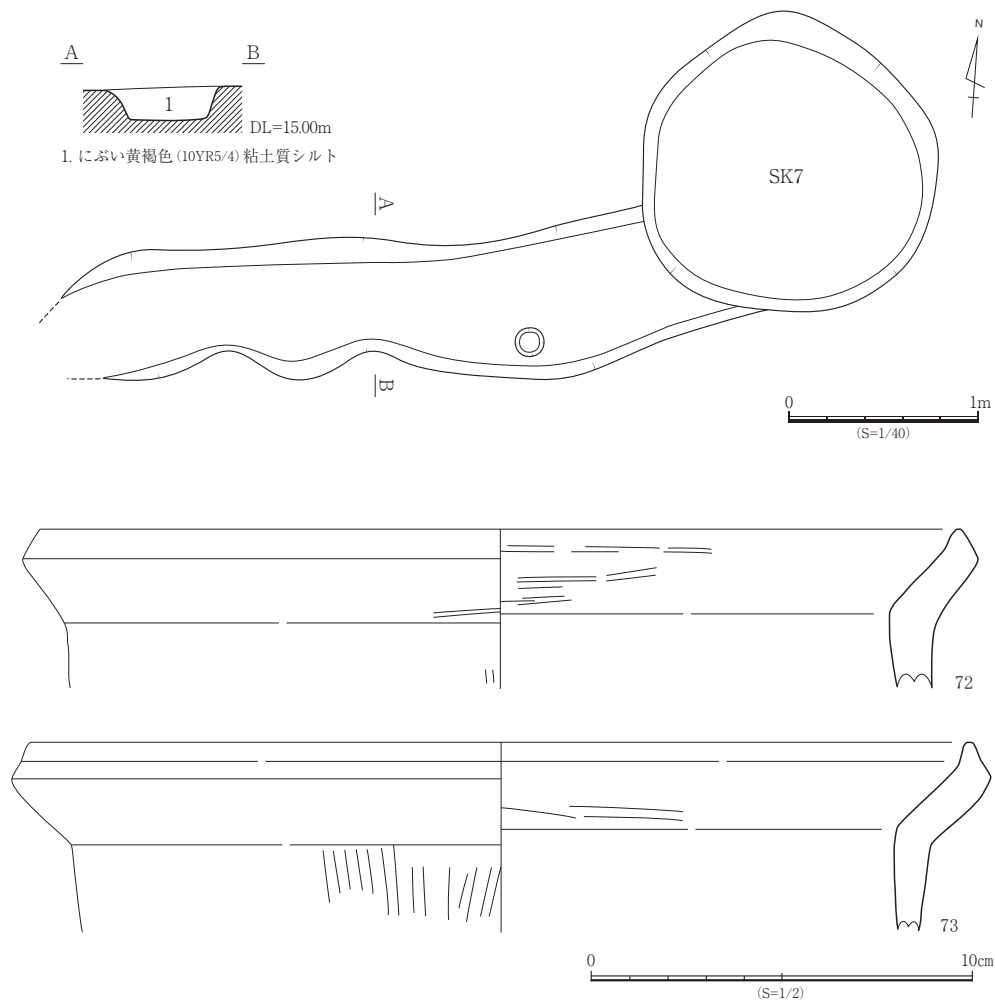


図 54 II区 SD6 遺構図・出土遺物

SD5 (図 53)

II区中央部, 標高 15.30m 前後で丘陵縁辺に沿って検出された溝である。検出長 4.33m, 幅 0.28 ~ 0.67m を測る。断面形は逆台形状を呈し, N - 45° - E を示し, 南に向かって傾斜している。南端は, 試掘トレンチでは確認できなかったが, SD3 に繋がる可能性がある。遺構埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。出土遺物は, 土師器甕 (No. 71) が出土した。口縁端部は上方に僅かに肥厚し, 端部は沈線状に凹む。口縁部内面及び胴部内面は横方向のハケ調整, 胴部外面は縦方向のハケ調整が施され, 胎土に長石を含む。

SD6 (図 54)

II区中央部, 標高 14.90m 前後で丘陵縁辺に沿って検出された溝である。東端はSK7 に切られ, 検出長 3.54m, 幅 0.55 ~ 0.80m, 深さは 6.7 ~ 15.9cm を測る。断面形は逆台形状を呈し, 西に向かって傾斜している。遺構埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。出土遺物は, 土師器甕 (No. 72・73) が出土した。72・73 とともに口縁部及び胴部内面に横方向のハケ調整, 胴部外面は縦方向のハケ調整が施され, 胎土に雲母片を含む。

(4) II 区の包含層出土遺物

ここでは、包含層から出土した遺物について層位・器種ごとに取り上げる。

① I・II 層出土遺物 (図55No.74~83)

I・II 層は、近世の遺物が出土した。74は土師質土器皿である。口縁部にタールが付着しており灯明皿として使用された痕跡を残す。75は唐津碗であり、見込みに砂目を残す。底部はくり底を呈する。76・77は唐津灰釉皿である。見込みに胎土目を残す。77は灰釉が内面のみに施釉され、見込みには砂目を残す。78は内野山窯の銅緑釉が施された皿である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、三日月状の砂目を残す。79は瀬戸・美濃産の広東茶碗である。松葉はコバルト、樹木は鉄釉により描かれる。80~83は磁器染付である。80・81は皿であり、80は見込みに山水楼阁文が描かれる。口縁部は稜花風のつくりであり、口銹釉が施される。81は見込みに五弁花文、内面は唐草文が施される。肥前産磁器である。82は碗であり、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、外面には草花文が施される。口縁部と高台外面に界線が巡る。83は在地産の能茶山窯の碗で外底部に「サ」の記号が施される。見込みには舟文が描かれる。

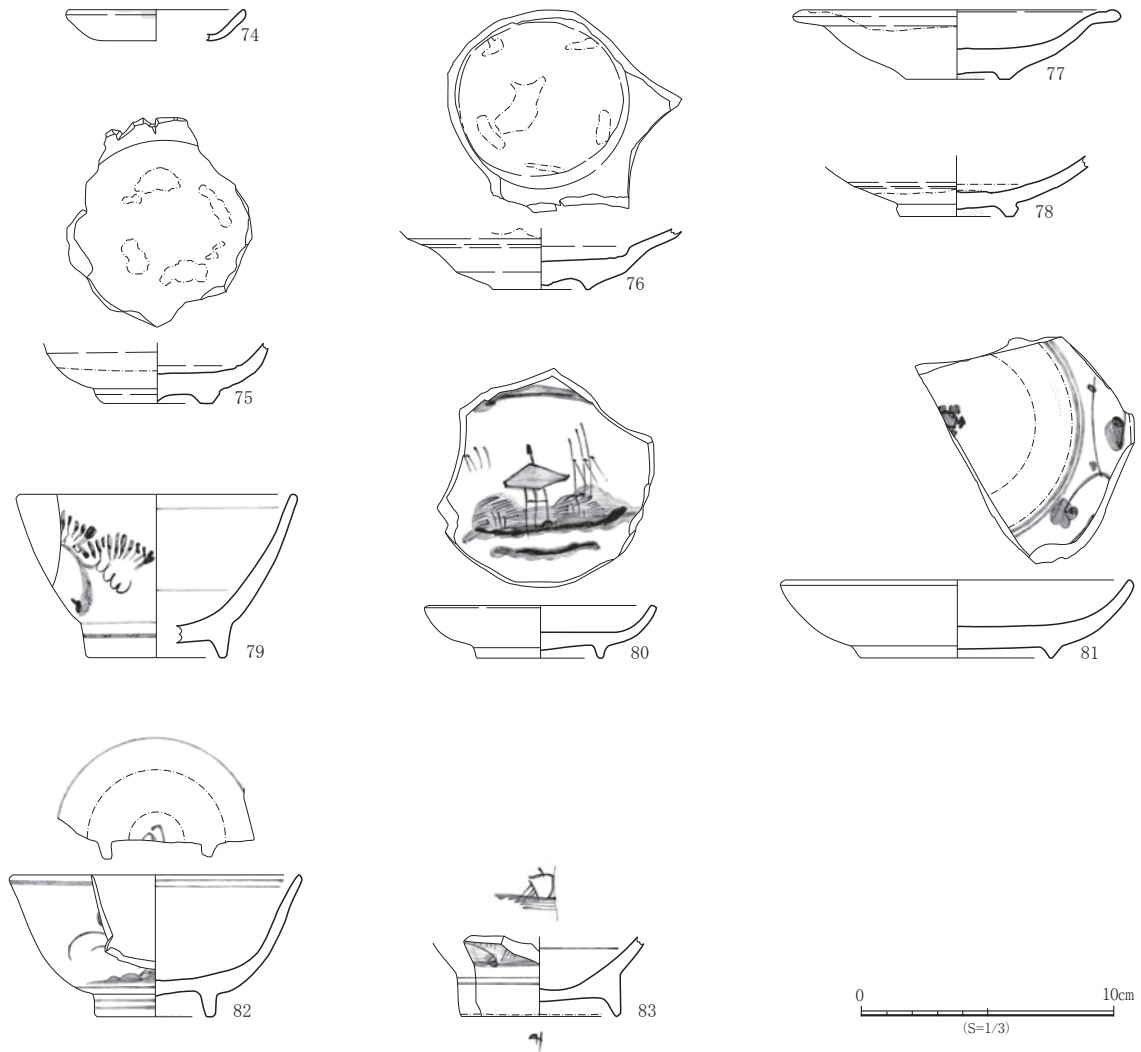


図 55 II 区 I・II 層出土遺物

②Ⅲ-1層出土遺物(図56No.84~90)

Ⅲ層は大きく上層と下層に分かれる。Ⅲ-1層からは中世の遺物が出土した。84は備前焼播鉢である。口縁部は上方に拡張する。内面の条線は6条を基調とし、口縁部の一部にまで施されている。胎土には直径6~8mm大の角礫を含む。間壁編年のⅣ期に該当する。85~87は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。85は口縁部が上方に屈曲し、端部がやや玉縁状を呈する。86・87は底部片であり、86は高台の畳付中央部が沈線状に凹む。高台脇は丁寧な削りが施されている。86・87ともに体部下半まで鉄釉が施される。88~90は青花である。88は皿で口縁部内外面に界線、体部外面に列点文が施される。89は碗で口縁部内外面に界線、体部外面に波濤文が施される。小野分類のC群に属する。90は皿であり底部は饅頭心で見込みに二重界線と草花文が施される。小野分類のE群に属する。Ⅲ-1層では、主に15~16世紀を中心とする遺物がみられる。

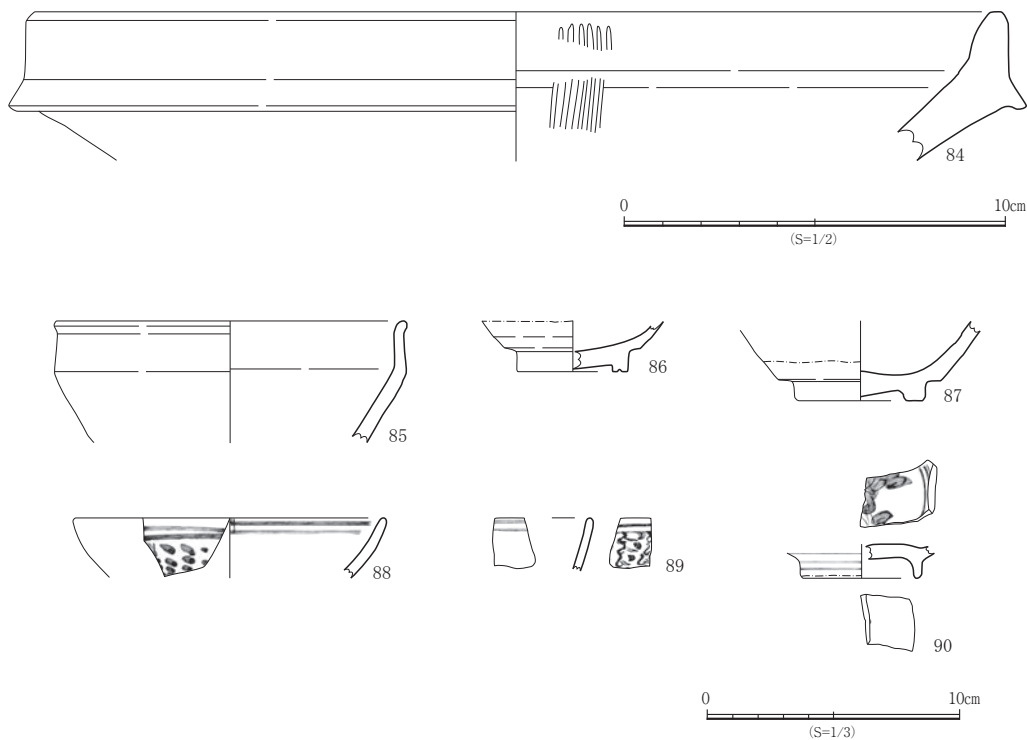


図56 Ⅱ区Ⅲ-1層出土遺物

③Ⅲ-2層出土遺物(図57No.91~103)

Ⅲ-2層からは古代~中世にかけての遺物が出土した。91~96は瓦器碗である。全て口縁部は横ナデ調整、体部外面に指頭圧痕を残す。91の器壁は体部下半が薄く、上半部がやや肥厚し、口縁部にかけて薄くなっている。口縁部は横ナデにより外反する。また、外面口縁部下の一部に横方向のハケ目が残る。92の体部は外方に大きく開く。底部は僅かに高台を残す。93も体部が外方に大きく開く。92・93ともに口径が14.7~15.2cmと大きい、器高が3.1cmと低く、口径と器高が比例しない。93の胎土にはチャートを含み在地産の可能性が考えられる。94は外面口縁部に二段の横ナデが認められる。体部下半は器壁が薄く、上半はやや肥厚し、口縁部は外反気味に仕上げる。底部は低い高台が付く。炭素が十分に吸着されておらず素地である。95・96の胎土にはチャートを含み在地産の可能性が考えられる。炭素が十分に吸着されておらず素地が見えている。胎土の色調は、91は灰白色、92~

3. 検出遺構と出土遺物

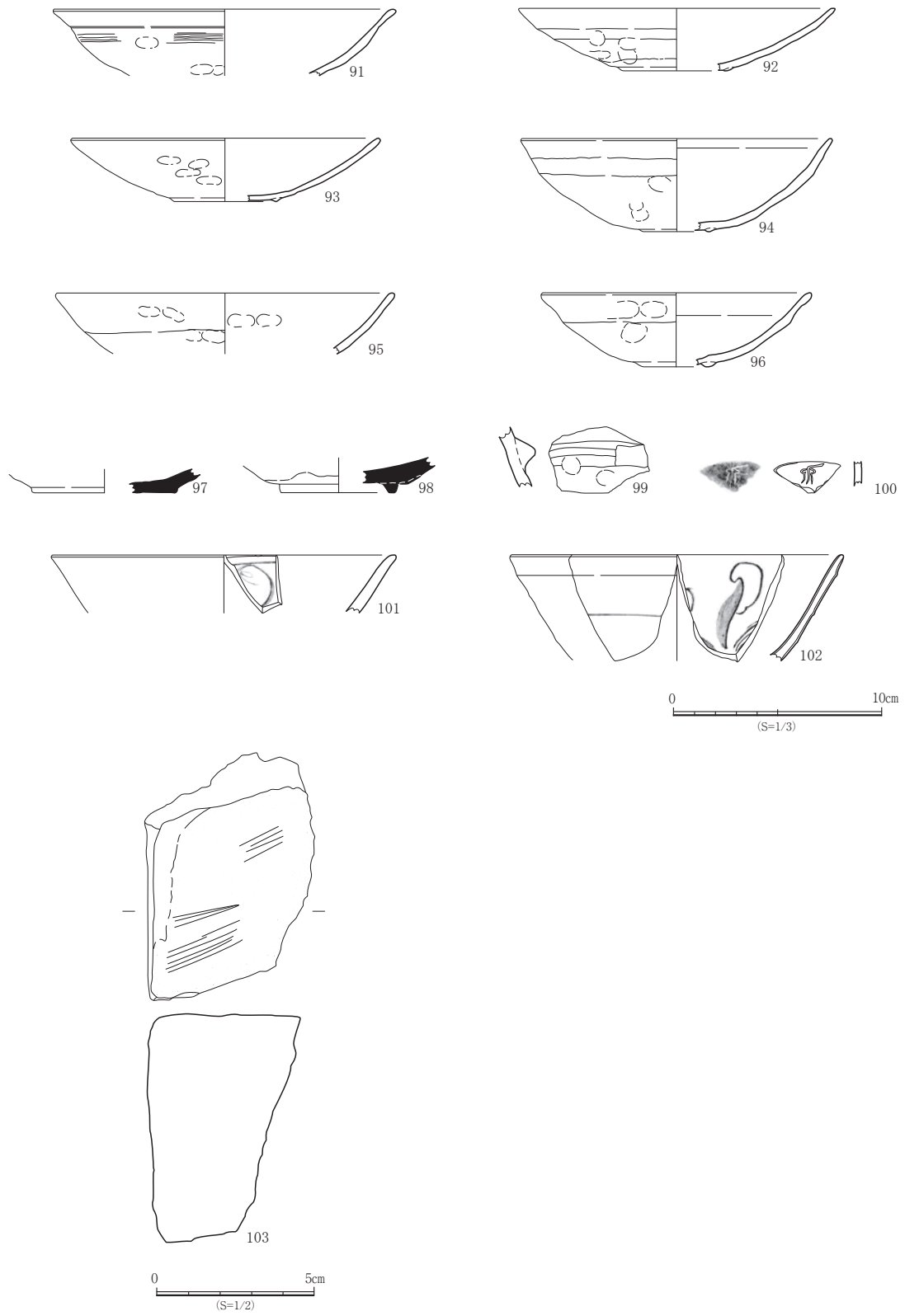


图 57 II区 III-2層出土遺物

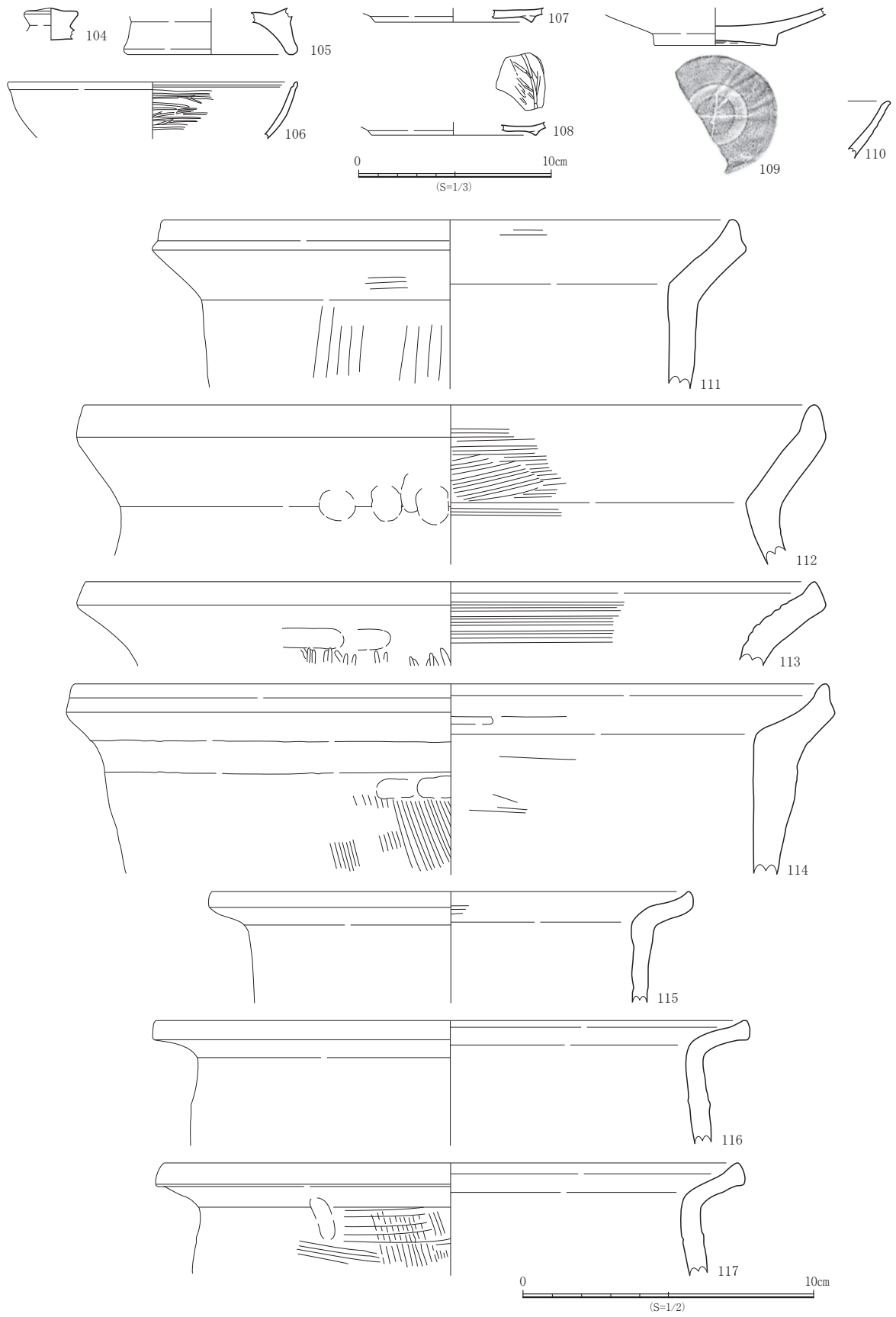


图 58 II区 IV層出土遺物 1

3. 検出遺構と出土遺物

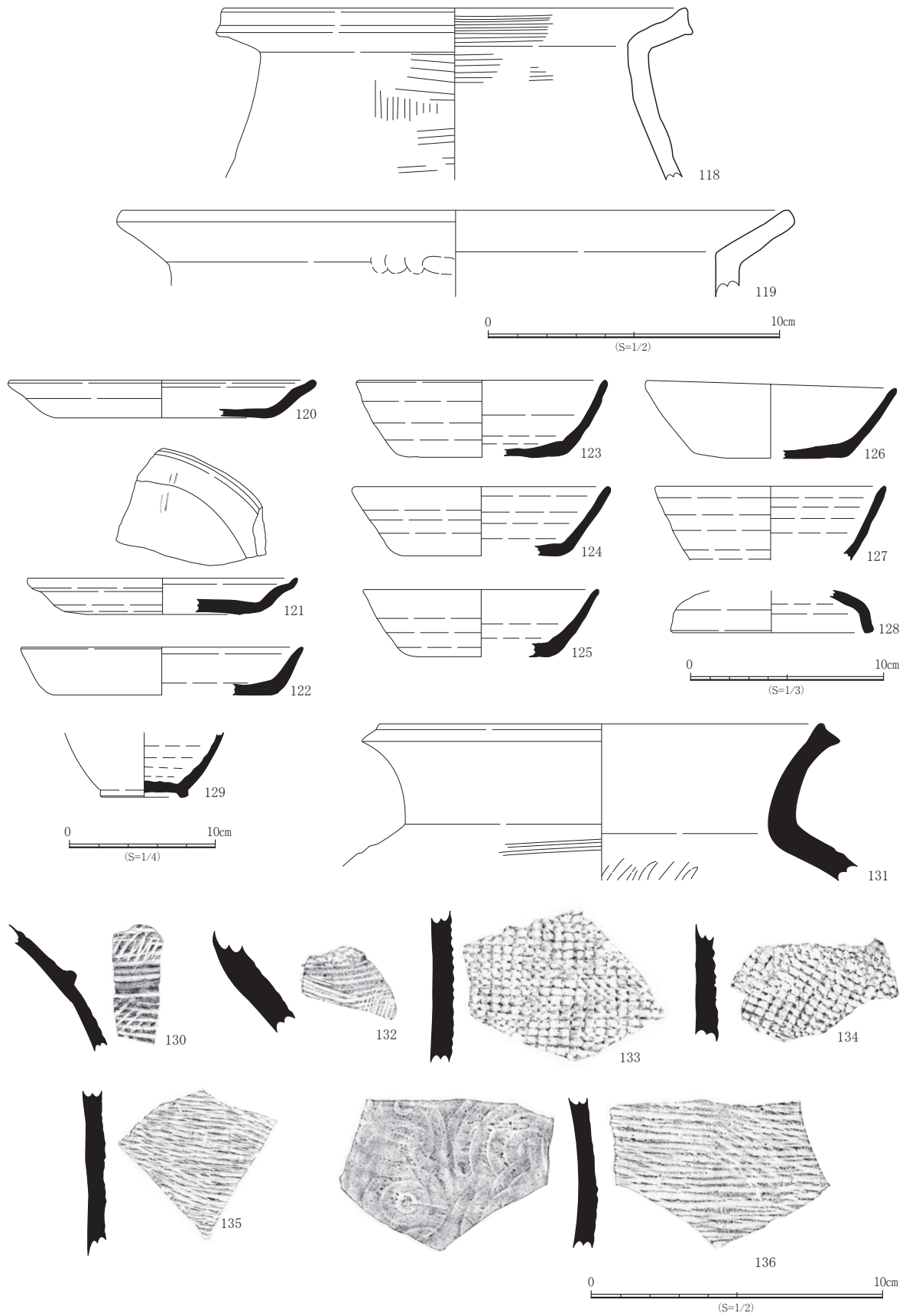


図 59 II区 IV層出土遺物 2



96は浅黄色～橙色を呈している。97・98は須恵器碗の底部である。97は円盤状高台を呈し、外底部に糸切り痕が認められる。98は貼り付け輪高台であり、高台部分の貼り付けが粗雑である。両者とも焼成が不十分であり、瓦質的な仕上がりである。99は瓦質土器羽釜の鏝片である。断面三角形の短い鏝が付く。100は瓦質土器である。器形は不明であるが、外面にヘラ描きによる文様が施されている。101・102は青磁碗である。内面に劃花文が施される。103は砂岩製の砥石である。一面のみ使用痕が認められる。

#### ④IV層出土遺物(図58・59No.104～136)

IV層からは古代の遺物がまとまって出土した。104は土師器の蓋の鈕片である。扁平化した宝珠を呈する。105は土師器碗の底部であり、「ハ」の字に開く高い高台を持つ。106～108は黒色土器碗のA類であり、内面は密なヘラミガキが施される。106の口縁部内面には一条の沈線が施される。107・108はいずれも畿内系と思われ搬入品である。109は緑釉陶器皿の底部であり、蛇ノ目高台である。外底部中央に「十」字のヘラ記号が認められる。釉薬は全体的に薄く施されている。110は灰釉陶器碗の口縁部であり、口縁端部は外側に短く屈曲する。内外面に灰釉が薄く施されている。111～119は土師器甕である。111～114の口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に尖り気味に仕上げる。胴部外面は縦方向のハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整が施される。111は単位の荒いハケ調整が施される。113は櫛描の様な深いハケ調整が口縁部内面に施される。114は口縁部が短く胴部と口縁部の接合部が肥厚する。胴部外面には二段の横方向のナデ調整が施される。111～114の色調はにぶい赤褐色～赤褐色を呈し、胎土には雲母片を含んでおり搬入品と思われる。115・116は器壁が薄く胎土にチャートを含む。115の口縁部は大きく外反し、端部はやや上方を向き丸みを帯びる。器壁は胴部と口縁部の接合部がやや肥厚している。116の口縁端部はナデ調整により外面に面を成し、僅かに上方につまみ上げる。115・116は焼成が不良で全体的な調整の詳細は不明であるが、基本的には横方向を基調としたハケ・ナデ調整が施されているものと思われる。117の口縁部は外反、端部は面を成し上方につまみ上げる。口縁部は横ナデ調整、胴部外面上位は縦方向のハケ調整の後、横方向のハケ調整が施される。118も内外面とも横方向のハケ調整を基調とする。口縁端部は115～117に比べ上方に拡張がみられ端部はしっかりした面を成す。117・118は111～114の搬入品の甕にみられるような胴部外面に施される縦方向のハケ調整ではなく、横方向を基調とする特徴がみられる。115～118は、いずれも色調が橙色で胎土にチャートの礫粒を含んでいる事から在地産の可能性がある。119の口縁部は器壁が薄く大きく外反し、口径が22.8cmと開くことから鍋の口縁部である。胎土には雲母片を含んでいる。120～136は須恵器である。120～122は皿であり、120・121の口縁部内面は沈線状に凹む。121の内面には二条の火摺痕が認められる。120・121は8世紀後半～9世紀前半代に位置づけられる。122は体部が直線的に立ち上がり、120・121に比べ器高が高い。123～127は杯である。法量は口径11.8～13.2cm、器高は3.5～4.1cmを測る。123は酸化焰焼成で内底部は凹む。122～127は法量から9世紀代に位置づけられる。128は蓋である。口の部分は丁寧な横ナデ調整が施され、端部は面を成す。129は壺の底部であり、断面四角形の高台が付く。内面のロクロ目が顕著である。130は壺の胴部片で、外面には一条の突帯が付き、斜状にタタキ目が認められる。焼成は不良で瓦質的な仕上がりである。131～136は甕である。131は口縁部片であり、内外面は横ナデ、口縁端部は上方につまみ上げ尖り気味に仕上げ、面を成す。胴部は一部にハケ状工具による調整痕が認められる。口縁の

### 3. 検出遺構と出土遺物

一部に自然釉が認められる。132～136は胴部片であり、外面には平行のタタキ目と、格子状のタタキ目がみられる。132～134は焼成が不十分であり、瓦質的な仕上がりである。135・136の外面は単位の細かい平行のタタキ目、136の内面には当て具痕が残る。

#### ⑤ V層出土遺物(図60No.137～140)

V層からは弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土した。137は鉢であり、底部は丸底を呈する。外面にはタタキ目が残る。138～140は甕である。138は外面にタタキ目を残す。内面はナデ調整が施される。139は丸底で胴部は丸みを持ち、口縁部は内面に稜を持ちながら外反する。胴部下半には接合痕が認められ、内外面ともにハケ調整が施される。140は法量が小さく底部は僅かに平底を呈する。胴部外面は下位に縦方向のハケ調整、内面は体部下半にハケ調整が認められる。他はナデ調整が施される。外面底部に僅かにタタキ目を残す。胎土には137～140ともにチャートを含んでいる。

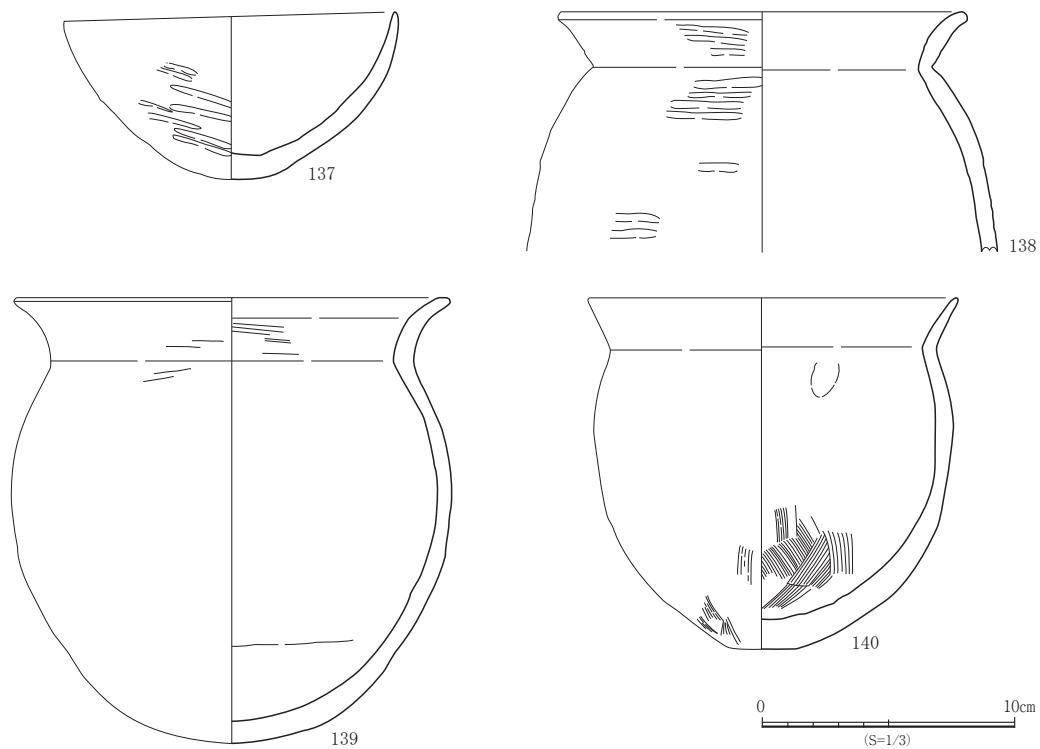


図 60 II区 V層出土遺物

# 第V章 鎌田遺跡

## 1. 調査概要

当調査区は、仁淀川右岸、県道土佐市いの町線の南側にあたる。調査地点南側の谷部には光宜神社が鎮座する。現況は、標高15.00～16.00mを測る田畑であり、調査対象地北部は昭和40年代に行われた県道工事の際、大規模な埋立てが行われており、2～3mの盛土によって造成されていた。

遺構は第V層上面で確認され、ピット、土坑、溝が検出された。埋土はIV層の黒褐色砂質シルトであり、IV層出土の遺物から鎌倉時代後半～南北朝期(13世紀後半～14世紀代)の遺構と考えられる。出土遺物は古代(奈良時代後半～平安時代前半)の遺物を中心に、中世(南北朝期)までの遺物が見られた。古代の遺物は第V層から出土しており、谷部からの流れ込みと考えられる。中世の遺物は第IV層から出土しており、瓦器椀、東播系須恵器の鉢などが出土した。

## 2. 調査の方法

### (1)調査方法

平成18・19年度に実施された試掘調査の結果、昭和40年代の造成に伴う盛土が認められる調査対象地北部では、遺構が検出されなかった事から、平成19年度試掘調査で中世の溝跡、ピットが確認

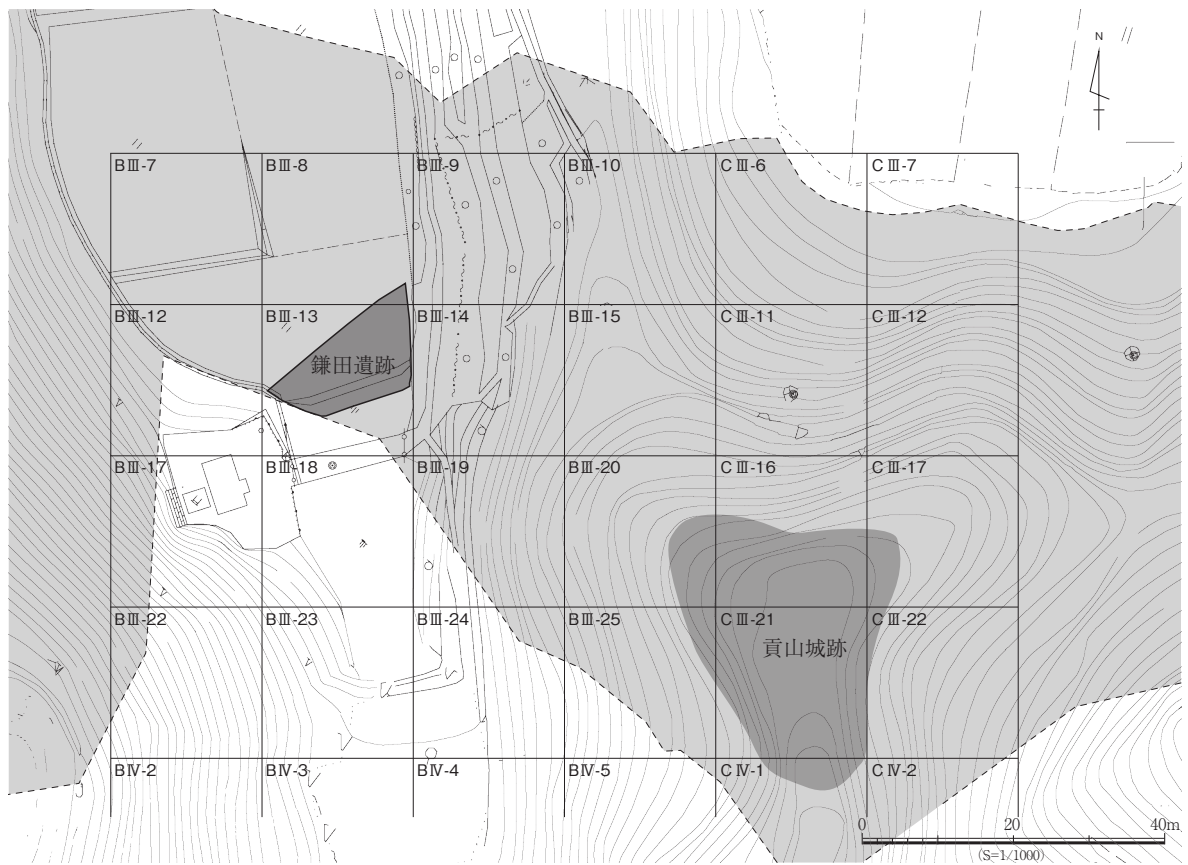


図 61 鎌田調査区位置図

## 2.調査の方法

されたTR10・16地点を本調査の対象地として、工事予定区域17,700㎡の内、工事の影響を受ける範囲内の163㎡について発掘調査を行った。

本調査区の現況は山林裾に開けた田畑地であり、まずは対象範囲内の草刈りを行い調査区の設定、調査前状況の写真撮影をした後、発掘調査に着手した。表土及び無遺物層は重機により掘削を行い、包含層掘削、及び遺構検出作業は人力により実施した。検出した遺構については人力により掘削し、掘削終了後に遺構全体の完掘写真撮影、平面図を作成し、必要に応じて個別遺構の完掘写真撮影も行った。出土遺物については必要に応じて出土状況についての写真撮影、出土状況図の作成、レベル測量を実施した。

測量については、3級基準点・3等水準点を設置して、城ヶ谷山遺跡調査時に設定したグリッド名称を踏襲し、調査区全体にグリッドを設定し、大グリッド(100m)には東西方向にアルファベット、南北方向にローマ数字を付し、中グリッド(20m)と小グリッド(4m)にはアラビア数字を用い、包含層遺物の取り上げ等には、各グリッド番号を使用した。本報告書の図面には公共座標(世界測地系)を記している。鎌田遺跡はBⅢグリッドに位置する。

### (2)基本層序

調査区南壁で認められた基本的な層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：褐灰色(10YR6/1)シルト質粘土(現耕作土)

第Ⅱ層：明黄褐色(10YR6/8)礫(整地盛土)

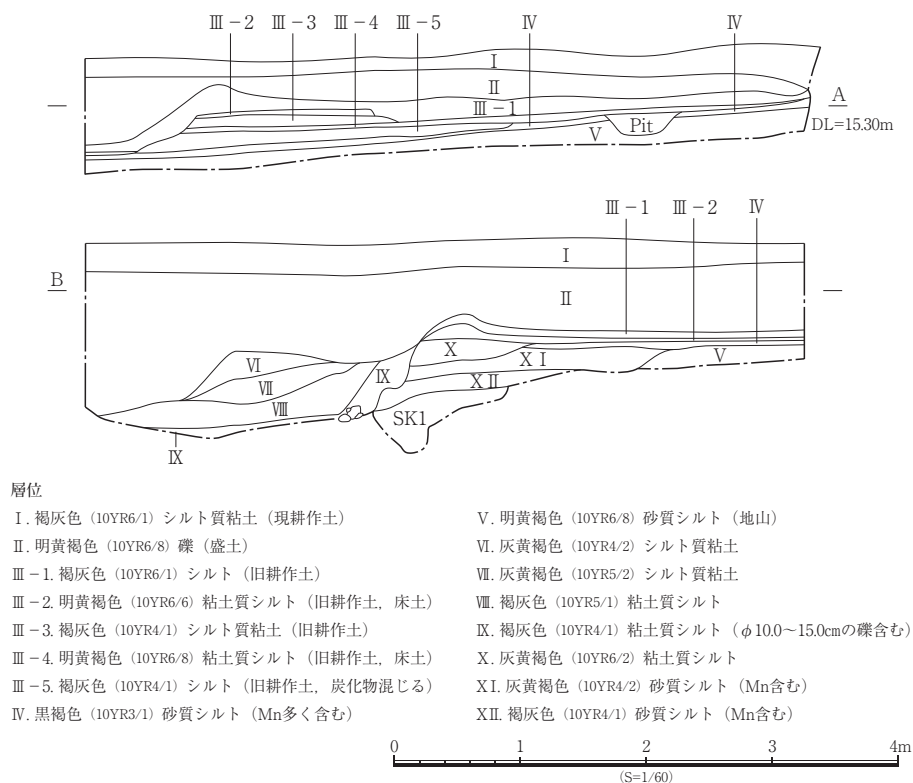
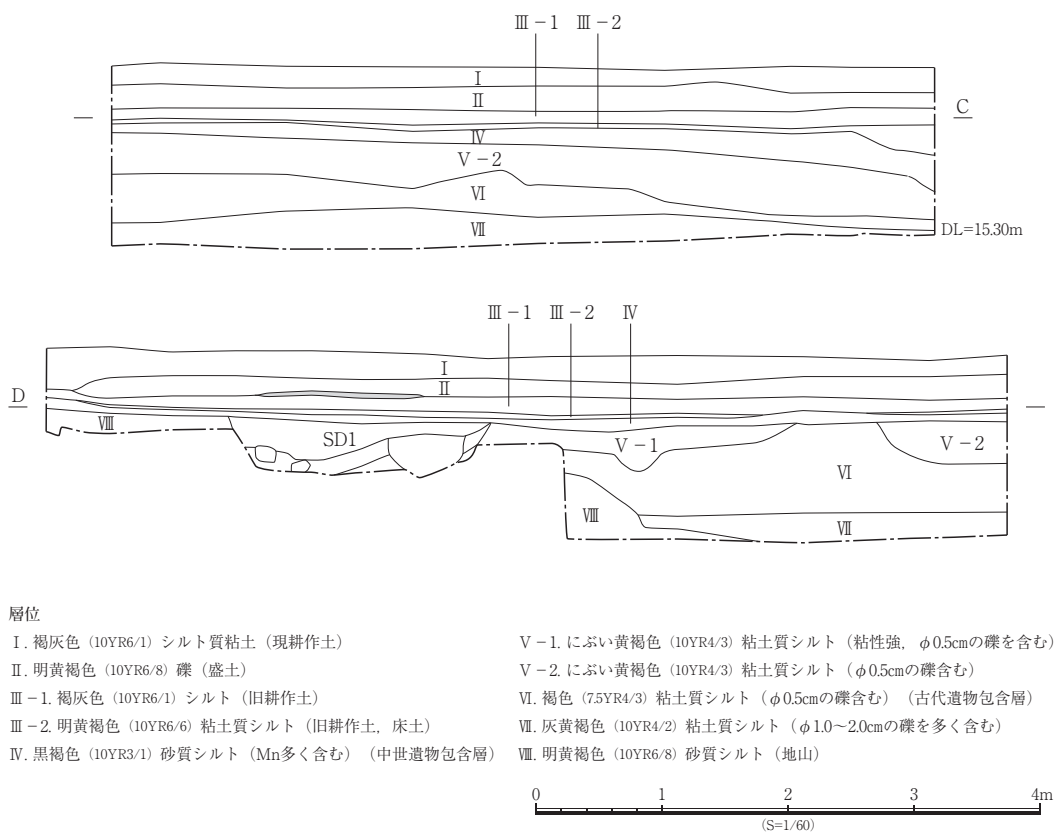


図 62 調査区東壁セクション図

- 第Ⅲ層：褐灰色 (10YR6/1) シルト (旧耕作土)
- 第Ⅳ層：黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト
- 第Ⅴ層：にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト (中世遺構検出面)
- 第Ⅵ層：褐色 (7.5YR4/3) 粘土質シルト
- 第Ⅶ層：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト
- 第Ⅷ層：明黄褐色 (10YR6/8) 砂質シルト (地山)

調査区北部及び西部は、造成による影響で深く削平されており、基本的な堆積は調査区中央部から南部にかけてのみ認められた。遺構検出面を構成するⅤ層以下は、Ⅵ層に古代の遺物が認められたが、谷部からの流れ込みと考えられる。



層位

- |  |   |
|--|---|
| I. 褐灰色 (10YR6/1) シルト質粘土 (現耕作土)             | V-1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト (粘性強, φ0.5cmの礫を含む) |
| II. 明黄褐色 (10YR6/8) 礫 (盛土)                  | V-2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト (φ0.5cmの礫含む)       |
| III-1. 褐灰色 (10YR6/1) シルト (旧耕作土)            | VI. 褐色 (7.5YR4/3) 粘土質シルト (φ0.5cmの礫含む) (古代遺物包含層) |
| III-2. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質シルト (旧耕作土, 床土)    | VII. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト (φ1.0~2.0cmの礫を多く含む)  |
| IV. 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト (Mn多く含む) (中世遺物包含層) | VIII. 明黄褐色 (10YR6/8) 砂質シルト (地山)                 |

図 63 調査区南壁セクション図



3. 検出遺構と出土遺物

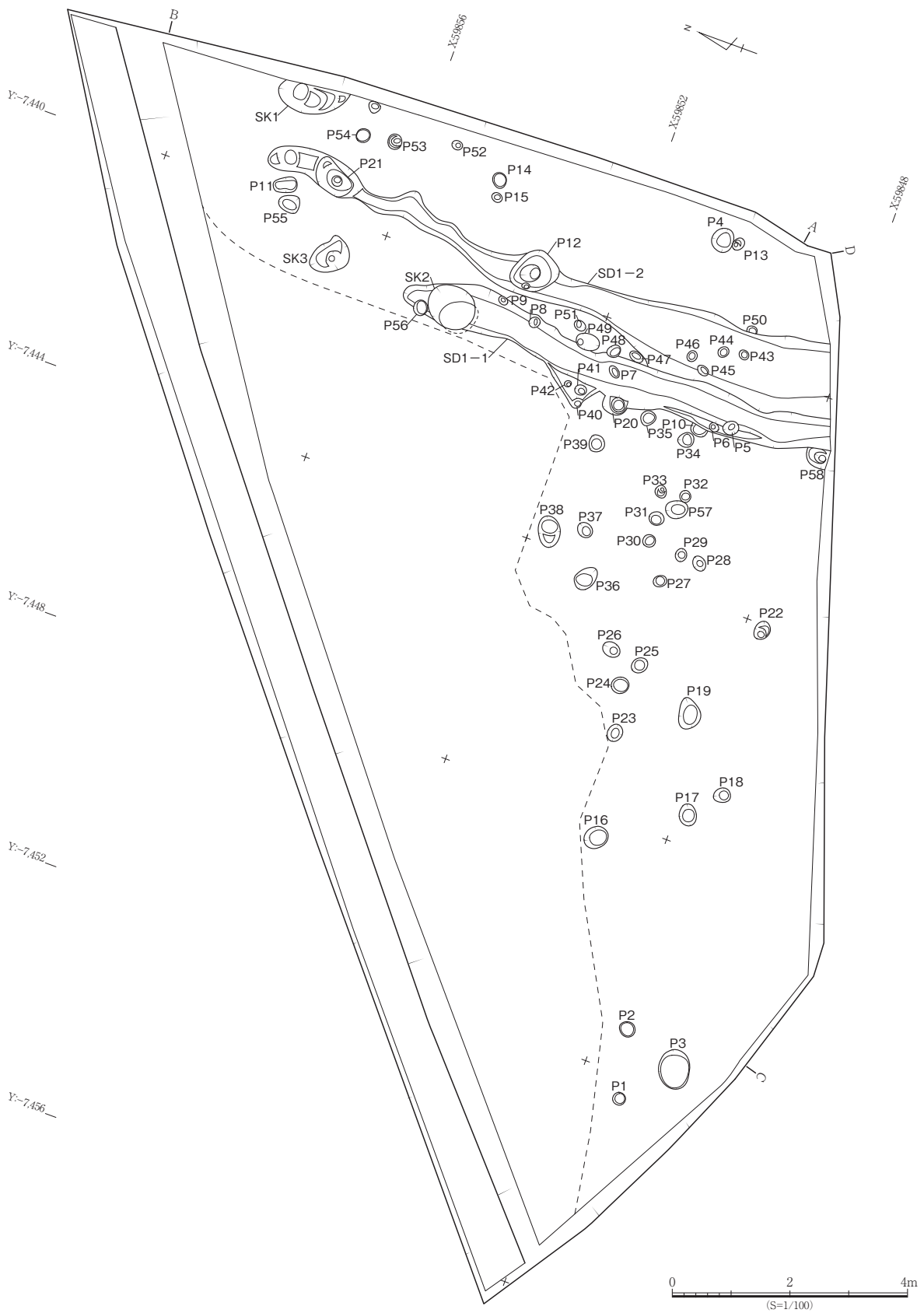


図 64 鎌田遺構配置図

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 検出遺構

遺構は標高14.40～15.00m，V層上面で検出された。ここでは，検出された遺構について内容を述べる。検出した遺構は，土坑，ピット，溝である。

#### ① 土坑

##### SK1 (図65)

調査区北東端で検出された土坑である。中央部の平面プランは楕円形と考えられ，長径1.20m，短径0.49mを測る。深さは38.0～52.0cmを測り，北側がピット状に深くなる。遺構埋土は灰黄色粘土質シルトで，土坑底面には炭化物層が認められた。

##### SK2 (図65)

調査区東部，SD1-1の北端で検出された土坑である。平面プランは円形で長径0.84m，短径0.73m，深さは40.0～46.0cmを測る。底面南側が袋状を呈する。遺構埋土は上層が暗灰黄色砂質シルトで，下層は粘土質シルトである。土師質土器細片が1点出土した。

##### SK3 (図65)

調査区東部，SD1-1の北で検出された土坑である。平面プランは不整形円で長径0.71m，短径0.51m，深さは50.0～67.0cmを測り，底面南側が柱痕状に深くなる。遺構埋土は，上層にIV層の黒褐色砂質シルトの堆積があり，下層は炭化物が混じったオリーブ褐色～暗オリーブ褐色を呈した粘土質シルトである。

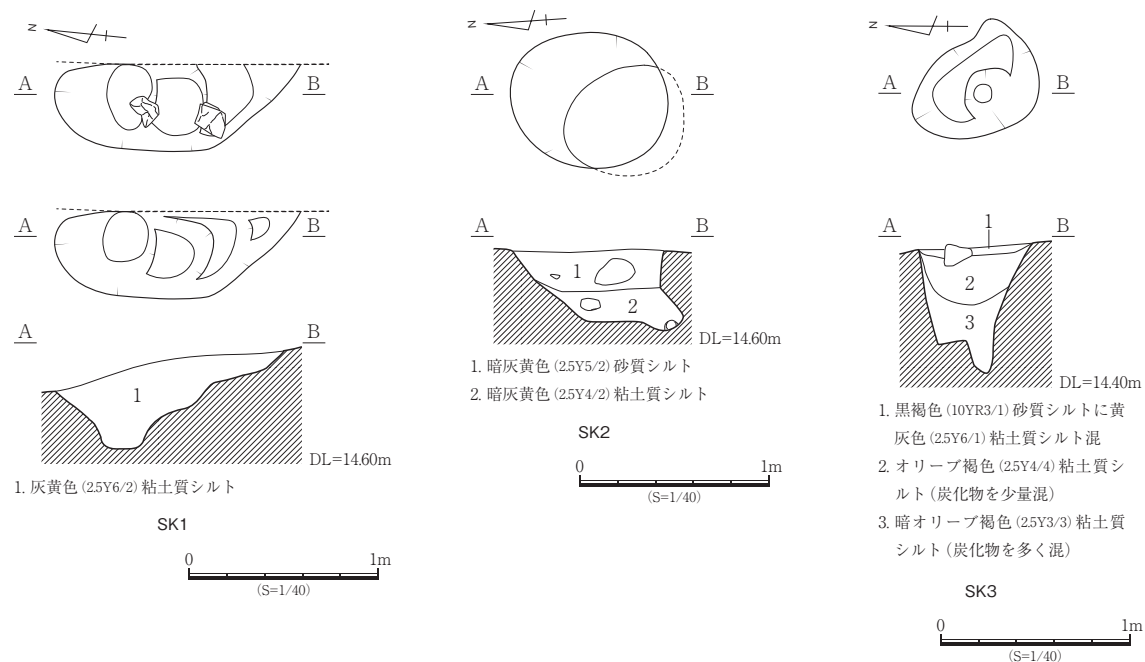


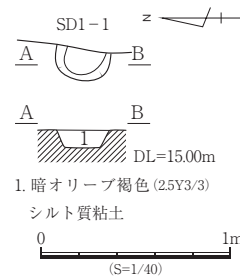
図65 SK遺構図

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### ②ピット

##### P4

調査区南東端で検出されたピットである。平面プランは円形で長径0.41m，短径0.37mを測り，深さは17.0cmを測る。遺構埋土は灰黄色砂質シルトであり，検出面で直径22.0cmの礎板を検出した。



##### P10 (図66)

調査区南部で検出されたピットであり，SD1 - 1 に切られる。平面プランは円形と思われ，復元直径0.29m，深さ9.0cmを測る。遺構埋土は暗オリーブ褐色シルト質粘土であり，埋土中から図示した須恵器皿(No.141)が1点出土した。内面に沈線状の工具痕が認められる。

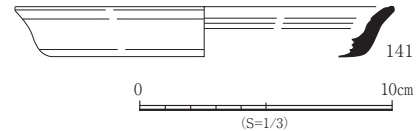


図66 P10 遺構図・出土遺物

##### P11

調査区北東部で検出されたピットである。平面プランは楕円形で長径0.41m，短径0.26mを測り，深さは11.0cmを測る。遺構埋土は暗オリーブ褐色シルト質粘土であり，検出面で直径16.0cmの礎板を検出した。

##### P12

調査区東部で検出されたピットであり，SD1 - 2 に切られる。平面プランは円形で長径0.80m，短径0.64mを測り，深さは58.0cmを測る。遺構埋土は暗オリーブ褐色シルト質粘土であり，ピット中央部に柱痕が認められる。東側テラスには直径15.0～16.0cmの根石が検出された。

#### ③溝

##### SD1 (図67)

調査区東部，標高14.80mで調査区に沿って南北方向に検出された溝である。中央部から北部にかけては2条に分かれ検出され，西側をSD1 - 1，東側をSD1 - 2とする。SD1 - 1は検出長7.62m，幅0.50～0.70m，深さは26.0～32.0cmを測る。溝底の北端はSK2と切り合い一段深くなる。遺構埋土は黄灰色粘土質シルトに暗オリーブ褐色シルト質粘土が混じる。SD1 - 2は，検出長10.32m，幅0.40～1.82m，深さは29.0～32.0cmを測る。溝の中央部と北部はP12・21との切り合いが認められる。SD1中央部に設定したバンクセクションを見ると，SD1 - 1の堆積の方が新しく，溝の切り直しをしている。埋土中には，直径18.0～20.0cm大の集石が認められ，遺物は，土師質土器細片19点，瓦器椀1点，須恵器3点，叩石1点が出土した。No.142・143は須恵器であり，142は杯の底部片である。外底部に回転ヘラ切り痕が認められる。143は皿であり，口縁部は外反し，内面に工具による調整が条線状に施される。144は瓦器椀であり，口縁部外面は二段の横ナデが認められる。摩耗が著しく内面のミガキ等，調整は不明である。

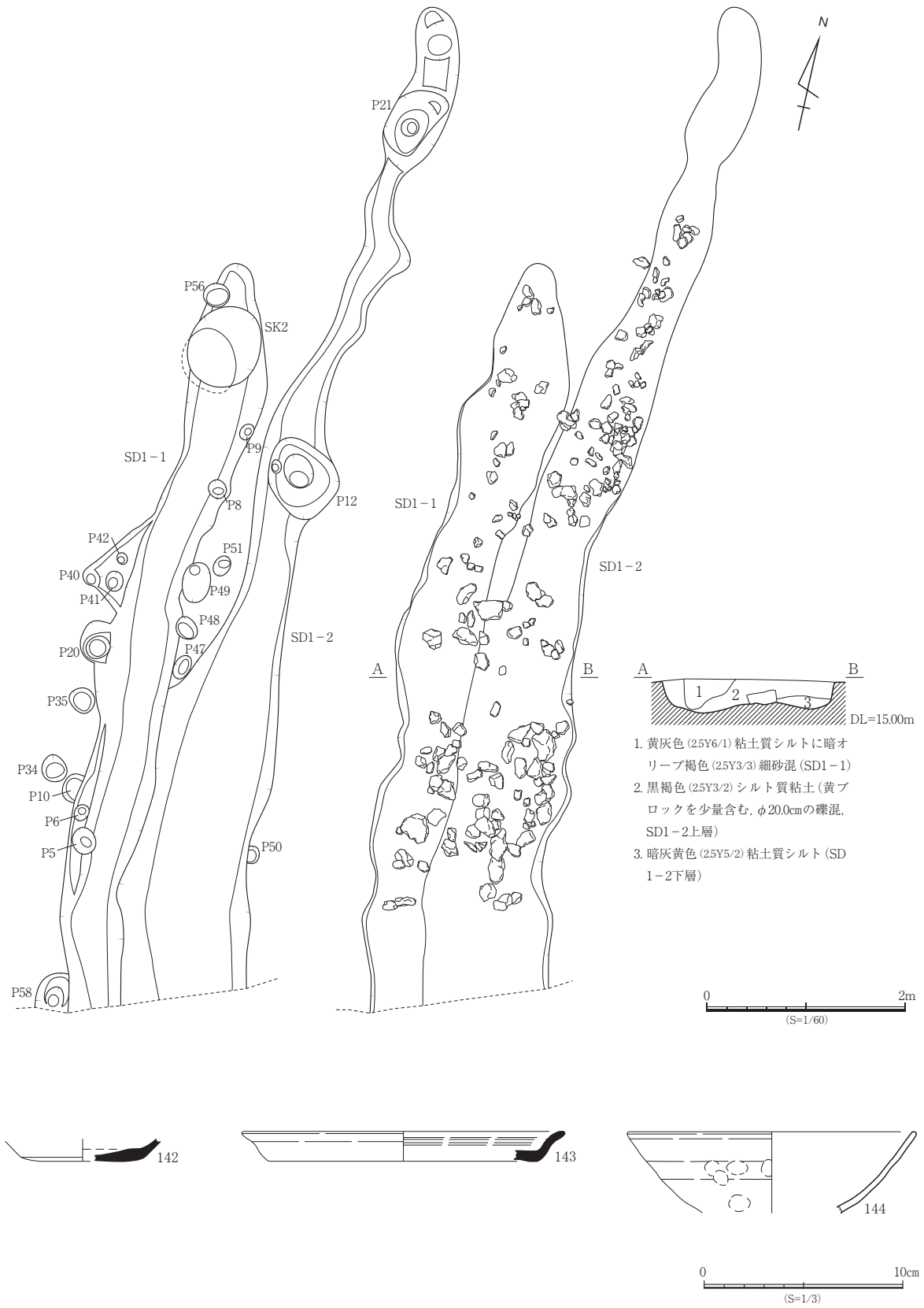


図67 SD1 遺構図・出土遺物

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (2) 包含層出土遺物

ここでは、包含層から出土した遺物について器種ごとに取り上げる。出土遺物は全てIV層から出土した。

#### IV層出土遺物(図68No.145～150)

145～147は須恵器である。145は杯であり、口縁部はやや外反気味で、回転ナデ調整が施される。146は蓋の鈕の部分であり、僅かに宝珠の突起部を残す。147は甕であり、口縁端部は面を成し、中央部が沈線状に凹む。外面は平行のタタキ目が残る。148・149は土師器甕の口縁部片である。148は口縁部内面に横方向のハケ調整が施される。149も口縁端部が欠損するが148と同じタイプになると思われる。150は東播系須恵器捏鉢である。口縁部は玉縁状を呈する。Ⅱ-2期。

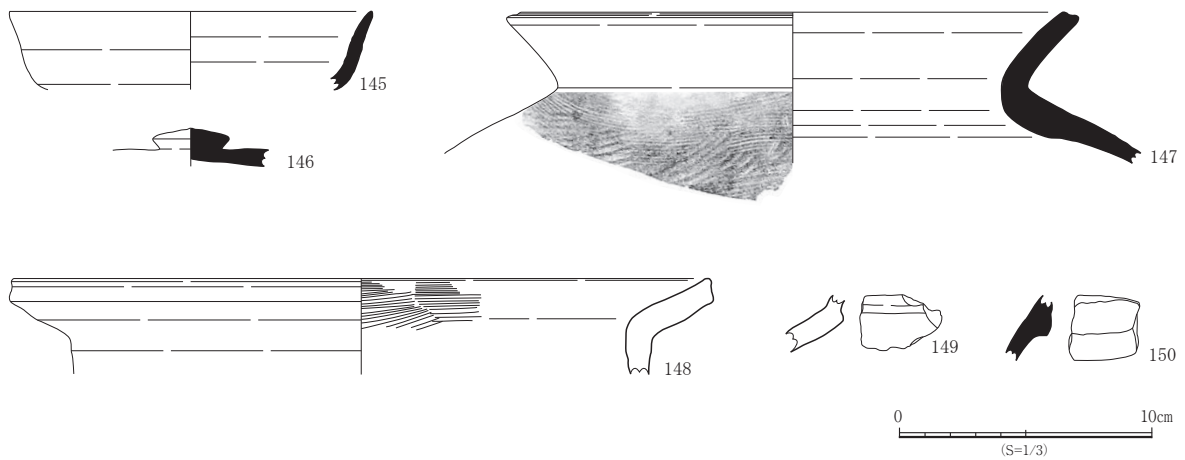


図 68 包含層出土遺物



# 第Ⅵ章 貢山城跡

## 1. 調査概要

当調査区は、仁淀川右岸、県道土佐市いの町線の南側にあたる。鎌田遺跡東側の標高 47.00m の丘陵上に立地し、平成 19 年度に現地踏査を行い、平場・堀切が確認された事により新たに発見された遺跡である。

発掘調査では、平場で一部、畑地、墓地等に改変された影響もみられたものの、柱穴と考えられるピットを検出した。堀切は、断面形がV字形をした「薬研堀」と呼ばれる形態で、堀切では古いタイプである。また、西側斜面では、北西部の平場から堀切に延びる通路状の平坦面が確認された。出土遺物は、近世の遺物が中心に出土している。

## 2. 調査の方法

### (1)調査方法

平成 19 年度に実施された踏査及び試掘調査の結果を受け、本調査の対象地として城郭遺構と思われる平場、堀切部分を対象に工事予定区域 17,700 m<sup>2</sup> の内、工事の影響を受ける範囲内の 1,079 m<sup>2</sup> について発掘調査を行った。

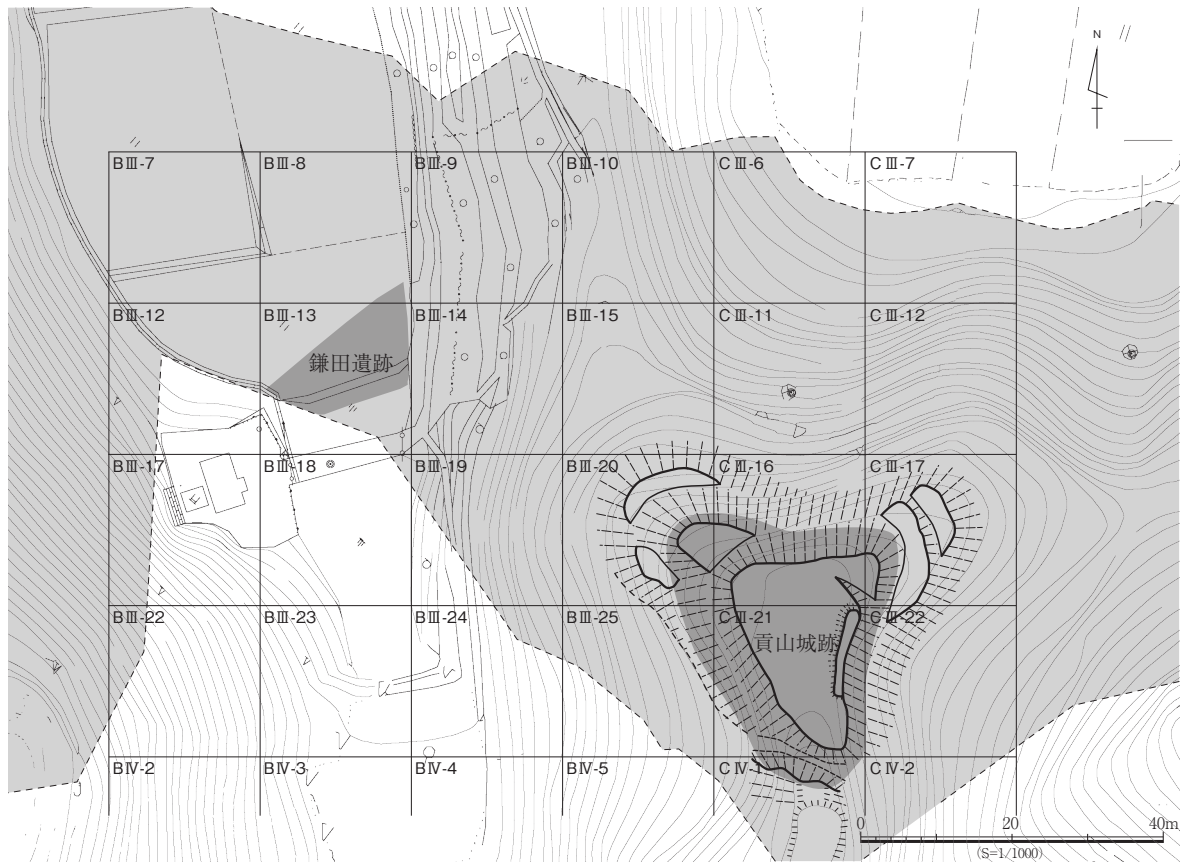


図 69 貢山調査区位置図

## 2.調査の方法

本調査区の現況は山林・畑地・墓地であり、まずは対象範囲内の樹木の伐採、草刈り等を行い調査区の設定、調査前状況の写真撮影をした後、現況の地形測量を実施した。その後、平場を中心にバンクを設定し、発掘調査に着手した。掘削は全て人力により行い、平場及び斜面の掘削廃土については土嚢に入れてコンクリートシューターを使用して斜面下に仮置きし土留めとした。また、小型のバックホーを使用して斜面の廃土を整地し作業道として使用した。検出した遺構については人力により掘削し、掘削終了後に遺構全体の完掘写真撮影、遺構図を作成し、調査区全体の航空写真測量を実施した。出土遺物については必要に応じて出土状況についての写真撮影、出土状況図の作成、レベル測量を実施した。

測量については、3級基準点・3等水準点を設置して、城ヶ谷山遺跡調査時に設定したグリッド名称を踏襲し、調査区全体にグリッドを設定し、大グリッド(100m)には東西方向にアルファベット、南北方向にローマ数字を付し、中グリッド(20m)と小グリッド(4m)にはアラビア数字を用い、包含層遺物の取り上げ等には、各グリッド番号を使用した。本報告書の図面には公共座標(世界測地系)を記している。貢山城跡は大グリッドのBⅢ・CⅢグリッドに位置する。

### (2)基本層序

調査区平場1の東西バンクで認められた基本的な層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：黒褐色(10YR2/3)砂質シルト(現表土)

第Ⅱ層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト

第Ⅲ層：明赤褐色(2.5YR5/8)シルト礫(整地土)

平場部は、現表土下に第Ⅱ層がみられ、Ⅱ層直下が岩盤となっていた。調査区北東部及び北西部の斜面には、平場1を造成した時の整地土(第Ⅲ層)が認められた。

## 3. 検出遺構と出土遺物

### (1)検出遺構

ここでは、検出された各遺構について内容を述べる。

#### ①平場1

本調査区の頂部にあたり、標高47.00～48.20mを測る。平場の形状は、北部で丘陵が北東方向と北西方向に尾根が二股に分かれる事から逆三角形形状を呈し、長軸は南北方向で25.00m、幅は、南端部で4.70m、北端部で18.50mを測り、面積は318㎡である。現況では畑地に改変されているものの、東側縁辺の標高が高く、土塁状の高まりを残していた。平場は丘陵頂部を削平し造成しており、削った土は北西斜面側に盛り、通路状平坦面を構築している。検出された遺構は平場の南西部でピットがまとまって検出された。一部、柵列としての機能が考えられる柱穴列についてはSAとして取り上げた。検出面は地山の岩盤面であり、埋土は全てⅡ層のにぶい黄褐色砂質シルトである。出土遺物はⅠ～Ⅱ層で尾戸窯の灯明皿、唐津鉄釉皿、肥前産磁器など近世の遺物が出土した。また、細片で図示できなかったが、土師質土器杯の細片1点、瓦器椀の細片2点など中世(13～14世紀代)の遺物も僅少出土した。

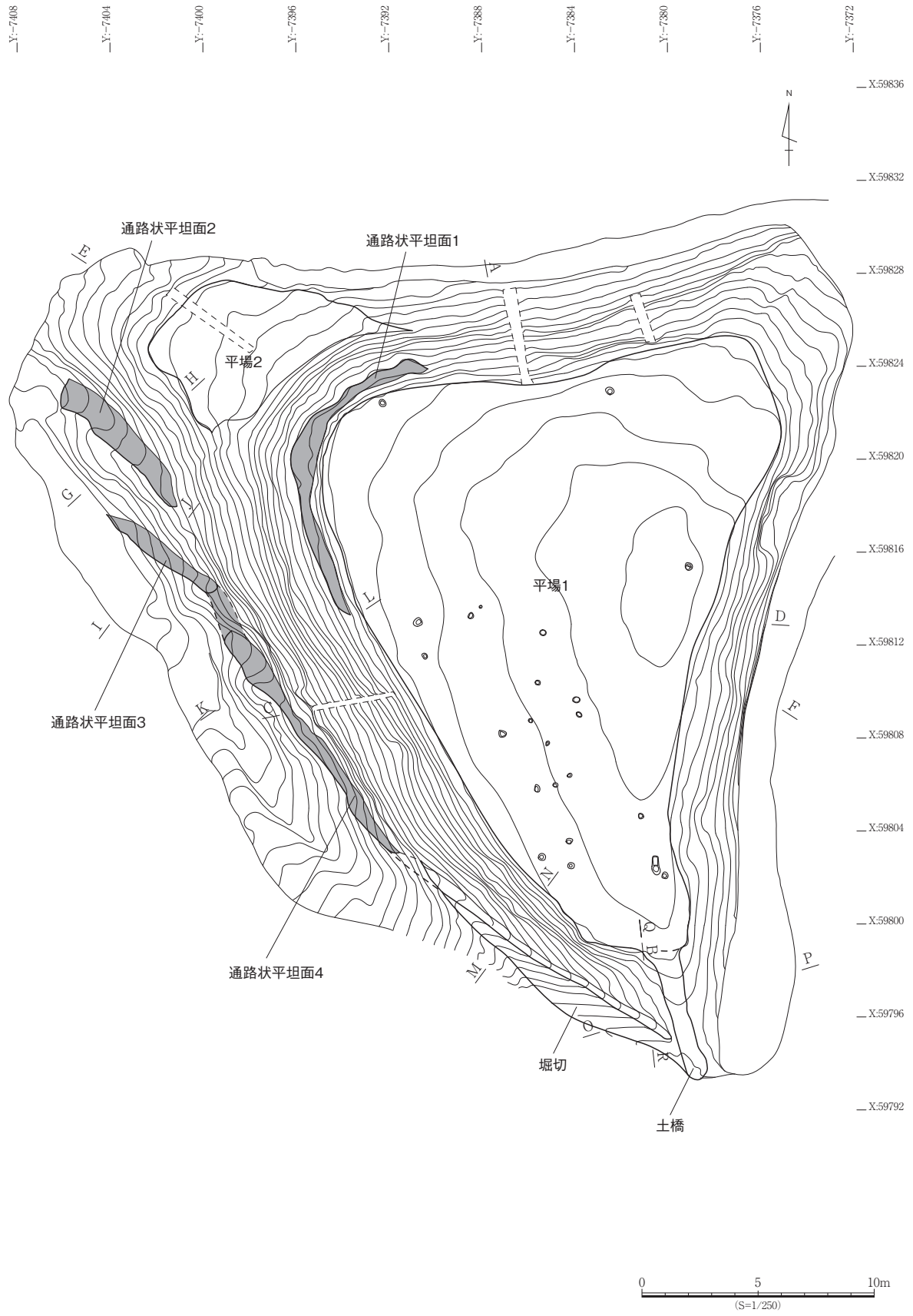
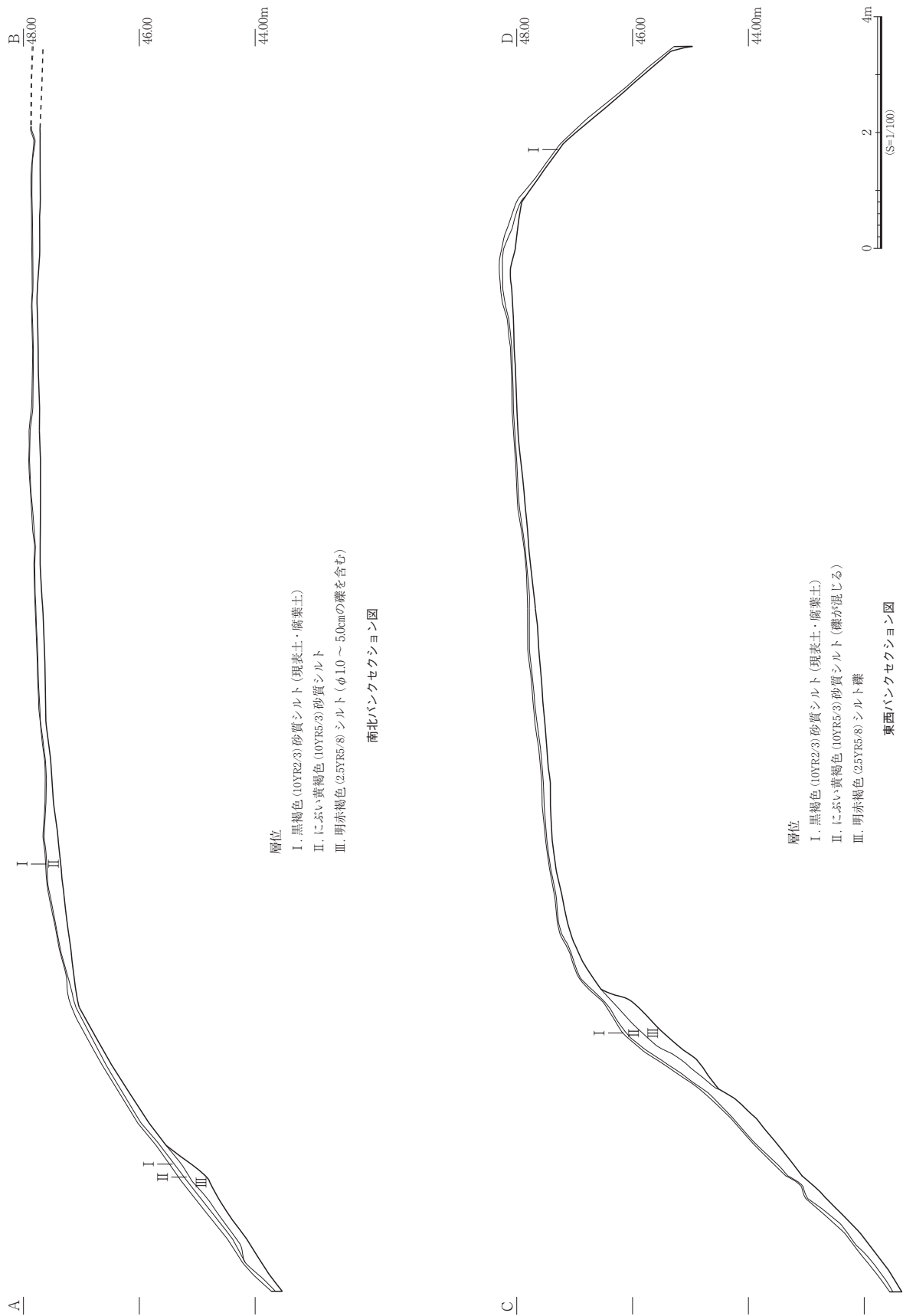


图 70 貢山遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物



図 71 貢山遺構配置図



層位  
 I. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト (現表土・腐葉土)  
 II. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト  
 III. 明赤褐色 (2.5YR5/8) シルト (φ1.0～5.0mmの礫を含む)

層位  
 I. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト (現表土・腐葉土)  
 II. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト (礫が混じる)  
 III. 明赤褐色 (2.5YR5/8) シルト礫

図 72 調査区セクション図



### 3. 検出遺構と出土遺物

#### SA1 (図73)

平場1の西部で検出したP1～3が該当する。東西方向を示し、全長5.40m、各柱間距離は2.25～3.15mを測る。P3は南北方向を示すSA2の北端ピットと重複し、L字型の囲い柵列の可能性も考えられる。

#### SA2 (図73)

平場1の南部で検出したP3～8が該当する。南北方向を示し、全長10.15m、各柱間距離は1.05～2.65mを測る。P3は東西方向を示すSA1の東端ピットと重複し、L字型の囲い柵列の可能性も考えられる。

#### P10 (図74)

平場1の北東端部で検出したピットである。平面プランは円形で長軸0.36m、短軸0.31m、深さは7.0cmと浅い。遺構埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、肥前産磁器皿(No.151)、内野山窯銅緑釉皿の破片が出土した。

#### ②平場2

調査区北西部、平場1からの比高差3.00～3.50m下の平場である。平場の形状は台形状を呈し、北東に向かってやや傾斜する。長軸は南東から北東であり4.90mを測る。幅は、基部で4.00m、先端部で2.20mを測り、面積は34㎡である。表土下にII層の黄褐色シルト礫の堆積が認められ、II層直下が岩盤である。平場2は平場1側の斜面部を一部削平し、段部を構築している。平場2ではピット等の遺構は検出されなかったが、肥前産白磁皿1点、土師質土器の焜炉片、瓦片など近世の遺物が出土した。

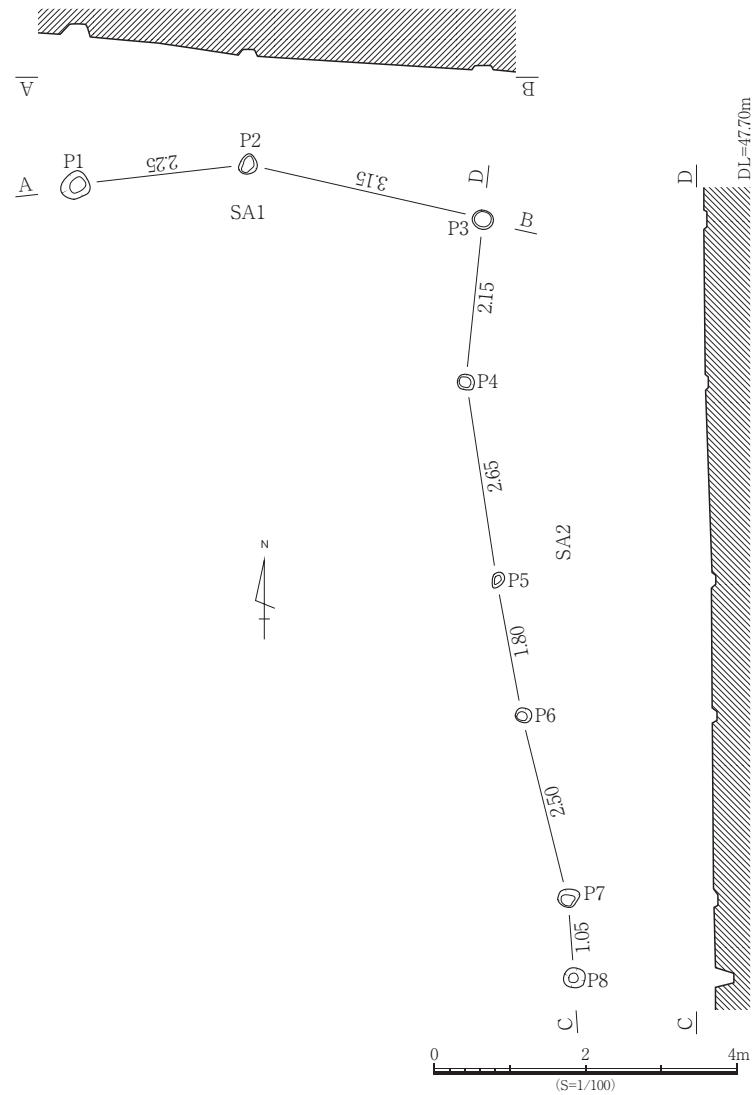


図73 SA1・2遺構図

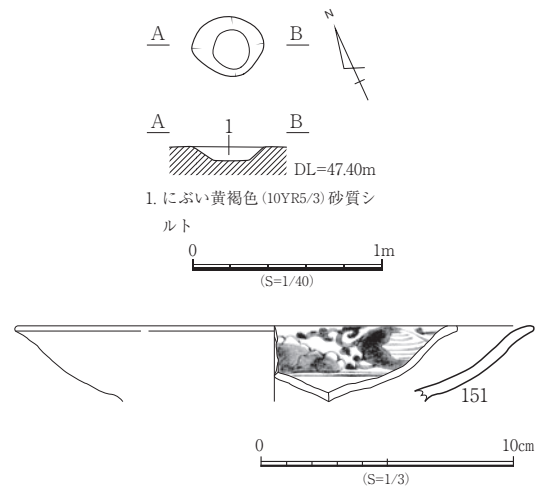


図74 P10遺構図・出土遺物

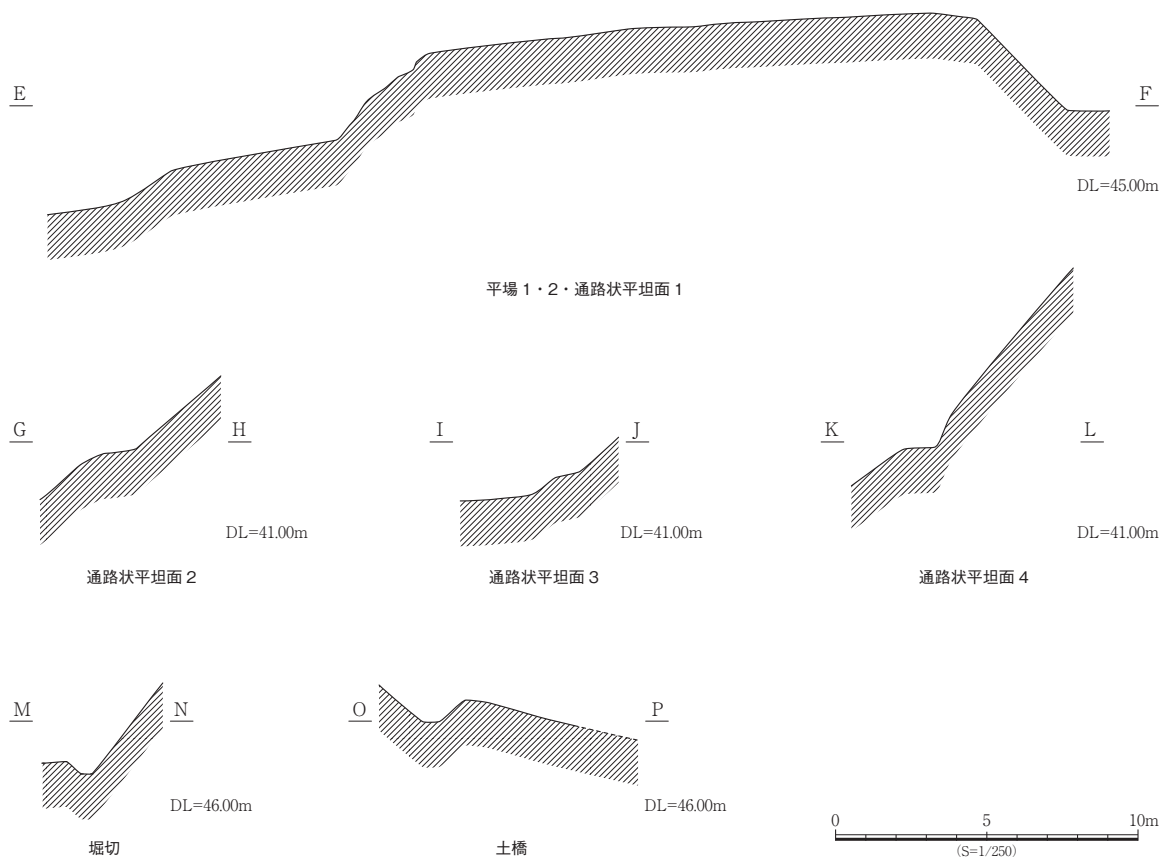


図 75 調査区エレベーション図

### ③通路状平坦面1

平場 1 の北西隅角部の斜面部直下で検出された通路状の平坦部である。下方の平場 2 の基部に平行し、延長 15.20m、幅 0.80～1.00m にわたり検出された。南端は西斜面に至り、平場 1 に接続していたものと考えられる。

### ④通路状平坦面2

平場 2 の南西斜面側で検出された通路状の平坦部である。延長 7.10m、幅 1.00～1.30m を測り、平場 2 の南側辺に沿って構築されている。西斜面下から平場 2 へのアプローチとして考えられる。

### ⑤通路状平坦面3・4

平場 1 の西斜面部で検出された通路状の平坦部である。通路状平坦面 3 と 4 は、斜面途中で崩れ途切れているが延長 18.80m、幅 0.50～1.20m を測り、南部の堀切の堀底につながる。西側斜面下からの連絡通路と思われる。

### ⑥堀切

調査区南端部、平場 1 の南に延びる丘陵尾根鞍部で検出された。堀切としての掘削が認められるのは土橋から西側の斜面部が明瞭であり、全長 12.00m、上端幅 4.20m、堀底幅 0.50～0.90m を測り、「薬研堀」の形状を示す。暗部は土橋状に残している。平場 1 の南西斜面部は切岸状に成形しており傾斜

### 3. 検出遺構と出土遺物

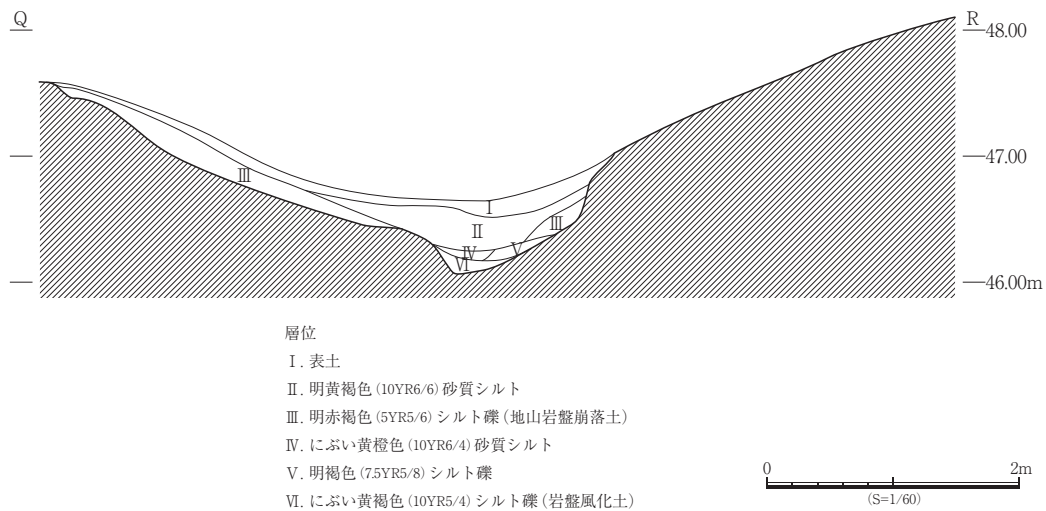


図 76 堀切セクション図

角は45～60°を測る。土橋よりのバンクセクションをみると、表土下に明黄褐色砂質シルトがあり、両側は岸からの岩盤が風化して崩落した堆積が認められた。最下層は地山の岩盤がV字形に掘込まれた痕跡があった。

#### ⑦土橋

調査区南端部、平場1の南に延びる丘陵尾根鞍部で検出された。全長5.50m、上端幅0.50～0.90mを測る。尾根鞍部を堀切で削り残し構築している。土橋東側は、東斜面の谷部の自然地形である。

#### (2)包含層出土遺物

ここでは、包含層から出土した実測可能な遺物について器種ごとに取り上げる。出土遺物は全てII層から出土した。

#### II層出土遺物(図77No.152・153)

152はII層から出土した能茶山窯の焙烙鍋である。鉄釉がハケ塗りされ、外面上半部には飛鉋が施される。153は西斜面II層から出土した寛永通宝である。1/3が欠損している。

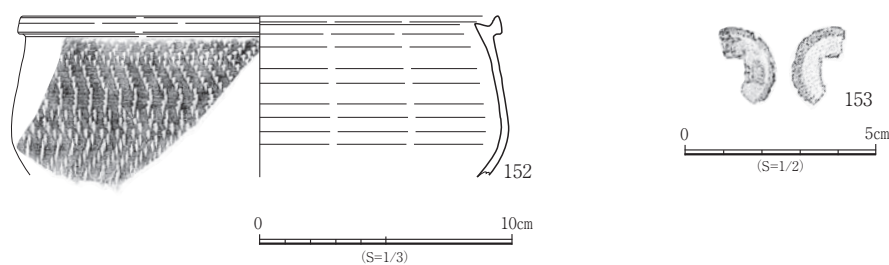


図 77 II層出土遺物

## 第Ⅶ章 総括

### 1. 城ヶ谷山遺跡

城ヶ谷山遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭、古代～中・近世にかけての遺構と遺物が確認された。遺構は、古代～中・近世にかけての掘立柱建物跡、土坑、溝などが検出され、谷開口部の丘陵裾斜面に段部を造り出し、標高14.00～16.00mに遺構面を形成している。ここでは、検出された遺構と出土した遺物について時代ごとに触れる。

#### (1) 弥生時代

下層(V層以下)で弥生時代終末期～古墳時代の甕や鉢など土器が一括して出土した。遺物が出土した地点はⅡ区の北壁側で標高13.50mに堆積している包含層からである。このV層以下は粘土、粘土質シルト、シルトの互層で堆積が認められ、氾濫原堆積物として捉えることができる。ノジュール化した植物根痕が多くみられ土壌化が認められることから、一時期に生活面として機能していたことが窺える。この面は下層確認の際に見つかった面であり、弥生土器が出土した地点を拡張し遺構検出を行ったが明確な遺構は検出されなかった。土器は鉢1個体、甕3個体であり、完形復元が可能な状態で出土し、検出面では火を使用した痕跡を示す焼土、炭化物も見つかっており、祭祀的な行為が行われた可能性が考えられる。甕は2タイプが認められ、外面にタタキ目を残すものと、ナデにより調整を施すものがみられる。前者は胴部の張りが少なく、弥生時代後期の甕の形態を残しており、後者は胴部が球形で法量も大小の分化が認められる。底部は丸底化しており、古墳時代前期に位置づけられる。前者のタタキ目を残す甕のタイプとの供伴も仁淀川流域の特徴の一つとして捉えることができる。

#### (2) 古代

出土遺物の帰属時期を整理すると、概ね8世紀後半～9世紀前半代、9世紀末～10世紀中葉、12世紀代の三時期が認められ、各時期の遺物の占める割合はピークがあるものの奈良時代～平安時代にかけて連綿と続いている。Ⅰ区ではⅣ～Ⅴ層、Ⅱ区ではⅢ～Ⅳ層からの出土が中心であり、この内、8世紀後半～9世紀前半代を示す遺物は僅少でありⅤ層及びⅥ層からの出土である。古代の遺物の時期的なピークは9世紀末～10世紀中葉頃を示しており、畿内系黒色土器や緑釉陶器の搬入品も認められる。この時代の遺構としてはⅠW区SD1、Ⅱ区SD4・6が挙げられる。検出面はⅥ層上面であり、小規模な谷部の地形に沿っている。12世紀代の遺構としては、Ⅱ区のSB3・5～7・9が挙げられ、柱穴及び検出面上の包含層から瓦器椀や土師器椀が出土している。この時代の瓦器椀や土師器椀はⅡ区のⅣ層で多く出土しており、瓦器椀では、搬入品と考えられる和泉型瓦器椀は僅少で、在地色の強い瓦器椀の割合がⅡ区のⅣ層では多く見られる。丘陵の裾部を平坦に成形し、掘立柱建物などを構築している。遺構検出面はⅤ～Ⅵ層上面で標高14.00m前後であり、遺構の分布をみれば仁淀川に面した調査区北側に集落の広がりを見る。仁淀川を挟み対岸の天神溝田遺跡の事例では、平成20年度に行われた調査で8世紀後半～12世紀にかけての遺構と遺物が検出されており、同様に標高14.00

1.城ヶ谷山遺跡

表2 出土遺物内訳表

城ヶ谷山遺跡

調査区	層位	弥生時代 終末～ 古墳時代 前期(3c前 半～4c前 半)	古代(9c末～12c後半)							中世(15c～16c)					近世(17c後半 ～18c)		その他				
			土師器 供膳具	土師器 甕	須恵器	黒色土器 椀(A)	緑釉陶器 皿	瓦器 椀	黒色土器 椀(B)	土師質土器 供膳具	瓦質土器 (銅・羽釜)	備前焼 播鉢	白磁皿	青花皿	青磁碗	陶器	磁器	瓦	砥石	硯	古銭
I区	I層		6	1						2				15							
	II層		13	7		1							2	1							
	III層		71	41	4	1	2	4		13	4	1	9	1	29	3					8
	IV層		219	150	8	4	1	3	1	3	21	2	2	3	2	10				1	7
	V層		433	364	20	13		4	1	3	72	1		4	13	1					7
	合計	0	736	568	33	19	3	11	2	6	106	9	3	18	3	68	4	0	0	0	1
II区	I・II層		59	40	1					6	1	3		1	35	10					
	III-1層		632	115	53	36	1	180	6	22	105	9	3	48	7	72	18	5	3	1	53
	III-2層		660	429	25	22	3	41		1	83			5	2	34	2				10
	IV層		503	419	31	23		30	1	2	90	1			1	1	1				8
	V層	46																			
	合計	46	1854	1003	110	81	4	251	7	25	284	11	6	53	11	142	31	5	3	1	0

鎌田遺跡

出土遺物	弥生		古代					中世				近世
	弥生土器	石器	土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	土師質土器	瓦質土器	東播系須恵器	瓦器	陶磁器	
IV層	2	2	179	20	11	1	37	2	1	1	17	

貢山城跡

位置	層位	中世		近世													
		土師質土器杯 南北朝13、14c	瓦器椀 南北朝13、14c	陶器							磁器				その他		
				京焼風陶器(尾戸窯)	灯明皿(尾戸窯)	肥前産陶器(内野山窯)	鉄釉皿(唐津産)	鉄釉茶碗(唐津産)	播鉢(堺産)	土師質土器提灯	肥前産磁器(皿・碗)	染付皿・碗(能茶山窯)	染付皿(鹿兒焼)	産地不明	瓦	鉄釘	銅銭
平場1	I・II層	1	2	4	1	5	2	1	1	1	13	5	6	3			3
平場2	I層										1				3		1
堀切	I層														1		
東斜面	I層														1		
西斜面	I・II層										1		1		1	1	2
北斜面	I層			1													
合計		1	2	5	1	5	2	1	1	1	15	5	7	3	6	5	2

～15.00mで集落跡が確認された。いの町内では、古代の遺構と遺物が発掘調査によって確認されたのは初めての事例となり、遺跡の立地と性格について比較検討するうえで貴重な成果と言える。両遺跡とも河川に面し陸路との結節点に立地しており、街道を結ぶ仁淀川の「渡し」があった場所としての可能性も考えられる。また、水運によって仁淀川を伝う物資の集散地としての役割も果たしていたのではないだろうか。

律令期に入り、郡郷制が施行される頃のいの町の中心部は吾川郡大野郷に属していたといわれ、西岸の波川付近は高岡郡吾川郷に、南部の八田地区を吾川郡桑原郷、東部の枝川・池内は土佐郡朝倉郷に属していた説がある。大野郷は天平勝宝4(752)年東大寺の封戸となっており、大野郷の貢納は国司を経て納められ、以後古代を通じて封郷であったとされる。また、文治元(1185)年には、源頼朝の守護・地頭設置により吾川郡は京都六条若宮八幡の別当秀嚴の所領とされており、荘園への変遷の中で他地域との繋がりを示す搬入品や、当時の遺物の組成を知る上で貴重な成果が得られた。

### (3)中世

中世では、瓦質土器や、青磁、青花といった遺物から15～16世紀中葉頃にピークがみられる。鎌倉～南北朝期を示す13～14世紀代の遺物は瓦器碗がみられるが量は僅少である。検出した遺構では、SB1・2・8が挙げられ棟方向、規模については他の建物と相違する。また、特筆すべき遺構としては火葬遺構と考えられるI W区SK1が挙げられる。時期の詳細は出土遺物が僅少であるが、出土した土師質土器杯の形態から鎌倉～南北朝期にかけての遺構と思われる。煙道と思われる長楕円形を呈した中央部の落ち込み部の両脇にピットがあり、形態的に東海地域(一の谷中世墳墓群：静岡県磐田市)などにみられる火葬遺構の形態に類似する。県内では南国市岡豊町に所在する奥谷南遺跡で火葬施設(SK10)が確認されており、土坑のプランは円形を呈し土坑底面に礫敷きが認められるなど当遺構と形態が異なる。県内では火葬遺構として認識できる遺構は少なく、今後、中世の墓地の形成や埋葬の風習をみていくうえで貴重である。

出土遺物の青花の割合でみるとⅡ区の出土量が多く、中でもC群の組成が占める割合が高い事から15世紀後半～16世紀中葉にピークがみられ、建物を検出したⅡ区を中心にこの頃には集落が形成されていたものと思われる。

### (4)近世

近世では唐津など肥前産磁器を中心とした17世紀後半頃の遺物にピークが認められ、野中兼山による万治2(1659)年に西岸を開拓するために行われた鎌田堰の築造開始時期頃にピークが重なる。鎌田堰は遺跡の西方約200m、鎌田城跡が立地する川に張り出した丘陵先端部の裾から対岸に造られており、地勢的にみて鎌田側はこの丘陵先端部から仁淀川に沿った瀬割り堤の構築が行われたものと思われ、堰と堤防の築造により土地の安定化が図られたものと思われる。この頃の遺構としてはⅡ区で検出されたSB4・10、円形を呈した土坑SK2・4～8が挙げられる。SB4・10は規模が小さく厩、もしくは小屋的な建物が想定される。土坑は二対一組で検出されており、これらは耕作時の肥料溜め施設として考えられており、周辺部の土地の安定化とともに耕作地が広がっていたものと思われる。



## 2. 鎌田遺跡

今回の調査区は丘陵裾部に位置し、谷部からの堆積と、仁淀川の氾濫原堆積によって地盤が形成されていた。調査区北部は、後世の土地の改変により削平されており、全体的な集落構造の抽出は困難であったが、検出された遺構と出土遺物について概観してみたい。

### (1)検出遺構

今回、検出された遺構の内、SD1は調査区東部で検出された遺構で、丘陵裾の縁辺に沿って見つかった。2条に分かれており、北部は削平の影響を受けて延長は不明であるが、溝の南側は、調査区の南方に延びており、光宜神社境内地の方に延びているものと思われる。地形は南部の丘陵に向かって高くなっており、調査対象地南部は、光宜神社境内の谷奥の方に石垣を伴った平場がみられ、今回検出された時期の遺跡の広がりがあるものと思われる。この溝からは9世紀代の須恵器と13世紀代に位置づけられる瓦器椀が流れ込みによる状況で出土しており、少なくとも13世紀代頃の遺構に位置づけられる。

### (2)出土遺物

出土遺物は、古代(奈良時代後半～平安時代前半)を中心に、中世(鎌倉～南北朝期)、近世(江戸時代後期)までの遺物が合計273点出土している。内容を概観すると、古代の遺物は須恵器供膳具の杯・皿、貯蔵具の甕が20点出土しており、これらは9世紀前半代に位置づけられる。また、土師器179点、緑釉陶器1点、黒色土器11点が出土しており、9世紀末～10世紀前半にかけての遺物も確認できる。中世では土師質土器37点、瓦質土器2点、東播系須恵器捏鉢1点、瓦器椀1点が出土しており、13世紀後半～14世紀前半代に位置づけられる遺物も出土している。これらの出土した遺物の帰属時期からは、古い段階の遺物は南部からの流れ込みと考えられるIV層から出土しており、検出面のV層SD1からも出土がみられる。SD1は瓦器椀も出土しており、最終の埋没は13世紀後半～14世紀前半代である。IV層からは古代と中世の遺物が混じり合って出土している事から、調査区南部からの流れ込みが想定される。SD1については南北方向に延びていることから、遺跡としては調査対象地南部の光宜神社周辺に広がりがあるものと思われる。

## 3. 貢山城跡

貢山城跡の縄張りには、現況で平場と堀切については確認されていた。今次調査の結果、平場1と西側斜面で地表下の遺構を検出する事ができた。ここでは検出された遺構と出土遺物から貢山城跡の特性を考えてみたい。

### (1)検出遺構

遺構としては、現況で平場と堀切が確認されていた。平場1ではピットが南西部に偏って検出され、柵列的な遺構が検出された。SA1・2は平場1の南西部で検出され、平場1の南西部をL字形に囲む様なプランである。中世城郭では柵列及び土塁など防御的な囲いは平場縁辺部で検出される例が多いが、平場を区画する様な配置は管見が少ない。平場1の東縁辺部については、土塁状に削り残し、西側に向かってやや傾斜させていることから東側の防塁としていた可能性が考えられる。検出され

た柵列は土塁状の高まりに平行しており、南部で検出された土橋からみて土塁と柵列の間は虎口構造を呈していた可能性も考えられる。

また、西側に目を向けると小規模な平場2と西斜面の通路としての通路状平坦面がみられ、貢山城跡西斜面下からの城道、もしくは連絡通路の機能が考えられる。通路状平坦面4は南側に位置する堀切の堀底を通路として使用し、上段の平場1へのアプローチも考えられる。

堀切については、平場1の南側に1条確認されたのみである。先述したように西側斜面下からのアプローチとして、また南西尾根部との行き来を遮断する目的で構築された遺構と考えられる。特に、平場1の南西斜面は切岸に成形していることから、南西尾根に延びる大内村への往還道(図78)を見据えた見張り台的な性格の城として位置づける事が可能である。この往還道は近年まで利用されており、出土遺物から近世後半期～幕末頃までは往還を監理する施設として機能をしていたものと考えられる。

## (2)出土遺物

出土遺物は、近世(江戸時代後半～幕末)が中心であり、主に平場1の北東部及び西斜面から出土した。中世の遺物は、平成19年度の試掘調査で堀切から青花碗の破片が1点出土し、今回の調査では土師質土器杯、瓦器碗などの細片が僅少出土したのみである。遺物のピークは近世であり、中でも内野山窯の銅緑釉が施された皿や、肥前産磁器から17世紀後半～18世紀前半代と、在地産である能茶山窯の磁器碗などから19世紀代にも画期がみられる。

このような平場と堀切のみで構成される城跡は仁淀川流域には複数みられ、立地をみれば川に面した丘陵の先端ピークに遺構を構築している場合が多い。貢山城跡も仁淀川に突き出した丘陵上に立地しており、周辺城跡との位置関係を考慮すると波川城跡と鎌田城跡に関連する施設の一部として捉える事ができる。貢山城跡の城郭としての性格、及び機能変化には言及できないが、今後、周辺地域の城郭との関連性、集落遺跡の様相を視野に入れて検討していく必要があるものと思われる。次項では、貢山城跡周辺の城跡の立地及び、城ヶ谷山遺跡、鎌田遺跡との関連性について述べる。

## 4. 考察

### (1)遺跡の立地からみた貢山城跡の性格

貢山城跡は鎌田城跡、波川城跡と尾根続きで繋がっており、領域的にみると波川城跡を中心として鎌田城跡が立地する南北丘陵を境界に西側が波川村、その丘陵から東側が鎌田村になっている。波川村は、天正年間の『長宗我部地検帳』では吾川郡に属しており、鎌田村、大内村は高岡郡に属する。<sup>(1)</sup>鎌田村南部に位置する大内村との関連も含めて検討していくと、貢山城跡の東側の谷には城ヶ谷山遺跡、西側の谷には鎌田遺跡があり、貢山城跡が立地する丘陵を中心に古代～中世にかけての集落遺跡が東西に展開することから貢山城跡は鎌田村の「村の城」の一部として位置付ける事が可能である。<sup>(2)</sup>そして、南部に隣接する大内村、西部の波川村に通じる陸路、往還道を見据えた城といえる。貢山城跡麓にある光宜神社横に全幅1.80～2.20mの山道が残っており、貢山城跡西斜面から大内村の高野谷に抜けるルートと、丘陵尾根部を西に伝い波川城跡に続くルートがあり、さらに尾根途中で分岐し鎌田城跡に向かうルートが続く。大内村に続くルートは往還として近年まで使用されており、唯一の陸路として重要視される。また、対岸の仁淀川右岸には、音竹城跡が立地しており、街道



#### 4. 考察

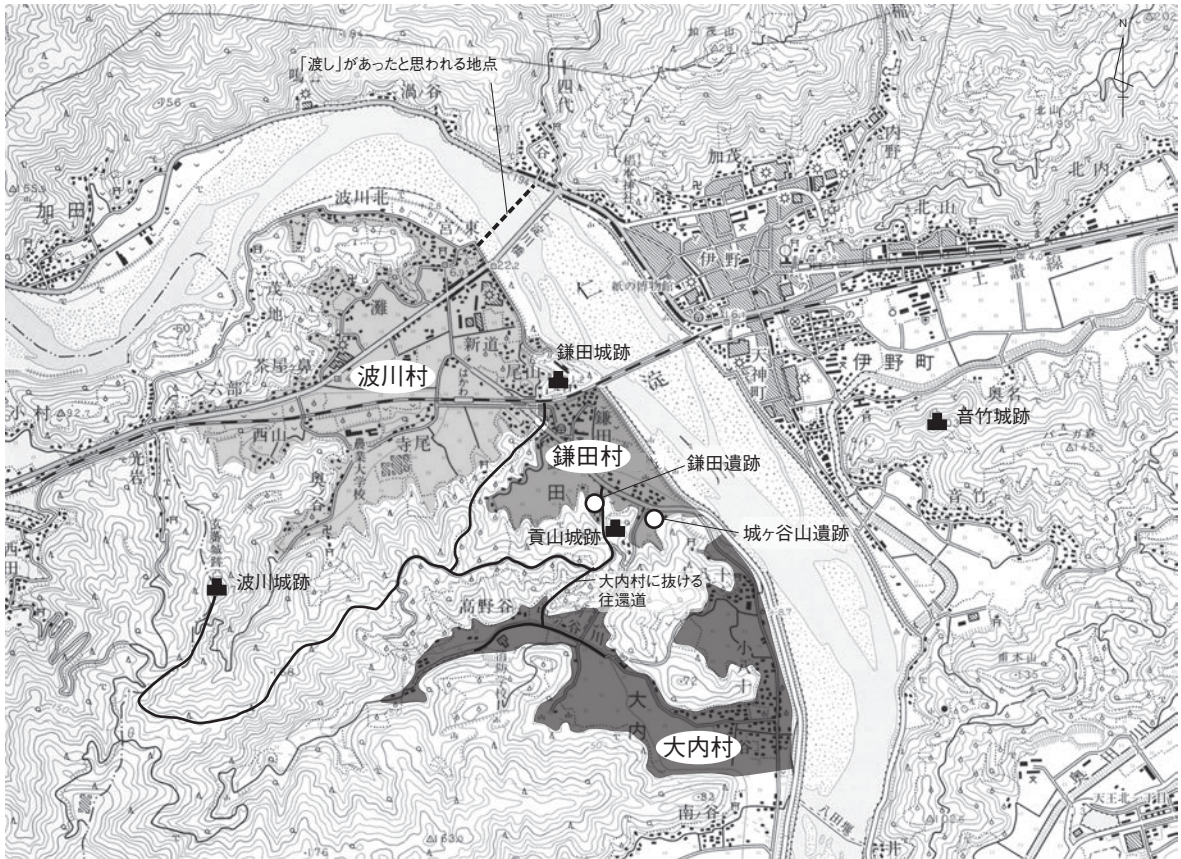


図78 村と街道と城

と「渡し」の接続ポイントに城が構築されている。貢山城跡は仁淀川の「渡し」を見据えた城ともいえる。<sup>(3)</sup>

#### (2) 周辺の城跡立地からみた仁淀川流域の「渡し」と「街道」

波川、鎌田に立地する鎌田城跡、麓城跡の位置は仁淀川の水運を直視できる場所に構築されており、波川村の西に隣接する日高村には「土佐二ノ宮」とされる小村神社が鎮座する。境内裏は仁淀川に接しており、対岸の加田城跡、神谷城跡の立地も視野に入れると、渡し の 結 節 点 と 呼 ぶ 地 点 に 位置する。「渡し」のポイントは国道33号線の仁淀川橋周辺とされており、右岸の波川から対岸の「谷」 「十四代」に船着き場が想定される。近世前期の『高岡郡本田新田地払帳』の波川村には「式石(反)渡守給田」との記載がみられ、仁淀川の公営渡船を監理する「渡守」が居た事がわかる。<sup>(4)</sup>一方、対岸の「谷」「十四代」は仁淀川の水深も深く船着場に適しており、物資の荷揚げ場所としての機能が考えられる。近世前期には、この場所から東側にあたる「問屋坂」に問屋が栄え、江戸時代以降に在郷町として栄え発展していくことが文献等からみてとれる。<sup>(5)</sup>また、鎌田城跡と貢山城跡の立地する右岸から「厩尻」のホノギが残る対岸の天神地区(早稲川と宇治川合流部、音竹城跡麓)にも「渡し」が想定される。仁淀川流域沿いには、これらの「渡し」に関連する場所周辺に中世山城の立地がみられ、「渡し」を見据えた城といえる。

一方、これらの「渡し」に接続する陸路、街道に目を向けると、現在の国道33号線「松山街道」沿い





図79 城郭位置図



#### 4. 考察

の丘陵に中世山城の立地がみられる。西部の佐川町・越知町と繋がるこの国道は古代から南海道の一部としての役割を果たしてきたとされており、先述した日下にある小村神社の立地などからみて人々の往来、交通の要衝とされる街道である。こうした重要な街道沿いに城郭の立地が集中するのは「街道を見据えた城」の一群として捉えることができる。これらの中世城館の中で日高村に立地する土岐古城跡(図79No.11)は、土佐一条氏が高岡郡を治めるために広治2(1556)年に土岐城を築いたとされており、この頃には、現在の日高村日下一帯は、一条氏の領域として治められていたことがわかる。日下は「久佐賀別府」として九条家領から後に一条家領になり、土佐西部幡多荘の別府にあたる。「久佐賀別府」の地名の初見は『佐伯文書』暦応3(1340)年にみられ、古くから幡多荘の別府として一条氏との関係があった地域であることが窺え、土岐古城跡は、一条氏がこの地域を治めるために重要視していた城の一つとして捉えることができる。現在残る土岐古城跡の縄張りは、畝状堅堀群や堀切が残っており、特に堅堀群は街道に面して構築されている。同様に(図79No.13)松尾城跡にも多重の堅堀群が配置されており、「松山街道」を見据えた城の一群として位置付ける事ができる。<sup>6)</sup>高知県内に残る中世山城の中でも堅堀群が多用されている山城が集中している地域であり、領域の経済や軍事を保持するために重要視されていた地域であった事が、こうした城の立地から窺い知る事ができる。

#### 補註

- (1)『長宗我部地検帳』によると「鎌田村」「大内村」は近世に一村化されている。
- (2)「村の城」とは、地域の住民が戦乱発生時の避難施設として、また、近隣集落との抗争時に立て籠る軍事施設としての機能もしていた城。村の境界に造られる事が多く、施設としては山頂に小規模な平場を作事するなど他の軍事施設の城に比べると簡素な造りであり、県内では、中心的な城とセットになるパターンがみられる。
- (3)仁淀川流域の「渡し」については、いの町道奥名西線道路改良工事に伴う発掘調査報告書『天神溝田遺跡Ⅰ』2010.2の中で、遺跡から出土する広域流通品に着目し、川に面した結節点に城館や、流通品が出土する遺跡が立地している事から仁淀川の水運と陸路の結節点について示唆している。
- (4)『高岡郡本田新田地払帳』は元禄年中成立のものであり、この段階には波川の仁淀川橋たもとに渡守が居た事が読み取れる。『長宗我部地検帳』「土佐郡朝倉庄枝川郷」には「大道」の記載が見られ、新町から南東に折れ、現在の国道33号線の南を併行し、是友、西浦を経て啞内に至るルートが想定されており、対岸の谷、もしくは羽根に渡り、「大道」にアクセスしていたものと思われる。
- (5)『森下家文書』は伊野町老を勤めた庄屋森下家に関わる文書である。谷には、『長宗我部地検帳』の記載では一屋敷しか見られず、寛保3(1743)年の『土佐国七郡郷村帳控』には十二戸の屋敷が記載されている。また、当時には、伊野村194頭、枝川村127頭の馬が飼育されており、これらの馬が農耕用と同時に物資の運搬用として専門化し駄賃を示していることが看取でき、谷に荷揚げされた物資を問屋坂商人の手を経て、これらの駄賃により城下町に運ばれ、在郷町として栄えたとされている。谷は仁淀川～弘岡井筋の水運と同時に、谷に陸揚げして「大道」経由の陸路輸送の結節点であった場所である。
- (6)中世城郭研究会発行『第22回全国城郭研究者セミナー陣城・臨時築城をめぐる』資料集2005.の大久保健司氏による「連続堅堀群から見た戦国土佐の城」に氏が作図された縄張り図をもとに仁淀川流域に分布する城に多用された畝状堅堀群についての分類がなされている。

# 遺物觀察表・遺構計測表



### 遺物観察表凡例

1. 遺物観察表の法量については、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。  
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。  
土錘については全長・全幅・孔径、石製品については全長・全幅・全厚の順にそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995, 貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁器』 1993を参照した。

城ヶ谷山遺跡 試掘調査出土遺物

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
1	TR6 Ⅲ層	土師質土器 杯	(7.1)	(1.1)	(6.8)	褐灰色 10YR5/1 にぶい黄橙色 10YR7/3 褐灰色 10YR5/1	内底部ロクロ目。底部回転糸切り。	
2	TR6 Ⅲ層	土師質土器 杯	(7.6)	(0.9)	(6.4)	褐灰色 10YR5/1 にぶい黄橙色 10YR6/3 褐灰色 10YR5/1	内面ロクロ目。底部回転糸切り。	
3	TR3 SX1 埋土	土師器 甕	24.0	(5.0)	—	にぶい褐色 7.5YR5/4 〃 〃	内外面ハケ調整。	
4	TR6 Ⅲ層	瓦器 椀	—	(3.5)	—	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい橙色 5YR7/3 にぶい黄橙色 10YR7/2	口縁部は横ナデ。炭素吸着が十分でなく、外面は剥離し、素地 がでている。	
5	TR6 Ⅲ層	緑釉陶器 皿	(7.1)	(1.6)	(4.6)	浅黄色 5Y7/3 浅黄色 2.5Y7/4 灰黄色 2.5Y7/2	円盤状高台。底部回転糸切り。内外面施釉。Ⅲ類（高橋分類）。	9c前
6	TR6 Ⅲ層	灰釉陶器 碗	—	(1.3)	—	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 灰白色 5Y8/1	端部は尖る。内外面全面施釉。	
7	TR3 包含層	石製品 石斧	全長 5.9	全幅 4.2	全厚 1.0	オリーブ黄色 7.5Y6/3	偏平片刃石斧。緑色片岩。重量 34.3g。	

鎌田遺跡 試掘調査出土遺物

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
8	TR10 Ⅳ層	土師器 椀	13.4	5.2	5.0	灰色 5Y5/1 灰黄色 2.5Y7/2 〃	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。回転ナ デ調整。貼り付け輪高台。	12c
9	TR12 Ⅳ層	土師質土器 杯	13.2	4.1	6.0	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。口縁部は僅かに外反する。底部回 転糸切り。	
10	TR11 Ⅳ層	瓦質土器 羽釜	(14.8)	(2.7)	—	にぶい褐色 7.5YR6/3 褐灰色 10YR5/1 にぶい褐色 7.5YR6/3	短い鋸が付く。	

城ヶ谷山遺跡 出土遺物

図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
11	IW区	SK1 埋土 3	土師質 土器 杯	(10.1)	(2.3)	6.8	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	内面タール付着。内底面ロクロ目顕著。厚みのある底部。糸切 り。	13c後
12	IW区	SK1 埋土 4	土師質 土器 杯	12.8	4.6	7.6	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	体部は直線的に立ち上がる。外面にタール付着。内外面横ナ デ。焼成不完全。外底部に籐状圧痕。No.11 と同じタイプ。	
13	IW区	P10 埋土	土製品 土錘	全長 (4.0)	全幅 1.1	孔径 0.5	明黄褐色 10YR7/6 〃 〃	重量 3.5g。	
14	Ⅱ区 (ⅠE区)	SB4Pit (P11) 埋土	唐津 皿	12.8	3.2	4.5	釉オリーブ黄色 7.5Y6/3 〃 灰白色 N8/	唐津灰釉皿。体部は外傾し口縁部は外反、端部は上方に尖 る。内外面体部中位まで灰釉が施される。一部高台脇まで釉 がかかる。内底部 4ヶ所に三日月状の砂目。くり底。	17c前 ～
15	ⅠE区	P20 埋土	土師質 土器 焙烙鍋	—	(5.0)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 黒褐色 10YR3/2 にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部横ナデ。体部に格子タケキ目残る。	17c前 ～

遺物観察表 1

図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面・外面・断面		
16	I W区	SD1 埋土	土師器 皿	13.1	2.0	5.8	橙色 5YR6/6 〃 〃	体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。 ヘラ切り。	10c前
17	I W区	SD1 埋土	緑釉陶器 碗	13.4	4.7	7.2	釉オリーブ灰色 10Y6/2 〃 灰白色 10Y8/2	断面逆台形状の低い高台が付く。内面見込みに沈線状の界線 が入る。胎土は軟質で釉の剥離が著しい。	10c前
18	I W区	II層	肥前産 陶器 皿	(10.2)	(1.9)	5.0	釉暗青灰色 10BG4/1 釉灰白色 N8/ 淡黄色 2.5Y8/3	削り出し輪高台。蛇ノ目釉剥ぎ。銅緑釉。内野山窯。	17c末 ～ 18c 前
19	I W区	III層	土師質 土器 杯	15.0	4.8	6.6	橙色 7.5YR6/6 明赤褐色 2.5YR5/6 橙色 7.5YR6/6	回転ナデ調整。ヘラ切り。	12c末 ～ 13c
20	I W区	III層	土師器 碗	14.0	3.9	6.0	黄橙色 10YR8/6 〃 〃	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。瓦 器碗と共通する器形。ナデ調整。	
21	I W区	III層	土師器 碗	(9.6)	(1.7)	6.6	にぶい橙色 7.5YR7/4 淡黄色 2.5Y8/3 にぶい橙色 7.5YR7/4	輪高台碗。内外面横ナデ。	12c
22	I W区	IV層 (炭化物 集中)	土師器 碗	(13.1)	(2.5)	8.8	明赤褐色 5YR5/6 〃 〃	体部は内湾気味に立ち上がる。	
23	I W区	IV層	土師器 碗	13.4	2.9	6.2	浅黄橙色 10YR8/4 にぶい黄橙色 10YR7/4 浅黄橙色 10YR8/4	体部は腰の張りが強く、口縁端部は大きく外反。ベタ高台。ナ デ調整。	10c末 ～ 11c
24	I W区	IV層	土師器 甕	24.0	(4.9)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	器壁薄い。口縁部は外反し、端部は上方に尖る。胎土 0.5 ～ 1 mmのチャート。在地産。	
25	I W区	V層	土師器 皿	7.4	1.0	5.4	橙色 5YR7/6 〃 〃	口縁端部は丸くおさめる。ヘラ切り。	9c末～ 10c
26	I W区	V層	土師器 杯	(10.0)	(1.8)	9.0	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	底部外面縁にタール附着。底部は分割成形によりやや段を持 つ。	9c末～ 10c
27	I W区	V層	黒色土器 碗	(14.6)	(4.7)	8.8	黒色 5Y2/1 にぶい黄橙色 10YR7/4 黒色 5Y2/1	体部は直線的に立ち上がる。断面三角形の高台。内黒 A。在地 産。	10c末 ～ 11c
28	I W区	V層	須恵器 碗	16.8	(1.9)	—	灰白色 5Y8/1 〃 〃	口縁端部は外側に尖り、内面に沈線状の凹みを持つ。ナデ調 整。精緻な胎土。	
29	I W区	V層	須恵器 碗	(9.8)	(1.7)	7.4	灰色 N4/ 灰色 5Y5/1 〃	丸みを帯びた貼り付け輪高台。高台内にヘラ起こし痕。在地 産 (天崎遺跡と同じ)。	10c末 ～ 11c
30	I W区	V層	土師器 甕	26.0	(5.1)	—	褐色 7.5YR4/3 黒褐色 7.5YR3/2 褐色 7.5YR4/3	口縁端部は面を成し、上に尖る。胴部外面縦位のハケ、内面口 縁部及び胴部にかけて横位のハケ調整。	9c
31	I W区	V層	土師器 甕	26.0	(7.5)	—	褐色 7.5YR4/4 〃 〃	口縁端部は面を成し、上に尖る。内面横ハケ、外面縦ハケ。搬 入品。	9c
32	I W区	V層	須恵器 壺	12.8	(2.2)	—	灰白色 5Y7/2 〃 〃	短頸壺。口縁部は短く立ち上がり端部は面を成す。	
33	I W区	V層	須恵器 壺	21.1	(8.9)	—	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y8/1 灰白色 2.5Y7/1	長頸壺。胴部の上下欠損。内外面回転ナデ調整。	12c～ 13c
34	I W区	V層	須恵器 甕	—	(7.9)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 灰黄褐色 10YR5/2 黄灰色 2.5Y5/1	格子状の工具によるタタキ目。焼成不良。	
35	IE区	I・II層	肥前産 陶器 皿	(10.5)	(2.2)	4.3	釉オリーブ灰色 10Y6/2 〃 灰白色 7.5Y8/1	見込みに胎土目。内外面体部下半まで施釉。くり底。唐津。	

遺物観察表2

図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
36	IE区	I・II層	尾戸窯碗	(10.4)	(5.5)	4.4	釉にぶい黄色 2.5Y6/3 〃 淡黄色 2.5Y8/3	畳付及び高台の一部に砂目残る。内外面施釉。尾戸窯。	
37	IE区	I・II層	唐津碗	(10.7)	(7.2)	4.7	釉赤黒色 7.5R1.7/1 明赤褐色 5YR5/8 明オリーブ灰色 2.5GY7/1	天目茶碗。外面下部釉なし。唐津。	
38	IE区	III層	青磁碗	11.6	(3.7)	—	オリーブ灰色 10Y6/2 〃 灰白色 7.5Y8/1	外面細蓮弁文。片彫り。	15c
39	IE区	III層	青磁碗	(6.9)	(2.0)	3.8	明緑灰色 10GY7/1 〃 灰白色 2.5Y7/1	稿蓮弁文碗底部。高台外面まで施釉。外底から畳付は露胎。	13c後
40	IE区	III層	白磁皿	(10.3)	(1.3)	6.0	釉灰白色 N8/ 〃 灰白色 10Y8/1	内面見込みに陽刻文。碁笥底。	
41	IE区	III層	瀬戸・美濃産陶器碗	12.7	(3.4)	—	釉暗褐色 7.5YR3/3 にぶい褐色 7.5YR5/4 淡黄色 2.5Y8/3	天目茶碗。口縁部内面は禾目状を呈する。瀬戸。	
42	IE区	IV層	瓦器皿	9.8	1.8	4.2	暗灰色 N3/ 灰白色 N7/ 〃	口縁部は横ナデ。底部に指頭圧痕。	13c
43	IE区	IV層	瓦器碗	14.6	(4.2)	—	浅黄橙色 10YR8/3 〃 〃	口縁部外面に二段ナデ。カーボンは内外面共に剥離。紀伊型か。	13c後 ～14c
44	IE区	IV層	瓦質土器鍋	(28.0)	(4.8)	—	黒色 5Y2/1 オリーブ黒色 5Y3/1 黒色 5Y2/1	口縁部は受け口状を呈する。端部内面沈線状に凹む。横ナデ調整。畿内系。	13c
45	IE区	IV層	瓦質土器羽釜	—	(7.2)	—	灰白色 10Y8/1 〃 灰色 N4/	三足羽釜。脚径 2.1 cm。	13c後
46	IE区	V層	土師器皿	7.8	1.6	6.0	浅黄橙色 10YR8/4 〃 〃	磨耗が著しく調整不明。	9c末～ 10c
47	IE区	V層	土師器碗	11.8	(4.2)	—	浅黄橙色 10YR8/4 〃 〃	体部は内湾気味に立ち上がる。	12c
48	IE区	V層	土師器碗	16.2	(4.6)	—	灰黄色 2.5Y7/2 淡黄色 2.5Y8/3 〃	体部は内湾気味に立ちあがり、口縁端部は僅かに外反する。口縁部外面横ナデ。	12c
49	IE区	V層	土師器碗	(10.4)	(2.5)	6.4	浅黄橙色 10YR8/4 〃 〃	円盤状高台。見込み部分は凹む。糸切り。	9c末～ 10c
50	IE区	V層	白磁碗	—	(3.1)	—	釉灰白色 5Y7/2 〃 灰白色 10Y8/1	外面体部下半露胎。II 4.5 類。	11c
51	IE区	V層	土師器甕	29.0	(6.3)	—	にぶい褐色 7.5YR5/4 〃 〃	長胴甕。口縁端部は面を成し、上方に尖る。ナデ調整。胴部外面に荒いハケ調整痕。胎土はチャート、石英。	12c
52	IE区	V層	土師器甕	(25.0)	(9.8)	—	灰黄色 2.5Y6/2 にぶい橙色 5YR6/3 〃	体部外面に荒い単位の縦ハケ。	10c
53	II区	SB5Pit埋土	瓦器皿	8.0	1.5	6.4	黒色 7.5Y2/1 〃 灰白色 2.5Y7/1	口縁部横ナデ。	
54	II区	SB5Pit埋土	土師質土器皿	(7.6)	(1.1)	4.8	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ロクロ成形。ナデ調整。	
55	II区	SB7Pit埋土	瓦器杯	14.8	(2.8)	—	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	口縁部に二段の横ナデ。体部下半に指押さえ痕。炭素吸着が不十分であり、素地のままである。	

遺物観察表3

図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面・外面・断面		
56	Ⅱ区	SB7Pit 埋土	瓦器 碗	15.5	4.8	4.0	にぶい黄橙色 10YR6/3 橙色 7.5YR6/6 〃	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反。口縁部外面横ナデ。カーボン付着前。素地。在地産。	
57	Ⅱ区	SB7Pit 埋土	黒色土器 碗	(10.7)	(0.8)	8.6	にぶい黄褐色 10YR7/4 黒色 5Y2/1 〃	断面三角形の低い高台が付く。内面ヘラミガキ。黒色処理。外面赤色塗彩。徳島。	9c
58	Ⅱ区	SB7Pit 埋土	須恵器 杯	13.7	(3.1)	—	灰白色 5Y7/2 灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。ナデ調整。焼成不良で内面は酸化焙焼成。	
59	Ⅱ区	SK3 埋土	土師器 杯	(10.5)	(1.8)	8.1	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6 〃	平底から体部は直線的に立ち上がる。内底は凹む。ヘラ切り。	10c前
60	Ⅱ区	SK3 埋土	土師器 皿	—	(2.6)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6 〃	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。口縁部ヘラミガキ。	
61	Ⅱ区	SK5 埋土	石製品 砥石	全長 27.3	全幅 15.0	全厚 9.0	にぶい黄色 2.5Y6/3	砥石。	
62	Ⅱ区	P27 埋土	黒色土器 碗	(8.4)	(0.7)	7.6	にぶい褐色 7.5YR5/4 黒色 7.5Y2/1 〃	三角高台。搬入品。	9c
63	Ⅱ区	P28 埋土	瓦器 皿	8.8	(1.7)	—	暗灰色 N3/ 〃 灰白色 2.5Y8/2	口縁部は横ナデ。	
64	Ⅱ区	P36 埋土	青花 碗	—	(2.1)	—	釉灰白色 N8/ 〃 灰白色 7.5Y8/1	外面草花文。	16c
65	Ⅱ区	SD2 埋土	須恵器 杯	10.3	4.0	6.1	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整。ヘラ切り。	9c
66	Ⅱ区	SD3 埋土	須恵器 蓋	23.2	2.4	15.0	灰白色 5Y7/2 〃 〃	口縁部は折縁。天井部はヘラ削り。外面は横ナデ調整。段を残す。	
67	Ⅱ区	SD3 埋土	須恵器 甕	—	(7.2)	—	灰色 5Y6/1 灰白色 5Y7/1 灰白色 2.5Y8/2	外面平行タタキ。内面当て具痕。ハケ調整。	
68	Ⅱ区	SD3 埋土	陶器 播鉢	21.5	(4.5)	—	釉灰赤色 2.5YR4/2 にぶい黄褐色 10YR5/3 灰色 10Y4/1	口縁部は水平な面を成す。体部内面に細い単位の条線が施される。	近世
69	Ⅱ区	SD4 埋土	土師器 甕	—	(5.7)	—	暗褐色 7.5YR3/3 〃 〃	胴部内面横ハケ、外面縦ハケ。雲母含む。	
70	Ⅱ区	SD4 埋土	土師器 甕	22.2	(5.8)	—	灰黄褐色 10YR4/2 黒褐色 10YR3/2 灰黄褐色 10YR4/2	長胴甕。口縁部は面を成し、上方に尖る。端部外面に沈線状の凹みを持つ。内面口縁部から胴部にかけて横位のハケ、外面胴部縦ハケ。	9c
71	Ⅱ区	SD5 埋土	土師器 甕	28.4	(4.6)	—	明赤褐色 2.5YR5/8 〃 〃	外面縦位のハケ調整。内面横位のハケ調整。口縁部内面縦ハケ後ナデ。長石含む。	8c後
72	Ⅱ区	SD6 埋土	土師器 甕	24.3	(4.2)	—	にぶい黄褐色 10YR5/4 〃 〃	口縁部は面を成し、上方にやや尖る。口縁部内面横ハケ。雲母含む。	
73	Ⅱ区	SD6 Ⅲ-2 層	土師器 甕	24.8	(5.0)	—	褐色 7.5YR4/4 〃 〃	口縁部は面を成し、上方に尖り、中央部は凹む。頸部外面縦ハケ。雲母含む。	
74	Ⅱ区	I・Ⅱ 層	土師質 土器 皿	7.0	1.3	4.6	灰色 10Y6/1 灰白色 7.5Y7/1 灰色 10Y6/1	灯明皿。口縁部にタール付着。	
75	Ⅱ区	I・Ⅱ 層	唐津 碗	(8.8)	(2.4)	4.4	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 灰白色 7.5Y7/1	砂目。くり底。唐津。	17c前

遺物観察表4



図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
76	II区	I・II 層	唐津 皿	(11.2)	(2.4)	3.9	釉灰オリーブ色 7.5Y6/2 灰黄褐色 10YR4/2 黄灰色 2.5Y5/1	くり底。底部内面胎土目。内面及び外面の体部中位まで灰釉が施釉。唐津。	17c
77	II区	I・II 層	唐津 皿	12.3	2.8	4.0	釉オリーブ灰色 10Y6/2 黒褐色 10YR3/2 灰色 5Y5/1	端反皿。口縁部は外反し、端部内面は沈線状に凹む。内外面に目跡。施釉は内面のみであり、口縁部外面の一部に垂れる。砂目。	
78	II区	I・II 層	肥前産 陶器 皿	(10.4)	(2.4)	4.4	釉暗緑灰色 10GY4/1 灰白色 5Y7/2 灰白色 5Y7/1	内底見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。高台の一部に砂附着。砂目。銅緑釉。内野山窯。	17c後
79	II区	I・II 層	瀬戸・美 濃産陶器 広東茶碗	10.8	6.5	5.2	釉灰白色 7.5Y8/2 〃 灰白色 5Y8/2	体部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる。外面に松樹が描かれ、松葉はコバルトの発色、樹木は鉄釉が施される。瀬戸。	
80	II区	I・II 層	肥前産 磁器 皿	8.8	2.1	4.9	釉灰白色 N8/ 〃 釉灰白色 10Y8/1	口縁部は花卉状を呈する。内面に山水文、東屋。	
81	II区	I・II 層	肥前産 磁器 皿	13.6	3.1	7.4	釉灰白色 N8/ 〃 灰白色 N8/ 〃	三角高台。コンニャク印。内面牡丹唐草文様。伊万里。	17c
82	II区	I・II 層	肥前産 磁器 碗	11.4	5.7	4.4	灰白色 10Y8/1 〃 灰白色 2.5Y8/2	見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。中央部に文様有り。外面は草花の文様。	
83	II区	I・II 層	磁器 碗	(8.4)	(3.2)	6.1	釉灰白色 N8/ 〃 灰白色 7.5Y8/1	広東茶碗。外底部に「サ」の記号。見込みに水に浮かぶ舟の文様。能茶山窯。	
84	II区	III-1 層	備前焼 播鉢	28.5	(3.9)	—	暗赤褐色 5YR3/4 〃 〃	口縁部は上方に拡張が行われ、端部は丸くおさめる。ナデ調整。内面の条線の一部は口縁部まで施される。	15c前
85	II区	III-1 層	瀬戸・美 濃産陶器 碗	13.8	(4.8)	—	釉黒色 10YR2/1 〃 淡黄色 2.5Y8/3	瀬戸天目茶碗。口縁端部は玉縁状を呈する。体部は中位で僅かに屈曲し、稜を持つ。	16c
86	II区	III-1 層	瀬戸・美 濃産陶器 碗	(7.2)	(2.0)	4.4	釉黒褐色 10YR2/2 灰白色 2.5Y8/2 〃	瀬戸天目茶碗。削り出し高台。外面下部は釉を削り取る。高台畳付は凹む。内面鉄釉。	15c
87	II区	III-1 層	瀬戸・美 濃産陶器 碗	(9.5)	(3.2)	5.0	釉黒色 10YR17/1 灰白色 2.5Y8/2 淡黄色 2.5Y8/3	瀬戸天目茶碗。削り出し高台。外面下部は釉を削り取る。	15c
88	II区	III-1 層	青花 皿	12.2	(2.4)	—	釉灰白色 N8/ 〃 灰白色 2.5Y8/1	口縁部内外面に二重界線。体部外面に烈点文。C群。	16c後
89	II区	III-1 層	青花 碗	—	(2.1)	—	釉灰白色 N8/ 〃 灰白色 N8/ 〃	口縁部内外面に二重界線。体部外面に波濤文。C群。	15c後 ～16c 前
90	II区	III-1 層	青花 皿	(5.8)	(1.4)	4.3	釉明青灰色 10BG7/1 〃 灰白色 2.5Y8/1	見込みに二重界線と草花風の文様が描かれる。高台外面に二重界線。E群。	16c
91	II区	III-2 層	瓦器 碗	16.2	(3.2)	—	灰白色 2.5Y8/2 黒色 5Y2/1 灰白色 2.5Y8/2	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は強い横ナデにより外反し、器壁が薄い。外面口縁部下にハケ目状の痕跡。体部下半は接合部で剥離する。体部外面指押さえ痕。	12c後
92	II区	III-2 層	瓦器 碗	15.2	3.1	4.6	黒色 7.5Y2/1 〃 浅黄色 2.5Y7/4	口縁部横ナデ。体部は外方に開く。	12c後
93	II区	III-2 層	瓦器 碗	14.7	3.1	4.9	黒色 7.5Y2/1 〃 浅黄色 2.5Y7/4	体部は内湾気味に立ち上がる。外面指押さえ痕。断面逆三角形の低い高台が付く。在地産。	13c
94	II区	III-2 層	瓦器 碗	14.8	4.5	3.2	淡黄色 2.5Y8/3 〃 〃	口縁外面に二段の横ナデ。低い高台が付く。炭素吸着が不十分であり、素地である。	
95	II区	III-2 層	瓦器 碗	16.1	(2.9)	—	灰色 5Y4/1 〃 橙色 7.5YR7/6	体部は内湾気味に立ち上がり中位で僅かに屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面横ナデ。焼成は不完全で胎土は橙色を呈する。	

遺物観察表5

図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面・外面・断面		
96	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	瓦器 椀	12.8	3.6	3.0	黒色 5Y2/1 橙色 5YR7/6 〃	体部外面は指押さえ痕、低い高台が付く。炭素吸着が不十分であり、内外面共炭素剥離が著しい。	
97	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	須恵器 椀	(9.2)	(1.1)	6.8	黄灰色 2.5Y4/1 〃 〃	円盤状高台。酸化焙焼成で瓦質的な仕上がりが。	
98	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	須恵器 椀	(9.2)	(1.7)	5.3	灰白色 7.5Y8/1 灰白色 7.5Y7/1 灰白色 7.5Y8/1	貼り付け輪高台。酸化焙焼成で瓦質的な仕上がりが。	
99	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	瓦質土器 羽釜	—	(2.9)	—	青灰色 10BG6/1 〃 〃	三角形の短い脚が付く。	13c後
100	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	瓦質土器 不明	—	(1.3)	—	オリーブ黒色 5Y3/1 〃 明黄褐色 2.5Y6/6	外面に文様が線刻される。	
101	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	青磁 碗	16.4	(2.8)	—	釉灰オリーブ色 7.5Y5/2 〃 灰白色 7.5Y7/1	内面に劃花文。	12c末
102	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	青磁 碗	15.8	(5.1)	—	灰色 7.5Y6/1 オリーブ黄色 7.5Y6/3 明オリーブ灰色 5GY7/1	内面に劃花文。	12c後
103	Ⅱ区	Ⅲ-2 層	石製品 砥石	全長 (8.0)	全幅 (5.4)	全厚 7.4	にぶい橙色 7.5YR6/4	砥石。砂岩製。	
104	Ⅱ区	Ⅳ層	土師器 蓋	紐径 (2.5)	(1.7)	—	黄橙色 7.5YR7/8 橙色 5YR6/8 黄橙色 7.5YR7/8	疑宝珠の蓋紐。	
105	Ⅱ区	Ⅳ層	土師器 椀	(8.4)	(2.4)	8.4	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	「ハ」の字型の高い高台が付く。	11c
106	Ⅱ区	Ⅳ層	黒色土器 椀	15.0	(3.0)	—	にぶい黄褐色 10YR6/4 黒色 2.5Y2/1 〃	口縁部内面に一条の沈線。端部は尖る。内面に密なヘラミガキ。搬入品。	
107	Ⅱ区	Ⅳ層	黒色土器 椀	(9.4)	(0.7)	8.2	灰黄褐色 10YR4/2 黒色 10YR1.7/1 〃	断面三角形の低い高台が付く。胎土に雲母片入る。搬入品。	9c
108	Ⅱ区	Ⅳ層	黒色土器 椀	(9.6)	(0.7)	8.6	にぶい赤褐色 5YR5/4 黒色 2.5Y2/1 〃	断面三角形の低い高台が付く。胎土に雲母片入る。搬入品。	9c
109	Ⅱ区	Ⅳ層	緑釉陶器 皿	(11.4)	(1.9)	6.3	釉オリーブ黄色 5Y6/4 〃 橙色 7.5YR7/6	蛇ノ目状の高台。外底に「十」字ヘラ記号。内外面に緑釉が薄く施釉される。	9c末
110	Ⅱ区	Ⅳ層	灰釉陶器 碗	—	(3.0)	—	釉明オリーブ灰色 2.5GY7/1 〃 灰白色 2.5GY8/1	口縁端部は外側につまみ出す。内外面に灰釉が施される。	11c
111	Ⅱ区	Ⅳ層	土師器 甕	19.6	(5.9)	—	にぶい黄褐色 10YR5/4 褐色 7.5YR4/4 にぶい黄褐色 10YR5/4	口縁端部は面を成し、沈線状の凹みを持つ。口縁部外面は横位のハケ。胴部外面は縦方向のハケ。雲母含む。	
112	Ⅱ区	Ⅳ層	土師器 甕	25.2	(5.5)	—	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR7/4 褐色 7.5YR4/6	口縁端部は上方にやや尖る。内面横ハケ。雲母含む。	
113	Ⅱ区	Ⅳ層	土師器 甕	25.2	(2.9)	—	にぶい赤褐色 5YR5/3 明褐色 7.5YR5/6 明黄褐色 10YR6/6	口縁端部は面を成し、上方に尖る。口縁部内面は荒いハケ調整で、沈線状に凹む。頸部、胴部外面も荒い縦方向のハケ調整。雲母含む。	
114	Ⅱ区	Ⅳ層	土師器 甕	26.0	(6.7)	—	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/4	口縁屈曲部は肥厚する。口縁部外面には二段のナデが残る。胴部外面は縦ハケ調整。雲母含む。搬入品。	10c
115	Ⅱ区	Ⅳ層	土師器 甕	16.6	(3.9)	—	明赤褐色 5YR5/6 橙色 5YR6/6 〃	器壁薄い。口縁端部はやや上方を向き丸みを帯びる。口縁部内面に横位のハケ調整。胎土はチャート、石英。在地産か。	10c

遺物観察表6

図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面・外面・断面		
116	II区	IV層	土師器 甕	20.4	(4.3)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	器壁は薄く、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面を成す。胎土は3～5mmのチャートを含む。	
117	II区	IV層	土師器 甕	19.9	(3.9)	—	橙色 5YR6/6 〃 〃	口縁部は外反する。端部は面を成し、上方につまみ上げる。横ナデ調整。胴部外面は縦ハケ後、上位は横ハケ。	10c
118	II区	IV層	土師器 甕	16.0	(6.0)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁端部は面取し、上に尖る。内外面とも横位のハケを基調とする。	10c
119	II区	IV層	土師器 甕	22.8	(3.0)	—	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄橙色 10YR6/3 〃	口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。器壁薄い。口縁部内外面横ナデ。雲母含む。	10c
120	II区	IV層	須恵器 皿	15.6	2.0	11.0	灰白色 7.5Y8/1 〃 〃	体部は直線的に立ち上がり、口縁部内面に一条の沈線。回転ナデ調整。ヘラ切り。	9c
121	II区	IV層	須恵器 皿	14.0	1.9	8.0	灰白色 2.5Y8/2 〃 〃	強い横ナデにより、口縁部内面が沈線状に凹む。内面底部から体部にかけて火襷痕。ヘラ切り。	8c後
122	II区	IV層	須恵器 皿	14.5	2.5	12.1	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	体部は直線的に立ち上がる。回転ナデ調整。ヘラ切り。	9c
123	II区	IV層	須恵器 杯	12.8	4.0	9.0	灰色 5Y5/1 浅黄色 2.5Y7/4 灰色 5Y5/1	体部は内湾気味に立ち上がる。底部の中央部は凹む。回転ナデ調整。ヘラ切り。酸化焙焼成。	
124	II区	IV層	須恵器 杯	13.2	3.6	8.0	黄灰色 2.5Y5/1 灰白色 2.5Y8/2 黄灰色 2.5Y5/1	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面横ナデ。回転ナデ調整。ヘラ切り。	
125	II区	IV層	須恵器 杯	12.0	3.5	7.0	淡黄色 2.5Y8/4 淡黄色 2.5Y8/3 〃	体部は直線的に立ち上がる。酸化焙焼成。	
126	II区	IV層	須恵器 杯	12.9	4.1	8.0	灰白色 7.5Y8/2 灰色 7.5Y4/1 灰白色 7.5Y8/2	体部は直線的に立ち上がる。内外面横ナデ調整。焼成不良。	9c後
127	II区	IV層	須恵器 杯	11.8	(3.9)	—	灰白色 10Y7/1 〃 〃	体部はやや内湾する。回転ナデ調整。外面に火襷痕。	
128	II区	IV層	須恵器 蓋	9.9	(2.2)	—	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	壺の蓋。内外面回転ナデ。	9c
129	II区	IV層	須恵器 壺	(11.0)	(4.5)	5.6	青灰色 5PB6/1 〃 〃	体部は内湾気味に立ち上がる。輪高台。外底に糸切り痕残る。内面ロクロ目顕著。	平安
130	II区	IV層	須恵器 壺	—	(4.4)	—	灰色 7.5Y6/1 灰白色 7.5Y7/1 〃	外面タタキ目。内面ナデ調整。突帯が一条付く。	
131	II区	IV層	須恵器 甕	15.2	(5.5)	—	灰色 7.5Y6/1 灰色 10Y4/1 〃	口縁端部は強いナデにより、上に尖る。口縁部自然釉。内外面横ナデ。	9c
132	II区	IV層	須恵器 甕	—	(3.5)	—	灰黄色 2.5Y6/2 灰色 5Y6/1 橙色 7.5YR6/8	外面平行タタキ。酸化焙焼成で瓦質的な仕上がりに。	
133	II区	IV層	須恵器 甕	—	(5.3)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 灰白色 2.5Y7/1 〃	外面格子タタキ。酸化焙焼成で瓦質的な仕上がりに。	
134	II区	IV層	須恵器 甕	—	(4.1)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 灰白色 2.5Y7/1 〃	外面格子タタキ。酸化焙焼成で瓦質的な仕上がりに。No.133と同一。	
135	II区	IV層	須恵器 甕	—	(5.7)	—	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y7/1 灰白色 2.5Y8/2	外面平行タタキ。	

遺物観察表7

図版 番号	調査 区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面・外面・断面		
136	II区	IV層	須恵器 甕	—	(5.2)	—	灰色 N5/ 灰色 7.5Y6/1 黄灰色 2.5Y5/1	外面平行タタキ。内面当て具痕。	
137	II区	V層	弥生土器 鉢	13.1	6.7	—	橙色 5YR6/6 〃 黄灰色 2.5Y5/1	外面タタキ目。底部は丸底を呈する。胎土はチャート。	3c
138	II区	V層	弥生土器 甕	15.8	(9.5)	—	にぶい黄褐色 10YR5/4 橙色 7.5YR6/6 黄灰色 2.5Y4/1	外面タタキ目、内面ナデ調整。胎土は0.5～3mmのチャート。	3c
139	II区	V層	弥生土器 甕	16.6	17.7	—	明赤褐色 5YR5/6 〃 黄灰色 2.5Y4/1	外面底部にタタキ目が僅かに残る。ナデ調整。内面胴部下半に接合部。胎土は0.5～3mmのチャート。	3c
140	II区	V層	弥生土器 甕	14.5	14.0	2.3	黒褐色 2.5Y3/1 明褐色 7.5YR5/6 黒褐色 2.5Y3/1	外面底部にタタキ目が僅かに残る。下位は縦方向のハケ調整。内面体部下位はハケ調整。他はナデ調整。胎土は0.1～0.5mmの砂粒、3～5mmのチャート、長石。	3c

### 鎌田遺跡・貢山城跡 出土遺物

図版 番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調	特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面・断面		
141	P10 埋土	須恵器 皿	(15.0)	2.0	12.4	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	体部内面に沈線状の工具痕。	
142	SD1 埋土	須恵器 杯	(7.8)	(1.1)	6.2	灰白色 10Y7/1 〃 〃	回転ヘラ切り。	
143	SD1 埋土	須恵器 皿	(16.2)	1.5	(13.6)	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	口縁部は外反する。内面工具の調整痕。条線状に入る。	
144	SD1 埋土	瓦器 椀	14.4	(4.1)	—	暗灰色 N3/ 灰色 N4/ 灰黄色 2.5Y7/2	口縁部外面は二段の横ナデ。摩耗が著しく内面のミガキ等、調整は不明。	
145	IV層	須恵器 杯	(14.4)	(3.1)	—	灰白色 N7/ 〃 〃	口縁部は外反気味になる。回転ナデ調整。	
146	IV層	須恵器 蓋	(6.2)	(1.5)	—	灰白色 10Y7/1 灰オリーブ色 5Y5/2 灰白色 N7/	外面に自然釉。	
147	IV層	須恵器 甕	21.4	(6.0)	—	灰色 N6/ 灰褐色 7.5YR5/2 灰色 N6/	口縁端部は面を成し、中央部が凹む。	
148	IV層	土師器 甕	27.6	(3.8)	—	明褐色 7.5YR5/6 〃 〃	口縁部内面ハケ調整。	
149	IV層	土師器 甕	—	(2.0)	—	にぶい黄褐色 10YR6/3 灰黄褐色 10YR6/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁部片。端部欠損。口縁部内面ハケ調整。	
150	IV層	東播系 須恵器 捏鉢	—	(2.6)	—	灰白色 5Y7/1 〃 〃	玉縁状の口縁部。摩耗が著しい。II-2期。	12c末～13c初
151	P10 埋土	肥前産 磁器 皿	20.4	(3.0)	—	灰白色 10Y8/1 〃 灰白色 2.5Y8/2	口縁部は緩やかに外反する。外面無文。内面花唐草文。	
152	II層	陶器 焙烙鍋	18.8	(6.4)	—	褐灰色 10YR5/1 灰褐色 5YR4/2 にぶい橙色 7.5YR7/4	鋳軸ハケ塗り、外面上半は飛鉋を施す。能茶山窯。	1820年～幕末
153	西斜面 II層	銅銭	銭径 (2.2)	穿径 (0.6)	厚さ (0.1)	—	寛永通宝。1/3欠損。重量1g。	

遺物観察表8

城ヶ谷山遺跡 I・II区遺構(SB)計測表

遺構番号	規模(m)		面積 (㎡)	柱間距離(m)		棟方向
	梁行	桁行		梁行	桁行	
SB1	3.10~3.25	4.80	15.60	3.10~3.25	1.20~1.95	N-76°-W
SB2	1.50~1.60	3.70	5.92	1.50~1.60	1.60~2.10	N-24°-E
SB3	4.35	7.10	31.32	1.30~3.05	2.15~2.55	N-35°-E
SB4	1.90	5.00~5.20	9.88	1.90	1.20~2.60	N-38°-E
SB5	3.80~3.90	5.40	21.06	1.80~2.10	1.75~1.85	N-32°-E
SB6	5.00~5.20	6.90~7.10	36.92	2.30~2.70	1.40~2.10	N-31°-E
SB7	3.70	6.70	24.79	1.70~2.00	2.20~2.35	N-30°-E
SB8	2.30	3.90	8.97	2.30	1.60~2.30	N-22°-E
SB9	2.10~2.20	3.70~3.80	8.36	2.10~2.20	1.55~2.25	N-55°-W
SB10	1.70	2.50~2.70	4.59	1.70	0.70~1.10	N-40°-E

I E区 遺構(SB1)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.30	0.28	0.30	—	—
P2	円形	0.26	0.25	0.24	—	—
P3	円形	0.22	0.21	0.21	—	—
P4	円形	0.20	0.20	0.19	—	—
P5	円形	0.30	0.30	0.13	0.17	—
P6	円形	0.25	0.25	0.36	—	—
P7	円形	0.28	0.26	0.30	—	—
P8	円形	0.20	0.19	0.25	—	—

I E区 遺構(SB2)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.33	0.30	0.20	—	—
P2	円形	0.25	0.22	0.40	—	—
P3	円形	0.28	0.26	0.45	—	—
P4	不整形	0.35	0.33	0.48	—	—
P5	円形	0.25	0.23	0.26	—	—
P6	円形	0.27	0.25	0.17	—	—

I E区 遺構(SB3)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.52	0.46	0.76	0.16	土師器細片2
P2	円形	0.35	0.33	0.47	—	瓦質土器1
P3	円形	0.67	0.60	0.83	—	土師器細片2
P4	楕円形	0.65	0.54	0.56	0.13	—
P5	円形	0.32	0.28	0.37	—	土師器細片1
P6	円形	0.37	0.37	0.07	—	—
P7	円形	0.28	(0.28)	0.44	—	—
P8	円形	0.53	0.52	0.43	—	—



I E区 遺構(SB3)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P9	円形	0.52	0.51	0.42	—	—
P10	円形	0.68	0.67	0.54	—	—

II区 遺構(SB4)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.52	0.48	0.46	—	—
P2	円形	0.40	0.38	0.65	—	唐津灰釉皿1・土師器細片4
P3	円形	0.28	0.24	0.39	—	—
P4	円形	0.32	0.28	0.30	—	—
P5	円形	0.26	0.26	0.37	0.10	—
P6	円形	0.32	0.30	0.61	—	—
P7	円形	0.26	0.24	0.33	—	—
P8	円形	0.28	0.27	0.20	—	—

II区 遺構(SB5)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.30	0.30	0.07	—	—
P2	円形	0.31	0.29	0.36	—	瓦器皿1
P3	円形	0.45	0.34	0.38	—	—
P4	円形	0.34	0.32	0.66	—	土師質土器皿1
P5	円形	0.37	0.30	0.41	—	土師器甕1
P6	円形	0.42	0.36	0.33	—	土師器細片2
P7	円形	0.33	0.30	0.39	0.13	土師器細片2
P8	円形	0.36	0.32	0.12	—	—
P9	円形	0.34	0.30	0.35	—	土師器甕1

II区 遺構(SB6)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.23	0.23	0.30	—	瓦器碗2・土師器細片2
P2	円形	0.55	0.52	0.52	—	土師器甕4・土師器細片4
P3	円形	0.45	0.34	0.38	—	—
P4	円形	0.34	0.32	0.66	—	土師器細片4
P5	円形	0.37	0.30	0.41	—	土師器甕1
P6	円形	0.42	0.36	0.33	—	土師器細片2
P7	円形	0.42	(0.30)	0.56	0.17	—
P8	円形	0.25	0.25	0.14	—	土師器細片3
P9	円形	0.25	0.25	0.14	—	—
P10	円形	0.22	0.19	0.15	—	土師器甕1・土師器細片2
P11	円形	0.27	0.24	0.11	0.11	—

Ⅱ区 遺構(SB7)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.28	0.22	0.14	—	土師器甕1・陶器1・唐津灰釉皿1
P2	円形	0.29	0.29	0.21	—	土師器杯1・土師器細片2・須恵器杯2・黒色土器A1・黒色土器B1・瓦器碗1・瓦器杯1
P3	円形	0.26	0.25	0.18	—	瓦器碗1・土師器甕1
P4	円形	0.33	0.28	0.27	—	—
P5	円形	0.32	0.28	0.30	0.19	青花碗1
P6	円形	0.40	0.37	0.30	—	須恵器1
P7	円形	0.39	0.28	0.15	—	—
P8	円形	0.30	0.24	0.12	—	—

Ⅱ区 遺構(SB8)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.43	0.43	0.44	0.22	—
P2	円形	0.32	0.28	0.18	—	土師器細片2
P3	円形	0.36	0.34	0.24	—	—
P4	円形	0.40	0.39	0.15	—	—
P5	円形	0.25	0.25	0.07	—	—
P6	円形	0.35	0.34	0.23	—	土師器細片1

Ⅱ区 遺構(SB9)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.32	0.28	0.16	—	—
P2	円形	0.20	0.20	0.33	—	唐津ハケ塗皿(二彩手)1
P3	円形	0.32	0.28	0.18	—	—
P4	円形	0.25	0.24	0.06	—	—
P5	円形	0.24	0.22	0.37	—	—
P6	円形	0.27	0.26	0.21	—	土師器細片3

Ⅱ区 遺構(SB10)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.19	0.16	0.20	—	—
P2	円形	0.28	0.24	0.19	—	—
P3	円形	0.18	0.17	0.22	—	—
P4	円形	0.25	0.24	0.20	—	—
P5	円形	0.30	0.27	0.12	—	—
P6	円形	0.16	0.14	0.10	—	—
P7	円形	0.25	0.24	0.06	—	—
P8	円形	0.32	0.28	0.14	—	—

I・II区 遺構(SA)計測表

遺構番号	柱穴数	全長(m)	柱間距離(m)	方向
SA1	9	15.80	1.80~2.20	N-40~44°-W
SA2	4	4.30	1.20~1.80	N-30°-E
SA3	3	3.20	1.60	N-50°-W

I E区 遺構(SA1)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.33	0.30	0.19	—	—
P2	円形	0.36	0.33	0.12	—	—
P3	円形	(0.35)	(0.14)	0.08	—	—
P4	円形	(0.28)	(0.12)	—	—	—
P5	円形	(0.38)	(0.11)	0.27	—	—
P6	円形	0.19	0.18	0.12	—	—
P7	円形	0.24	0.23	0.10	—	—
P8	円形	0.24	0.22	0.65	—	—
P9	円形	0.52	0.48	0.35	—	—

II区 遺構(SA2)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.34	0.31	0.15	—	土師器細片5
P2	円形	0.26	(0.20)	0.10	—	—
P3	円形	0.28	0.27	0.16	—	黒色土器A1
P4	円形	0.24	0.22	0.31	—	瓦器皿1

II区 遺構(SA3)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.40	0.38	0.35	—	土師器皿1・土師器細片3
P2	円形	0.43	0.38	0.24	—	—
P3	円形	0.39	0.38	0.38	—	土師器細片3・土師器甕1

I区 遺構(SK・SD・SX)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
SK1	楕円形	1.71	0.52	0.17	土師質土器杯7・土師質土器細片16・鉄滓6・骨片1
SK2	方形	0.71	(0.57)	0.07	須恵器1・土師器甕16・土師器細片13
SK3	不整楕円形	0.97	0.46	0.20	土師器甕2・土師器細片7・瓦器1
SK4	隅丸方形	0.96	(0.42)	0.20	土師器甕1・土師器細片2
SK5	円形	0.88	0.70	0.31	—
SK6	隅丸方形	0.92	(0.68)	0.15	土師器細片3

遺構番号	規模(m)			主軸方向	出土遺物
	全長	幅	深さ		
SD1	(8.62)	0.87	0.26	N-48°-E	土師器皿3・緑釉碗1・土師器甕8・土師器細片37・土師器杯1
SD2	(1.62)	—	0.17	N-24°-W	土師器甕2・土師器皿3・瓦器椀2

I 区 遺構(SK・SD・SX)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
SX1	不整形	(1.25)	1.05	—	土師器細片2・土師器甕1

II 区 遺構(SK・SD・SX)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
SK1	不整形	1.63	0.89	0.08	土師器皿1
SK2	円形	1.36	1.32	0.31	唐津灰釉皿1・内野山窯銅緑釉皿1・磁器2・土師器細片4・鉄釘1
SK3	不整楕円形	2.62	2.17	0.31	須恵器1・土師器細片6・土師器杯1・土師器皿1・鉄釘1
SK4	円形	1.30	1.30	(0.27)	近世陶磁器2・土師器細片3
SK5	不整円形	1.78	1.66	0.35	炆器搨鉢1・唐津灰釉皿1・内野山窯銅緑釉皿1・染付2・土師器甕5・瓦質土器2・漆器1・砥石1・陶器搨鉢(堺)1・陶器9
SK6	円形	1.66	1.62	0.43	緑釉陶器1・瓦質土器1・土師器甕1・土師器細片1
SK7	円形	1.58	1.56	0.52	近世陶磁器2・瓦質土器2・土師器甕3
SK8	円形	1.46	1.45	0.18	銅緑釉碗1・陶器碗1・瓦質土器2・土師器甕1・土師器皿2・土師器細片16
SK9	隅丸方形	1.85	1.75	0.39	土師器甕1・土師器細片3
SK10	不整円形	1.18	1.01	0.09	—

遺構番号	規模(m)			主軸方向	出土遺物
	全長	幅	深さ		
SD2	(2.47)	0.53	0.09	N-57°-W	須恵器杯1・土師器甕1
SD3	(9.10)	1.57	0.18	N-54°-W	染付皿2・陶器碗1・陶器搨鉢1・陶器1・白磁6・青磁1・磁器2・瓦器3・瓦質土器1・須恵器蓋1・須恵器甕9・土師器甕45・土師器細片30・土鍾1
SD4	(5.44)	0.71	0.13	N-10°-W	須恵器杯1・土師器甕26・土師器細片14・土鍾1
SD5	(4.33)	0.67	0.12	N-45°-E	土師器長胴甕3・土師器細片2
SD6	(3.54)	0.80	0.16	N-78°-W	土師器甕28・土師器細片19

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	備考
		長径	短径	深さ		
SX1	不整形	1.29	0.83	0.08	瓦質土器3・土師器甕5・土師器細片4	炭化物集中

I W区 遺構(P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.20	0.19	0.12	—	土師器皿2・土師器細片5
P2	楕円形	0.19	0.16	0.06	—	瓦器椀4
P3	円形	0.26	0.24	0.10	—	土師器甕1
P4	円形	0.20	0.20	0.08	—	土師器細片1
P5	楕円形	0.39	0.25	0.15	—	土師器細片1
P7	円形	0.33	0.30	0.27	—	土師器甕2・土師器細片2・鉄釘1
P8	楕円形	0.70	0.57	0.65	0.37	土師器甕5・土師器細片11・瓦質土器1
P9	楕円形	0.51	0.33	0.16	—	土師器細片1・瓦質土器1
P10	円形	0.24	0.22	0.27	—	土鍾1・土師器甕1・土師器細片2
P11	円形	0.32	0.28	0.13	—	黒色土器A1・土師器細片1

I W区 遺構(P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P12	円形	(0.33)	0.33	0.11	—	土師器細片1
P13	楕円形	0.32	0.23	0.23	—	土師器甕2
P14	円形	0.39	0.39	0.27	—	須恵器甕1・土師器甕2・土師器1
P15	円形	0.48	0.40	0.14	—	—
P16	楕円形	0.30	0.17	0.30	—	土師器細片1
P17	円形	0.48	0.47	0.20	0.22	土師器甕6
P18	楕円形	0.44	0.29	—	—	土師器甕2・土師器細片1
P19	楕円形	0.43	0.37	0.17	0.17	土師器細片2
P20	楕円形	0.25	0.21	0.17	—	土師器甕3・土師器細片1
P21	楕円形	0.26	0.20	0.37	—	土師器細片3
P22	楕円形	0.28	0.22	0.10	—	—
P23	円形	0.24	0.22	0.26	—	土師器甕4・土師器細片5・黒色土器 A1
P27	円形	0.21	0.18	0.70	—	—

I E区 遺構(P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.40	0.34	0.40	—	土師器細片1
P3	円形	0.34	0.30	0.40	—	—
P7	楕円形	(0.26)	0.26	0.21	—	土師器甕1
P8	楕円形	0.37	0.31	0.47	—	—
P9	円形	0.39	0.35	0.24	—	—
P10	円形	0.39	0.37	0.67	—	陶器1・不明炭化物1
P12	円形	0.35	0.31	0.38	—	土師器細片1
P13	円形	0.29	0.28	0.30	—	瓦質土器1
P15	円形	0.35	0.33	0.19	—	—
P16	円形	0.27	0.26	0.17	—	—
P17	楕円形	0.50	0.38	0.39	—	鉄釘2
P18	円形	0.19	0.19	0.15	—	土師器甕1
P19	円形	0.47	0.44	0.68	—	土師器細片4
P20	円形	0.45	0.37	0.47	—	土師質土器焙烙鍋1
P21	楕円形	0.65	0.35	0.19	—	—
P23	円形	0.19	0.18	0.26	—	土師器甕1・土師器細片1

II区 遺構(P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	円形	0.22	0.22	0.06	—	土師器細片2
P2	円形	0.23	0.20	0.15	—	土師器細片1
P3	円形	0.39	0.37	0.31	—	鉄滓1
P5	円形	0.30	0.29	0.28	—	近世磁器1・土師器細片3
P8	円形	0.22	0.20	0.20	—	土師器細片1
P9	円形	0.24	0.22	0.20	—	土師器細片2
P12	円形	0.37	0.36	0.24	—	土師器鉢1・瓦質土器1



## Ⅱ区 遺構(P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			柱痕径(m)	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P16	楕円形	0.23	0.18	0.13	—	土師器細片1
P17	不整円形	0.36	0.35	0.22	—	近世磁器1
P19	円形	0.51	0.51	0.12	—	土師器甕1
P20	円形	(0.40)	0.38	0.17	—	土師器細片1
P21	円形	0.52	0.46	0.48	0.32	土師器細片1
P27	楕円形	0.27	0.22	0.21	—	土師器細片2・黒色土器A 椀1
P28	円形	0.28	0.24	0.24	—	瓦質土器2・土師器灯明皿2・土師器細片2・瓦器皿1
P29	円形	0.37	0.36	0.16	—	須恵器1
P32	円形	0.21	0.19	0.05	—	土師器甕1
P33	円形	0.32	0.28	0.18	—	土師器皿1・備前搦鉢1
P34	楕円形	0.34	0.27	0.11	—	須恵器皿1
P35	円形	0.30	0.26	0.13	—	土錘1
P36	円形	0.22	0.18	0.16	—	瓦器1・青花碗1
P37	楕円形	0.33	0.27	0.07	—	土師器甕1・須恵器1
P38	円形	0.34	0.30	0.23	—	須恵器甕1
P40	円形	0.26	0.23	0.10	—	土師器細片6
P41	円形	0.34	0.31	0.08	—	土師器甕1・瓦器1
P43	円形	0.39	0.36	0.17	0.27	近世陶磁器1
P44	円形	0.37	0.37	0.54	0.17	陶器1・瓦質土器2・土師器細片3
P45	円形	0.52	0.51	0.28	0.23	染付1
P46	円形	0.37	0.34	0.33	0.26	瓦質土器1・黒色土器B1・土師器細片1
P51	楕円形	0.24	0.19	0.09	—	土師器細片1
P52	円形	0.42	0.41	0.21	—	土師器細片4
P54	円形	0.42	0.32	0.42	—	尾戸窯陶器1
P56	円形	0.17	0.16	0.06	0.07	土師器甕1・土師器細片1
P57	円形	0.34	0.32	0.59	0.30	土師器甕3・土師器長胴甕1・土師器細片1
P58	円形	0.32	0.30	0.61	—	土師器甕2・粘土塊
P59	楕円形	0.33	0.28	0.21	—	陶器1・土錘1・瓦質土器1・土師器細片2
P60	楕円形	0.29	0.24	0.08	—	土師器甕1・土師器細片4
P61	円形	0.21	0.19	0.16	—	土師器細片1
P62	円形	0.31	0.31	0.23	—	土師器細片1
P64	円形	0.32	0.30	0.33	—	土師器細片3
P67	円形	0.21	0.20	0.24	—	土師器甕1
P68	円形	0.22	(0.12)	—	—	土師器細片3
P71	円形	0.34	0.29	0.12	—	土師器甕1・須恵器1
P72	楕円形	0.39	0.32	0.39	—	鉄滓1
P77	円形	0.33	0.33	0.23	—	土師器甕1
P78	楕円形	0.25	0.19	0.12	—	土師器皿1
P79	円形	0.48	0.44	0.51	—	瓦質土器1
P80	円形	0.33	0.32	0.37	—	土師器細片3・鉄釘1
P81	円形	0.43	0.40	0.61	—	瓦質土器1・土師器甕1・土師器細片5・鉄滓1
P83	楕円形	0.39	0.24	0.22	—	土師器椀1・土師器細片5

鎌田遺跡 遺構(SK・SD・P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
SK1	楕円形	1.20	(0.49)	0.52	—
SK2	円形	0.84	0.73	0.46	土師質土器1
SK3	不整形円形	0.71	0.51	0.67	—

遺構番号	規模(m)			主軸方向	出土遺物
	全長	幅	深さ		
SD1	10.32	1.82	0.32	N - 12° - W	土師質土器19・須恵器皿1・須恵器2・瓦器椀1・叩石1

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
P1	円形	0.22	0.21	0.11	—
P2	円形	0.28	0.26	0.16	—
P3	円形	0.67	0.53	0.17	—
P4	円形	0.41	0.37	0.17	—
P5	円形	0.26	0.23	0.32	—
P6	円形	0.17	0.14	0.22	—
P7	円形	0.23	0.14	0.05	—
P8	楕円形	0.19	0.17	0.18	—
P9	円形	0.17	0.12	0.11	—
P10	円形	0.29	(0.16)	0.09	須恵器皿1
P11	楕円形	0.41	0.26	0.11	—
P12	円形	0.80	0.64	0.58	—
P13	円形	0.23	0.18	0.23	—
P14	円形	0.27	0.23	0.08	—
P15	円形	0.18	0.15	0.10	—
P16	円形	0.43	0.35	0.11	—
P17	円形	0.37	0.29	0.08	—
P18	円形	0.29	0.25	0.09	—
P19	円形	0.52	0.40	0.32	—
P20	円形	0.42	(0.31)	0.34	須恵器2・土師質土器1
P21	円形	0.74	0.43	0.58	—
P22	円形	0.32	0.26	0.39	—
P23	円形	0.30	0.25	0.15	—
P24	円形	0.30	0.28	0.10	—
P25	円形	0.29	0.24	0.11	—
P26	円形	0.32	0.24	0.24	—
P27	円形	0.23	0.19	0.14	—
P28	円形	0.27	0.21	0.15	—
P29	円形	0.23	0.19	0.16	—
P30	円形	0.22	0.21	0.18	—

鎌田遺跡 遺構(SK・SD・P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
P31	円形	0.25	0.23	0.29	—
P32	円形	0.21	0.18	0.16	—
P33	円形	0.22	0.19	0.21	—
P34	円形	0.28	0.25	0.40	—
P35	円形	0.26	0.23	0.14	—
P36	円形	0.45	0.31	0.22	—
P37	円形	0.28	0.23	0.39	—
P38	円形	0.54	0.37	0.18	—
P39	円形	0.29	0.27	0.13	—
P40	円形	0.19	0.16	0.19	—
P41	円形	0.19	0.16	0.24	—
P42	円形	0.12	0.10	0.10	—
P43	円形	0.18	0.15	0.06	—
P44	円形	0.20	0.17	0.06	—
P45	円形	0.21	0.15	0.11	—
P46	円形	0.19	0.17	0.07	—
P47	円形	0.25	0.16	0.19	—
P48	円形	0.25	0.20	0.15	—
P49	円形	0.40	0.28	0.08	—
P50	円形	0.18	0.12	0.10	—
P51	円形	0.21	0.16	0.13	—
P52	円形	0.19	0.15	0.07	—
P53	円形	0.26	0.24	0.14	—
P54	円形	0.25	0.23	0.05	—
P55	円形	0.36	0.30	0.20	—
P56	円形	0.26	0.24	0.22	—
P57	円形	0.38	0.30	0.24	—
P58	円形	0.42	0.39	0.31	土師器鍋1

貢山城跡 遺構(SA)計測表

遺構番号	柱穴数	全長(m)	柱間距離(m)	方向
SA1	3	5.40	2.25~3.15	N-85°-W
SA2	6	10.15	1.05~2.65	N-10°-W

遺構(SA1)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
P1	円形	0.38	0.34	0.16	—
P2	円形	0.27	0.24	0.09	—
P3	円形	0.28	0.25	0.05	—

遺構(SA2)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
P3	円形	0.28	0.25	0.05	—
P4	円形	0.23	0.20	0.04	—
P5	円形	0.22	0.16	0.06	—
P6	円形	0.21	0.20	0.08	—
P7	円形	0.29	0.25	0.05	—
P8	円形	0.30	0.27	0.24	—

遺構(P)計測表

遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
P9	円形	0.34	0.27	0.30	—
P10	円形	0.36	0.31	0.07	磁器1・内野山窯銅緑釉皿1
P11	円形	0.33	0.31	0.11	—
P12	円形	0.26	0.20	0.10	—
P13	円形	0.13	0.12	0.13	—
P14	円形	0.32	0.25	0.05	—
P15	円形	0.27	0.21	0.05	—
P16	円形	0.20	0.20	0.12	—
P17	円形	0.35	0.31	0.06	—
P18	円形	0.21	0.17	0.04	—
P19	円形	0.32	0.23	0.14	—
P20	円形	0.32	0.31	0.66	—
P21	円形	0.25	0.23	0.07	—
P22	楕円形	0.82	0.33	0.12	—
P23	円形	0.28	0.26	0.18	—

# 写真図版



いの町鎌田地区(西より)





# 城ヶ谷山遺跡





城ヶ谷山遺跡全景(西上空より)





城ヶ谷山遺跡全景(北上空より)



城ヶ谷山遺跡 I 区全景(西上空より)





I W区上面遺構検出状態(南より)



SD1バンクセクション(北より)



SD1 緑釉陶器出土状態 (No.17)



SD1 土師器皿出土状態 (No.16)



SD1 土師器出土状態





I W区下面遺構検出状態(北より)



I W区 SB1 完掘状態(東より)



I W区 SK1 土師器出土状態(南より)



I W区 P8 根石検出状態(北より)



I W区 土師器甕出土状態(北より)





I W区西壁セクション(東より)



I E区 SK5 半裁状態(北より)



I E区 SK5 セクション(北より)



I E区 SK5 周辺出土鉄滓(北より)



I E区 SK5 周辺出土鉄釘(北より)





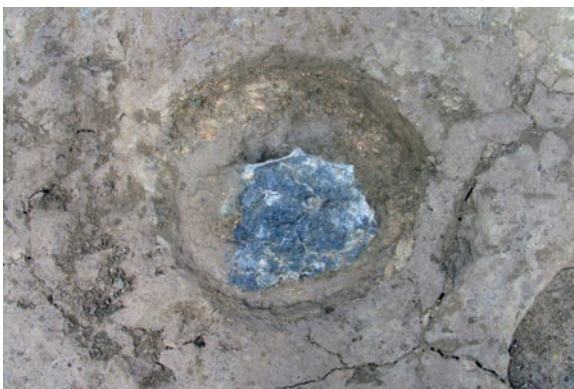
I E区 SB3Pit 調査区西壁セクション(北東より)



I E区 SB3(P1)セクション(東より)



I E区 SB3(P1)セクション(東より)



I E区 SB3(P6)礎板検出状態(東より)



I E区 SB3(P1)完掘状態(東より)





I W区完掘状態(北西より)



I E区完掘状態(北西より)





Ⅱ区北西部上面遺構検出状態(東より)



Ⅱ区北東部上面遺構検出状態(東より)





Ⅱ区下面遺構検出状態(北東より)



Ⅱ区北西部下面遺構検出状態(北より)





Ⅱ区 SD3集石検出状態(東より)



Ⅱ区 SD3完掘状態(北東より)





Ⅱ区包含層(Ⅰ·Ⅱ層)陶器碗出土状态



Ⅱ区包含層(Ⅲ層)土師器甕出土状态



Ⅱ区包含層(Ⅲ層)土師器甕出土状态



Ⅱ区瓦質土器(No.100)出土状态



Ⅱ区唐津灰釉皿(No.76)出土状态



Ⅱ区須惠器壺(No.129)出土状态



Ⅱ区青磁碗(No.101)出土状态



Ⅱ区瓦器碗(No.93)出土状态





Ⅱ区下層弥生土器出土状態(南より)



Ⅱ区下層弥生土器出土状態(北より)





試掘調査出土遺物(外面)



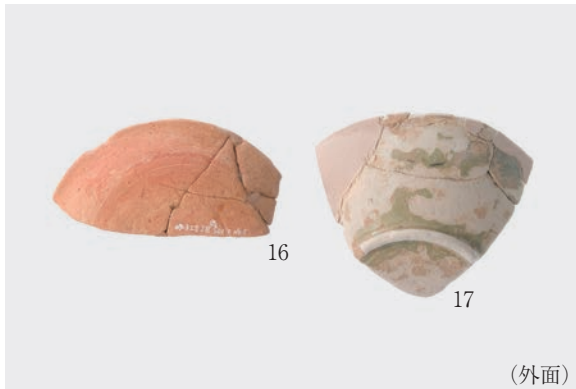
試掘調査出土遺物(内面)



I 区 P10・20 出土 土錘, 土師質土器(鍋)



I W 区 V 層出土 須恵器(壺・甕)



I W 区 SD1 出土 土師器(皿), 緑釉陶器(碗)

(外面)

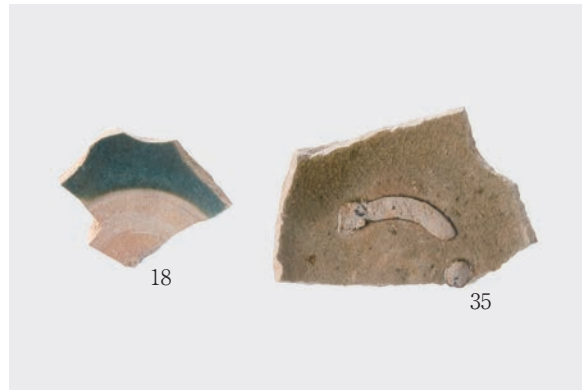


I W 区 SD1 出土 土師器(皿), 緑釉陶器(碗)

(内面)



I W・E 区 I・II 層出土 肥前産陶器(皿)(外面)



I W・E 区 I・II 層出土 肥前産陶器(皿)(内面)



I W 区 III 層出土 土師器(椀)(外面)



I W 区 III 層出土 土師器(椀)(内面)





11

I W区 SK1 出土 土師質土器(杯)



12

I W区 SK1 出土 土師質土器(杯)



14

I E区 SB4Pit 出土 唐津(皿)



19

I W区 III層出土 土師質土器(杯)



22

I W区 IV層出土 土師器(碗)



23

I W区 IV層出土 土師器(碗)



27

I W区 V層出土 黒色土器(碗)



36

I E区 I・II層出土 尾戸窯(碗)



I W区IV層出土 土師器(甕)(外面)



I W区IV層出土 土師器(甕)(内面)



I W区V層出土 土師器(皿・杯)(外面)



I W区V層出土 土師器(皿・杯)(内面)



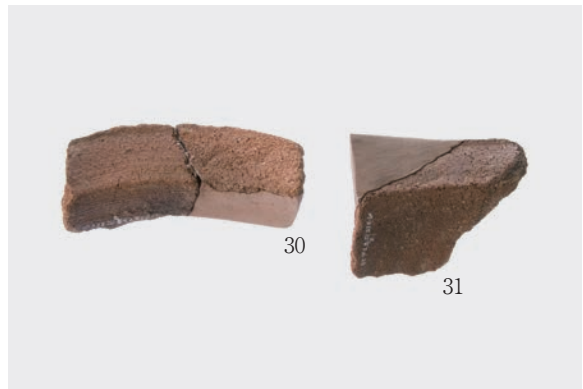
I W区V層出土 須恵器(椀)(外面)



I W区V層出土 須恵器(椀)(内面)



I W区V層出土 土師器(甕)(外面)



I W区V層出土 土師器(甕)(内面)



I E区 I・II層出土 唐津(碗)



II区 SD2出土 須恵器(杯)



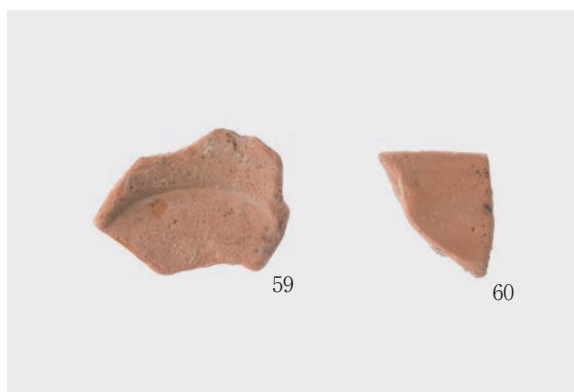
II区 SB5Pit出土 瓦器(皿), 土師質土器(皿)



II区 SB5Pit出土 瓦器(皿), 土師質土器(皿)



II区 SK3出土 土師器(杯・皿)(外面)



II区 SK3出土 土師器(杯・皿)(内面)



II区 SK5出土 砥石(表面)



II区 SK5出土 砥石(側面)



I E区IV層出土 瓦器(皿・椀)(外面)



I E区IV層出土 瓦器(皿・椀)(内面)



I E区IV層出土 瓦質土器(鍋・羽釜)(外面)



I E区IV層出土 瓦質土器(鍋・羽釜)(内面)



I E区V層出土 白磁(碗)(外面)



I E区V層出土 白磁(碗)(内面)



I E区V層出土 土師器(甕)(外面)

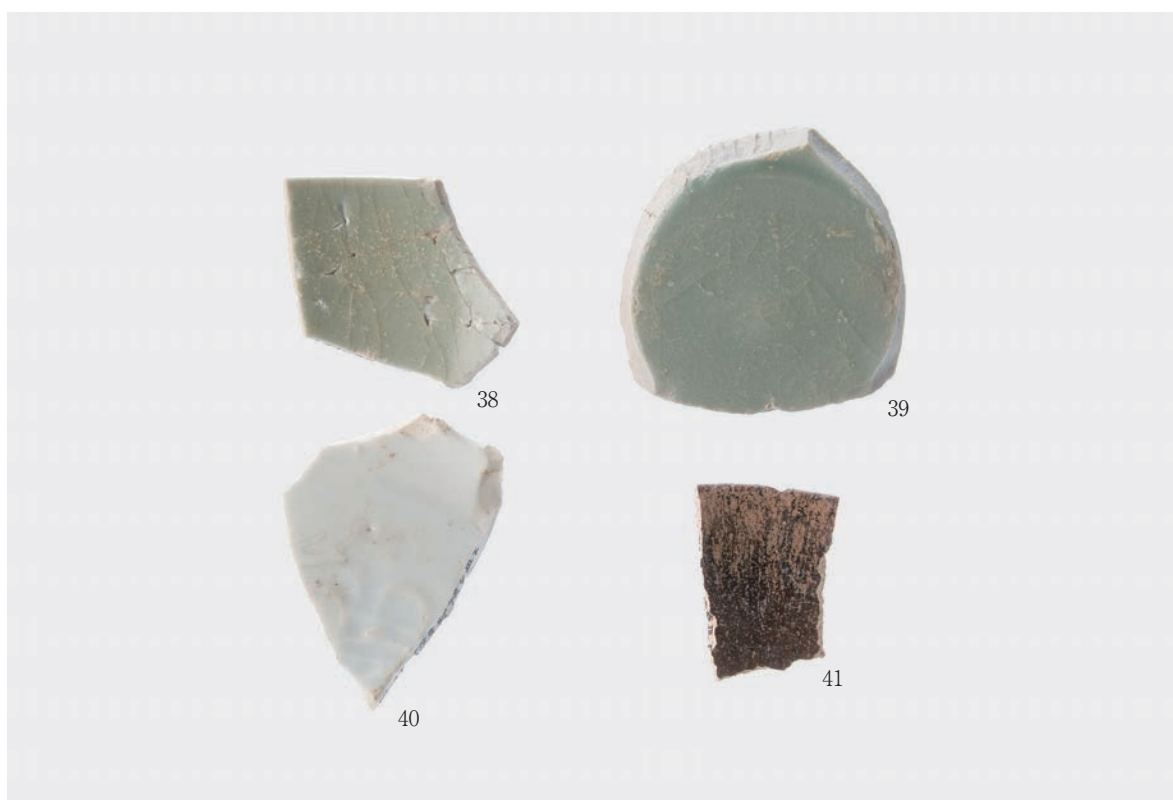


I E区V層出土 土師器(甕)(内面)





I E区Ⅲ層出土 青磁(碗), 白磁(皿), 瀬戸・美濃産陶器(碗)(外面)



I E区Ⅲ層出土 青磁(碗), 白磁(皿), 瀬戸・美濃産陶器(碗)(内面)



I E区V層出土 土師器(皿・椀)(外面)



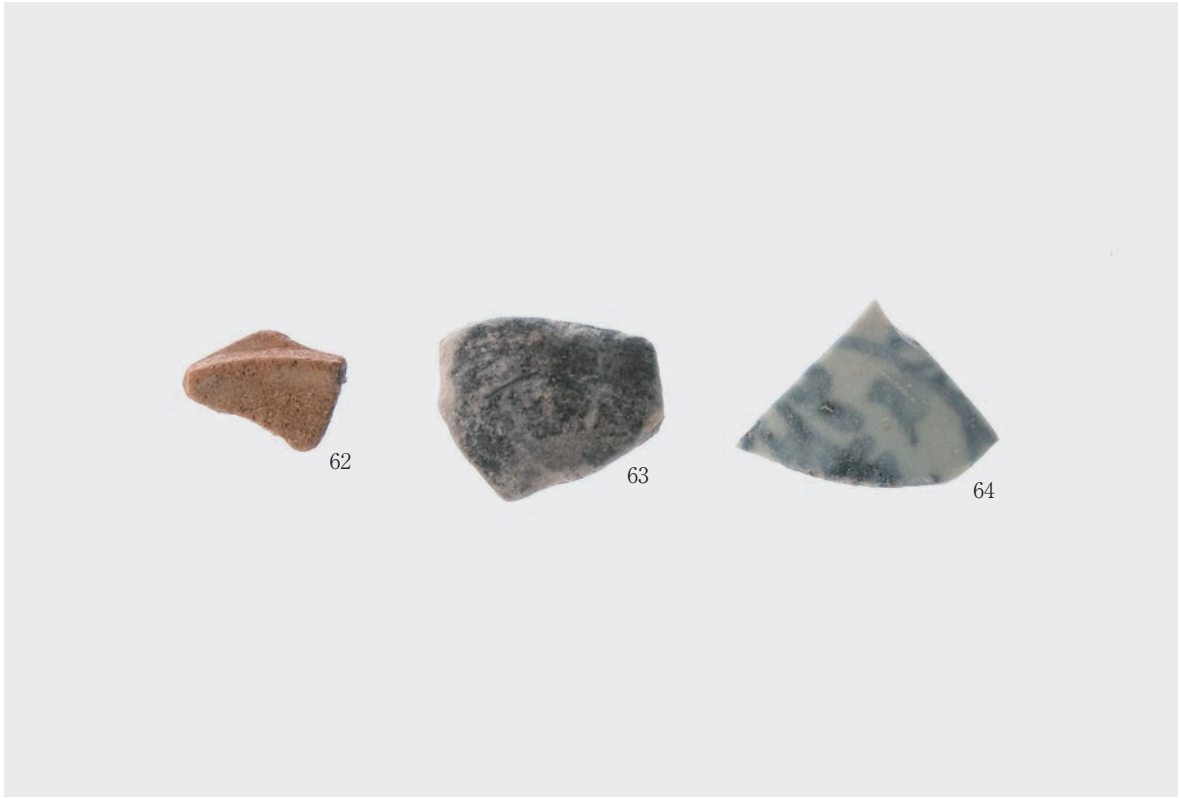
I E区V層出土 土師器(皿・椀)(内面)



II区 SB7Pit 出土 瓦器(杯·碗), 黑色土器(碗), 須惠器(杯)(外面)



II区 SB7Pit 出土 瓦器(杯·碗), 黑色土器(碗), 須惠器(杯)(内面)



Ⅱ区 P27·28·36 出土 黑色土器(碗), 瓦器(皿), 青花(碗)(外面)



Ⅱ区 P27·28·36 出土 黑色土器(碗), 瓦器(皿), 青花(碗)(内面)





Ⅱ区 SD3出土 須恵器(蓋・甕), 陶器(播鉢)(外面)



Ⅱ区 SD3出土 須恵器(蓋・甕), 陶器(播鉢)(内面)



Ⅱ区 SD4～6出土 土師器(甕)(外面)



Ⅱ区 SD4～6出土 土師器(甕)(内面)



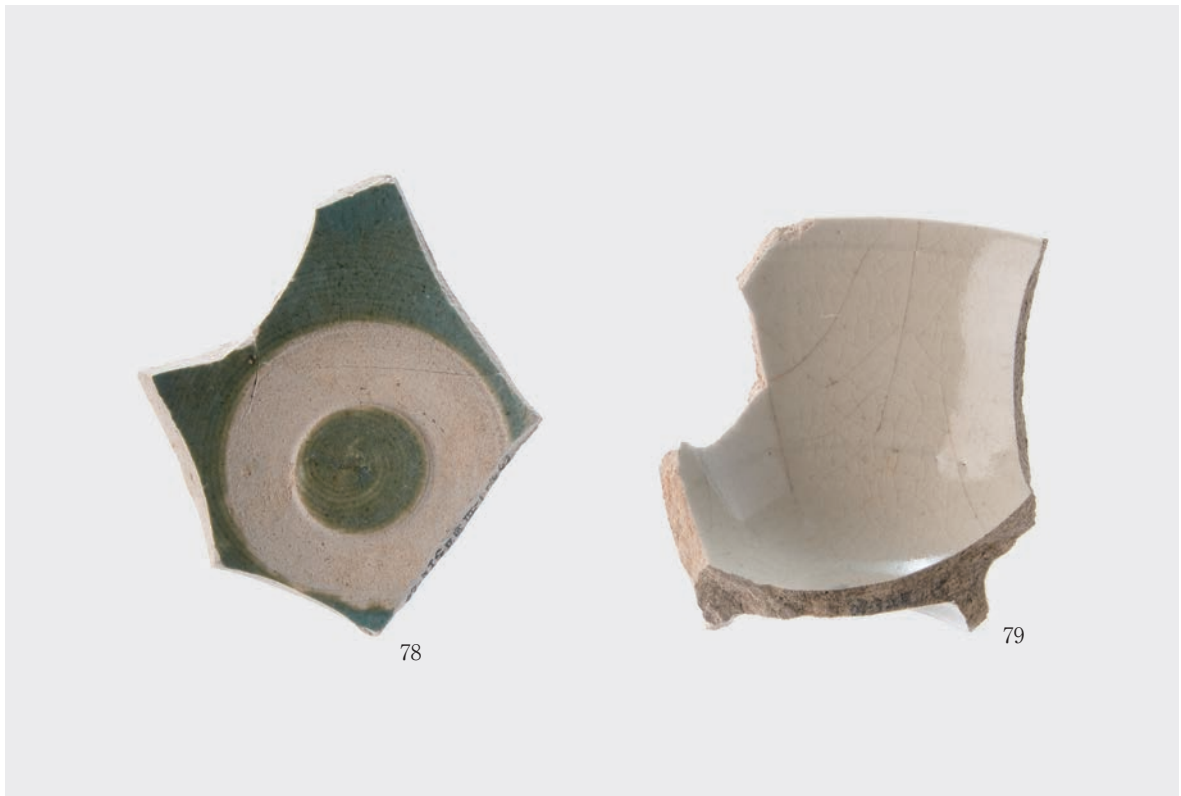
Ⅱ区Ⅰ·Ⅱ層出土 唐津(碗·皿)(外面)



Ⅱ区Ⅰ·Ⅱ層出土 唐津(碗·皿)(内面)



Ⅱ区Ⅰ・Ⅱ層出土 肥前産陶器(皿), 瀬戸・美濃産陶器(碗)(外面)

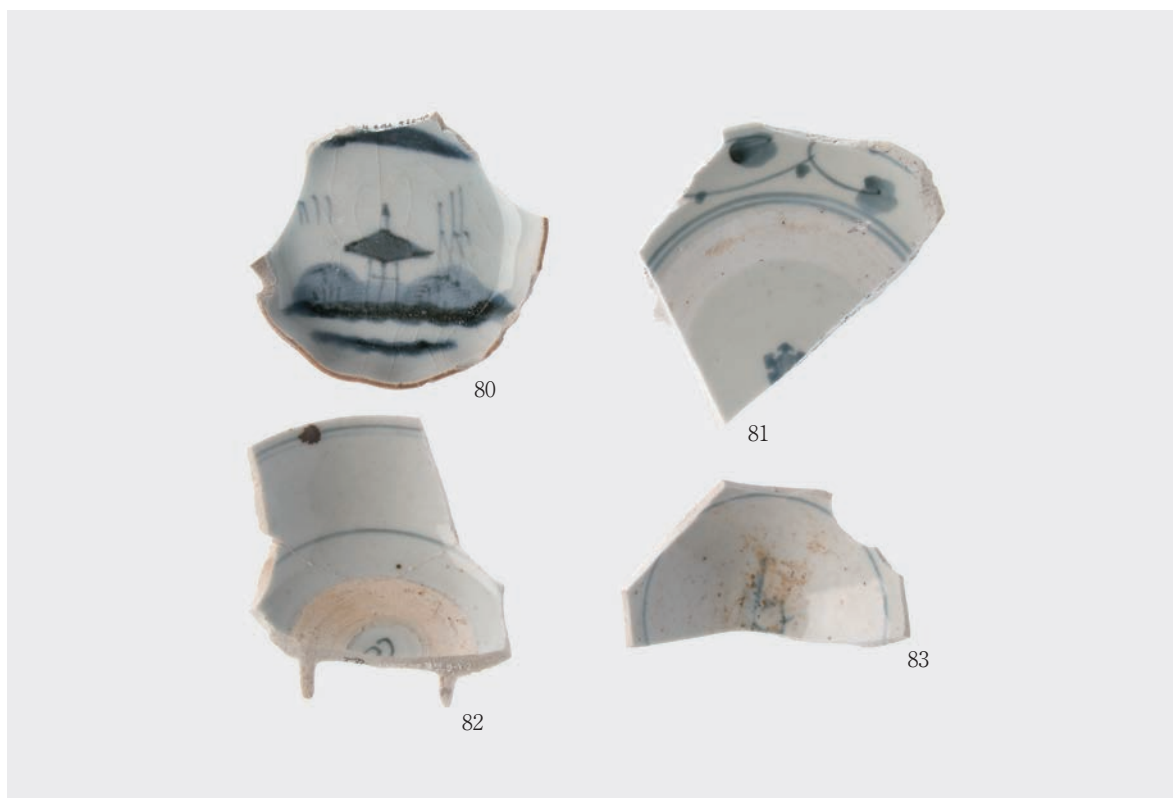


Ⅱ区Ⅰ・Ⅱ層出土 肥前産陶器(皿), 瀬戸・美濃産陶器(碗)(内面)





Ⅱ区Ⅰ·Ⅱ層出土 肥前産磁器(皿・碗)(外面)



Ⅱ区Ⅰ·Ⅱ層出土 肥前産磁器(皿・碗)(内面)



Ⅱ区Ⅲ-1層出土 備前焼(播鉢)(外面)



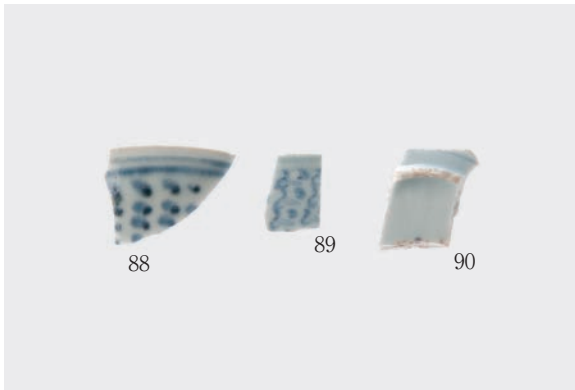
Ⅱ区Ⅲ-1層出土 備前焼(播鉢)(内面)



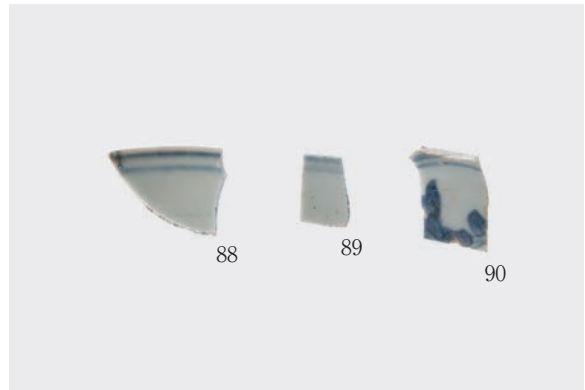
Ⅱ区Ⅲ-1層出土 瀬戸・美濃産陶器(碗)(外面)



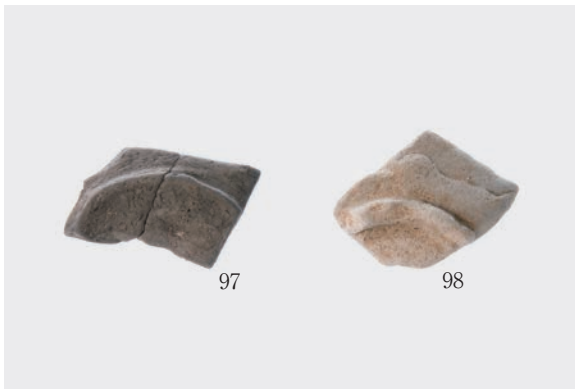
Ⅱ区Ⅲ-1層出土 瀬戸・美濃産陶器(碗)(内面)



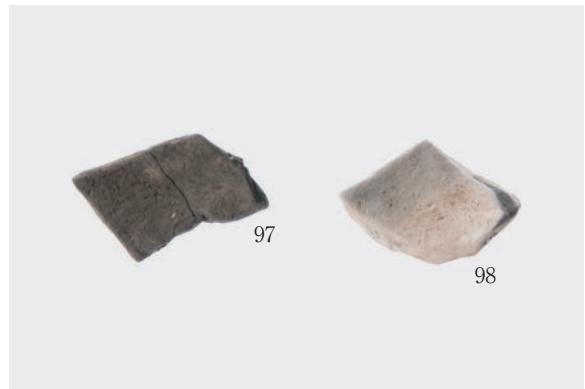
Ⅱ区Ⅲ-1層出土 青花(皿・碗)(外面)



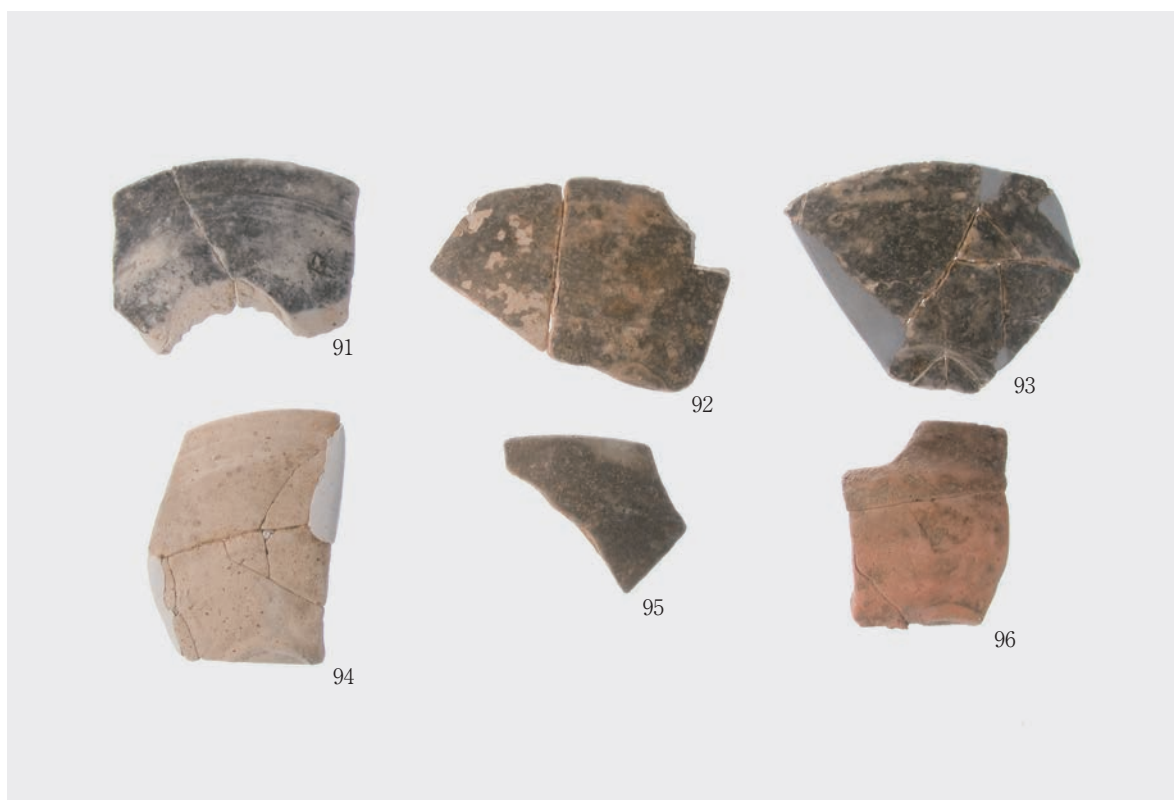
Ⅱ区Ⅲ-1層出土 青花(皿・碗)(内面)



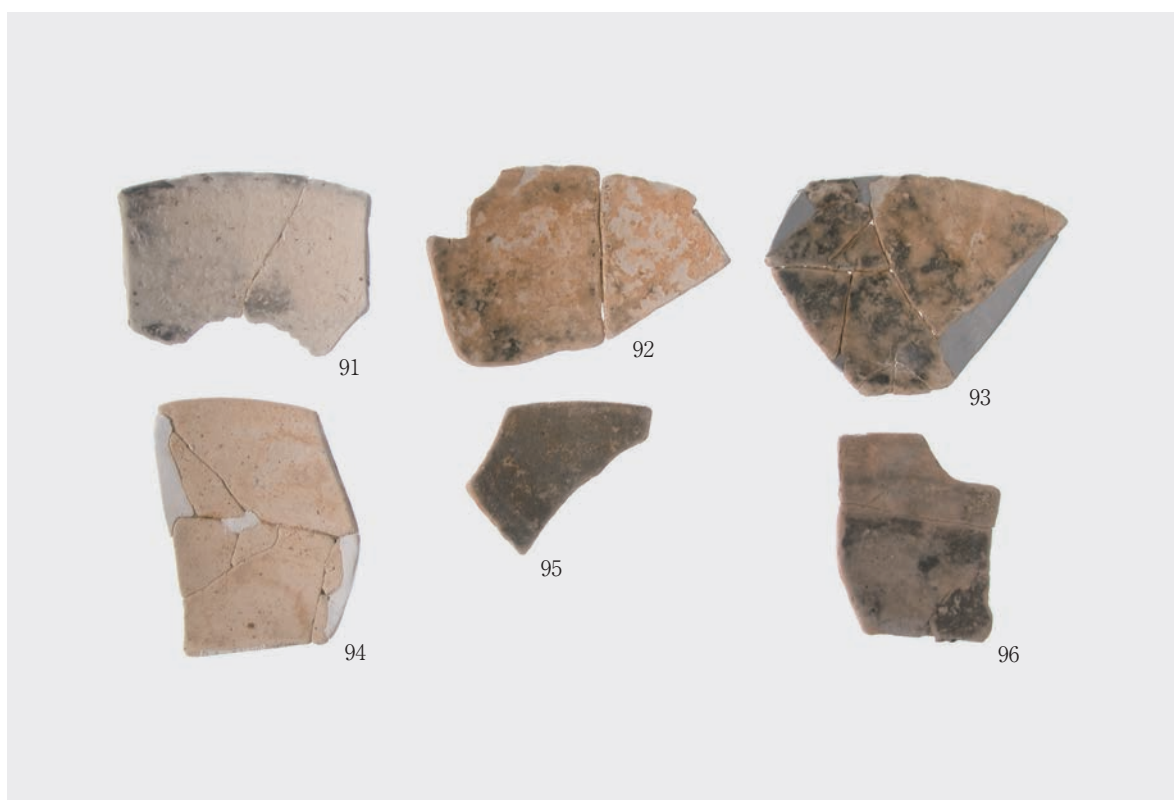
Ⅱ区Ⅲ-2層出土 須恵器(碗)(外面)



Ⅱ区Ⅲ-2層出土 須恵器(碗)(内面)



II区III-2層出土 瓦器(椀)(外面)



II区III-2層出土 瓦器(椀)(内面)



Ⅱ区Ⅲ-2層出土 瓦質土器(羽釜·不明)



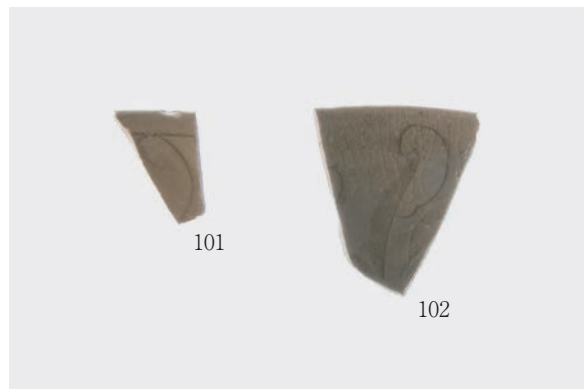
Ⅱ区Ⅲ-2層出土 瓦質土器(不明·刻印部分)



Ⅱ区Ⅲ-2層出土 瓦質土器(不明)



Ⅱ区Ⅲ-2層出土 青磁(碗)(外面)



Ⅱ区Ⅲ-2層出土 青磁(碗)(内面)





II区IV層出土 黑色土器(碗)(外面)



II区IV層出土 黑色土器(碗)(内面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 綠釉陶器(皿), 灰釉陶器(碗)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 綠釉陶器(皿), 灰釉陶器(碗)(内面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 土師器(甕)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 土師器(甕)(内面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 土師器(甕)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 土師器(甕)(内面)





Ⅱ区Ⅳ層出土 須惠器(杯)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須惠器(杯)(内面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(皿)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(皿)(内面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(杯)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(壺)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(蓋・壺)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(蓋・壺)(内面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(甕)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須恵器(甕)(内面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須惠器(甕)(外面)



Ⅱ区Ⅳ層出土 須惠器(甕)(内面)



Ⅱ区Ⅴ層出土 弥生土器



137

Ⅱ区Ⅴ層出土 弥生土器(鉢)



138

Ⅱ区Ⅴ層出土 弥生土器(甕)



139

Ⅱ区Ⅴ層出土 弥生土器(甕)



140

Ⅱ区Ⅴ層出土 弥生土器(甕)

# 鎌田遺跡







貢山城跡・鎌田遺跡調査前近景(北より)



鎌田遺跡調査前全景(北東より)





光宜神社風景(東より)



鎌田遺跡遺構検出状態(北東より)





鎌田遺跡遺構検出状態(北より)



SD1 集石検出状態(北より)





SD1 集石検出状態(北より)



SD1 南壁セクション(北より)





SD1バンクセクション(南より)



SD1完掘状態(北西より)





調査区東壁セクション(北西より)



調査区東壁セクション(西より)





調査区南東壁セクション(北西より)



SK1 東壁セクション(西より)



SK1 完掘状態(西より)



SK2セクション(西より)



SK2 完掘状態(北より)





SK3セクション(西より)



SK3完掘状態(西より)



P12根石出土状態(北より)



P12完掘状態(北より)



P21根石検出状態(西より)



P21完掘状態(西より)



P11礎板検出状態(西より)



須恵器口縁部出土状態(西より)





完掘状態(北西より)

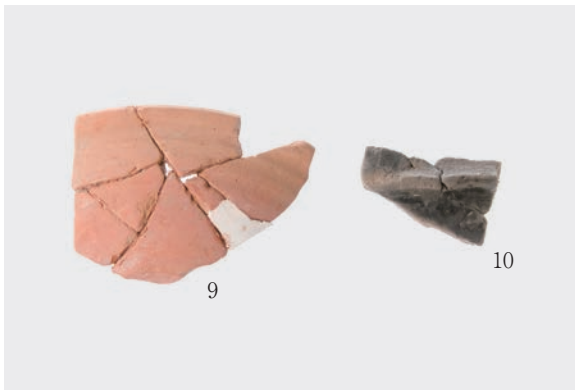


完掘状態(東より)



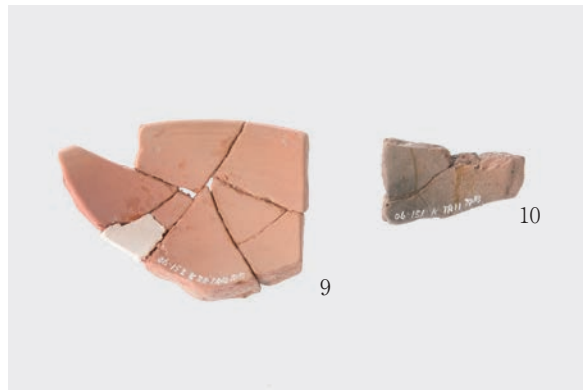
8

試掘調査出土遺物



9

10



9

10

試掘調査出土遺物(外面)

試掘調査出土遺物(内面)



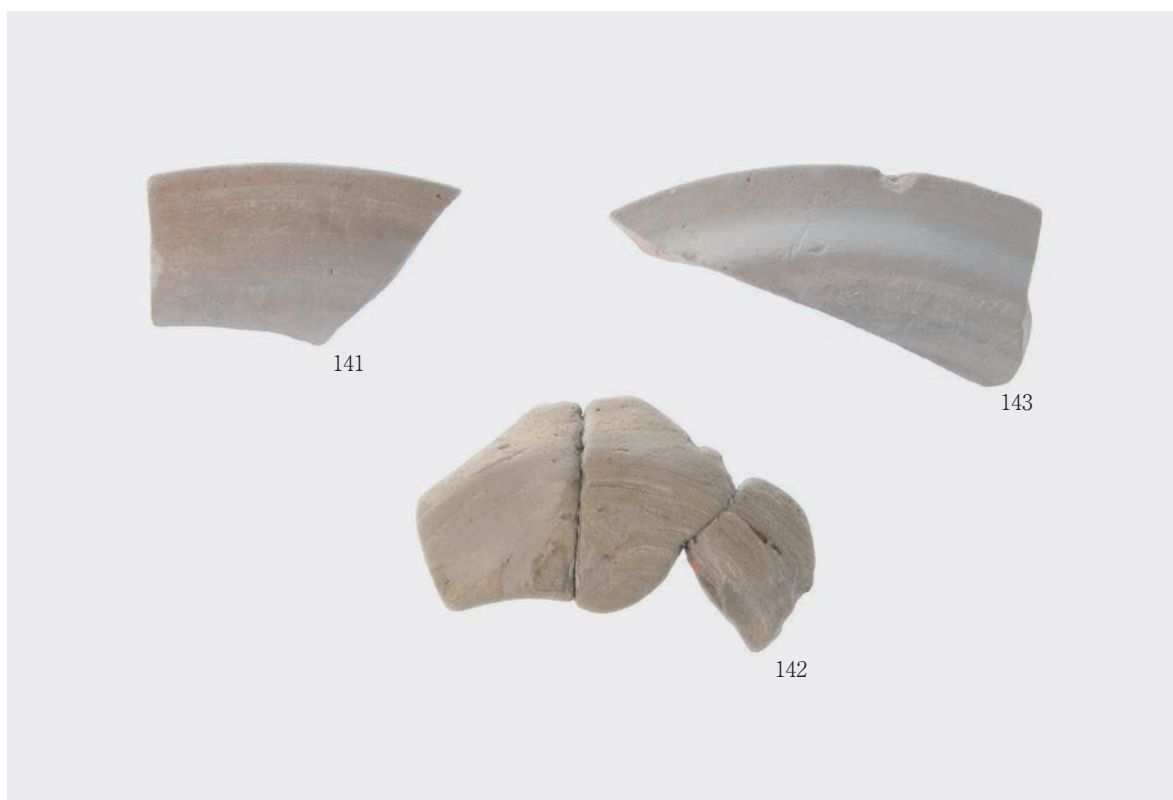
144



144

SD1出土 瓦器(椀)(外面)

SD1出土 瓦器(椀)(内面)



P10・SD1 出土 須恵器(皿・杯)(外面)



P10・SD1 出土 須恵器(皿・杯)(内面)





IV層出土 須恵器(杯・蓋・甕), 土師器(甕), 東播系須恵器(捏鉢)(外面)



IV層出土 須恵器(杯・蓋・甕), 土師器(甕), 東播系須恵器(捏鉢)(内面)



# 貢山城跡





貢山城跡遠景(西上空より)



貢山城跡全景(西上空より)





貢山城跡遠景(東・仁淀川より)



貢山城跡完掘状態(西上空より)





平場1 遺構検出状態(南より)



平場1-4区遺構検出状態(南より)





平場1-3区バンクセクション(南より)



平場1完掘状態(南より)





平場2バンク(南東・平場1より)



平場2完掘状態(南東・平場1より)





西斜面通路状遺構から堀切へのアプローチ(北西より)



西斜面完掘状態(南より)





土橋・東斜面完掘状態(南より)



東斜面完掘状態(北より)





北斜面完掘状態(東より)



北斜面トレンチセクション(東より)





堀切調査前風景(西より)



堀切調査前風景(南より)





堀切バンクセクション(北西より)



堀切バンクセクション(西より)





堀切完掘状態(西より)



土橋・堀切完掘状態(東より)





平場からの北西風景



平場からの東風景



P10·II層出土 磁器(皿), 陶器(鍋)(外面)



P10·II層出土 磁器(皿), 陶器(鍋)(内面)



発掘調査に携わった現場作業員さんたち(平成21年1月 貢山城跡にて)



## 報告書抄録

ふりがな		じょうがたにやまいせき・かまたいせき・みつぎやまじょうせき						
書名		城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡						
副書名		高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書 I						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第134集						
編著者名		吉成 承三						
編集機関		(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2013年3月12日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうがたにやまいせき 城ヶ谷山遺跡	〒781-2127 高知県 吾川郡 いの町鎌田	39386	320047	33° 32' 22"	133° 25' 21"	2007.4.25 ) 2007.8.31	1,206㎡	記録保存調査
かまたいせき 鎌田遺跡			320046	33° 32' 22"	133° 25' 11"	2008.11.5 ) 2008.12.9		
みつぎやまじょうせき 貢山城跡			320045	33° 32' 21"	133° 25' 13"	2008.11.12 ) 2009.1.13		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
城ヶ谷山遺跡	集落跡	古代 中世	掘立柱建物跡 柵列 土坑 溝跡 性格不明遺構 ピット	10棟 3列 16基 8条 2基 88個	弥生土器 土師器 土師器 須恵器 黒色土器 瓦質土器 瓦質土器 陶器	城ヶ谷山遺跡では、平安時代～江戸時代にかけての掘立柱建物跡や溝跡など集落遺跡を示す遺構及び黒色土器や緑釉陶器など搬入品が確認された。		
鎌田遺跡	集落跡	古代 中世	土坑 溝跡 ピット	3基 1条 58個	弥生土器 石土器 土師器 須恵器 黒色土器 土師質土器 瓦質土器 近世陶磁器	鎌田遺跡では、平安時代～南北朝期にかけての溝跡が確認された。		
貢山城跡	城館跡	中世 近世	平場 通路状平坦面 堀切 土橋 柵列 ピット	2 4 1 1 2列 15個	土師質土器 瓦器 京焼風陶器 肥前産陶器・磁器 染付 瓦 銅銭	貢山城跡では、防御遺構である堀切、柵列、通路状遺構などが確認された。		
要約	<p>当遺跡は、仁淀川右岸、本流に面した丘陵地及び丘陵裾の低地にそれぞれ立地する。試掘調査により新たに発見された遺跡であり、古代～中・近世を中心とする遺構と遺物が確認された。調査の結果、城ヶ谷山遺跡では平安時代～江戸時代を中心とする掘立柱建物跡、溝等、集落を構成する遺構が確認された。遺物は、古代では畿内系の緑釉陶器や黒色土器、中世では青磁などの貿易陶磁器類など他地域からの搬入品が確認されており、仁淀川流域の川津、宿的な性格が考えられる遺跡である。鎌田遺跡は貢山城跡の麓にあり、平安時代～南北朝期の溝跡が確認され、貢山城跡の機能時期の一端を知る遺構・遺物が確認された。貢山城跡は、これらの遺跡を見下ろす丘陵上に立地しており、「往還」及び「渡し」を監理する仁淀川と街道を監理する性格の城と考えられる。</p>							



高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第134集

城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ

2013年3月12日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

















付図 城ヶ谷山遺跡遺構配置図